

令和4年度 館長講座

第1回講座

旧石器時代・縄文時代草創期の高瀬山遺跡

令和4年7月3日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

旧石器時代・縄文時代草創期の高瀬山遺跡

はじめに

高瀬山遺跡で旧石器時代に溯るものがあるのではないかと考えられた石器に花買場で採集された円盤形石核がある。この石器は 1936(昭和 11)年に阿部酉喜夫氏が採集した。中期旧石器時代に溯るルバロア型石核ではないかと注目されていた。この石核についてご子息の祥人氏(後に慶應義塾大学の教授となられる)は 1976(昭和 51)年に詳細に観察・分析した結果、ルバロア型石核とは言えないという評価が下された(abe1976)。

高瀬山遺跡で明確な旧石器時代から縄文時代草創期の石器が見つかったのは 1981 年のことである。東北電力の鉄塔移設に伴う調査で尖頭器石器群が出土した。この包含層は古墳時代の方形周溝墓により攪乱されていたが、両面加工尖頭器にノッチが伴った(山形県教委 1982)。

1985 年には市道の建設に伴い高瀬山 L 遺跡が、翌年には B 遺跡の発掘調査が寒河江市教委によって行われた。この調査でも尖頭器をもつ石器群が出土した(寒河江市教委 1986・86)

1994(平成 6)年から東北横断自動車道の建設に伴う高瀬山遺跡の調査が始まり、1997(平成 9)年まで行われた 1 期調査区の 1 区と 6 区で尖頭器石器群や細石刃核、石刃等の旧石器が出土した((財)山形県埋蔵文化財センター2004)。

2000(平成 12)年には市道建設に伴う発掘調査でも尖頭器石器群が出土した(寒河江市教委 2001)。以下、各地区の調査報告書から、旧石器部分を抜き出して講座の資料とする。

1 高瀬山遺跡鉄塔地区

1 調査要項

所在地 山形県寒河江市大字寒河江字高瀬山乙 978-38・字三条 65・109 他

調査員 名和達朗・渋谷孝雄・阿部明彦

調査期日 1981(昭和 56)年 11 月 30 日～1982(昭和 57)年 1 月 30 日

遺跡の概要 昭和 56 年 11 月 30 日～昭和 57 年 1 月 30 日

今回の調査は、昭和 56 年度に予定されている東北電力鉄塔建替工事と高瀬山・三条両遺跡との調整に資するために実施したものである。

高瀬山遺跡は、寒河江市街から南方約 1 km、最上川左岸の高瀬山丘陵一帯にかけて立地しており、早くから高瀬山古墳をはじめ、土器・石器等の遺物が採集されることで知られている。この丘陵の北東側に鉄塔が建替されることになり、その区域 8×8(m)の範囲について調査を行った。

その結果、遺跡の層序は、Ⅰ層-耕作土、Ⅱ層-黒色土、Ⅲ層-黄褐色ローム(地山)を示し、Ⅱ層が縄文・古墳・歴史、Ⅲ層が旧石器時代の遺物包含層となっている。遺構は、深さ 30～40cm 程掘り下げた皿層上面において確認され、調査区南中央から北東隅にのびる溝状の落ち込み SD1 が検出された。遺物は、全て破片で調査区中央から南側半分にかけて出土し、特に SD1 覆土内及

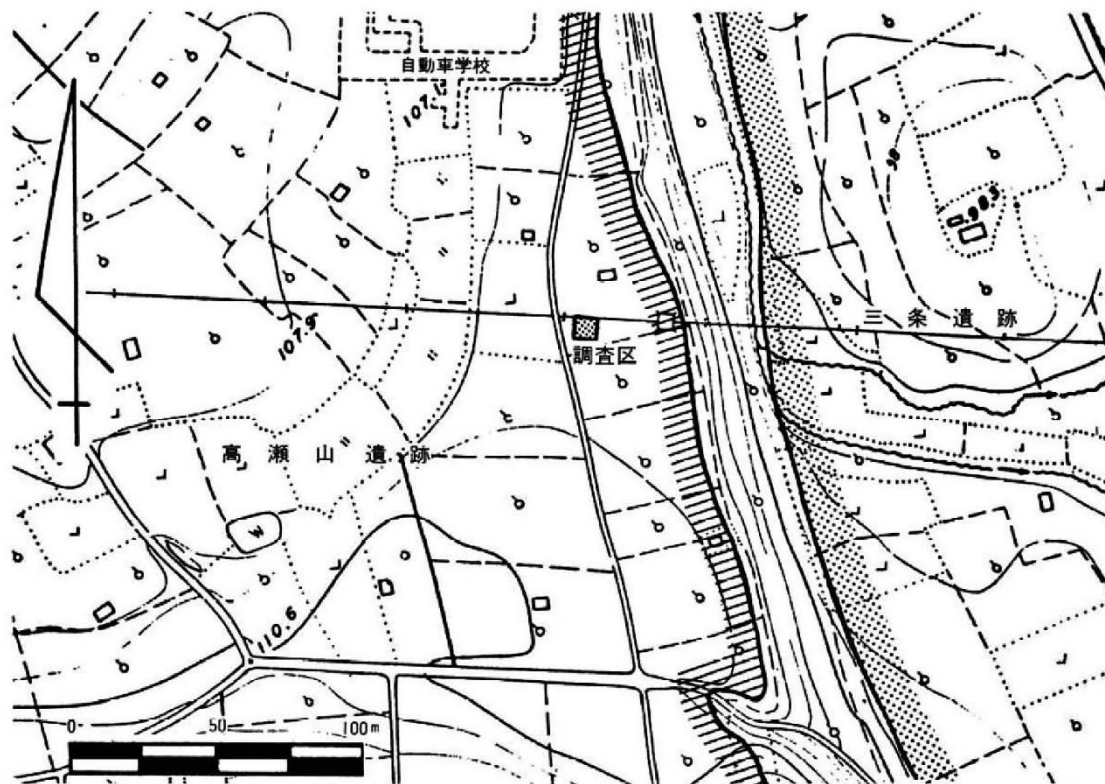


図1 高瀬山遺跡調査区位置図

び1-4G付近に集中している。

三条遺跡は、高瀬山丘陵と国鉄左沢線とにはさまれた一帯にかけて遺物の散布がみとめられ、特に高瀬山東側の微高地にかけて多くなるようである。今回は、水田地帯の二か所について調査を実施し、微高地側と水田中央部にそれぞれ4本ずつ計8本の試掘溝を入れた。試掘溝は、1×1(m)の大きさである。

遺跡の層序は、Ⅰ層-耕作土、Ⅱ層-旧耕作土、Ⅲ層-赤褐色土、Ⅳ層-黒褐色粘土、Ⅴ層-明褐色粘土(地山)である。その中で、Ⅰ層はⅡ層の上に人為的に盛られたものであり、以前の圃場整備によるものと思われる。Ⅲ層は水田の基盤を呈し酸化鉄を堆積している。遺物包含層は、Ⅳ層で赤焼土器・須恵器・陶器が若干出土している。それらは、全て小片で器形全体については不明であるが、坏・甕及びすり鉢等に分けられる。時期的には前二者については平安時代・後者については中世と思われる。なお遺構は、今回の調査では未確認である。

2 古墳時代の遺構について

検出された遺構は、SD1が主要のものであり、他には後世の掘り込みによる攪乱が6ヶ所で認められただけである。土壌・住居跡等の検出はない。以下ではSD1の溝状遺構およびその出土遺物と旧石器時代の出土遺物について説明を行う。

調査区内での平面形は、略「L」字状を呈し、西南および東南方向に溝がのびるものと考えられた。県教委による調査と併行して行われた寒河江市教委の分布調査では5トレンチでその延長部と考えられる溝を検出し、溝がかなりの規模で方形に巡っている事が確認された。しかし、トレンチが1×4mと小規模なため、SD1の計測を正確には行い得ない。8×8mの調査区における

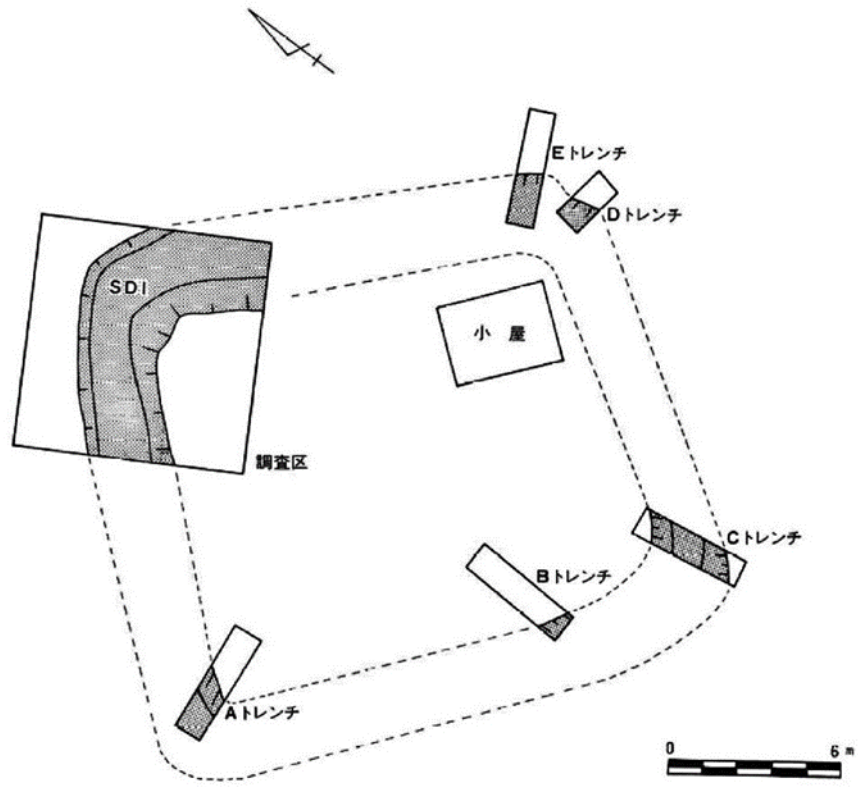
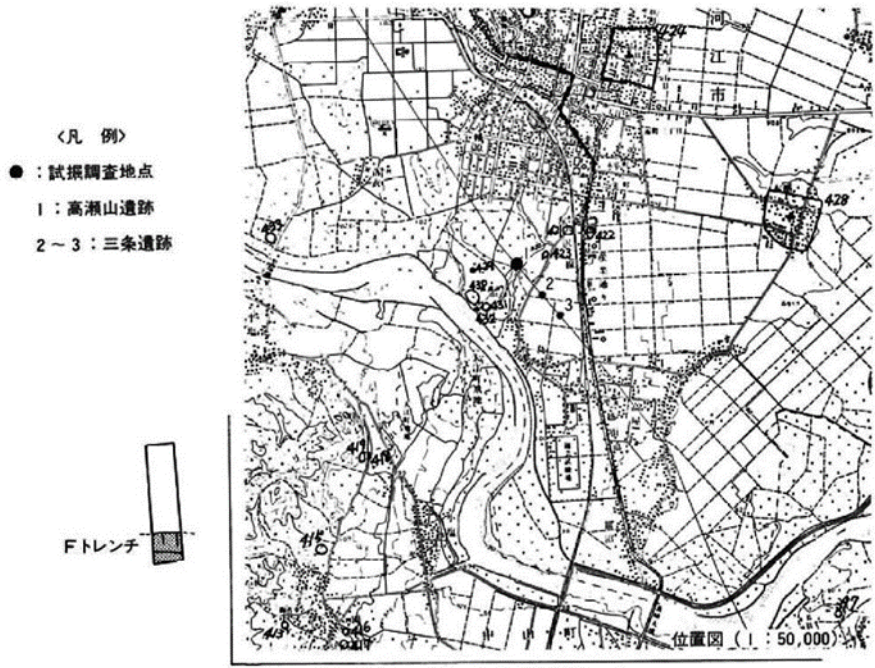


図2 高瀬山遺跡調査概要図

溝幅は、コーナー部の上端 350~360cm、下端 140~190cm を測り、南壁セクションでは上端 317cm、下端 165cm である。全体の規模は、溝上端の外径で東西 19~20m、南北 18~19m、同じく内径は東西 15m、南北 13m 前後と推測できる。以上のような推計も含めた SD1 の計測値からは、SD1 がやや

不整形を呈し、東西方向に幾分長い事が予測される。溝幅等についても寒河江市教委調査の東南コーナーでは上端 3m 前後・下端 1m 前後となっており、必ずしも均等ではないらしい。

溝の深さは、検出面(Ⅲ層上面)から平均 70cm 前後を計るが、セクションの観察からはⅡ層上面から掘り込まれている事が判り、構築時点ではさらに 20cm 前後深かった事になる。

覆土は、自然堆積と考えられる状況を呈し、覆土 7 層に平安期の遺物が多く混入していた。覆土 5 層はⅡ層とほぼ同質のクロボク土で遺物の混入はほとんどない。

遺物は、溝のコーナー部分を中心に検出し、覆土 8・7 層に多く認められた。それらは回転糸切底の赤焼土器の坏、甕、同じく回転糸切底の須恵器坏などである。また覆土 2 層の下面には、溝底より 2~3cm 浮いて出土した壺形土器と思われる土師器の体部破片が 4-1.G で検出された。これは、胎土に石英粒などの粗砂を多く含むもので、外面にハケ目の調整痕、内面ナデの調整痕が認められる。また、外面は二次焼成(加熱)によりもろくなっており、内面には炭化物が附着している。

時期は明確にし得ないが、調査員の協議では 5C 後半頃、東西南半における南小泉Ⅱ式併行ではないかと考えられ、SD1 の構築もその頃の所産ではないかと考えられる。

3 旧石器時代ないし縄文時代草創期の石器群

尖頭器石器群は総数 689 点の出土をみた。内訳は両面加工尖頭器 4 点、ノッチ 6 点、剥片 161 点、破片 518 点で、そのうち原位置を保っていると考えられるⅢ層出土の 355 点の平面分布は第 9 図に示した。その分布範囲は、Ⅱ層の出土状況(表)からみても 1~4-3 区が北限にあたり、調査区外の南西方向にのびるものと想定できる。調査区内では径 2m 前後の小ブロックが 3 ヶ所検出され、各小ブロックのあるグリッドでは、Ⅱ層からの出土量も多く、水平方向の遺物の移動は少なかったと判断できる。また SD1 の覆土からも尖頭器 2 点を含む 125 点が出土し、1~2 ヶ所の小ブロックがあったものと推定でき、調査区内には 100~200 点の遺物からなる 4~5 ヶ所の小ブロックがあったものと想定できる。

尖頭器は 4 点とも折損資料で、図 3-1~3 は先端部(2 は基部の可能性もある)、4 は基部になるものと思われる。大きさから次の二種類に分けられる。長さが推定 15cm 内外と大形のもの(1~3)、推定長 8cm 前後と中形のもの(4)である。4 の基部はやや丸味をおびる。1~3 の基部形態は明らかでないが、①先端部両側縁のなす角度が大きいこと、②全体的に幅広であること、から舌部をもたない木葉形尖頭器と考えられる。

図 4 の 5~7 は弯曲する剥片(円盤状石核から剥離されたもの、もしくは尖頭器製作の初期段階で生じる剥片とみられる)の先端部に加工して、ノッチにつくりあげた石器で、他に 3 点の出土がある。

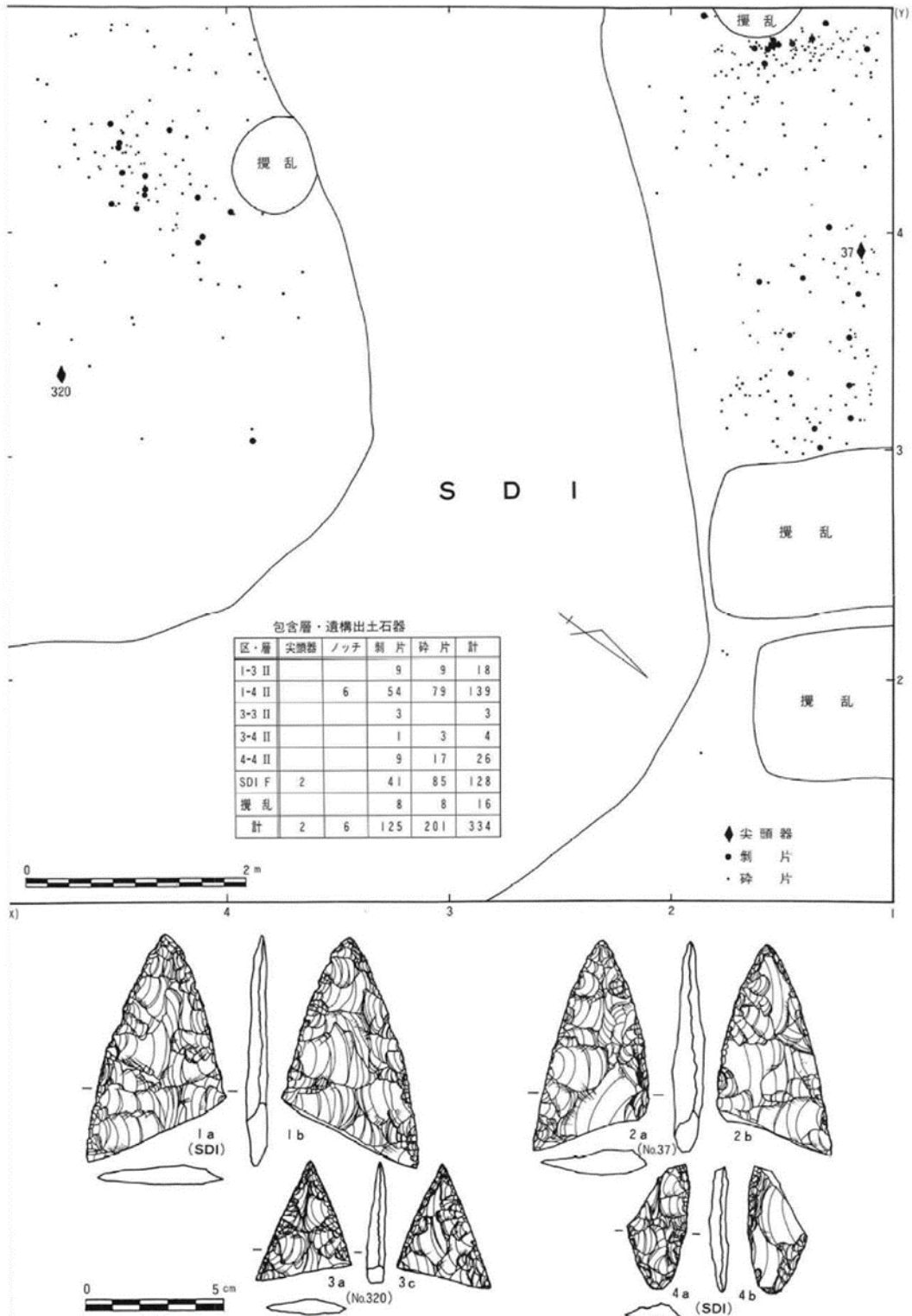


図3 高瀬山遺跡Ⅲ層出土石器分布図・尖頭器実測図

剥片・碎片については詳しく述べる余裕はないが、剥片の背面観察によると、石刃技法はな

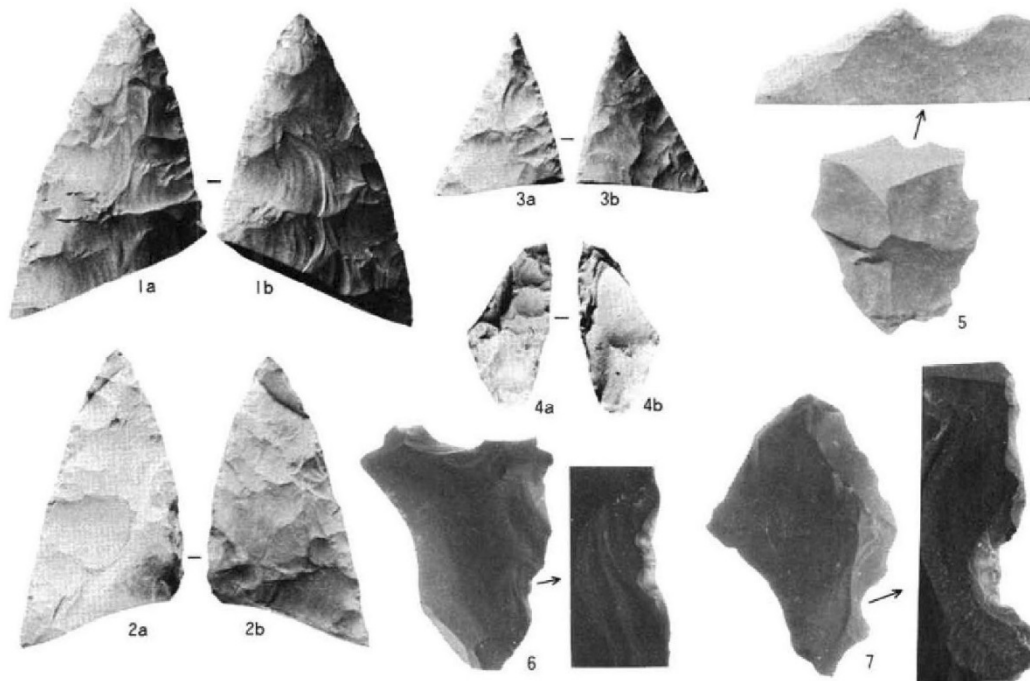


図4 高瀬山遺跡鉄塔地区石器写真

く、多くの打面をもつ円盤状石核から剥離されたものであることがうかがえる。

尖頭器はナイフ形石器をもつ石刃石器群の段階に出現し、細石刃石器群で一時衰退し、片刃石斧・有舌尖頭器を伴う石器群で再び盛行することが知られている(加藤 1973)。細石刃に先行する尖頭器石器群とみられる越中山 A' (加藤 1975)では、①ナイフ形石器を含む石刃石器群がある。②尖頭器は 6~10cm 前後と中形である、という特徴をもつ。また細石刃以降の尖頭器を含む石器群は、石刃技法をもつ長者久保(山内・佐藤 1966)、東山紺野(加藤編 1973)などと、石刃技法のない上屋地 A(加藤編 1972)、弓張平 B(加藤編 1978)があるが、尖頭器は中形~大形で前三者は片刃石斧をもち、弓張平 B では有舌尖頭器を主体としている。本遺跡の石器群は調査区が限定されているため、石器組成についてはなお不明確であるが、①石刃技法をもたない、②尖頭器は中形~大形で、ノッチが共伴するという点で、上屋地 A や尼子第 II 岩陰最下層(加藤 1976)に近接するものと考えられる。

2 高瀬山遺跡 L 地区(L 遺跡)

1 調査経過

調査区域は、分布調査の結果に基づき、道路予定線の中心杭No.2 からNo.4 にかけて設定した。調査を開始するにあたり、中心杭No.2 とNo.4 を結ぶ線を基準として、工事区域をすべてカバーで

きるように1辺2m×2mのグリッドを設定し、西から東へ1.2.3. …・…8、北からA.B.C. ……0とした。

No2杭はA-5に当る。発掘調査は、重機による表土の除去(試掘調査結果により、縄文時代の遺物包含層であるII層上面まで、約20(cm~40cm)を行い、その後、手掘りにより遺構確認を行いつつV層(北区)まで掘り下げていった。しかしながら、縄文時代のたしかな遺構の確認はできなかった。

L遺跡の存在する段丘縁辺部は土壌堆積が顕著でなく、かえって縄文時代の文化層が削り去られた可能性もある。

遺構としては、性格不明の土壌と石器製作場と思われるブロックが検出された(図5)。このブロックは、段丘傾斜地に位置し、V層(黄褐色粘土層)に至ってもなお石器の出土をみた(図6)。縄文時代を遡る文化層の存在が予想されたため、補足調査を実施し、各文化層の正確な把握と遺物の包含状態を確認し、その記録につとめた(9月27日~10月1日)。

2 遺構の分布

図5に遺構の分布を示した。調査区南に土壌、北側に石器集中地点Lブロックが存在する。特にこのブロックでは4m×6mの調査区に2つの文化層を把握することができた。ブロックは段丘に沿ってさらに東西に延びるものと思われる。近辺に住居跡等は確認できなかった。

3 文化層設定と検証

この地点の調査では、幅4m×6m深さ1mの範囲内に2千点をこす石器、剥片類が出土した。調査の時点で、III層の無遺物層をはさんで上下に文化層が存在することが判明した。しかし、傾斜地上部付近の層位が不明なことや、I・II層においても時期差のある石器群の存在も考えられるため、母岩ごとに分類・接合を行い、また、平面及び垂直分布の様相を記録した(図7)。その結果、I・II層ではレベル差をもって同一母岩の分布がみられることにより同一の石器文化と考えられ、III層をはさんでの上下の接合関係はとらえられないことから異なる二つの石器文化の存在が考えられた。II層中位に石器の集中をみる文化をL I石器文化とする。次に、IV層下部よりV層とVI層上面にかけて遺物の分布がみられ、V層に集中をみるのをL II石器文化とする。遺物の多くは斜面上からの流れこみのような状況である。

4 L地区出土の遺物

第2文化層(L II石器文化)出土石器(図8)

L II石器文化の出土資料は、すべて未製品か欠損・破損品と思われるもので完形品は見当らな

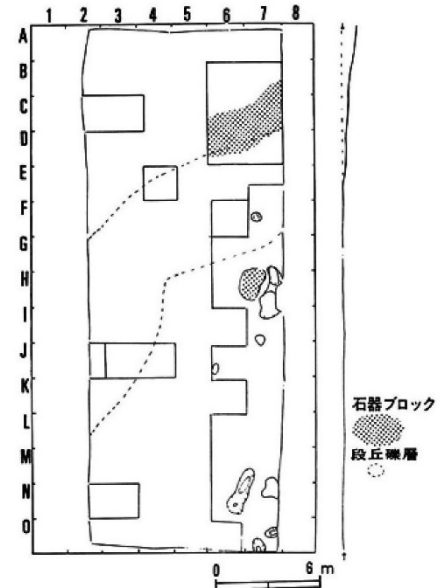


図5 ブロックの位置

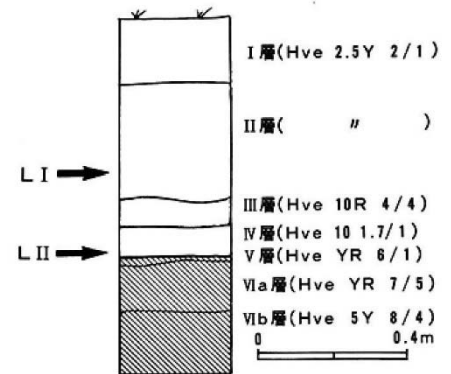


図6 L遺跡層序図

い。図8の1は両面加工の尖頭状石器である。表面中央部は剥離が不十分でコブ状に残している。未製品であろう。2は片刃石斧先端部とみられる。大江町庚申山出土片刃石斧に似る(山形大学

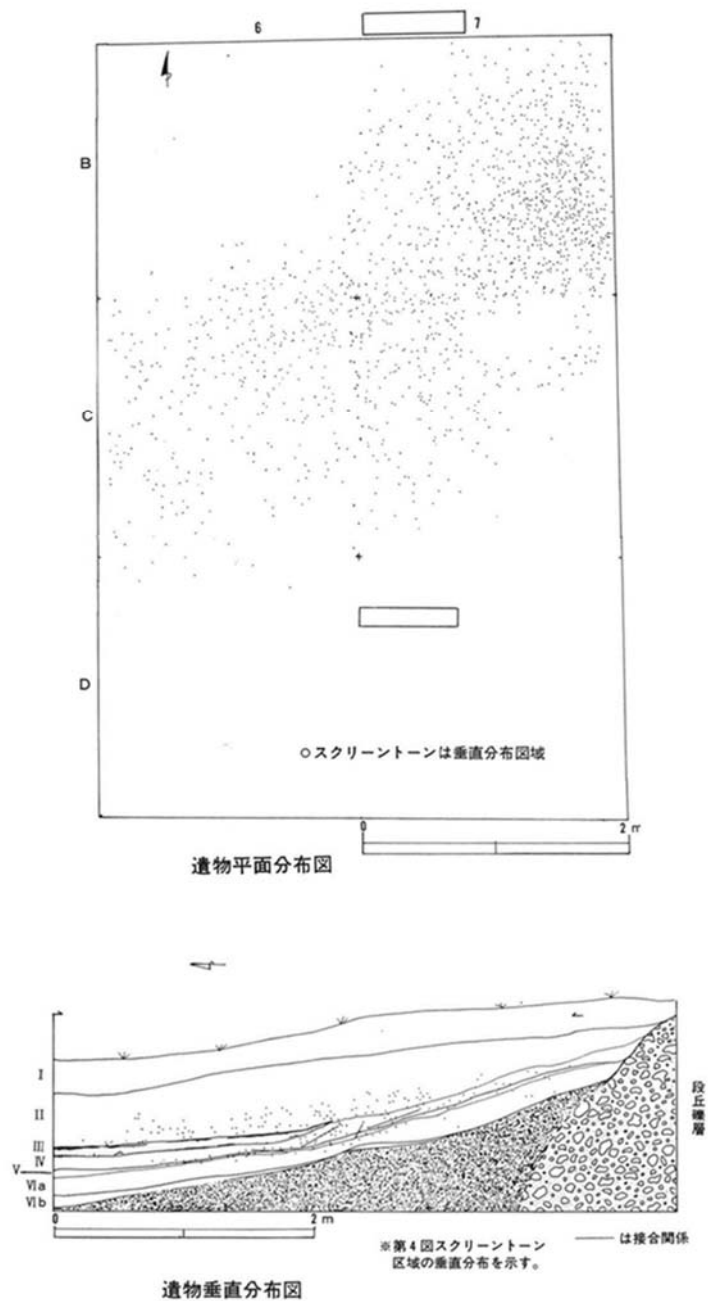


図7 遺物の平面分布と垂直分布図

附属博物館蔵)。3は大型縦長剥片を表材としたエンドスクレーパーである。基部が火熱をうけ火ハネを呈す。図8-4は舟底形石器または細石刃核のブランクと思われる。側辺調整に失敗し、破損廃棄したと見られる。技術的にはホロカ系に属す。5は大型の両側辺加工のスクレーパーである。

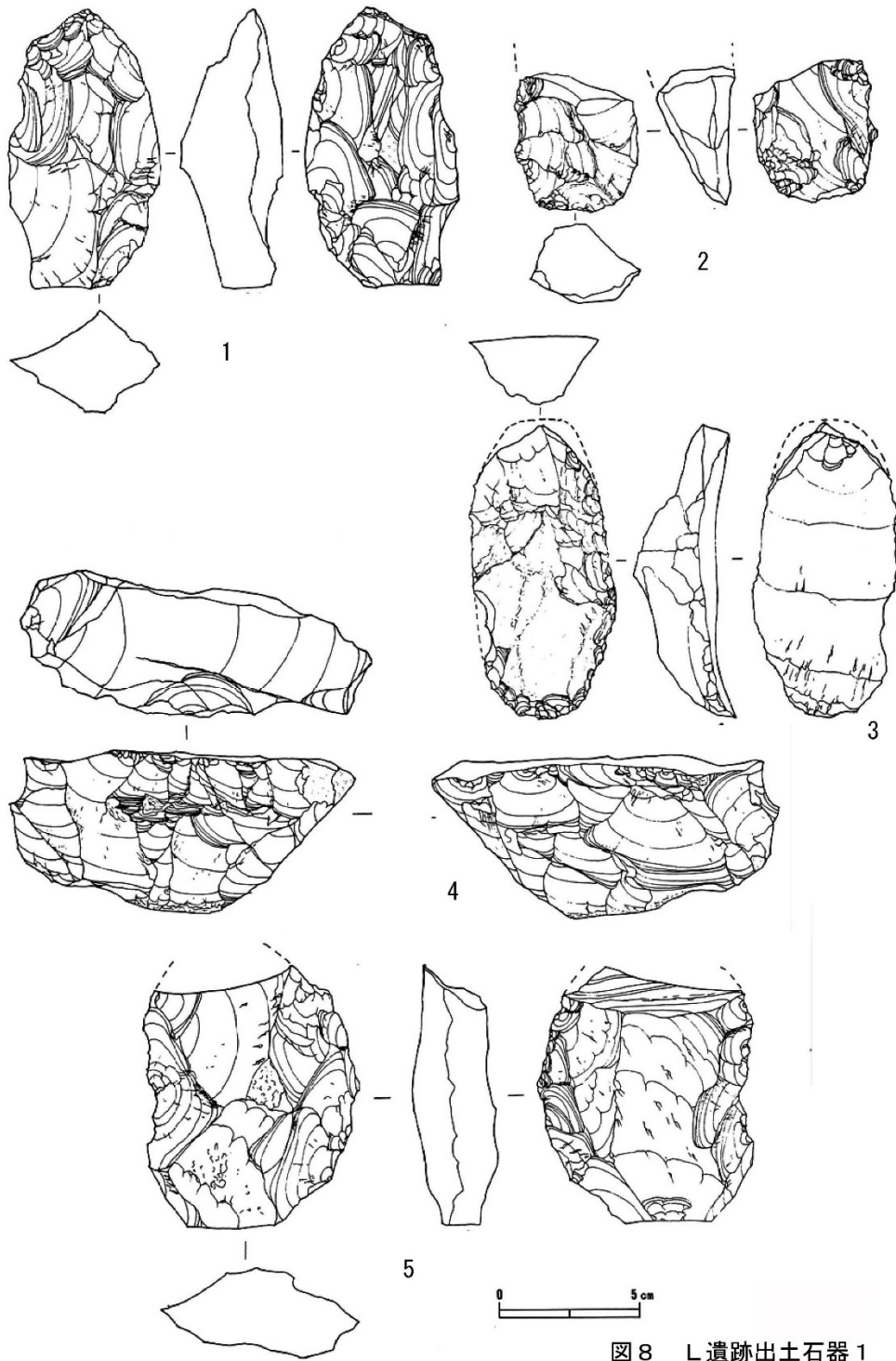


図8 L遺跡出土石器1

第1文化層(LI石器文化)出土石器(図9)

図9-6は石核である。石刃状剥片を生産したとみられ、最終剥離面はヒンジ状になっている。打面は平坦、作業面調整がみられる。大江町橋上遺跡出土石核のIb類に似る(註1)。7・8は石核作業面再生剥片である。石核下方からの加撃により作業面の再生を行っている。第

9・10 は石刃状剥片である。他の資料に石刃と剥片の接合資料がある。11 はつまみ部を意図的に作出していることより石匙とみられる。今回の調査において、縄文時代に普遍的にみられる石鏃、石錐などは検出されていない。

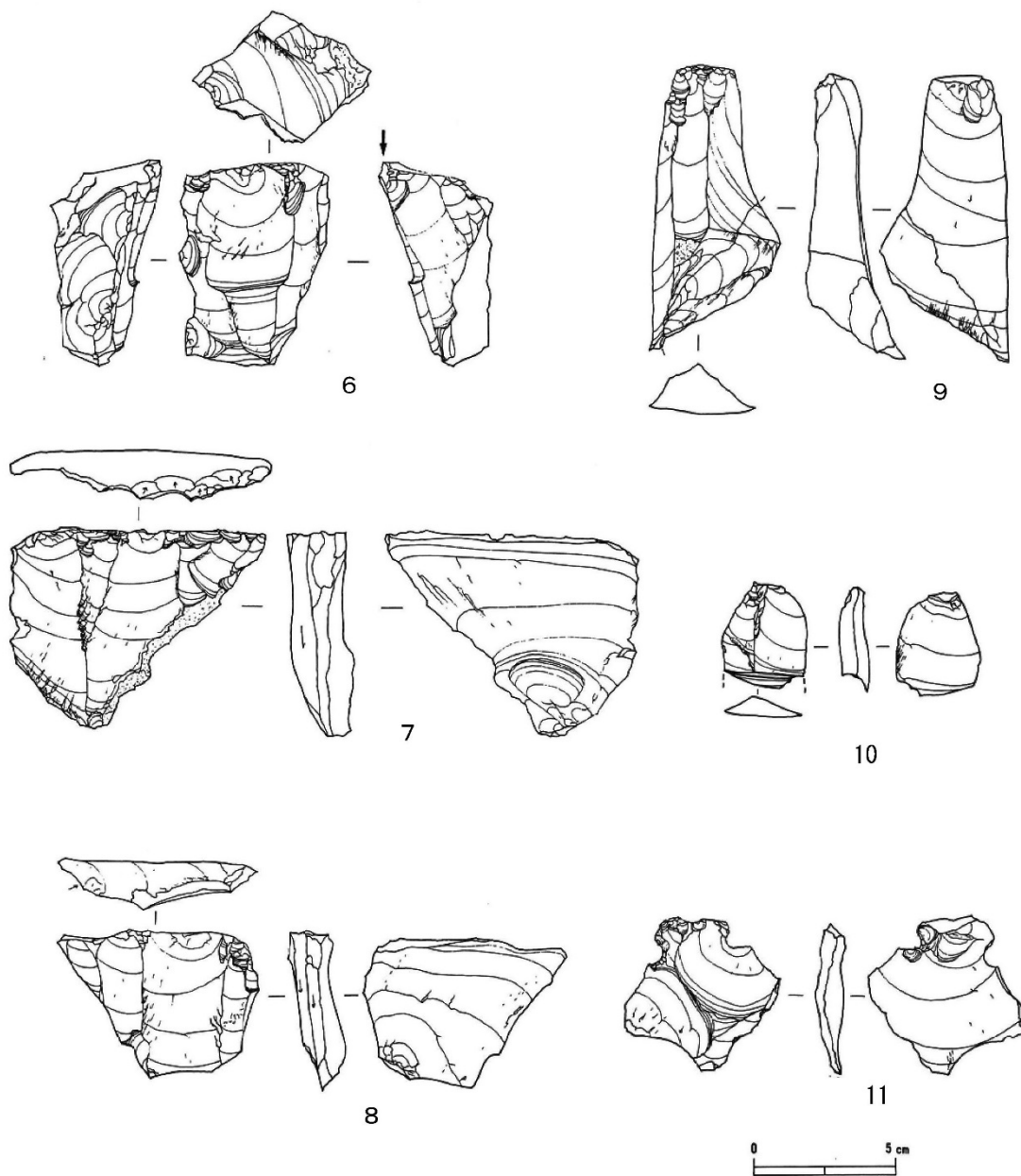


図9 L遺跡出土石器2

5 まとめ

段丘崖の調査区(北区)では2千点をこえる石器、剥片類が出土し、2つの文化層が確認された。それぞれ、第1文化層(LI石器文化)縄文時代中期末の石器群第2文化層(LII石器文化)縄文時代中期以前～中石器時代の石器群であると考えられる。

LⅠ石器文化は、石刃状剥片・石刃核・石筥・石匙などの石器があり、大江町橋上遺跡の石器群と同時期の石器群として理解される(註1)。この種の石器群は縄文時代中期末に西村山地域には濃密に分布をみることができ(註2)。

LⅡ石器文化は、片刃石斧・舟底形石器(未製品)・大型搔器などがあり、特に二次加工時の剥片・碎片が多く存在する。幾つかの剥片が接合し、石器製作技術の一端が明らかになっている(註3)。この地点は、河岸段丘縁辺における石器製作地とみられる。縄文時代あるいは中石器時代においてのこの種の石器製作跡の調査は例をみない。当該期の生活構造を解明する上で重要な意味をもつ遺跡と思われる。高瀬山遺跡群の調査が進む中で、L地点の生活ブロックとしての性格が明らかになるであろう。整理分析途中のため、概要にとどめた。

註1 石井浩幸 1985「橋上遺跡における石器製作作業の分析」『橋上遺跡発掘調査報告書』

大江町教育委員会

註2 寒河江工業高校 1967～1973『人工のはじまりの研究』第1集～第9集。

大江町教育委員会 1967『月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書—古式石器の出土地—』

註3 接合資料は、舟底形石器・打製石斧の製作工程をしめす資料である。

2 高瀬山B遺跡

1 調査経過

高瀬山B遺跡は、寒河江市大字山西に所在する。昭和59年、市道元町平塩線道路改良事業が具体化されたことにより、路線内の試掘調査を実施した結果、L遺跡(上野地区)、B・K遺跡(山西地区)を確認した。市教育委員会では担当課である市土木課と協議を行ない、土木事業計画と調整をはかり、昭和60年度はK遺跡の一部とL遺跡の緊急発掘調査を実施した(寒河江市教育委員会『高瀬山K・L遺跡発掘調査報告書』1986)。61年度は、前年の調査をうけて、K遺跡の残された部分とB遺跡の緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和61年5月7日に重機による表土の除去より開始した。ついでグリッドの設定を行ない、B遺跡については、道路予定線中心杭No.18とNo.22を結んだ線を基準線とし、東西・南北間に5m間隔で基準杭を設置していった。グリッド番号は北から南に51、52、53……とし、西から東にP、Q、R……とした。No.22はT-69に当たる。K遺跡も同様にNo.28とNo.32を結んだ線を基準線とし、北から101、102、103……、西からH、1、J……とした。No.28はL-101にあたる。調査はB・K遺跡平行して進め、順次手掘りにより掘り下げ、遺構検出、精査を行なった。調査途中、K遺跡において遺構が予想以上多く、また、B遺跡において旧石器が発見されたことなどもあり調査予算の増額補正を行なった。実測と遺物収納は6月30日で終えた。調査実施面積は約1200㎡(B-500㎡、K-700㎡)である。

2 基本層序(図10)

I層:10YR%黒褐色シルト、粘性は弱い。軟質。

II層:10YR黒褐色シルト、粘性は弱い。I層よりやや硬い軟質。

III層:7.5YR 髪5黒褐色シルト、粘性は弱い。1、II層より粘性はやや弱い。

IV層:10YRシルト。I～III層とV層の漸移層。I～III層より硬質。V層の粒子を含む。

砂層に直接に接しているところでは砂質をおびる。

V層:10YR 勿褐色シルト。粘性はIV層よりあるが弱い。やや硬質。

石器集中地点では上部 10cm から下位がやや色が鮮やか(10YR%)になる傾向がある。砂層(VI層)に接している部分ではより砂質である。小～極小のマンガン粒を全体に含む。T-65、T-66 では厚く堆積し、色もやや鮮やか(10YR%)で、粘性もより強くなる。下部ではやや粘土化し白味をおび、マンガン粒がふえる。T-66 南半では下部は細砂質になり、白い塊状の粘土(径 10mm 以上)をまばらに含む。

VI層:7.5YR 賜～%褐色.粗砂～レキ層。レキは径 20cm を越えるものがあるが、多くは 5cm 以下である。

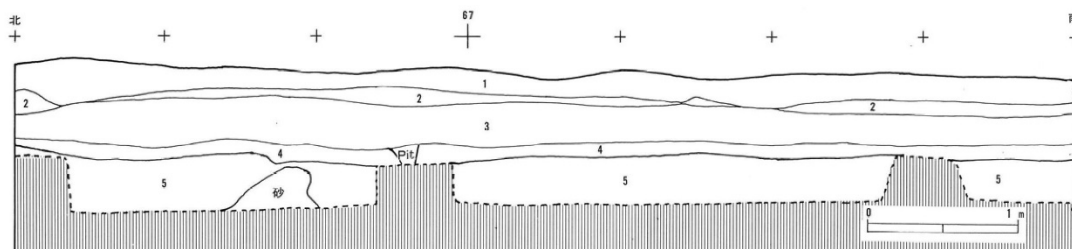


図10 B遺跡土層断面

V・VI層は基本的に段丘構成層である。IV層はV層の上半がIII層により汚染されたものと考えられる。

歴史時代、縄文時代の遺物は、II・III層に包含されている。III層下部～IV層上面で、歴史時代、縄文時代の遺構を確認している。

旧石器時代の遺物はIV・V層に包含されている。ただし、IV～VI層は段丘構成層であるので、III層の下にV層、VI層あるいは直接VIがくるところもある。よって、1ブロックはVI層(レキ層)の直上に旧石器時代の遺物が含まれている。

3 遺構配置(図 11)

旧石器時代旧石器時代の遺物集中箇所はニケ所確認された。U-64Gに径 1m×1mの第1ブロック、T-64・S-64Gに径 3m×1mの第2ブロックがある。

縄文時代土壌が3基確認されている。U-64・65GにSK2、SK5、S-64GにSK7がある。U-71Gに溝状の遺構があるが、縄文時代に位置付けられるものである。

歴史時代S-65・66Gに竪穴住居址(ST1)とU-69、T-68、S-68Gに溝が確認された。

4 遺物分布

縄文時代の土器と石器はほぼまんべんなく分布しているが、T-63、U-65、U-66、U-67、T-66に集中がみられる。

歴史時代の土師器と須恵器は、U-66、S-66、U-69 区に集中がみられる。一部に遺構の分布と重複するが、それ以外にも集中する。

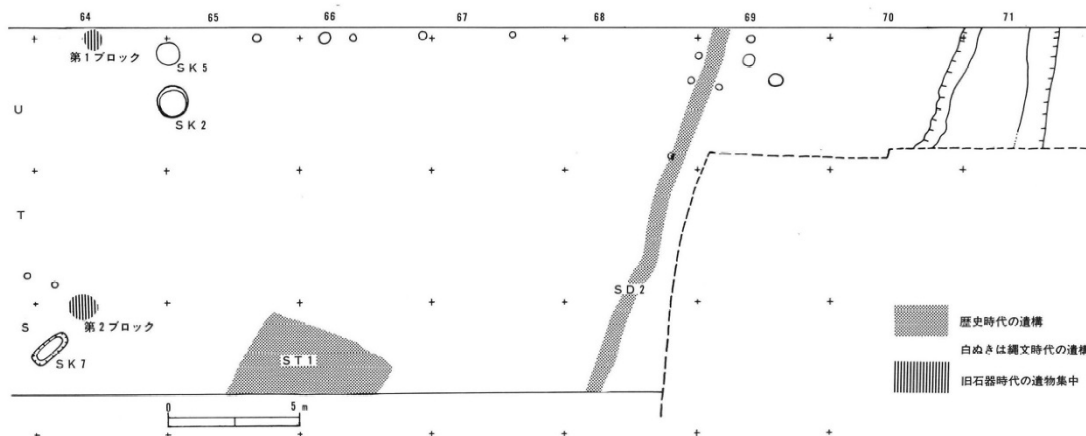


図11 B遺跡遺構配置・石器ブロック分布図

5 旧石器時代

旧石器時代の遺構と認められるものは検出されなかったが、それに準ずるものとして遺物分布について述べる。

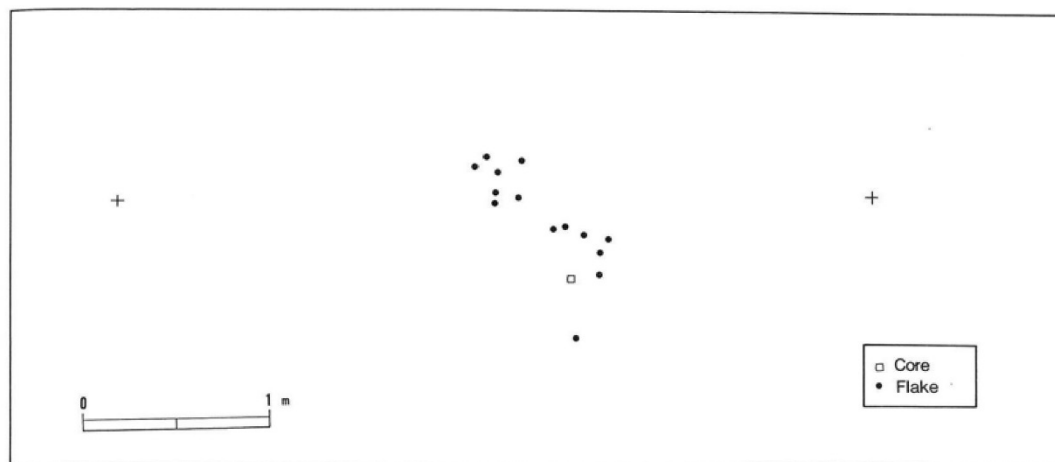


図12 第1ブロックの分布図

第1ブロック(図12)は、レキ層(VI層)が盛り上がった頂部からやや傾斜しはじめるが、その傾斜の変わる所に弧状に分布する。

第2ブロック(図13)は、レキ層(VI層)が西にはり出す部分のさらに先端部に分布している。

第1ブロックは二母岩で構成されている(図)。母岩1は西側に、母岩2は東側にほとんど重複せず分布している。母岩1は剥片のみ、母岩2は1点の石核を弧状にとり囲むように出土している。

第2ブロックは、T列に幅1mの旧石器確認のための試掘トレンチをいれた際に確認された。試掘トレンチからは石器2、石核1、剥片5点が得られたが、それらの出土地点はとらえられてい

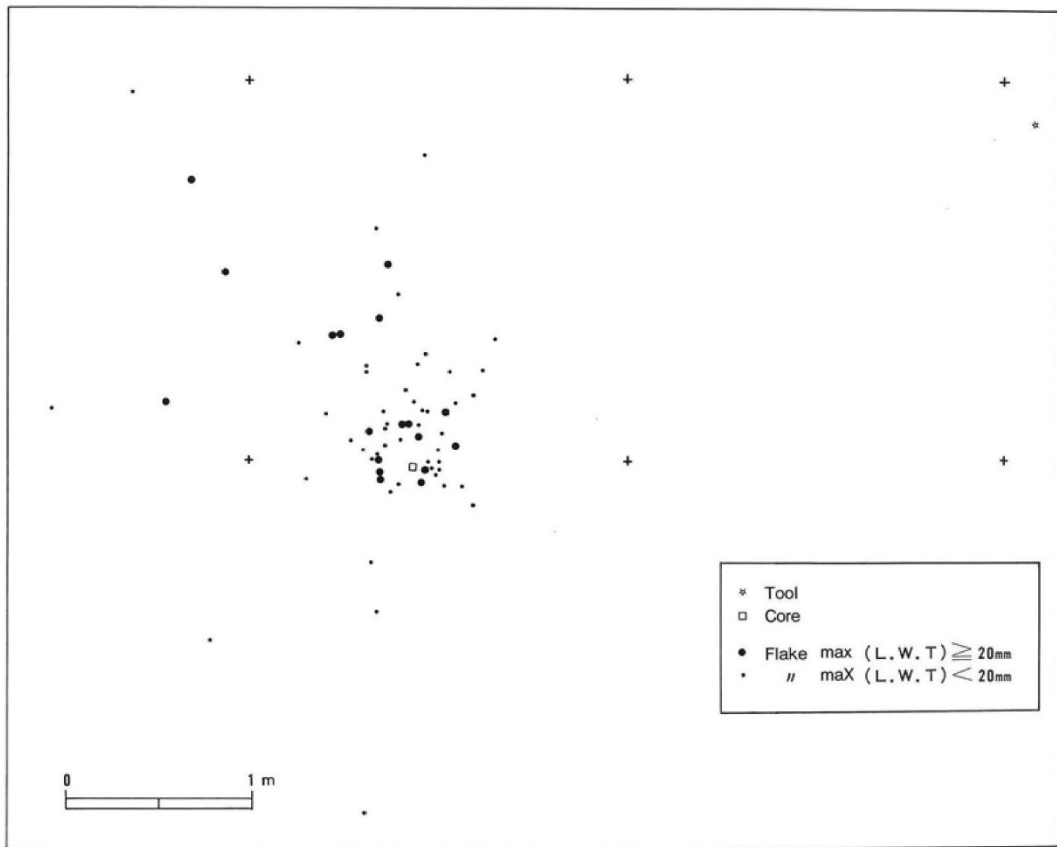


図13 第2ブロック分布図

ない。したがって、図 13 にはそれらの遺物の出土地点は記されていない。二本の杭(+)の東側 1m が空白なのは、以上の理由による。

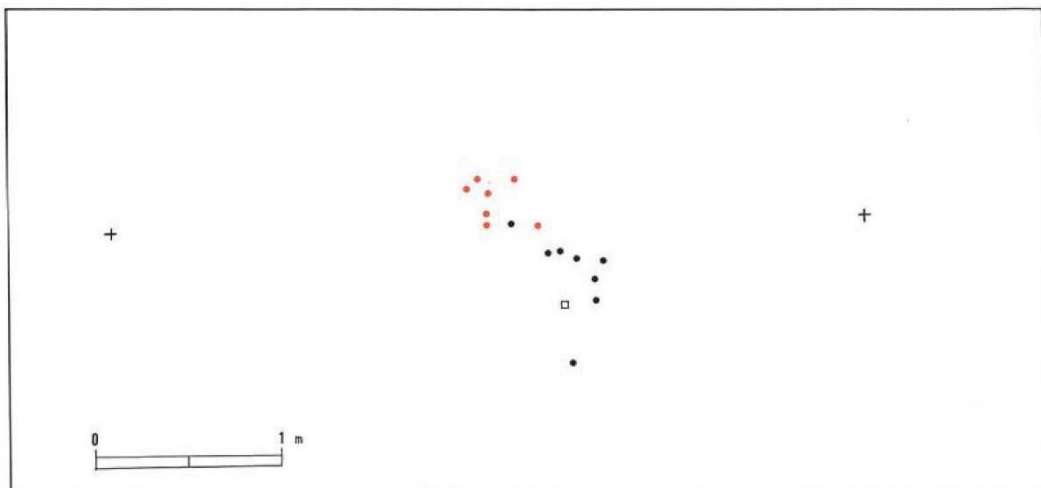


図14 第1ブロック母岩 1・2 分布図

第2ブロックは二母岩で構成されている。他は単品の剥片である。母岩3(図)は石核(試掘トレンチ内出土)を東端にし、西側に開いた半径約 3.5m の扇形に分布していたものと考えられる。石

器 2 点も試掘トレンチ内より出土していることから、石核に近接した位置にあったものと思われる。母岩 4(図 15)は、石核を中心に、西南方向に扇形に開く散漫な分布を示している。

第 2 ブロックの北西から、半欠の両面加工尖頭器が出土している。

第 1 ブロック、第 2 ブロックとも分布範囲の狭い、また遺物密度の低い集中地点であ

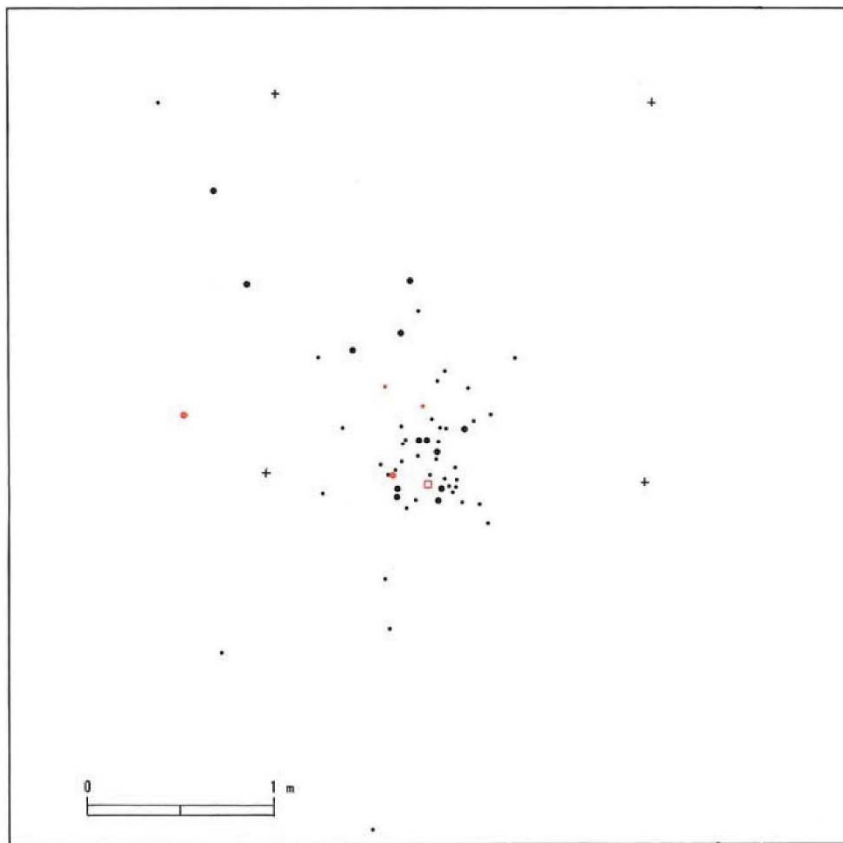


図15 第2ブロック母岩3・4分布図

る。両者は、2 母岩をもつという意味で共通する。両ブロックが剥片剥離後、そのままの状態であったと仮定するならば、第 1 ブロックは、レキ層の形成する高まりで剥離を行ない、一方、第 2 ブロックでは、レキ層の先端に位置して剥離を行っていたことになる。石核の位置に剥離を行なった人がいたと仮定するならば、第 1 ブロックでは、南側を向いて、第 2 ブロックでは南西から西を向いて剥離を行っていたと考えられる。

遺物:空間分布から二つのブロックが認められた。両ブロックには、母岩 1、2 と母岩 3・4 が中心的に位置することが認められるが、両ブロック間に接合はみられない。

第 1 ブロックでは、遺物はIV層(レキ層)直上から得られている。しかし、第 1 ブロックのある地点は、VI・V層が極端に薄いか、堆積がみられないので、第 2 ブロックとの層位的関係をとらえることはできなかった。

第 2 ブロックは、遺物の出土層にかなりのバラツキがみられる(表 3)。発掘時には、IV・V層出土の資料のみを旧石器時代のものと考えたが、III層出土の資料中にも同一母岩資料が認められ、遺物がIII層中にも浮き上がっていることが明らかとなった。一部に土壌攪乱が推定される。

このような状況の中で資料の一括性を保証するためには、同一母岩資料がIV・V層中に確実に含まれているということが条件となる。しかし、母岩外資料も少なからずIV・V層中に認められたり、型式学的に旧石器時代の可能性のある資料が皿層中に認められる。そのような資料については、参考として加えることにする。

第1ブロック(図14)から13点の石器が得られた。うち、6点が母岩1(1~6)、7点が母岩2(7~12)である。母岩1では剥片(図16-1)とバルバースカー片(図16-5)が接合する。

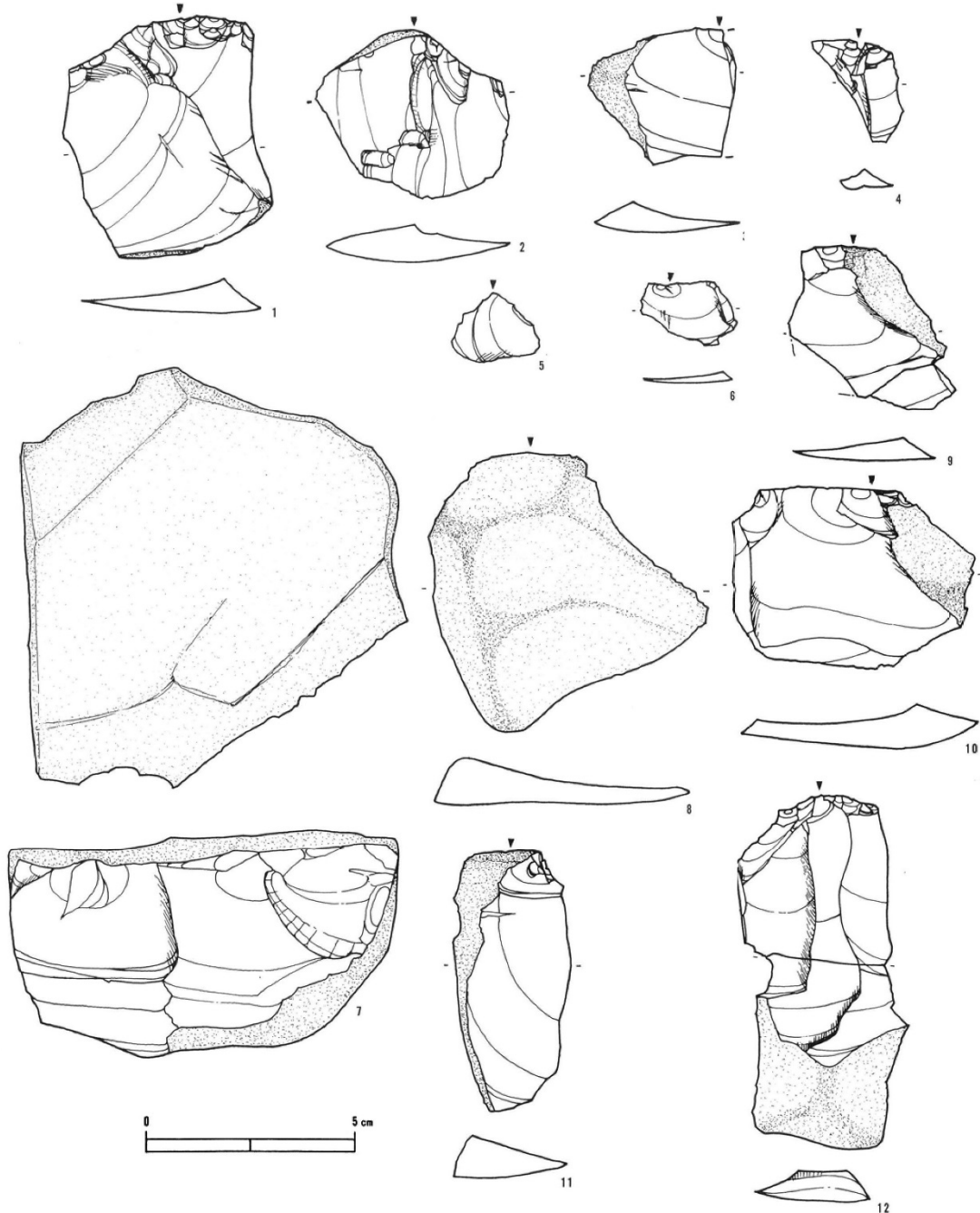


図16 B遺跡出土石器実測図1

母岩2は全点接合する。両母岩に見られる剥片は、原面打面を持ち、部分的に頭部調整を施されたものがほとんどである。

第2ブロック(図15)から72点の石器が得られている。母岩3が量的に主体を占めている。二次調整のある石器は3点(図17)が出土している。15は基部整形石器で先端が失なわれてい

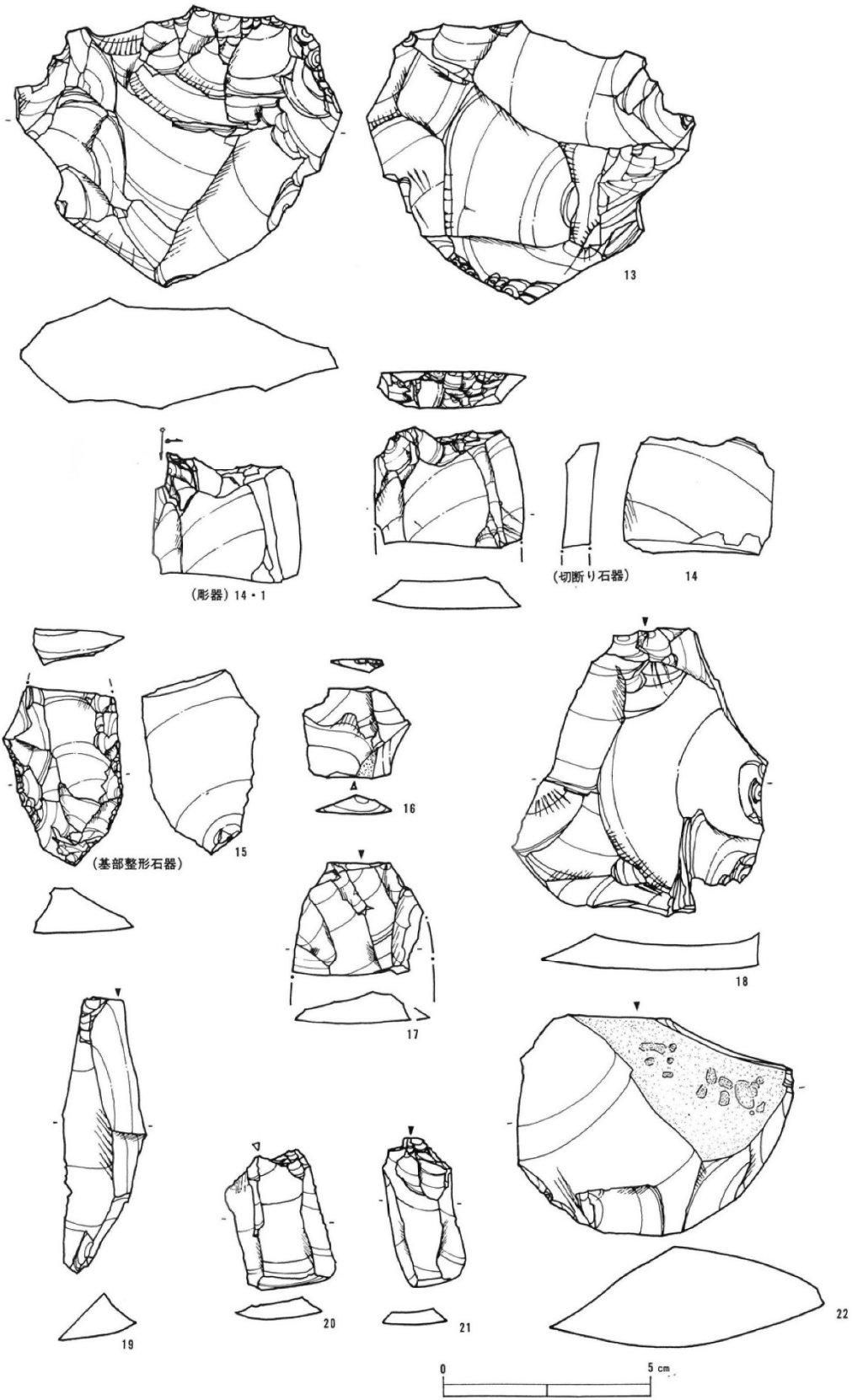


图17 B遺跡出土石器実測図2

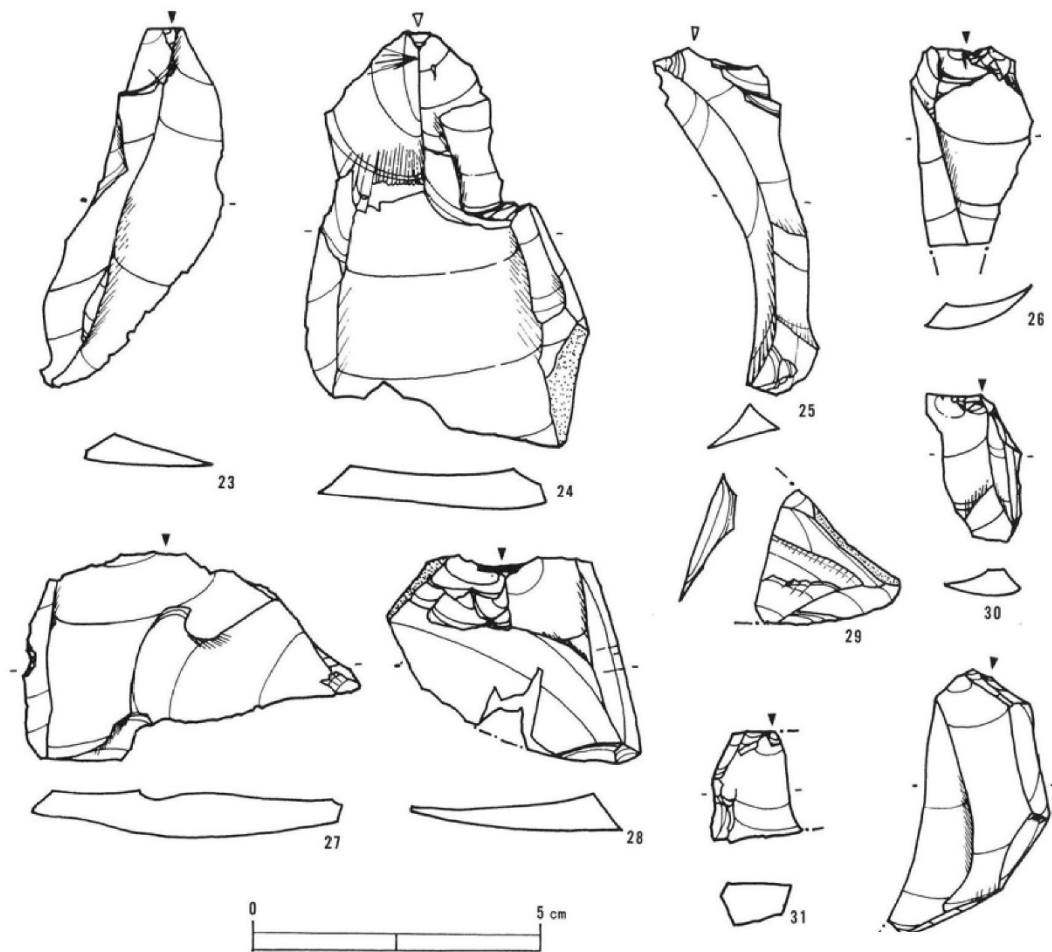


図18 B遺跡出土石器実測図3

る。14 は切断り石器で、基部は発掘時の事故で失なわれている。14 には細部調整剥片が 1 点接合している。接合した状態を見ると、彫刀面が残されており、器種変えがなされたことが明らかとなった。33 は先端部左に鋸歯縁の細部調整が見られる。

母岩 3、4 とも接合例(図)をもつ。両母岩の剥片は、剥離面打面がほとんどで、部分的に頭部調整がみられる。

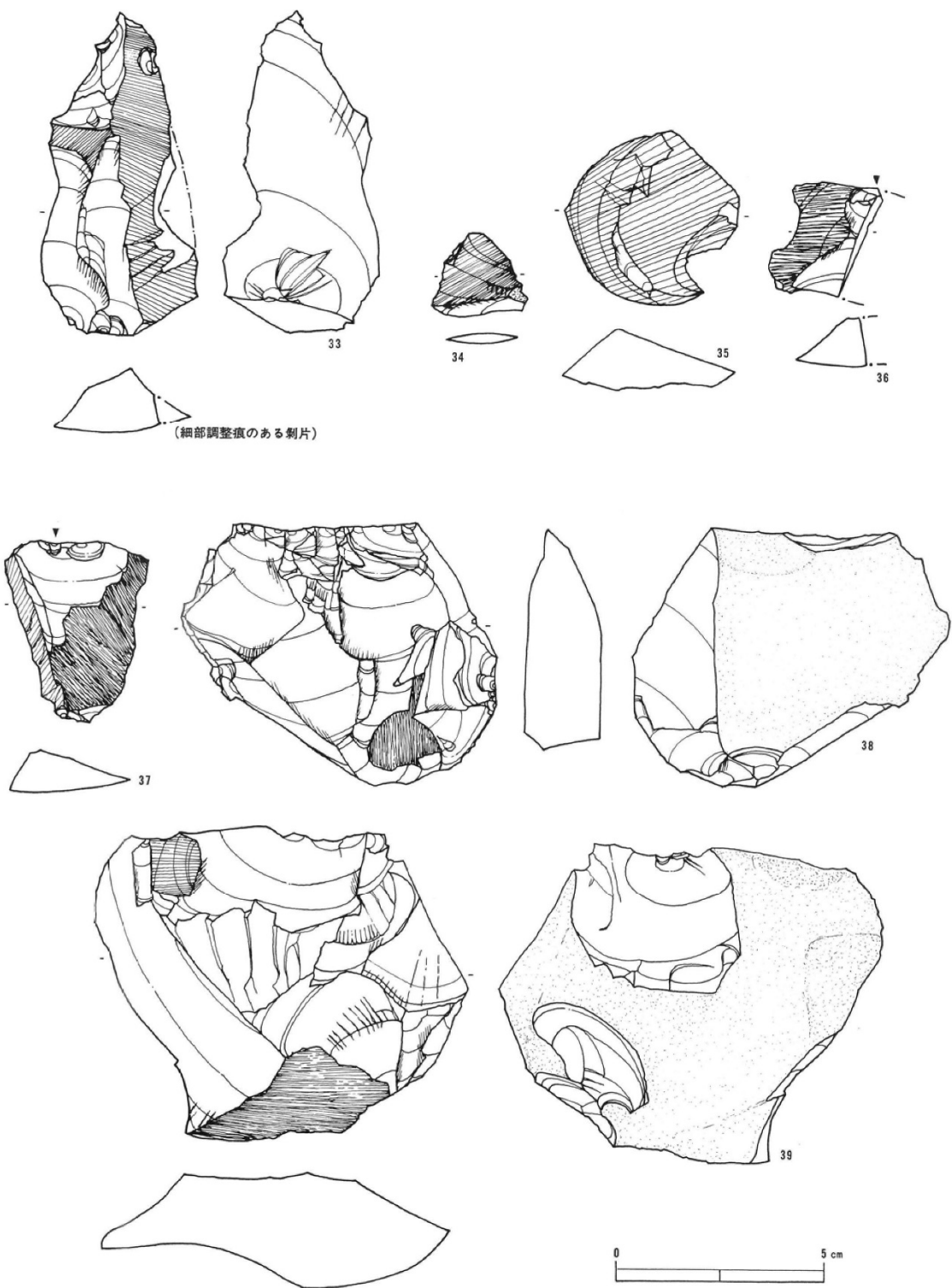


図19 B遺跡出土石器実測図4

6 考察と課題

(旧石器時代)

高瀬山遺跡群の中で、旧石器時代の石器群を発掘調査によって確認できたのは三例目である。高瀬山1遺跡鉄塔地点(山形県教委『分布調査報告書(9)』1982)では、両面加工尖頭器4点、ノッチ6点を含む総数680点の尖頭器石器群を検出している。同じくL遺跡では、片刃石斧、舟底形石器を含む晩期旧石器時代の石器群を検出している。I・L地点とも同じ中位段丘面(M2面)に位置している。鉄塔地点では、Ⅲ層黄褐色ロームを一次的包含層に、L遺跡Ⅱ文化層ではⅣ層(明赤灰色土層)とⅤ層(黄褐色粘土層)にわたって遺物が分布するという。B遺跡の層序と対比した場合、B地点のⅤ層に鉄塔地点Ⅲ層、L遺跡Ⅴ層がほぼ対応すると考えられる。

阿子島(『高瀬山K・L遺跡発掘調査報告書』1986)によれば、M-1面の14C年代が3.1万年、2.5万年、L-2面構成層上部の14C年代が1.5万年とされることから、M-1面の形成年代は、その間に位置付けられる。生活面として安定した状況を考慮すれば、B遺跡の旧石器群の年代はL-3面形成年代にかなり近いが、あるいはそれ以降の年代が与えられよう。層位的には、B遺跡と鉄塔地点はほぼ同じ層準に遺物が含まれていたといえる。しかし、L遺跡は段丘の側刻崖に位置することから、堆積のメカニズムが他の二遺跡と異なることが考えられ、層位的に必ずしも同じ条件であるとはいえない。L遺跡の年代については問題が残る。

B遺跡内において、二つの遺物集中地点が確認された。両者の間に同一母岩の資料は含まれていない。同一層内における共存を示すものであるが、同時存在を保証するものではない。また、第1ブロックには石器(too1)が含まれておらず、石器型式学的に年代を限定することは困難である。第2ブロックには、基部調整石器と切断り石器が各1点含まれている。切断り石器は彫器からの器種変えが見られ、彫刻刀面作出技術の存在を保証している。また、剥片は、石刃状剥片、剥片が多い。このような石器群は、小国平林遺跡の石器群に一部共通するところが見られる。しかし、これらの特色はごく一部にすぎない。

B遺跡の二つのブロックは、従来の東北地方日本海側の旧石器時代遺跡の中では、どれよりもコンパクトで単純なものといえる。原石となる頁岩は、中位面の段丘礫層や最上川で大量に入手できる。そのような条件下での遺物のあり方は、今後東北地方の旧石器時代の遺跡を考えていく上で重要な例となろう。

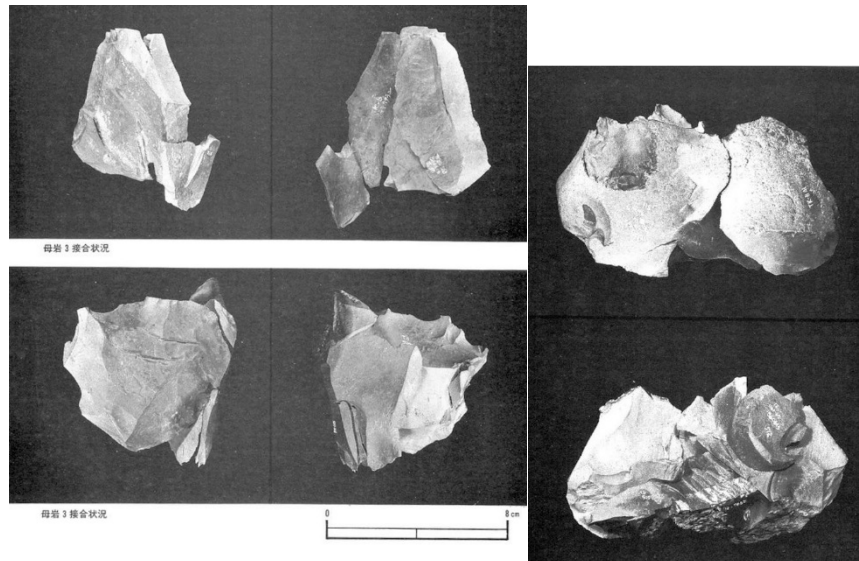


図20 母岩3 接合状況 図21 母岩接合状況

4 高瀬山遺跡市教委調査E区(2000年)出土旧石器

1 調査位置

平成12年度高瀬山遺跡の調査区の精査中、D地点の褐色粘土層から石器が出土したため、D地点北側部分について、旧石器時代の遺構・遺物検出のため補足調査を実施した。D地点は標高109mの段丘縁辺に位置する。東北横断道酒田線が傍をはしている。古墳時代から平安時代の遺構精査後、粘土層上面から約30cmの深さまで、すべて手掘りですすめた。その結果、図にしめした範囲から石器が出土した。

2 層序

調査区D地点が位置する河岸段丘は、4面に相当する。D地点の北壁を掘り下げ、発掘地点直下の地層の状況を検討した。このグリッドの壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下の通りである。観察終了線は、地表下約1m20cmである。段丘礫層まではさらに約1m数10cmの地層の堆積がある。

Ia層 耕作土(10YR3/1)

Ib層 黒色土(10YR3/1)締めり少ない。パサパサしている根の攪乱あり。

II層 漸移層(7.5YR4/3)一部根の攪乱あり。III層の腐食化した層か?

III層 明褐色風化火山灰層(10YR5/6)粘性強い細粒あり。

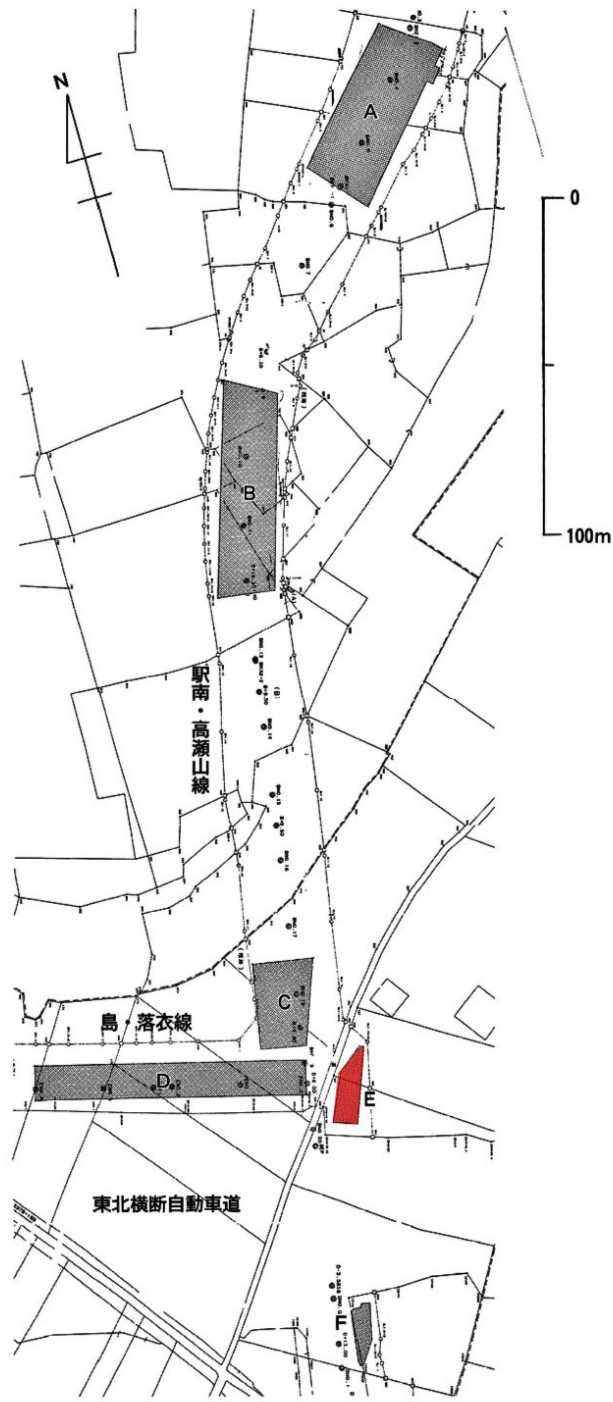


図22 E地区の位置

IV層 明褐色粘土質シルト層(7.5YR7/2)粒状に10YR5/8粘質土が混じる。締まり強い。

V層 黄褐色粘土質シルト層(10YR5/8)粘性少。

VI層 明褐色シルト層(7.5YR7/2)に黄褐色シルト層(10YR5/8)が斑状に混じる。下部は砂質。

VII層 黄褐色シルト質砂層(10YR5/8)粘性少ない。

以上のI～IV層が遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器や石器が出土する。旧石器時代の遺物はこれらI～III層準からも出土するが、耕作や根などの攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層準はIV層である。石器資料は、III層下部から出土し始め、IV層中にまとまって出土する。一部V層上部にかかる部分もある。IVに当時の生活面があると判断できる(図)。V層以下は無遺物層である。

I～IV層は風成層、V層以下は水成層である。水成層から風成層へ移行するV層の上部は水平堆積ではなく、複雑な様相を呈している。

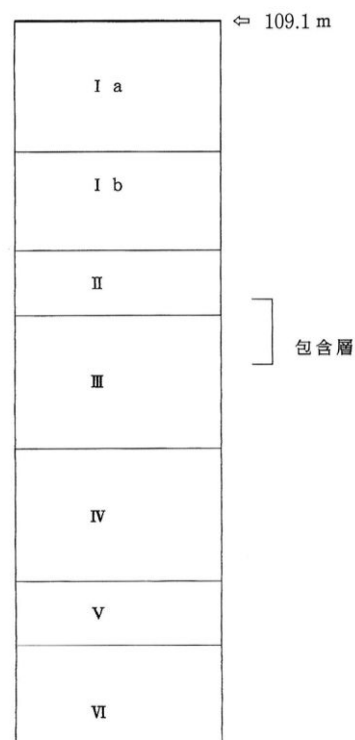


図23 層序概要図

3 分布

石器群は層位的に褐色粘土層から粘土質シルト層にかけて出土した。根等による攪乱も入り、生活面は、IV層中と推定した。石器群の表面的な分布は調査D区の東北コーナーに位置し、全体として楕円形の状況を示す。ブロックとしては1ヵ所の確認となった。1号ブロックと呼称する。このブロックは長径4m、短径2mを測る。東側は古墳の周溝SDに削られて消滅し、周溝覆土からも剥片・碎片が出土している。本来はもう少し東側にも広がっていたものと考えられた。ブロック外からも尖頭器・搔器・篋状石器などが単独で出土・採集した。

II層以下、手掘りによる掘り下げを実施、層位と分布の広がりを確認している。

I～II層 古墳と思われる周溝確認中、石器片が出土し始める。調査区北東コーナー付近を精査。旧石器時代の遺物の可能性があり、出土位置を記録しつつ、取上げに入る。根等により攪乱されているものの、径1mの範囲に、比較的大き目の剥片が分布する。

III～IV層 III層中～IV層上部にかけて、広範囲に散布が確認された。微細な剥片の拡がりが見られ、径2m50cm程の範囲に分布している。根などの影響で、10～15cmほど下に入り込んだ資料もある。分布の中心付近には、比較的大きい資料が分布している。遺物の出土レベルのピークからIV層上部が本来の包含層と推測できる。

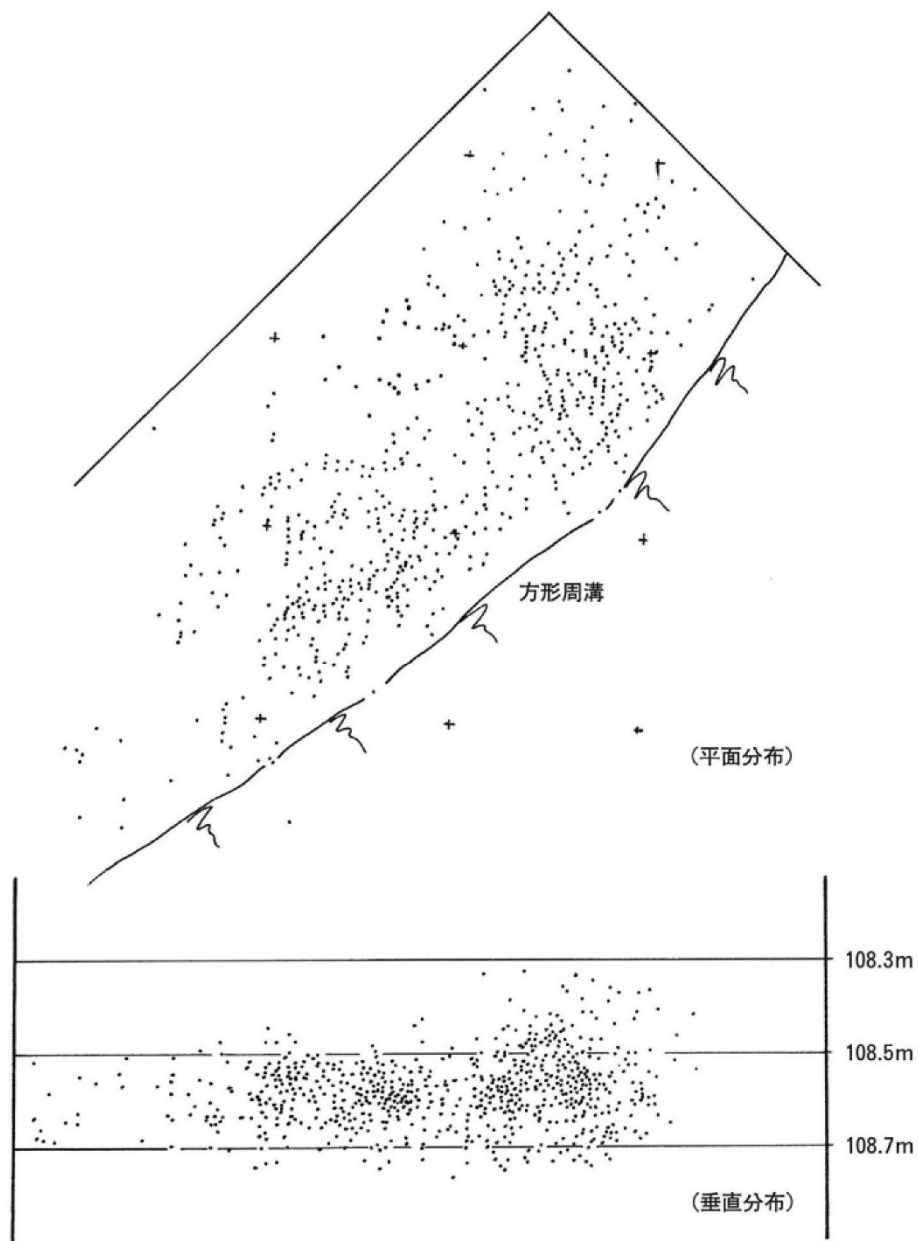


図24 旧石器の平面・垂直分布図

4 出土石器

第1ブロックの旧石器時代石器群は剥片 210 点、碎片 540 点の計 760 点から構成される。発掘資料はすべて剥片・碎片である。これらはすべて槍先形尖頭器の製作加工の途上に生じたものと思われる。

(1) 剥片・碎片

ほとんどは槍先形尖頭器の製作によって剥ぎ捨てられた石片であり、素材加工の部位や製作段階によって大小様々な形態の石片が出現する。中には、礫面を有するものも含まれるが概して大型の剥片に多く、初期の調整剥離において礫面の除去が進められた経緯を示すものと考えられる。

資料の大きさと背面の剥離構成は、その調整剥離段階を示すひとつの指標として以下のように分類した。

- A 類: 背面の剥離面剥離軸が、剥片剥離軸と同一方向の剥離面のみで構成される。
- B 類: 背面の剥離面剥離軸が、 45° ～ 90° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- C 類: 背面の剥離面剥離軸が、 180° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- D 類: 背面の剥離面剥離軸が、 90° ～ 135° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- E 類: 背面の剥離面剥離軸が、A～D 以外でさまざまな方向から剥離された剥離面で構成される。

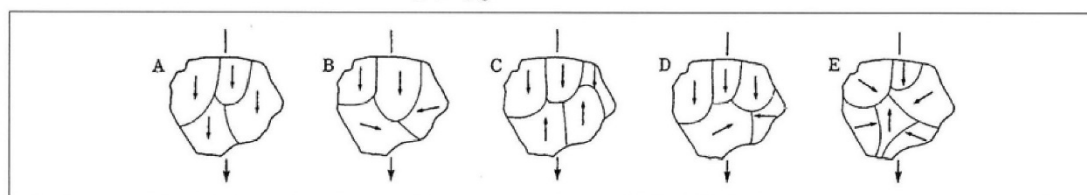


図25 剥離面構成模式図

A 類は背面にみられる剥離がすべて打面側からの剥離による剥離面構成からなり、打面側からの剥離が連続する点と対辺からの剥離面を有しないことを特徴とするが、資料全体の 60%を占め、その内訳は小形の剥片が 75%を占める。小形であるがゆえ中軸線を越えないことにつながるであろうが、中軸線を越える必要のない終末段階の調整剥片に相当するものと考えられる。

他にブロックを切り合う古墳周溝から搔器、筥状石器が出土し、近接する畑地から槍先形尖頭器が採集された(図 26)。

5 石器群の性格

Ⅲ層～Ⅳ層の遺物分布を見ると小型剥片と碎片および微細な石片が資料を構成することから鑑み鑑み、尖頭器の製作が行われたことは間違いないと思われる。しかも、大形の剥片がないこと、表皮のついた剥片が少ないこと、調査区内にはブランクとして搬入され、2 次的剥離作業が行われたエリアととらえることができよう。生産された尖頭器は遺存していない。生活の場に持ち運ばれたか、あるいは本来の機能を果たしているものと推測される。分布図をみると、ブロックはさらに西北側に広がる様相を示している。

D 調査区の北東約 10m のところからも、尖頭器を主体とする石器ブロックが検出されている(1981 山形県教委)。

東北横断自動車道酒田線建設に関わる緊急発掘調査では、隣接した 6 区から石器集中地点が 1 ブロックが確認されている。径 3m ほどのブロックで、礫や石核を中心に小形の剥片、碎片が多数出土した。高瀬山北端の L 地点からも尖頭器製作の場と思われる石器集中地点が確認されており(石井 1985)、段丘縁片に近接し旧石器時代の遺跡が散在しているのかとも考えられる。



図26 D・E地区出土旧石器実測図

6 編年的位置

石器群の特徴及び周辺地域との比較から、所属年代につれておきたい。高瀬山遺跡では、

以前から尖頭器が採集されたり、発掘資料として注目されることがあった。

高瀬山遺跡(送電線部分)では槍先形尖頭器の破損品や剥片がまとまって出土し、製作地のブロックとみられる。出土した槍先形尖頭器は、薄手で幅広いタイプの木葉形尖頭器が主体を占める。高瀬山遺跡の北側の位置するL地点段丘崖に位置する石器製作地である。1985年、市道整備に係る発掘調査で尖頭器・搔器・片刃石斧が出土した。

寒河江市高松 II 遺跡でも、槍先形尖頭器とともに、たくさんの剥片碎片が出土している。槍先形尖頭器を観察すると、形態の大小と広がりがあるものの薄手の槍先形尖頭器を仕上げている様子が伺える。他に組成する石器として大型の両面加工石器があり、類例は日向洞窟遺跡西地点や仙台市野川遺跡から出土している。

寒河江川流域ではこのほかに西川町月山沢遺跡・上野 A 遺跡・弓張平 B 遺跡において槍先形尖頭器石器群が出土している。月山沢遺跡では細石刃の片鱗が伺え、上野 A 遺跡では、削片剥取の技術を持つ尖頭器、弓張平 B 遺跡では初期の有舌尖頭器石器群がまとまって出土した。これらの石器群の検討から石井浩幸は、山形県における槍先形尖頭器石器群の編年案を示した。この編年表に組み入れるならば、高瀬山遺跡 E 調査区(2000)の石器群は、大きく細石刃文化以降縄文時代草創期までの時期におさまると見られる。製作された尖頭器の形態や伴出する石器群の全体が判明するならば、なお詳細な時期を設定することも可能となる。今後との課題としておきたい。

参考文献

- 宇野修平・大宮富善他 1980 「市内遺跡発掘調査報告書」寒河江市教育委員会
渋谷孝雄 1980 「高瀬山遺跡」 「分布調査報告書 9」 山形県教育委員会
石井浩幸 1985 高瀬山遺跡 L 地点 『高瀬山 B・K 遺跡』 寒河江市教育委員会
佐藤正俊 1980 『月山沢遺跡』 山形県教育委員会
加藤稔他 1978 「弓張平 B 遺跡 3 次 4 次発掘調査報告書」 山形県教育委員会
阿部祥人 1999 『上野 A 遺跡発掘調査概要』 慶応義塾大学考古学研究室
石井浩幸 2000 「弓張平 B 遺跡の有舌尖頭器石器群の検討」 『山形考古』 6-1

4 高瀬山遺跡横断自動車道 1 期調査区出土旧石器

1 1 期調査区の旧石器出土地区

1期調査区では1区と6区で旧石器が出土した。その位置を図27に示す。

2 1区の旧石器

1区 旧石器出土地点の層序 (図29・30)

1区の調査区がのる高瀬山の段丘面は、地形区分4面に相当する(阿古島 功 1997)。

高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高112m、最上川との比高20mの区域にあたり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡(3+面)は、より低位の段丘面に相当し比高が18mである。1区付近はさくらんぼやりんご・桑等の果樹地域になっていた



図27 高瀬山1期調査区旧石器出土地区位置図

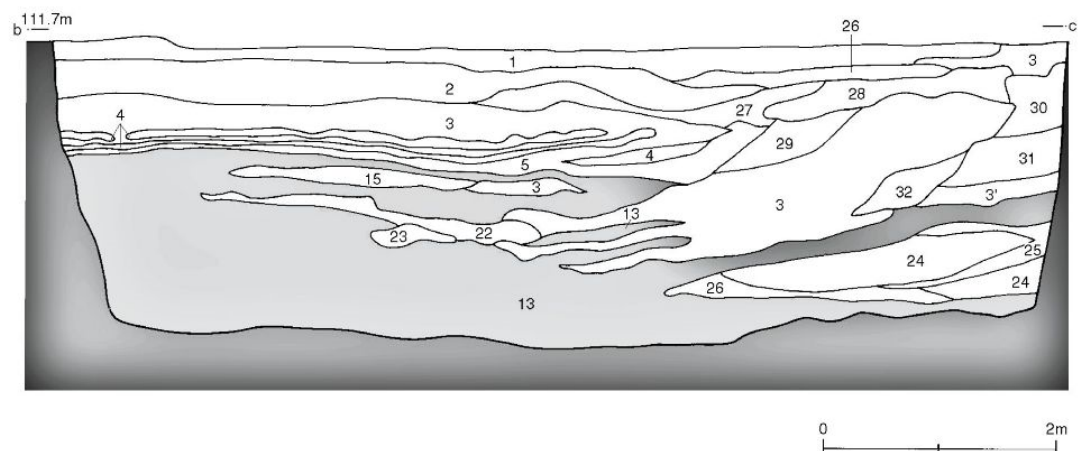
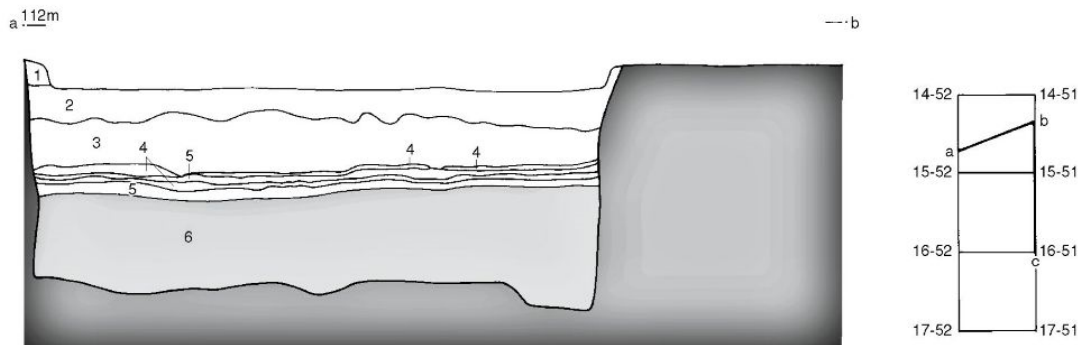
ため、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで攪乱される場合があり、一部根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。調査が進むにしたがい、より下層にも包含層が存在することが確認され、最終的には段丘礫層を掘りきり、岩盤面まで掘り下げた。この掘り下げ箇所の東壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下 2 m70cm である。

I層 耕作土	VII層 明褐色シルト層
II層 黒色土	VIII層 褐色砂層
III層 漸移層	IX層 赤茶褐色砂層
IV層 明褐色風化火山灰層	X層 赤茶褐色砂礫層
V層 明褐色粘土質シルト層	XI層 黄褐色砂層
VI層 黄褐色粘土質シルト層	

以上の堆積層のうち、I～III層が縄文時代までの遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石器が出土し、旧石器時代の遺物は、これらI～IIIの層準からも出土するが、耕作や根の攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はIV層中にある。石器群はIII層下部からまとまった出土を見せ始め、IV層中に集中して出土する。IV層に当時の生活面があると判断できる。IV層に集中する石器群を第I文化層とした。V層以下VI層までは無遺物層である。シルト層や砂層の堆積したVII層に相当するレベルから若干の石器が集中して出土する部分を確認した。これを第2文化層とする。

礫層からも散漫ながら摩滅している石器を検出し、検出レベルが上下しているものの礫層内出土のものを一括して第3文化層として区分した。第3文化層の礫層内から検出した炭化物のC14年代測定では、46,000BPの年代が示された（理化学的分析報告参照）。

石器群の年代を判断する1つの指標になるものと思われる。



- | | | | | | |
|----|------------|--|-------|--------|---------------------------------|
| 1 | 黄褐色粘質土 | 灰白色土粒少量混入 | I | 黄褐色土 | 鉄分及び白色土(火山灰)をわずかに混入 |
| 2 | 黄褐色粘質土 | 灰白色粘土を筋線状に混入 | II | 黄褐色土 | 白色土粒を多く混入 |
| 3 | 灰白色粘質土 | 黑色土粒(マンガン)多量混入 | III | 黄灰色土 | IIよりも白色土粒、白色土を多く混入 |
| 3' | 灰白色粘質土 | 黑色土粒(マンガン)多量に混入、酸化している | IV | 灰白色土 | 粘性やや有り、(火山灰層?)黄褐色砂質土少量混入 |
| 4 | 赤茶褐色砂質土 | 3と同様だが、黄褐色シルトブロック多量混入 | V | 灰白色土 | IVよりもやや砂質で灰白色土少なく、黄褐色砂質土を多く混入する |
| 5 | 灰白色砂質土 | 3を多量に混入、マンガンを多量に混入 | VI | 灰白色土 | IVとは同じだがやや砂質 |
| 6 | 赤茶褐色礫 | 3と似るが、3より砂質 | VII | 黄褐色土 | 灰白色土粒多量に混入(5mm~1cm) |
| 7 | 黄褐色砂 | 3、5を筋状に混入 | VIII | 黄褐色土 | 灰白色土を多量に混入 |
| 8 | 灰白色粘質土 | 3、5を筋状に混入 | IX | 灰白色土 | やや砂質土を混入 |
| 9 | 黄褐色砂質土 | 3とは同じだが、3よりマンガン多量に混入 | X | 黄褐色土 | 灰白色粘質土を多く混入 |
| 10 | 黄褐色砂質土 | 灰白色砂質粘土を混入、グライ化著しい | XI | 黄褐色土 | 灰白色土ブロックを少量混入する |
| 11 | 赤茶褐色粗砂 | 礫少量混入、小礫0.5~1cm混じる | XII | 灰白色土 | 黄褐色砂質土を多量に混入 |
| 12 | 灰白色砂質粘土 | 砂利多く混入、14とは同じ | XIII | 灰白色土 | 粘性強い(Xと似るが) |
| 13 | 黄褐色砂礫 | 礫多量に混入 | XIV | 灰白色土 | 灰白色砂質土少量混入、Xと同様だが、灰白色砂少ない |
| 14 | 灰白色粗砂 | 12と同様だが、色調が黄褐色で灰白色粗砂(14)を混入、一部灰白色砂質土混入 | XV | 黄褐色土 | ややグライ化強い |
| 15 | 黄褐色~赤茶褐色粗砂 | 小礫(2~3cm)と灰白色砂質土を多量に混入、11とは似ている | XVI | 黄灰色土 | 16と同様だが、グライ化16より弱い、灰白色砂質土を混入 |
| 16 | 黄褐色~赤茶褐色粗砂 | 10と似るが、礫ほとんど混入しない | XVII | 黄灰色土 | 灰白色砂質粘土を多く混入、17とはほぼ同様 |
| 17 | 灰白色粗砂 | 15と同じと考えられるが、灰白色部分多い(グライ化少ない) | XVIII | 黄褐色砂質土 | IIと似るが、灰白色土粒を少量混入 |
| 18 | 灰褐色粗砂 | 15と同じと考えられるが、灰白色部分多い(グライ化少ない) | XIX | 黄褐色砂質土 | 19とは同じだが、19よりやや灰白色土粒を少量混入 |
| 19 | 灰褐色粗砂 | 12、13と同様だが、色調赤い | XX | 黄褐色砂質土 | IIと同様だが、IIより砂質 |
| 20 | 褐色土 | グライ化著しい | XXI | 黄褐色砂質土 | IIと同様だが、IIより砂質 |
| 21 | 褐色土 | 岩板、砂岩? | XXII | 灰白色砂質土 | IIと同様だが、IIより砂質 |
| 22 | 灰白色粘質土 | 3と似た土だが、やや軟弱で礫混入する | XXIII | 褐色砂礫 | IIと同様だが、IIより砂質 |
| 23 | 黄灰色粘質土 | 22と似るが22より砂質で黄褐色(グライ化)である | | | |
| 24 | 灰白色粘質土 | 16と同様だが、灰白色粘土含まず、礫少量混入 | | | |
| 25 | 灰白色粘質土 | 13と同じにしてもいいが、やや灰白色砂多い | | | |
| 26 | 黄褐色粘質土 | 2と同様だが、灰白色粘土をわずかに混入しない | | | |
| 27 | 黄褐色粘質土 | 2と同様だが、2より灰白色粘土やや少なく色調2より黄褐色が強い(グライ化?) | | | |
| 28 | 黄褐色粘質土 | 27より灰白色粘土やや少ない | | | |
| 29 | 黄褐色粘質土 | 2と似るが、2よりやや砂質 | | | |
| 30 | 褐色砂質粘土 | 灰白色土粒、同ブロック多く混入(色調が赤いのはグライ化のためか) | | | |
| 31 | 灰白色粘質土 | 3と同様だが、粘質土でなく砂質土である | | | |
| 32 | 灰白色粘質土 | 3と同様だが3よりやや砂質である | | | |
| 33 | 灰白色砂質土 | 一部グライ化して黄褐色を呈する3を少量混入している | | | |

図29 1期1区旧石器出土地土層断面図(1)



図30 1期1区旧石器時代出土土層断面図(2)

1 区 旧石器時代遺物の分布

旧石器時代遺物は1区の中央部に分布し、高瀬山の丘陵部分でも全体の中心付近にあたる。旧石器が出土した部分を中心の約100㎡にわたって慎重に掘り下げを行いつつ、石器の出土状況の記録を行っていった。先に述べたように、層位的に3つの文化層を確認されたことから、それぞれの文化層の石器群の分布状況を説明する。

第1文化層(図31~33)

第1文化層として確認した石器群ブロックは大半がIV層からV層にかけて出土しており、平面的な分布は、南北に15m、東西に10mの不整楕円形の範囲を示す。ここから1,565点の旧石器時代の石器群が検出され、浅い落ち込みも確認したが、風倒木痕などによる自然的な落ち込みとも考えられる。全体としては大きく1つにまとまっているものの細部においては、北側や南側において、小規模な集中域を構成しているようで、幾つかの小さなブロックから大きなブロックが形成されているともいえる。さらに周囲10mの範囲にまばらに石器が分布している。

層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部をピークにレンズ状に分布

していることが窺え、集中した状況を見せている。剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。第1文化層の石器群ブロックは剥片類の集中したレベルをもとにすればIV層上～中位にかけて生活面があると捉えておく。

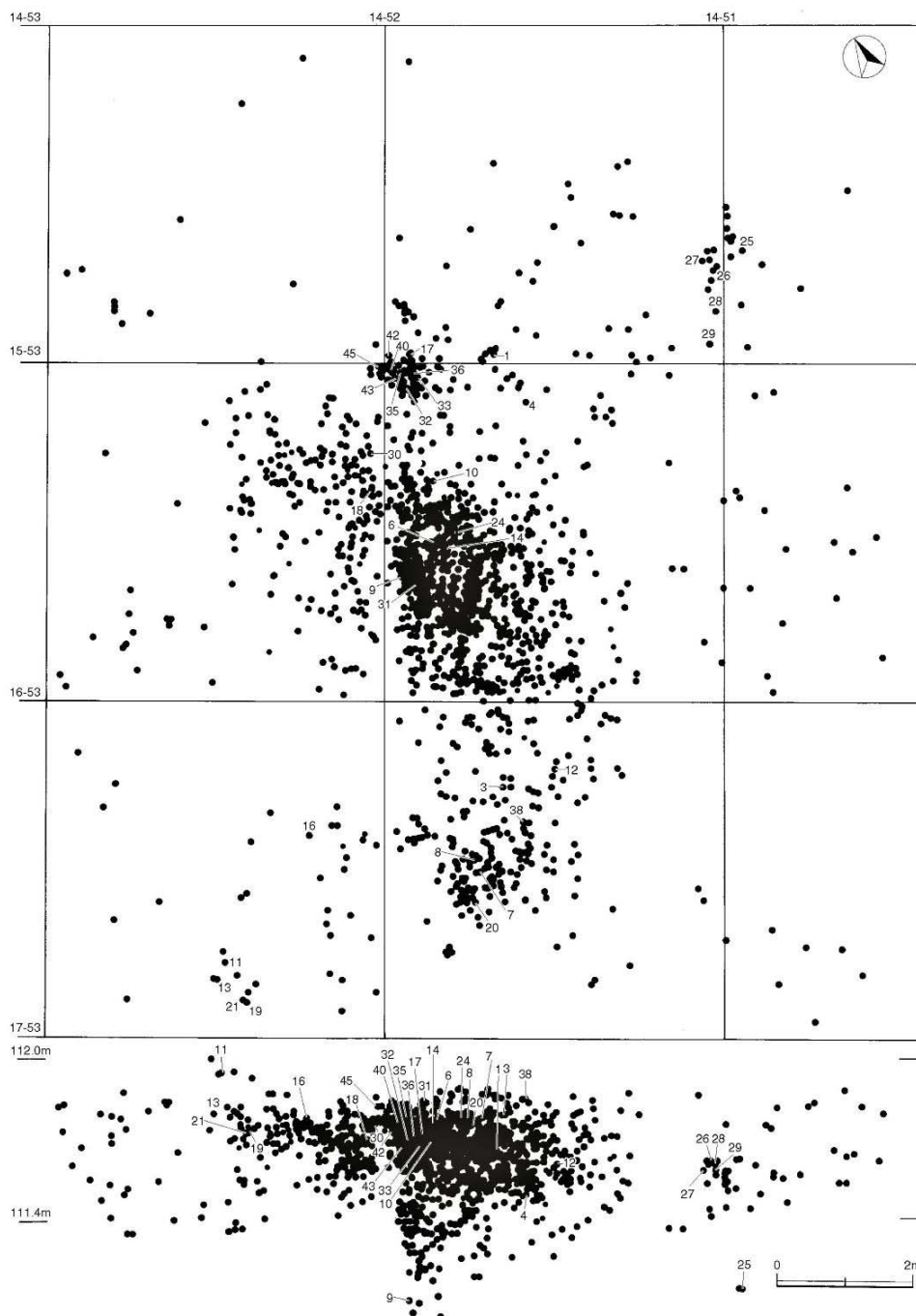


図31 1期1区旧石器第1文化層平面・垂直分布図(1)

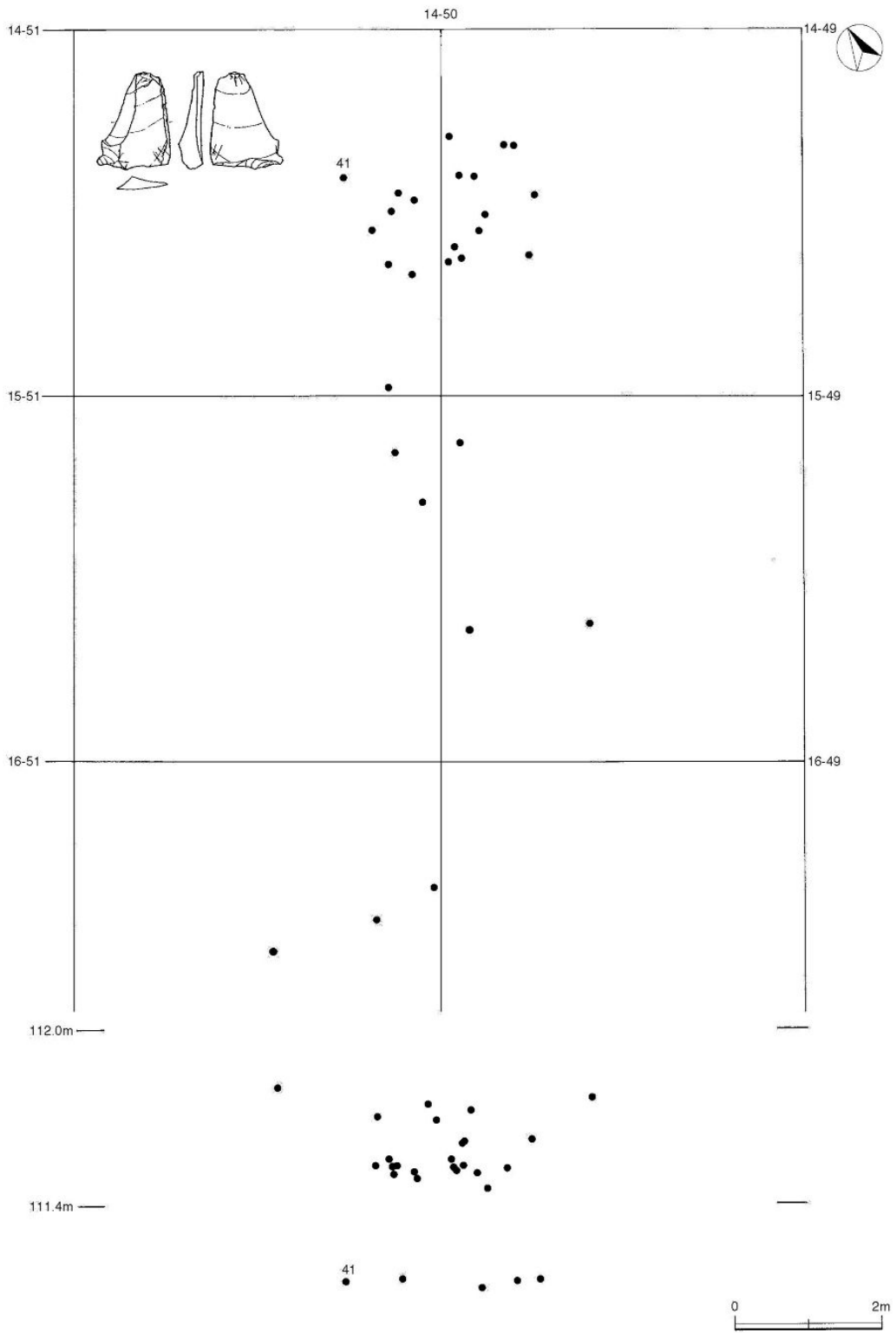


图32 1期1区旧石器第1文化層平面・垂直分布图(2)

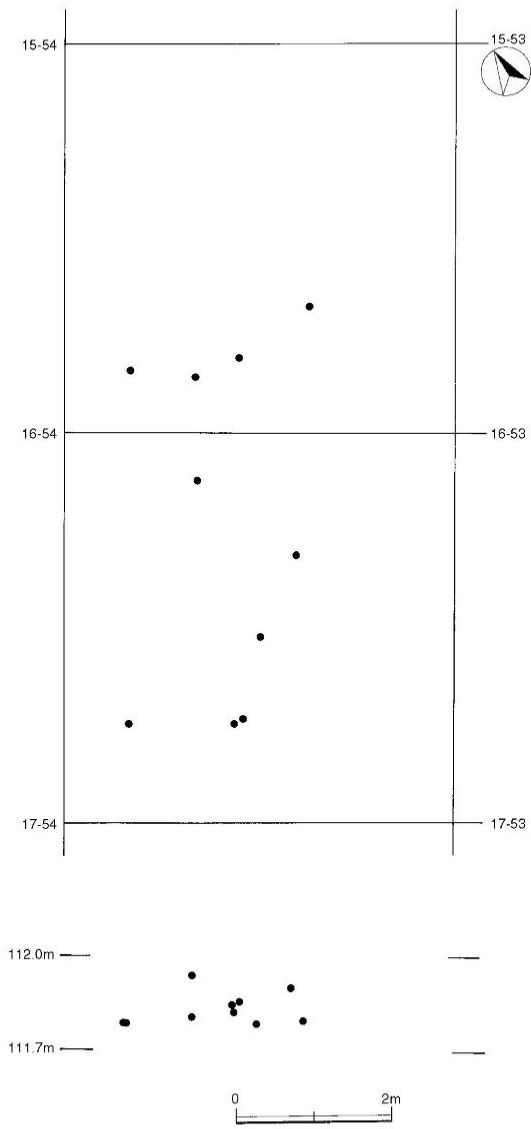


图33 1期1区旧石器第1文化層平面・垂直分布图(3)

第2文化層 (図 34)

第2文化層として確認した石器群ブロックはほとんどがVI層からVII層にかけて約 20cm の高低差を持って出土しており、平面的な分布は深掘区の全域からまばらに出土した。ここから 22 点の旧石器時代の石器群が検出された。全体として1つにまとまっているものかどうか、分布は周囲に広がることも予想され、部分的な分布状況を検出しているようでもある。

石器群ブロックとしては一カ所の確認となったが、散漫な分布と資料数の少なさは注目される。砂礫を含む旧河道の堆積層部分になるためか、石器資料のすべてが摩滅を受けたものである。

流水の働きによって本来の位置から移動し、かつ物理的な衝撃から稜やエッジがつぶれた状況を見せている。出土した石器は、石刃として分類できるものである。

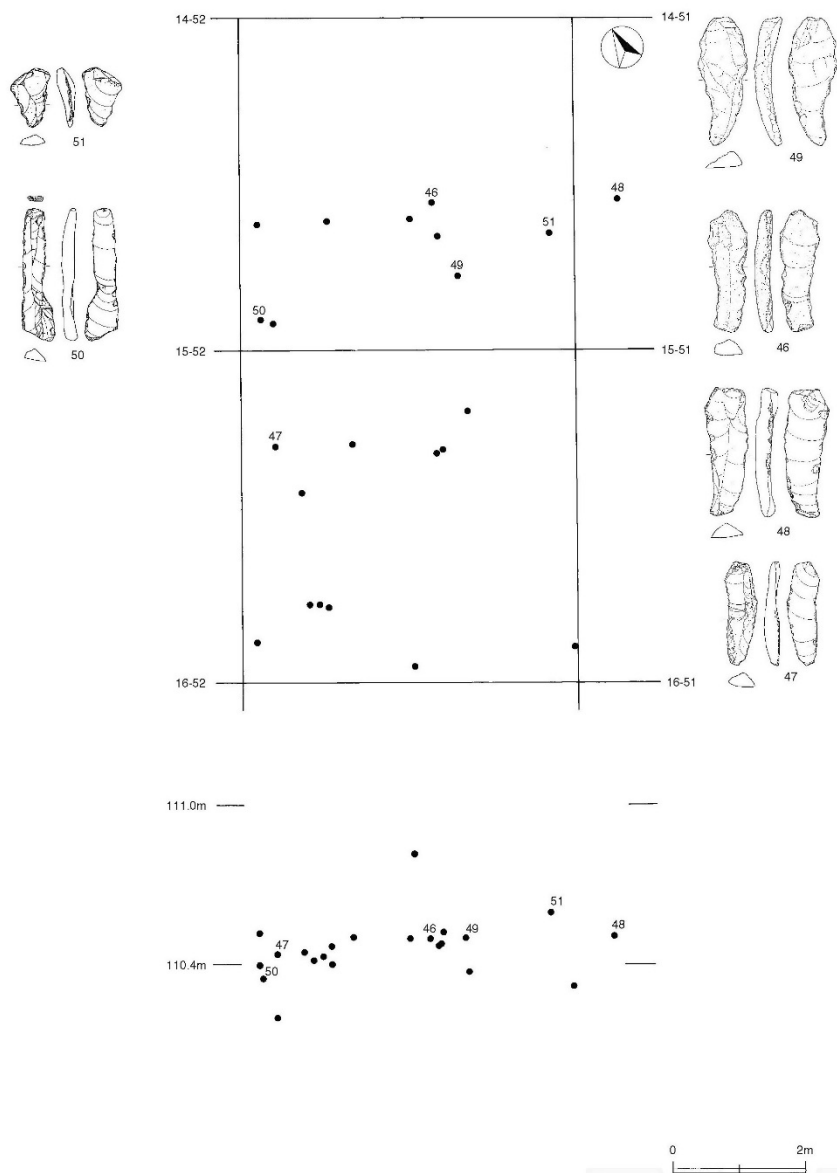


図34 1期1区第2文化層の石器の平面・垂直分布

第3文化層 (図 35)

砂層とシルト層の堆積層の下、段丘礫層内の出土石器群を第3文化層とした。深掘りした範囲 5×5 mのほぼ全域から 60cm 程の高低差をもって検出された。石器群はすべて摩滅しており、流されるなどの現象から砂礫とぶつかり摩滅したものと見られる。当初、自然的な偶発的な生成による偽石器と考えたものの、形態的に石刃や人工的な加工を受けた石器と判断できる属性を持っていたため、人工的な遺物と捉えた。ただ、礫層からは頁岩の自然礫も出土することは考慮すべき点である。

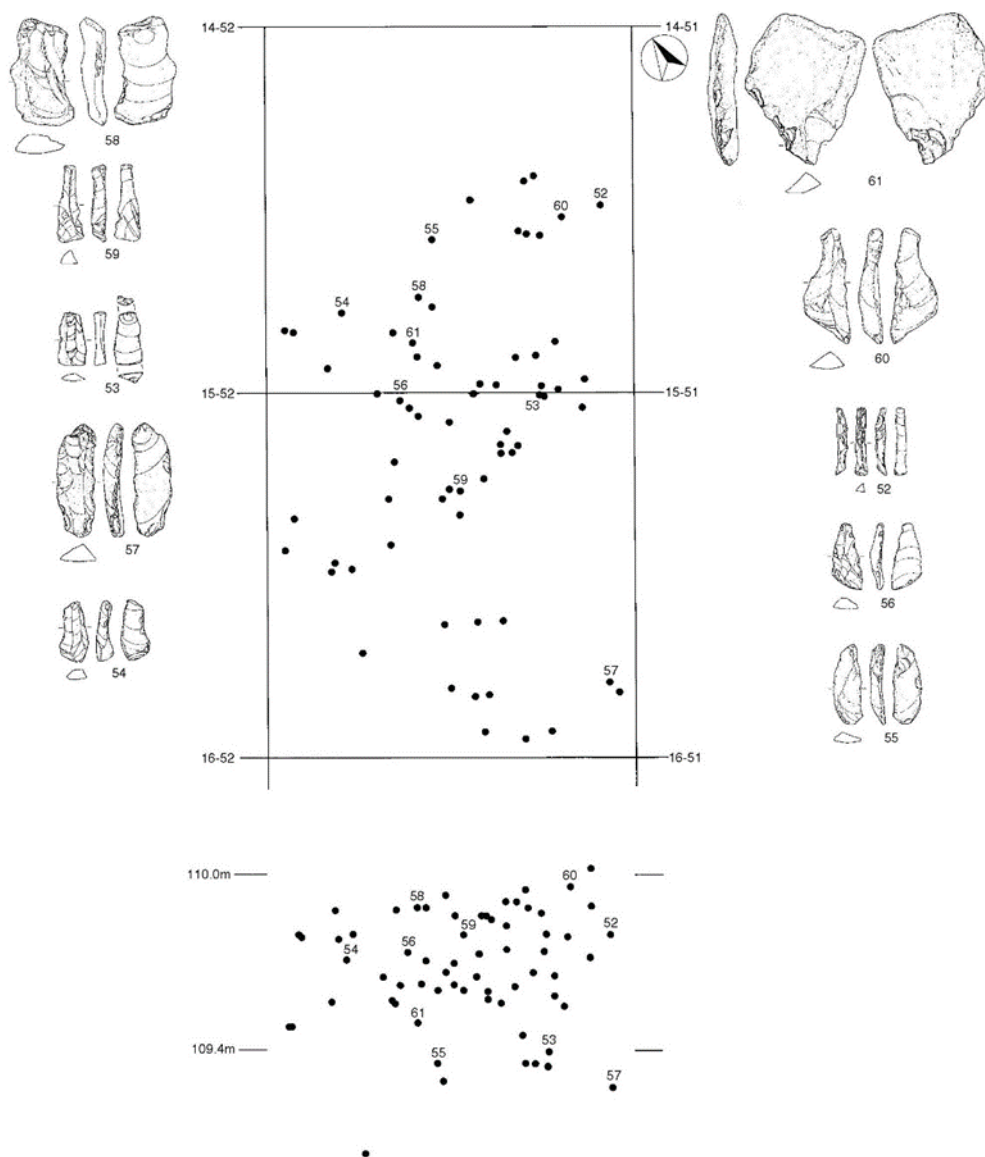


図35 1期1区第3文化層の石器の平面・垂直分布



1 区出土の旧石器時代石器群の概要

1 区の旧石器時代ブロックの石器の組成の内容としては尖頭器をはじめ、搔器、石刃、剥片、碎片などで、利器としての石器は量的に少なかった。一方、石器製作に関わる石器類が大半を占めている。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる石器類が多い。以下、出土した石器の概要を述べる。

第1文化層（図 36～41）

尖頭器（図 36-1）

器体中央部で破損し、表面には素材の礫面が残る。比較的大型の尖頭器を製作中に破損した資料と思われる。

片面加工尖頭器（図 36-2）

剥片の背面に周辺からの器面調整剥離を行い、尖頭器状に整形した石器である。

ナイフ形石器（図 36-3）

背面右側面に切り出し部を残し、他周辺は加工され、尖頭状に整形される。腹面の剥離痕の観察からは、整形した素材は石刃とは異なるようである。

舟底形石器（図 36-5）

甲板面はネガティブな面であり、剥離方向に縦長に整形される。甲板面及び底部からの調整剥離によって船底状に作り上げられ、甲板面からの細かい剥離により仕上げられている。細石刃核の母形というよりも完成した石器と考えたい。

搔器（図 36-4）

薄く幅広の剥片を利用し、背面周辺に加工がなされ、打面部は除去されている。

石核（図 37～40）

石核は4点出土している。剥片と接合したものもある。第34図20は石刃状剥片を生産した石核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、3枚の石刃状剥片の剥離痕が残る。背面・底面には表皮が残る、最終的に石核正面の剥片剥取が困難となり廃棄されたとみられる。

石刃状剥片

やや縦長の剥片で、石刃としては短いものが多い。これは、出土している石核の作業面の長さからも推測されるところで、残されている資料には、礫面があるものが多い。打面は幅があり、複数の切り合いが認められものや、平坦なものなど様々である。石材として頁岩素材のものが多数を占めるが少量ながら黒曜石製の石刃が出土している。

剥片・碎片

剥片・碎片は多数出土している。その中の一部資料を図示している。剥片類の中には、破損や切断、加工の痕跡を残すものなど様々見受けられ、同一母岩と思われる石器資料も多数存在し、その幾つかは接合している。

接合した資料について

出土した石器群を母岩別に分類し接合作業を行った。接合作業は十分ではなかったが7個体の資料について接合関係を確認した。今後さらに増加すると思われるが、現時点での成果の一部を報告する。

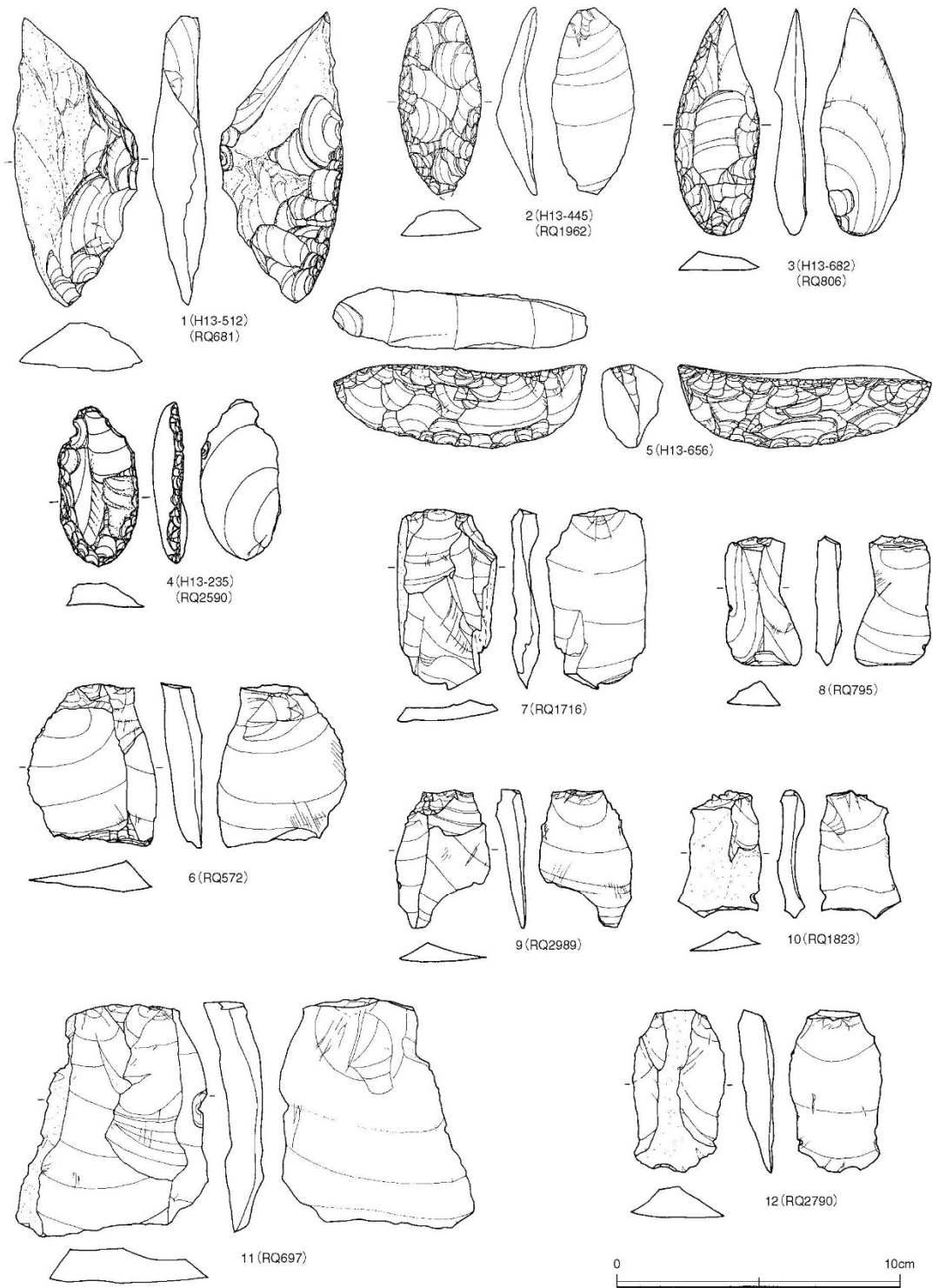


図36 1期1区第1文化層の石器〈1〉

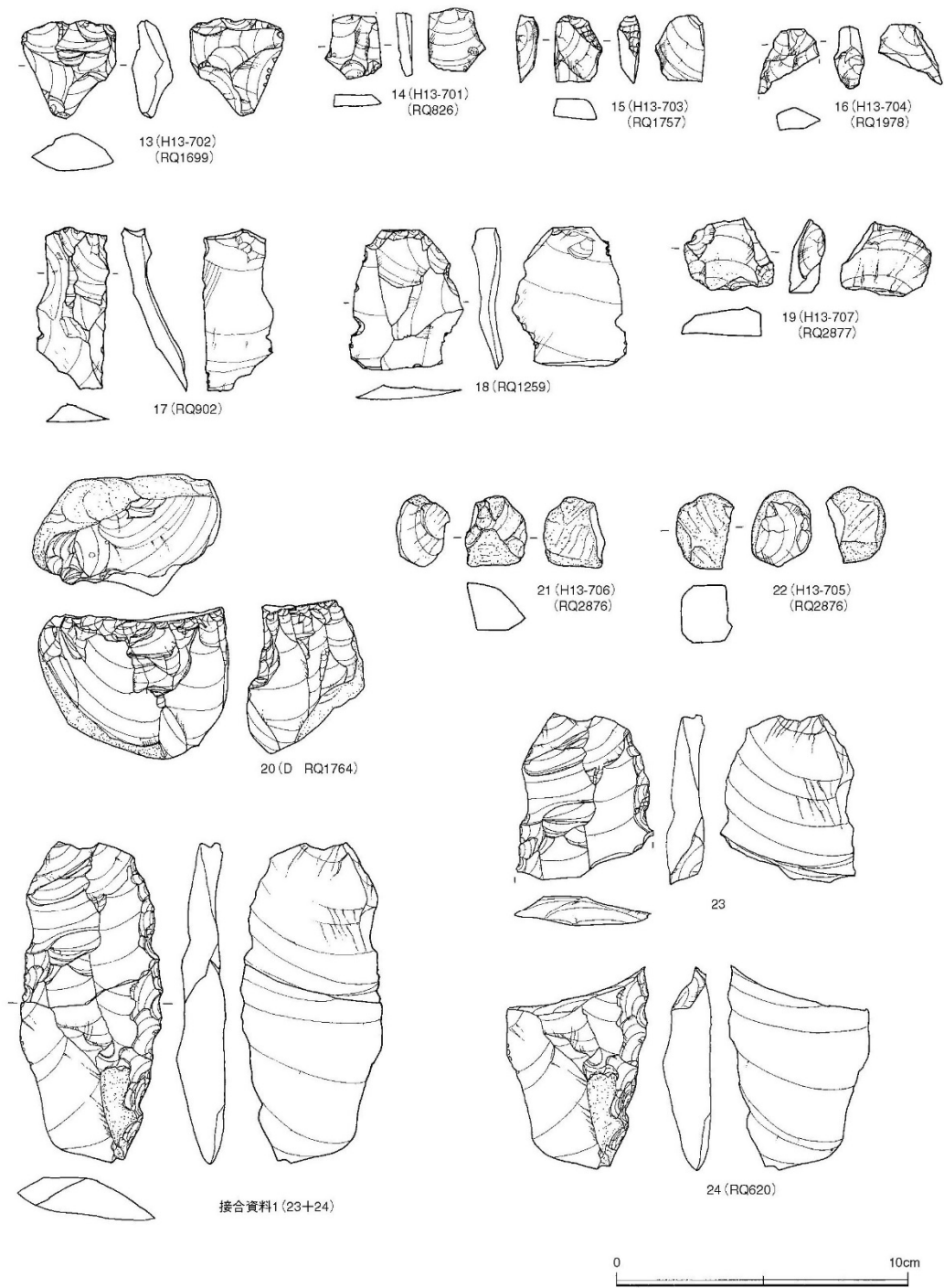


図37 1期1区第1文化層の石器〈2〉

接合資料1 (図37)

大型の石刃が途中で切損したものが接合した。長さ 10cm を超える大型の石刃で打点部分も切損している。背面右側辺に直線状に二次加工が施され、刃部を形成している。作業面が 15cm ほどを持つ石刃核が準備され、剥離されたものと考えられる。

接合資料2 (図 38)

当資料は合計5点の石器が接合した。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする剥片がある程度剥離され作業が進行した状況を見せるもので、底部付近に礫面を残している。作業面

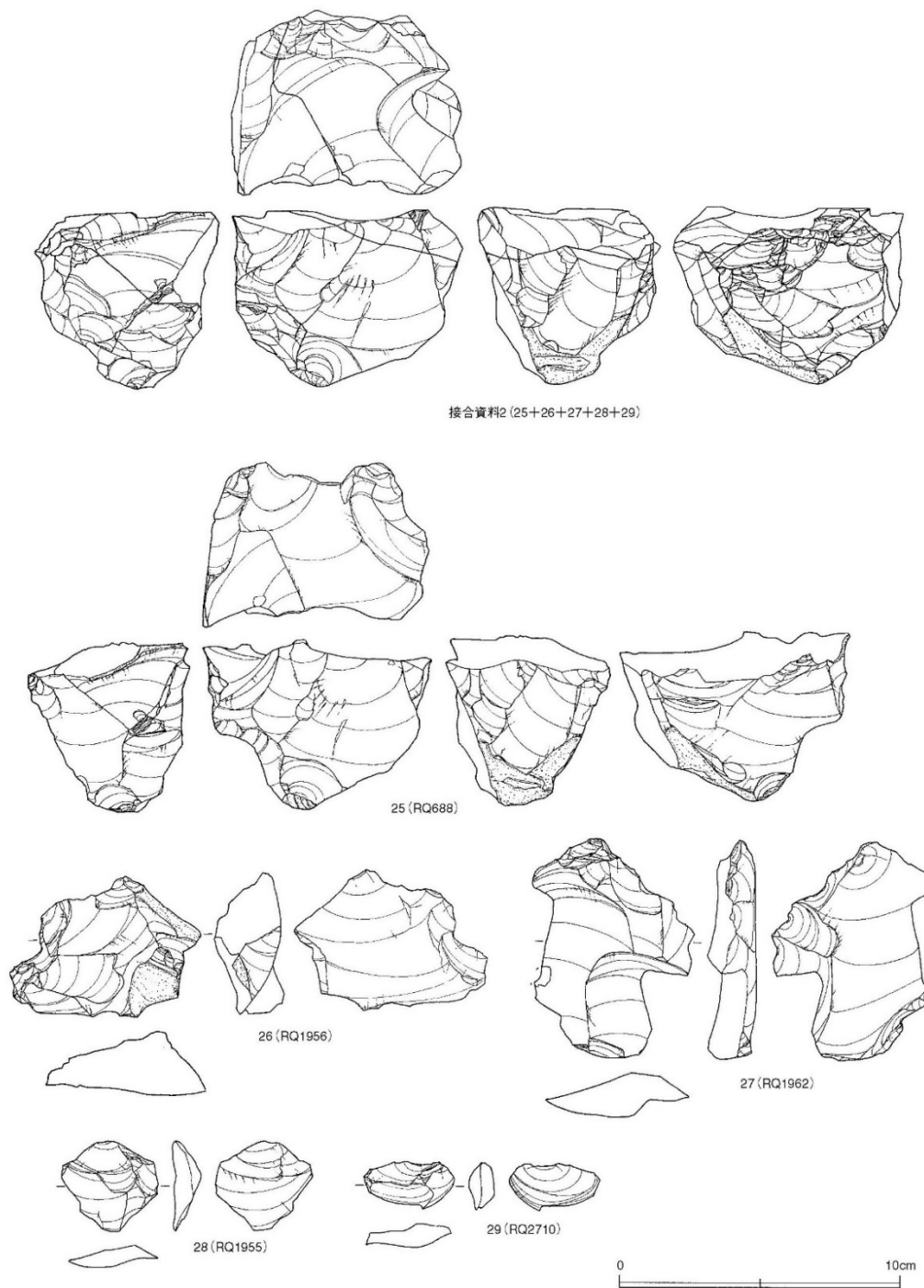


図38 1期1区第1文化層の石器〈3〉

は側辺をめくり、多数の剥離痕跡を残している。石核は剥片の剥離と打面の調整等を繰り返し、

幅広で円錐状の形態になっていったと思われる。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片が接合したことから煩雑に打面を移動しつつ目的とする剥片を得ようとする意識が看取できる。

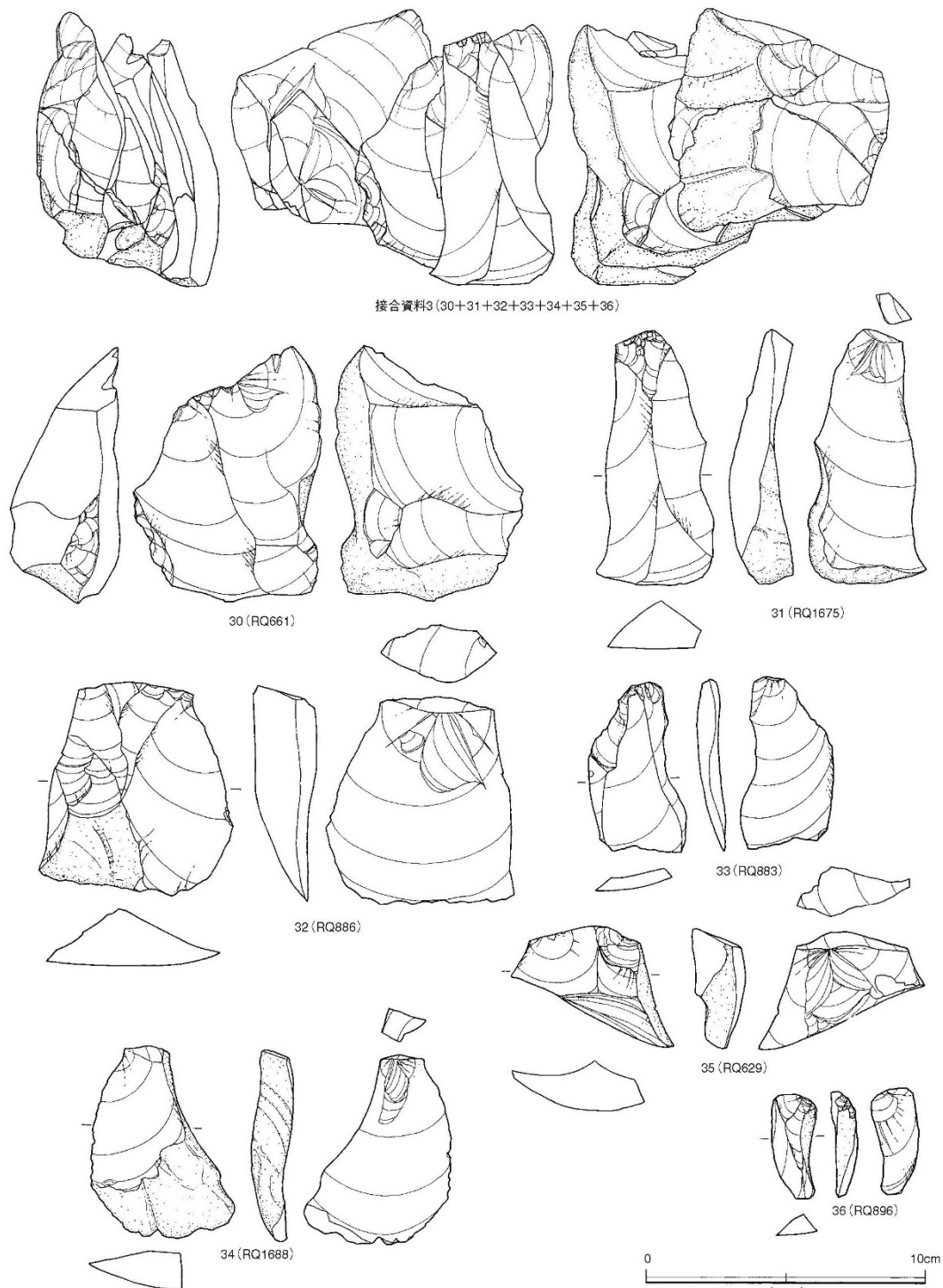


図39 1期1区第1文化層の石器〈4〉

接合資料3 (図39)

当資料は合計7点の石器が接合した。総重量は410gを量る。復元された接合資料は石核から目的とする石刃状の剥片を剥離し、薄く扁平な石核が残される状況をみせるもので、上下左右に作業面の痕跡が認められ、打面が転移している様子が看取できる。作業面となった部分はいずれも数枚の剥離痕が確認でき、接合した資料は作業面部分に接合している。作業面が打面になり、そこから剥離作業が展開するというプロセスが窺える。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは7点のみである。

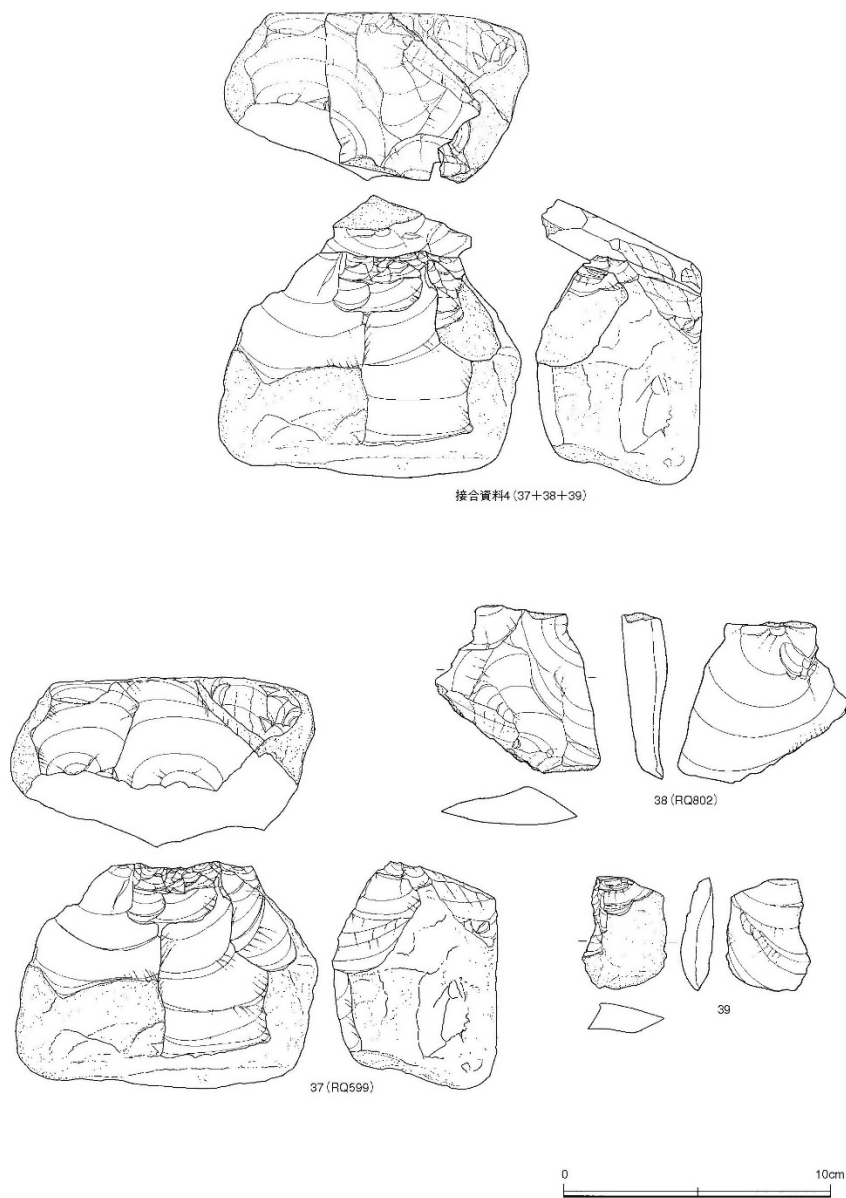


図40 1期1区第1文化層の石器〈5〉

接合資料4 (図40)

石核に2点の剥片が接合した。箱型の母岩の側辺に横方向から数回剥離を施し、礫面除去と打面を形成し、その後、作業面に対して、数回の剥片剥離作業を施している。作業面中央に剥離に

失敗したとみられる小さな剥離痕が集中していることから剥片生産を途中であきらめ、放棄した
ものと考えられる。もともとの母岩選択を理解することのできる資料である。

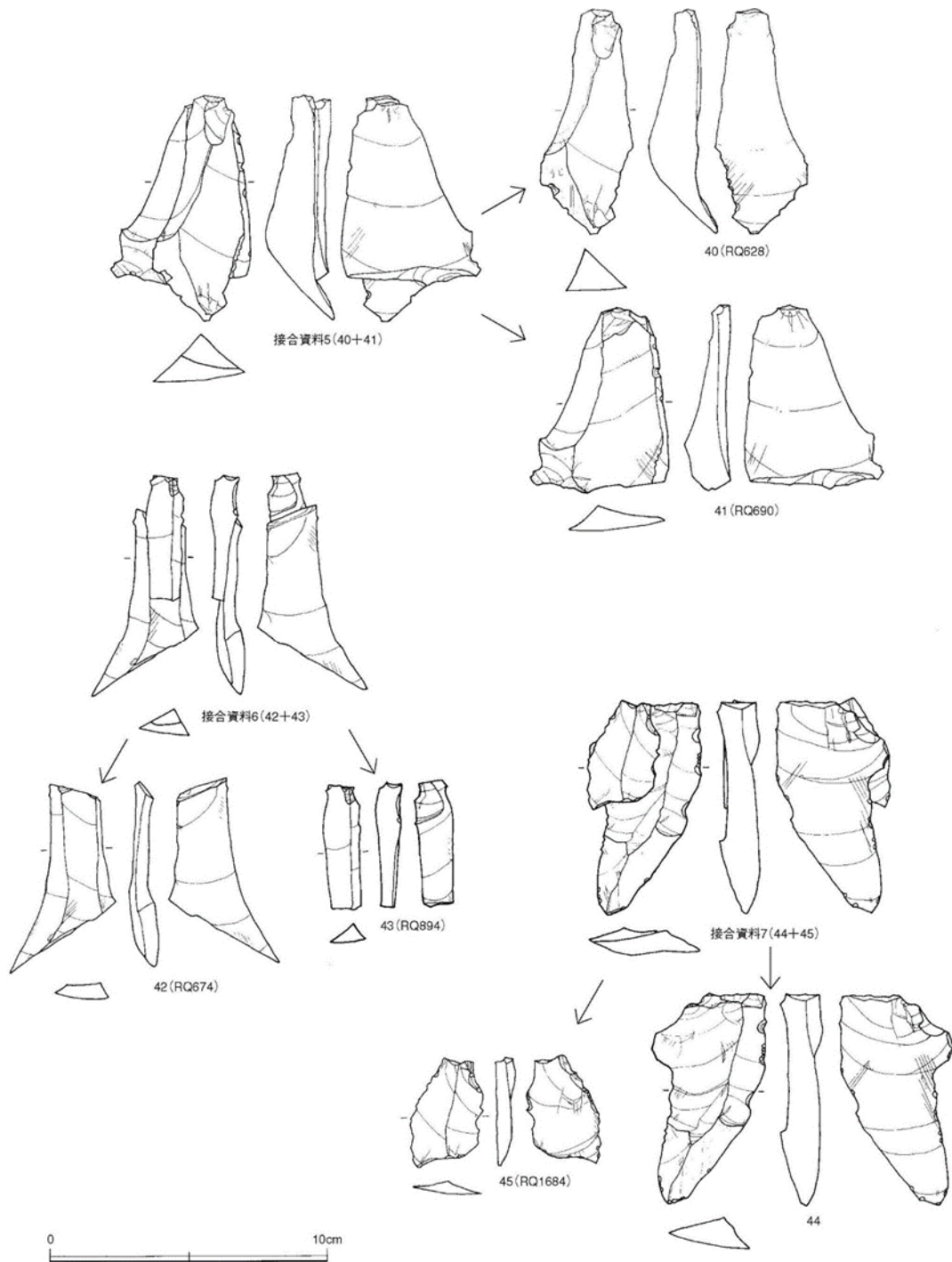


図41 1期1区第1文化層の石器〈6〉

接合資料5 (図41)

縦長剥片が2点接合した。2点ともに内側に内向気味に反っていることから、石核は円錐形

となっていたものと考えられる。

接合資料6 (図41)

石刃状の剥片が2点接合している。

接合資料7 (図41)

長さ10cm程の石刃状剥片に小さい剥片が接合した。打面部が比較的大きい。背面の剥離痕から連続して石刃状剥片が剥取されたことが伺える。

剥片の生産技術について

一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程を以下のように整理した。

①石材・石核の準備

接合資料2・4はやや扁平な角礫を、接合資料3はどんぐり形の頁岩を母岩としたと推測する。

②作業面の設定

準備された頁岩の形態や作業面との位置関係から表皮部分の礫面除去により、打面部が決定する。作業面をどこに設定するか意識が先行している感がある。

③石核の調整加工

礫面部の除去や打面の調整剥離など、意図的な剥離準備が行われている。打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への調整剥離も施される。

④目的剥片生産

作業面と打面の相対的な位置関係は一定しつつも、効率や能率性から打面が転移する。そのため、目的剥片の剥離の連続性にも限りがある。(接合資料3)

石刃の生産を目的としているものの強い規制や技能は把握できず、縦長剥片との区別が明確でない資料も多い。

⑤作業面・打面の調整

剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

⑥転移・再生

接合資料からは打面の転移が煩雑に確認される。

⑦廃棄

残核が廃棄されていることは、搬入から廃棄までの行為が一貫しており、かつ比較的短い期間で生産活動がなされたと思われる。

製作された石器

第1文化層出土の「石器」としては、図36に示した尖頭器やナイフ形石器、搔器などがあげられる。石器素材の生産として石刃を製作する技術が整っており、ナイフ形石器や搔器の素材となっている。また、尖頭器の大きさや形態をみると片面加工の小型の尖頭器は、新潟県真人原遺跡などからまとまった検出例が報告されており(小野 昭他 2003)、素材の生産となる剥片生産技術にも類似する部分があるようである。また、ナイフ形石器は、尖頭器とナイフ形石器の系

譜上に位置するとみられ、石器群の構成から西川町上野A遺跡や小国町平林遺跡等との関連が指摘される。

第2文化層 (図42)

頁岩製の石器が22点出土した。中でも石刃がまとまっており、第40図に示したように、すべて表面の摩滅したものである。第40図48などは縦長で湾曲しており、単設打面と思われる連続した剥離面を残している。長幅比が一定しており、時期的技術的に共通性が感じられる。また、どの石刃も刃部のガジリが激しく、砂礫中での二次的な影響によるものだろう。

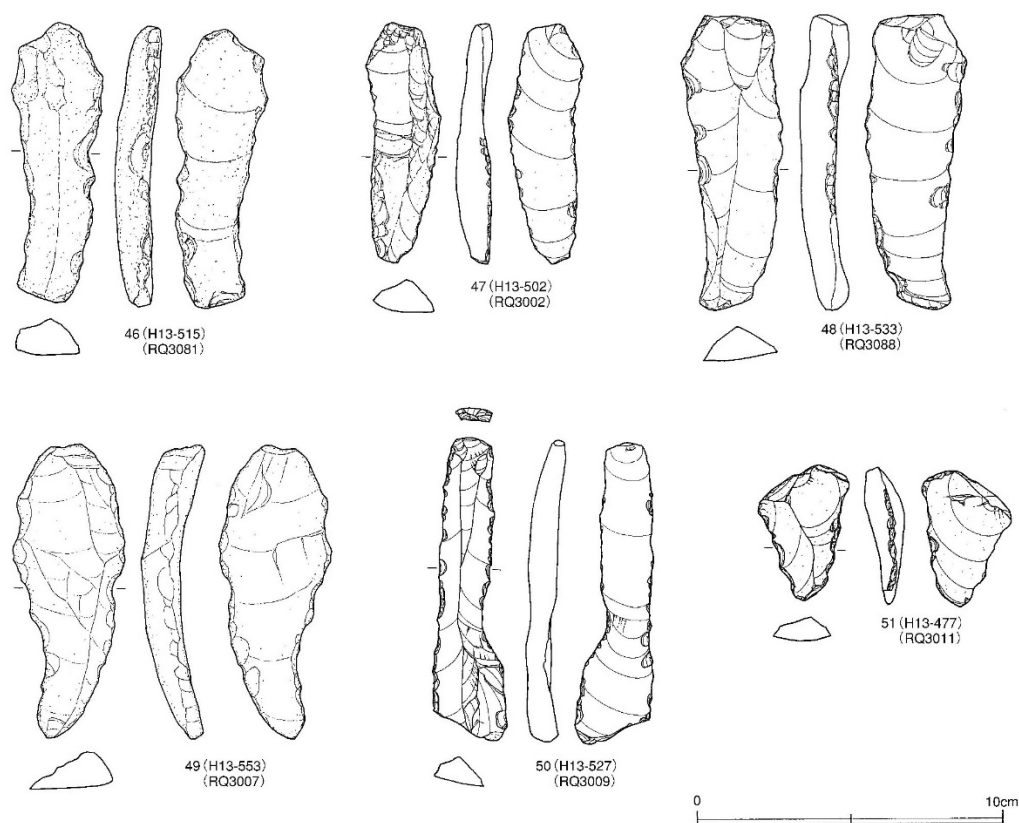


図42 1期1区第2文化層の石器

第3文化層 (図43)

石器や石片を66点検出した。いずれも表面が摩滅しており、疑わしいものも含まれているため、人工のものと思われるものを図示した。第42図52~54は石刃と見られ、52は稜付き石刃とみられる。61は原石に打ち欠いたような剥離痕が認められるが自然の営力による剥落痕の可能性はある。

第2文化層の石刃石器群のグループと両者の型式学的な検討からは判別がむずかしく、層位的な上下関係によって区別しておいた。

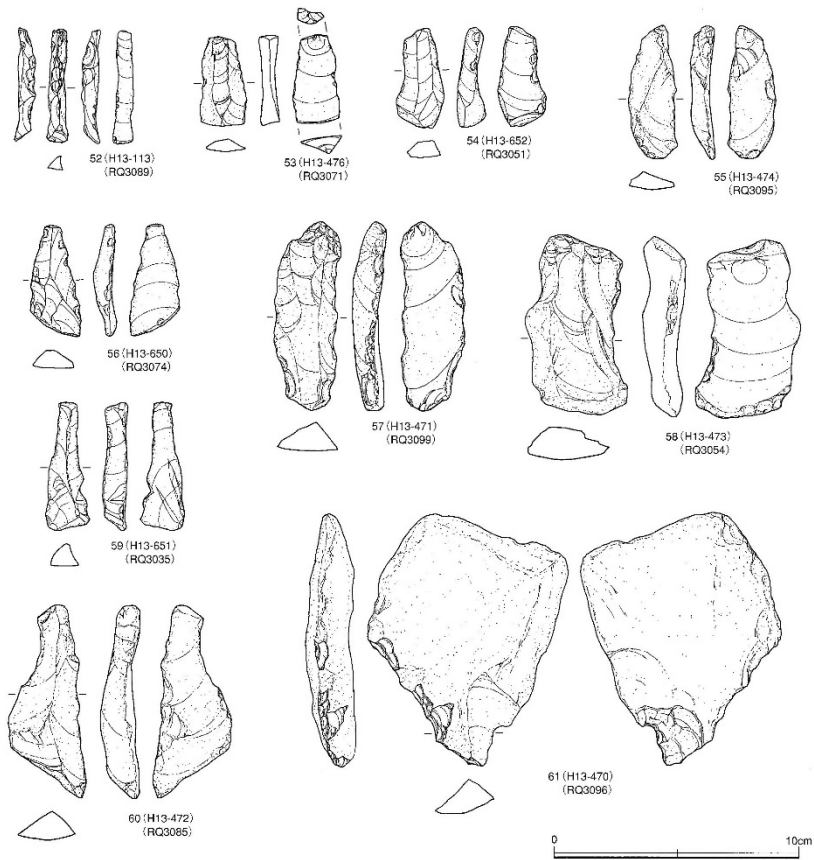


図43 1期1区第3文化層の石器

集中区以外の石器(図44)

集中区以外でも1期調査区では旧石器が出土した。

62は石核である。上向方向からの石刃状剥片の剥離痕と下方からの1枚の剥離痕が認められる。裏面は自然面である。

63は片面加工の尖頭器である。左側縁先端部と右側縁に細かいリタッチがある。

64は左側縁全体にリタッチがある。

1区検出の旧石器ブロックについて

第1文化層の遺物については分布や組成から石器の製作の場であると

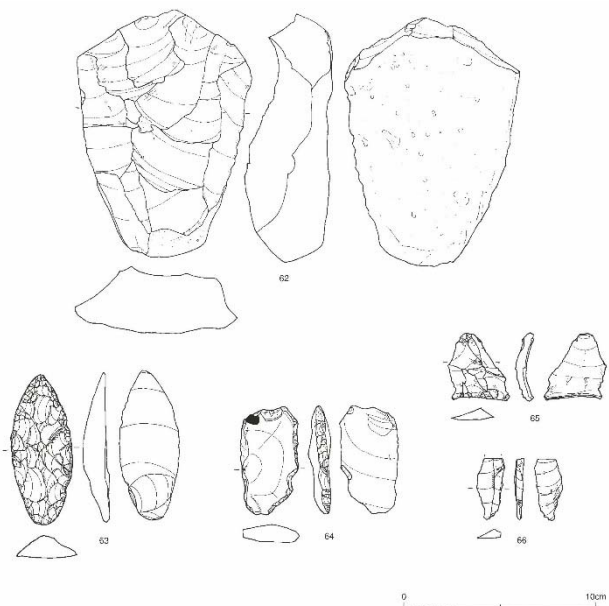


図44 1期1区調査区集中区以外の石器

思われる。大型の剥片や礫面を持つ資料が多いことから、原石の搬入後の一次処理の段階から行われているものと見られる。完成された石器が少ないことから、製作された石器の大半は調査区外に持ち運ばれたと考えられる。また単一のブロックを成しているものの、微視的には幾つかの小さい集中域を持つことは時間的に長期にわたる作業場と考えられる。ここから西側 30mほどの地点から、寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の石器製作のブロックが2カ所発見されている（寒河江市教育委員会 1987）。ここでは搔器といくつかの接合資料が得られており、剥片生産の状況など類似する部分がみとめられ、やや地点が離れているものの1つの石器文化を構成する可能性を指摘しておく。

第2文化層の石器群については石刃石器群のグループとしてまとまっており、移動しているものの技術的に類似したグループの所産と考えた。打面の転移を示す資料は少なく、連続的に剥離取得した状況を示唆する。第3文化層の石器群は、摩滅しながらも形態的には石刃石器群のグループとして理解されよう。ただ、組成や技術的な部分での特徴ははっきりせず、第2文化層の石器群との区分も明確にできなかった。

6区の旧石器

6区旧石器出土地点の層序 (図45)

6区の調査区がのる高瀬山東側の段丘面は、地形区分4面に相当する（阿古島 功 1997）。

高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高 112m、最上川との比高 20mの区域にあたり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡（3+面）は、より低位の段丘面に相当し比高が 18mの地点である。6区付近はさくらんぼやりんごの果樹地になっていたが、以前は桑畑や雑木林だったことがあり、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。一部の奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで攪乱される場合があり、さらに根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。

旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの西側の壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。この掘り下げカ所の南西壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下 1 m30cm である。段丘礫層までは、さらに約 2 mの堆積がある。

- I層 耕作土
- II層 黒色土
- III層 漸移層
- IV層 明褐色風化火山灰層
- V層 明褐灰色粘土質シルト層
- VI層 黄褐色粘土質シルト層

以上の堆積層のうち、I～IV層が遺物包含層である。

I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石

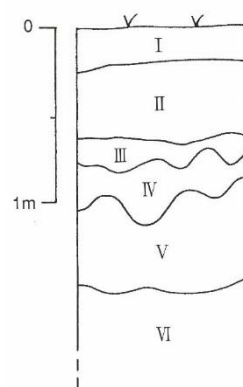
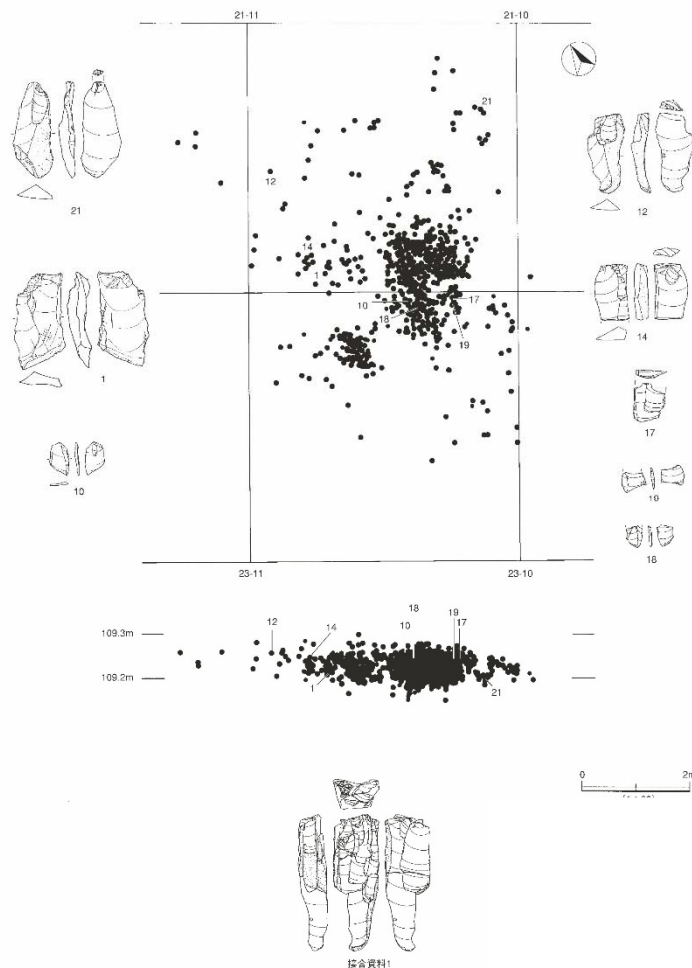


図45 1期6区の土層柱状図

器が出土する。旧石器時代の遺物は、これらⅠ～Ⅲ層の層準からも出土するが、耕作や根の攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はⅣ層中にある。石器群はⅢ層下部からまとまった出土を見せ始め、Ⅳ層中に集中して出土する。Ⅳ層に当時の生活面があると判断できる。Ⅴ層以下は無遺物層である。シルト層や砂層の下は砂礫層に到達する。Ⅰ～Ⅳ層は風成層、Ⅴ層以下は水成層と考えられ、水成層から風成層へ移行するⅤ層の上部は水平堆積ではなく、凹凸が多い。

旧石器時代遺物の分布 (図 46)

石器群の分布は6区の南東コーナーに位置し、全体として楕円形の状況を示す。



石器
ックと

図46 1期6区の旧石器平面・垂直区分布図

群ブロ
しては

1カ所の確認となった。このブロックは長径6m、短径4mを測る。東側は古墳の周溝に削平されており、ブロック全体はもう少し東側にも広がっていたものと考えられる。Ⅲ層以下、層位と分布の広がりをおぼろげながら慎重に掘り下げを行った。掘り下げ調査時の所見は以下のとおりである。

Ⅲ層→Ⅰ層の表土や耕作土の掘り下げによって、旧石器時代の遺物の存在が注目され、Ⅲ層から出土位置を記録しつつ取り上げに入った。径5mの範囲に出土地点が集中することが判明、中心部に大きめの剥片の出土が認められた。

Ⅳ層→Ⅳ層上部に径6mほどの分布の広がりを見せたのを境に徐々に、集中域が縮小していった。Ⅳ層上～中位に石刃核が直立した状況で出土し、あわせて石刃や剥片類が集中した。

集中域は大きく一つのブロックとして認識したものの、南西部分に小さな集中部分も確認でき、何回かの活動の痕跡と捉えられよう。

層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部を基準にレンズ状に分布していることが窺えた。全体的に碎片などは上下に拡散した状況をみせ、30g以上の剥片は相対的な差異は少なく、集中した状況を見せている。(中沢祐一 2000)によれば、3～10gの資料が相対的に拡散しやすく、安定するのは33g以上の資料だという。「生活面」の認定については遺物重量のみを基準とすることはできないが、少なくとも軽量の遺物の垂直方向への拡散と比較的安定している重量のある資料群があるならば大型の剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。高瀬山遺跡1期6区の旧石器時代石器群ブロックでは比較的大型剥片類の集中したレベルからⅣ層中位レベルを生活面と捉えておく。

石器群の概要

6区の旧石器時代のブロックの石器の組成は石核、石刃、剥片、碎片などで、明確に利器としての石器は確認できなかった。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる資料が多い。以下、各石器の概要を述べる。

① 石核

石核は1点出土している。剥片と接合したものもある。図49-20は石刃を生産した石核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、5枚の石刃の剥離痕が残る。側面・背面には表皮の除去の痕跡が看守される。最終的に石核の打面再生剥離後に廃棄されたとみられる。

② 石刃状剥片

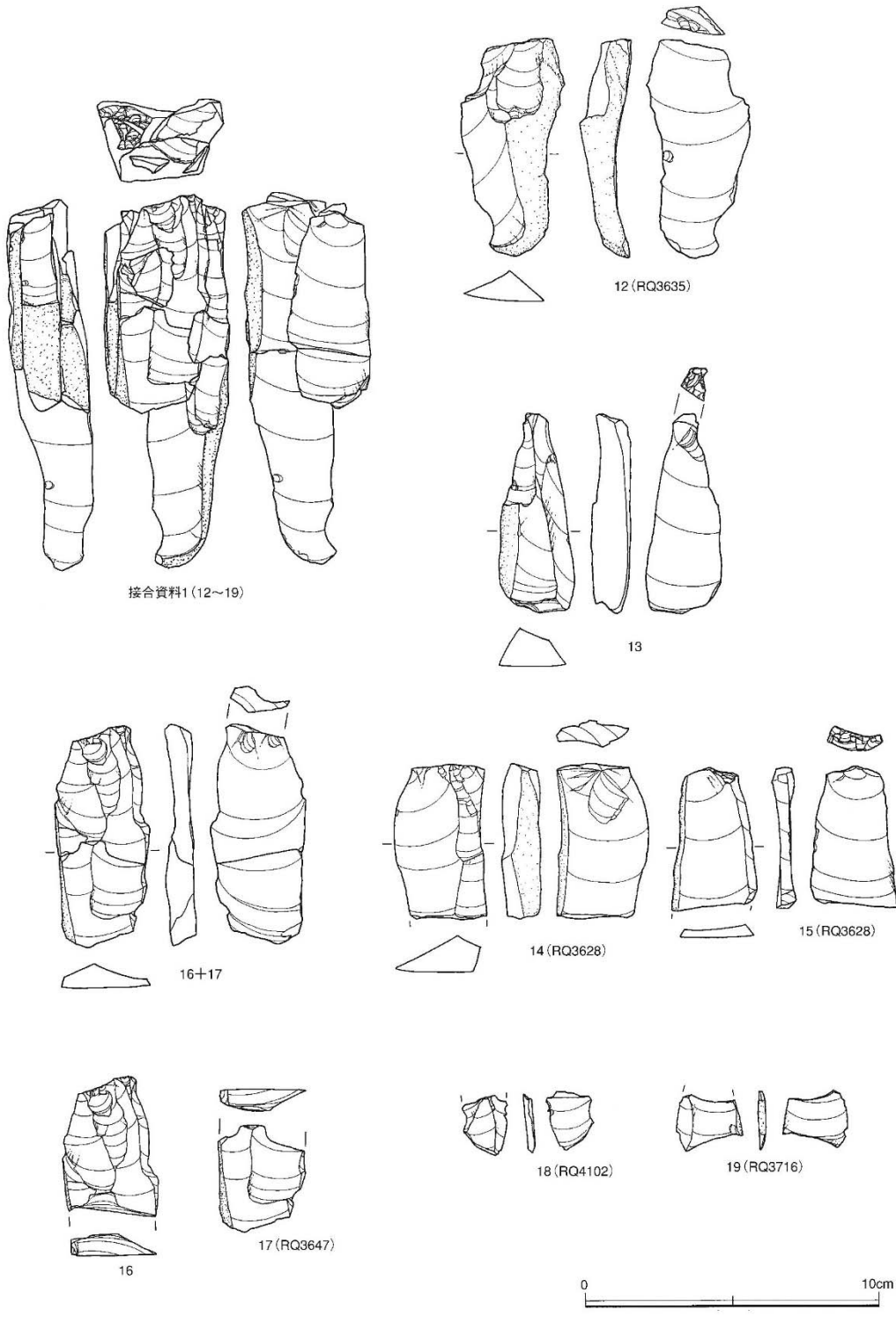
比較的縦長の形状で先端部分は、尖頭状のものが多いが、自然面や平縁のものもある。大きさは10cm前後の資料が大半で、もともとの石刃核の作業面長の範囲内での広がりとおぼろげに捉えられる。ブロック全体での割合は少なく、多くは持ち去られたと推測される。

③ 剥片・碎片

剥片・碎片は約725点出土している。石刃生産において派生した様々な石片類とみている。ブロックの中心付近には、細かい碎片がとくに密集しており、二次加工によるチップ類も含まれていると思われる。



図47 1期6区の石器〈1〉



接合資料1 (12~19)

図48 1期6区の石器〈2〉

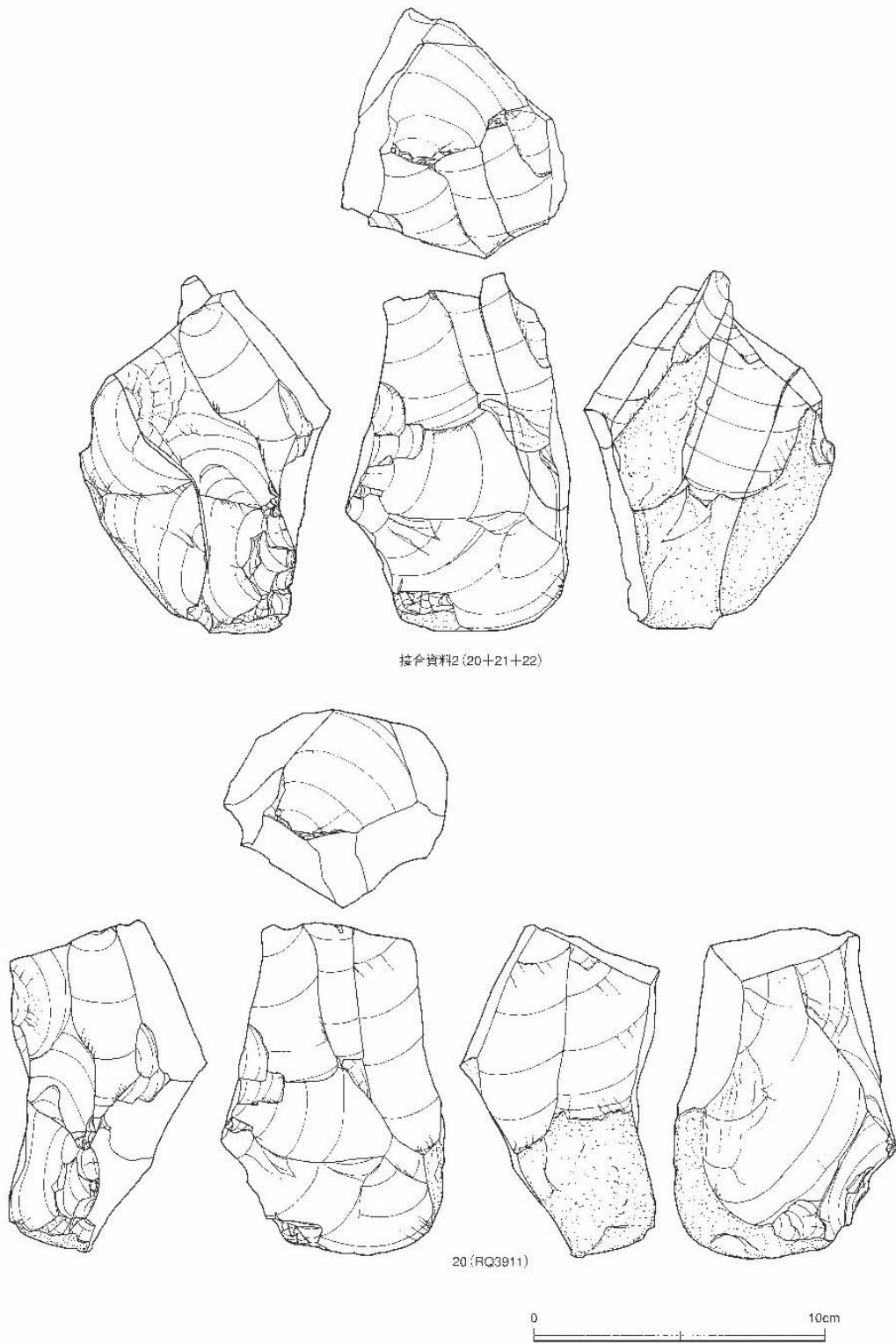


図49 1期6区の石器〈3〉

接合した資料について

出土した石器類の接合関係の観察から、2個体別資料の接合関係を確認している。

① 接合資料1 (図48)

当資料は合計8点の石器が接合した。総重量は90g、長さ12cmをはかる。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする石刃がある程度剥離され進行した状況みせるもので、左右の側面に礫面を残している。作業面となった部分は幅が狭く、もともとの石核は幅狭く縦に長いものだったと思われる。残核は検出されておらず、最終的な石核の状態は確認できない。ブロック内に同一母岩と思われる剥片碎片がいくつか認められ、接合作業を試みたが接合するまでにはいかなかった。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片とみている。接合した石刃は最長で7cm、短いもので2cmを測る。礫面を残し、かつ折れなどの現象から利器として選択されなかったものと考えられる。打点の動きから素材の稜部分を考慮しながら打面を左右に移動していることが看取できる。

② 接合資料2 (図49)

当資料は合計3点の石器が接合した。総重量は680g、長さ11cmをはかる。復元された接合資料は石核から目的とする石刃がある程度剥離され打面再生が行われた状況みせるもので、左右の側面や底面に礫面を残している。作業面となった部分(正面左右)は幅6cmを測り、3枚の剥離痕が確認できる。接合した資料(第49図-21)は作業面の調整とみられ、第49図の22は石核底部の調整剥片と見られる。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは2点のみである。

石刃生産技術について

一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程とその技術を整理するならば、以下のようにまとめられる。

① 石材石核の準備

石材となった頁岩は高瀬山周辺では、最上川河床や周辺の路頭から容易に採集できる。

接合資料1はやや扁平な円礫を、接合資料2はどんぐり形の頁岩と推測する。

② 打面作業面の設定

準備された頁岩の形態から帽子状の突端部分の剥取により、打面部・底部・作業面が決定する。

③ 石核の調整加工

作業面には横方向からの剥離により礫面除去がなされ、節理などの位置なども勘案して作業の設定を行っている。

打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への部分的な調整剥離も施される。

④ 目的剥片生産

作業面と打面の相対的な位置関係は一定し、打点は左右に移動し後退していく。

石刃の生産を目的としている。

⑤ 作業面・打面の調整

剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

⑥ 転移・再生

接合資料からは打面の転移は確認できなかったが、打面の再生は行われている。

⑦廃棄

残核の大きさからは、十分に作業継続が可能と考えられるものが廃棄されていると思われた。しかし、ブロック中央に見られたことは、搬入から廃棄までの行為が一貫しておりかつ、比較的短い期間で生産活動がなされたと見られる。

二次加工や製作された石器については、完成した製品としての「石器」が検出しておらず詳細は不明であるが、石刃素材の石器が作られたと考えられる。

旧石器時代の石器ブロックの性格

遺物の分布や組成から石器の製作の場であることは間違いないと思われる。しかも母岩数が少なく、母岩1と母岩2の個体資料が大半であること、大型の剥片や礫面を持つ資料が少ないことから、原石の一次処理が終わった段階で、持ち込まれたものと見られる。さらに完成された石器が遺存していないことから、製作された石器は他の生活の場に持ち運ばれたと考えられる。また単一のブロックを成し、周囲からはブロックの検出が見られなかったことは、時間的にも短期間に利用された場・区域と考えたい。

ここから北側 50mほどの地点から、平成 12 年寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の尖頭器製作のブロックの一部が発見されている。さらに北側には、1980 年に山形県教育委員会により、尖頭器や搔器などの石器群のブロックを検出している。高瀬山の東側段丘縁辺にそって旧石器時代の遺物が広く散在することが推測されてくる。6 区で検出した旧石器時代の石器ブロックは、標準となる石器の出土はなかったものの、石刃の生産や調整剥片・碎片の多さから石器類の素材生産、さらに器体の調整加工の行われた「場」と捉えることができよう。

5 高瀬山遺跡HO3 期調査区出土旧石器

1 調査に至る経緯

高瀬山遺跡は、旧石器時代～中世にわたる複合遺跡で、約 90ha に及ぶ県内屈指の規模を誇っている。1989 年には東北横断自動車道（山形道）の建設計画に伴って、山形県により寒河江・大江・西川地区の分布調査が行われた。これにより高瀬山遺跡は高瀬山遺跡群として、現状の東西 1600 m・南北 600mの範囲に大きく修正されることとなった。その後、1994～1997 年にかけて高速道路建設事業に係る大規模な発掘調査が山形県埋蔵文化財センターによって実施された。調査面積約 15ha の広範囲に及ぶことから、調査区域は高瀬山遺跡 1 期・高瀬山遺跡 2 期・高瀬山遺跡 S A（サーブスエリア地区）の 3 地区に分かれている。併せて調査が行われた三条遺跡・落衣長者屋敷遺跡も、高瀬山遺跡と一連の遺跡群として捉えることができる。

高速道路のサーブスエリア周辺では、今回の調査原因となった最上川ふるさと総合公園整備事業が計画された。遺跡範囲に含まれる全体面積 28.9ha について、平成 7～23 年度の期間で整備が進められてきた。平成 14 年度までに県道天童寒河江線の西側約 17.1ha の供用が行われ、会場となった第 19 回全国都市緑化やまがたフェアでは期間中に約 73 万人が訪れた。その後も、

寒河江市主催の花咲かフェアが毎年6月頃に開催されており、約28万人の来場者で賑わっている。残りの県道から東側の「歴史の丘」区域については、平成15年度から住民とのワークショップを重ねつつ、住民参加型の公園づくりを行っている。2008年4月までにコミュニティー広場・スケートパーク・ドッグランの供用を開始し、供用面積は合計20.9haとなっている。公園整備事業に伴う発掘調査は、事業主体である山形県土木部（現県土整備部）からの委託を受け、同センターが実施してきた。1997～2001年には県道を挟んだ西側約9haの範囲を対象として、高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査が実施された。なお、「HO」地区の名称は、同事業の旧称「ハイウェイ・オアシス」事業に由来する。2004・2005年には県道東側を対象とする高瀬山遺跡（HO）2期発掘調査が実施され、高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査へと引き続いている。以下に、その経緯や分布調査の経過について詳述する。

2002～2008年にかけて、県教育委員会は公園東側の整備事業に係る分布調査を実施している。2002年4月には試掘坑19か所（面積23㎡）の試掘調査を行い、縄文時代と奈良・平安時代の堅穴住居跡を検出した。2003年10月には面積160㎡の試掘調査を行い、平安時代の須恵器が出土した。翌11・12月には事業区内に所在する高瀬山古墳の現地確認・試掘調査が行われた。古墳の範囲確認のため、外周に向けて放射状に試掘トレンチ8か所（面積116㎡）を設定した。調査の結果、外径約34mの円形に廻る周溝が検出された。2007年4月～2008年2月には、果樹移植や植栽、給排水など公園設備の埋設工事に伴う立会調査が実施された。計9次にわたる調査は、実働29日間・総面積約1,188㎡に及び、縄文時代と平安時代に属する遺構・遺物を中心として、まとまった成果が得られている。これらの分布調査の結果、記録保存調査による対応が必要との判断がなされたことにより、2008年からは同センターによる高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査が、3か年にわたり実施されることとなった。

2 発掘調査の経過

高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査は平成20～22年度の第1～3次にわたって実施された。総面積3,780㎡で、調査日数は実働139日間を要した。なお、調査区や調査工程などの都合により、一般対象の現地調査説明会は行っていない。また、遺構図の記録にあたっては、写真測量によるオルソ画像の作成とデジタルトレースを外部に委託して行った。以下に、調査年次ごとの経過について概略を記しておく（第3次調査のみ記載）

第3次調査

2010年6月1日～8月18日（実働57日間）の期間で、面積1,500㎡の調査を実施した（図50）。工事工程との調整により調査区を大きく前半と後半の2つに分け、工事用道路のかからない東側の調査区から調査を開始した。なお、J13トレンチについては、事業側による残土除去と雑木伐採が完了してからの実施となる。また、活断層調査に係るK区では、段丘斜面を縦断する4本のテストトレンチを設定し、断層範囲の確認を行った。6月中旬、工事工程の都合により、遺構検出まででJ区の前半部分の調査を中断し、植栽が行われるI区の調査に移行する。6月中旬にI区とK区のテストトレンチの調査を終了し、遺構精査からJ区の調査を再開する。6月末、事業側にI区を引き渡すとともに、山形大学山野井徹名誉教授を交え、今後のK区の面調査等の進め方について現地協議を行う。7月上旬、調査と併行して進められていた公園工事が完了し、

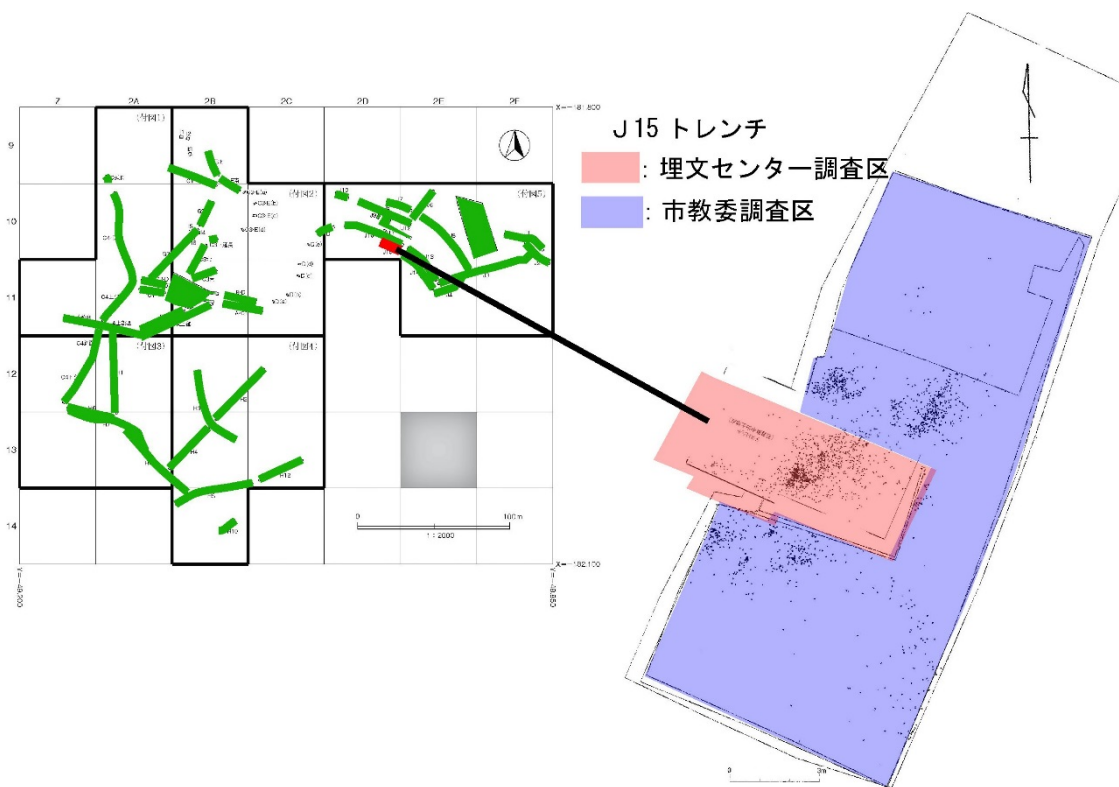


図 50 HO 3期調査区配置図・旧石器分布図（市教委調査分合成）

工事用道路の引き渡しを受ける。J 区の前半部分の調査終了とともに、7月中旬からはJ 区の西側の後半部分の調査に移行する。7月下旬、K 区の調査範囲がほぼ全域にわたる面積 600 m²に決定し、重機による表土掘削から開始した。また、J 15 トレンチにおいて、地山の表層から多量の石器剥片・碎片を出土する石器集中出土地点を検出した。調査の終盤において想定外の作業量が見込まれる状況となったことから、事業側と協議した結果、全体的な調査は予定通り終了するが、石器集中出土地点の調査と埋め戻しについては、一部期間を延長して実施することで調整が図られた。8月上旬、K 区の面調査は遺構検出までで終了し、8月5日に山形大学山野井名誉教授による高瀬山活断層地形見学会（参加約 50 名）が現地で開催された。

3 調査区の立地と層序

高瀬山遺跡（HO）3期の調査区は、寒河江市街の南西、寒河江市大字寒河江字高瀬山に所在する。広大な遺跡範囲の東端にあたり、最上川左岸（標高 90.1 m）に面した段丘崖と高瀬山（標高 122.5 m）西麓の中位段丘面（標高 113.4 m）に立地する。以前は、湿地帯が広がっていた荒蕪地を開墾し、畑地や果樹園として利用されていたが、現況は公園造成地となっている。

基本層序

第1次調査で各トレンチの端に設定したサブトレンチから、調査区の特徴的な土層を示す2地点（C 3北延長トレンチ東壁・C 3南トレンチ東壁）の土層断面図（第5図）を抽出した。調査区における基本層序は、大別して、以下の4層にまとめることができる。



C3北延長トレンチ東壁 a-a' (付図2)

- I. 7.5YR4/1 褐灰色シルト～粗砂 拳大の碎石を多く含む。(盛土)
- II. 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物を少し含む。
- III. 5YR3/1 黒褐色シルト 炭化物を少し含む。
- IV. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (地山)

C3南トレンチ東壁 b-b' (付図2)

- I. 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗砂 1～5cm 大の碎石を含む。(盛土)
- II. 5YR3/1 黒褐色シルト
- III. 5YR2/1 黒褐色粘土質シルト
- IV. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (地山)



図51 H O 3 期 3 次調査区土層柱状図

- I層：褐灰色・黒褐色シルト～粗砂（工事盛土による碎石層）
- II層：黒褐色シルト（畑地・果樹園の耕作土層）
- III層：黒褐色・黒色粘土質シルト（黒ボク土層 縄文～平安時代の遺物包含層）
- IV層：にぶい黄褐色シルト（地山 旧石器時代の遺物包含層）

I層は公園工事に伴う人為的な盛土である。重機の転圧で硬くしまる。II層は本来の表土であり、畑地や果樹園を開墾した際の耕作土である。下層の黒ボク土層に比べてやや褐色を呈し、その境目は波状に攪拌された状況が認められた。III層は腐植質の所謂黒ボク土層で、やや粘性がある。第2・3次調査区では黒色を呈し、層厚の厚い箇所が認められる。G3トレンチの埋設土器（EU 211）の包含状況やK区の活断層に係る年代測定の結果から、縄文時代早期以降の生活面は黒ボク土層の中～上位に位置するものと推定される。IV層は褐色ローム質土の所謂地山である。最上川に面する段丘崖に位置するA斜面トレンチ（付図1）では、河川堆積とみられる砂礫層になっている。調査では、IV層上面を遺構検出面としており、現地表面からの深さは両トレンチにおいて130cm前後を測る。J15トレンチでは、地山（ローム層）上位の約30～40cmの範囲で後期旧石器時代に属する石器群が出土している。

4 J 15 出土旧石器資料

(1) 概要と方法

J15トレンチテストピットでは、3層中部を中心として、2,823点の珪質頁岩製旧石器がまとまって出土している（以下、J15出土旧石器資料）。ここでは、このJ15出土旧石器資料について記述を行う。一括性 またJ15出土旧石器資料のなかには、褐鉄が付着する鉄製工具による接触痕を留め、かつ風化度が浅い1点の剥片（852）を除いて、型式学的に、あるいは風化度の浅い石器といった、縄文時代などの他の時期の所産と考えられる石器はまったく認められ

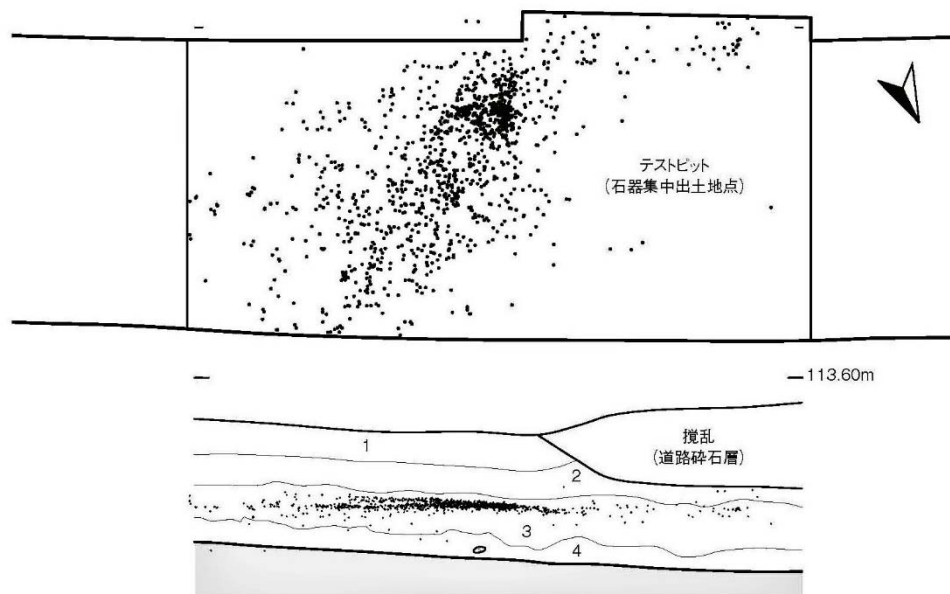
ない。つまり石器群は他の時期の石器が混入した形跡もなく、時期的に限定される一括性の高い資料群であると考えられる。

分析方法 資料整理に際しては、このJ 15 出土旧石器資料について、第4節のSX 241 出土石器資料と同様に、動作連鎖の概念に基づく技術学（Tixier1967、山中 2007）に依っている。

出土層位と出土状態 石器ブロックは、3層の黄褐色粘土質シルト層より出土し3層中部を中心に濃密な出土状況を示す。一部で埋没後に生じた浮き上がりや、後世の耕作などによる土地改変、果樹などの植物の根の成長による土壌の動きの影響を若干受けている。しかし、分布が濃密な3層中～下部付近から出土した石器の大多数は、面的に出土していること、背面や腹面等の平坦な面が層理面と並行的である、すなわち“自然な状態”であること、ほとんどの石器の薄い縁辺や先端部に微細剥離痕や転磨痕といったダメージがないこと、土層中に流水を示す砂礫などの堆積物が目立って認められないことから、ブロックが形成された当時の原位置に近く留めている可能性が高い。

平面分布（図

52） J 15 トレンチのうち、旧石器が出土したトレンチの中央から西寄り、南北約 1.7 m ×東西約 3.5 mのテストピットを設定。石器ブロックは、北東～南西方向で約 3 m× 1.5 mの範囲に集中し、その中でもとくに南側に密集してい



J15トレンチ南壁(テストピット)

1. 10YR2/2黒褐色シルト ややしまりなし。(表土)
2. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 10YR5/6シルトを粒状にやや多く含む。 ややしまりなし。木根による攪乱が目立つ。(地山への漸移層か)
3. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト しまりあり。
4. 10YR5/4に黄褐色シルト質細砂 しまりあり。下部に褐鉄分の集積が見られる。

図52 J15遺物分布図

る。またブロックの西側には、飛び地的な石器分布がみられる。

今回の調査では、事業範囲の関係で調査範囲が限られており、調査区を拡張することができなかったため、今回検出した石器ブロックは、本来のブロックのなかの一部分であることが容易に想定される。2011年5月、資料の重要性に注目した寒河江市教育委員会は、高瀬山遺跡発掘調査団を結成し、この石器分布の全体を把握することを目的とした、当該地点の学術調査を実施している（寒河江市教委 2012）。この調査区の出土状況を合成したのが図 50 である。

(2) 原石と母岩

原石 原石は、すべて珪質頁岩である。自然面の状態から判断される原石形状は、自然面が認められる母岩から、少なくとも転磨によるクラックが顕著に見られ、やや凹凸感のある亜円礫、風化面がやや発達し、わずかに凹凸感のある表面形状の亜円礫、風化面が発達し、滑らかな表面形状の円礫が認められる。選択された大きさは、9～15cm 大。いずれも、自然面の状態から、近隣の河川、あるいは段丘礫層からの採取が考えられる。

母岩 J 15 出土旧石器資料は、石質、色調、粒子の粗細、自然面の状態、節理や潜在割れの有無とその状態、接合関係などを基準に、子細な観察を行い母岩別分類を行っている。その結果、P 1～P 34 (P 21 は欠番) までの 33 母岩が認められる。上述したように、単独母岩の P 34 は、新しい時期のものであると考えられる。したがって、分析では、P 34 を除く、上記の基準で分類できた 32 母岩を基本として進めている。

ただし、ブロックの完掘には至っていないので、欠落している部分が多い。32 に分類できたとあっても、まだ1つの母岩の一部分を観ているに過ぎないかもしれないし、未発見の母岩が存在する可能性も否定できない。

搬入品 一方で、分類の結果、P 6 は双面彫刻刀形石器 1 点と神山型彫刻刀形石器ブランク 1 点のみで構成され、そのほかの石刃や剥片などは認められない。そのた、P 6 は、本地点で製作されていない可能性が高い。したがって、P 6 は、他所で製作され、製品として本地点に持ち込まれた搬入品であることが考えられる。

(3) ツール (図 53・54)

石器組成 (図) J 15 出土旧石器資料の石器組成は、杉久保型ナイフ形石器 4 点 (ほぼ完形が 2 点、先端部のみが 1 点、基部のみが 1 点)、裏細部調整切り面彫刻刀形石器 6 点 (典型的な神山型彫刻刀形石器 1 点、彫刀面を作出していないブランク 4 点)、細部調整切り面彫刻刀形石器 (小坂型彫刻刀形石器) 2 点、双面彫刻刀形石器 1 点、無調整面彫刻刀形石器 3 点、彫刻刀スポール 41 点 (そのうち、神山型彫刻刀のスポールも含まれる)、細石刃 21 点、石刃 118 点 (稜付き石刃なども含む)、剥片 798 点、チップ 1,635 点 (抽出できた二次加工チップ 13 点)、石刃核 7 点、石刃核ブランク 1 点、石核 1 点 (素材生産の石核ではなく、一打で内部の節理や潜在割れに響き、破碎したもの)、原石 1 点 (ただし、試し割りと考えられる 1 面の剥離痕あり)、被熱痕を有する石器 184 点、石英安山岩製ハンマーストーン 1 点 (珪質頁岩よりもやや軟質)。このほか、石器に付着するように出土した炭化物 1 点、自然礫 10 点も出土している。

ナイフ形石器 551 は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。細身で薄手で、やや湾曲する先細りの石刃を素材とする。基部側の左右に裏面側からのブランディングを施し、基部の縁辺角を急角度に仕上げている。さらに、素材腹面のバルブ付近を基部側の左右両側縁から剥離。バルブ除去は、左右両縁辺付近が崩れていること、6mm 程度の狭い範囲を打撃することを考慮すると、両極打撃であった可能性がある。なお、ブランディングに際しても、ブランディング面が急角度であること、一部のブランディング剥離面の末端にごく薄いヒンジが認められることから、台上での加工の可能性がある。先端側は未加工であるが、最先端部は表面側から折れている (曲げ折

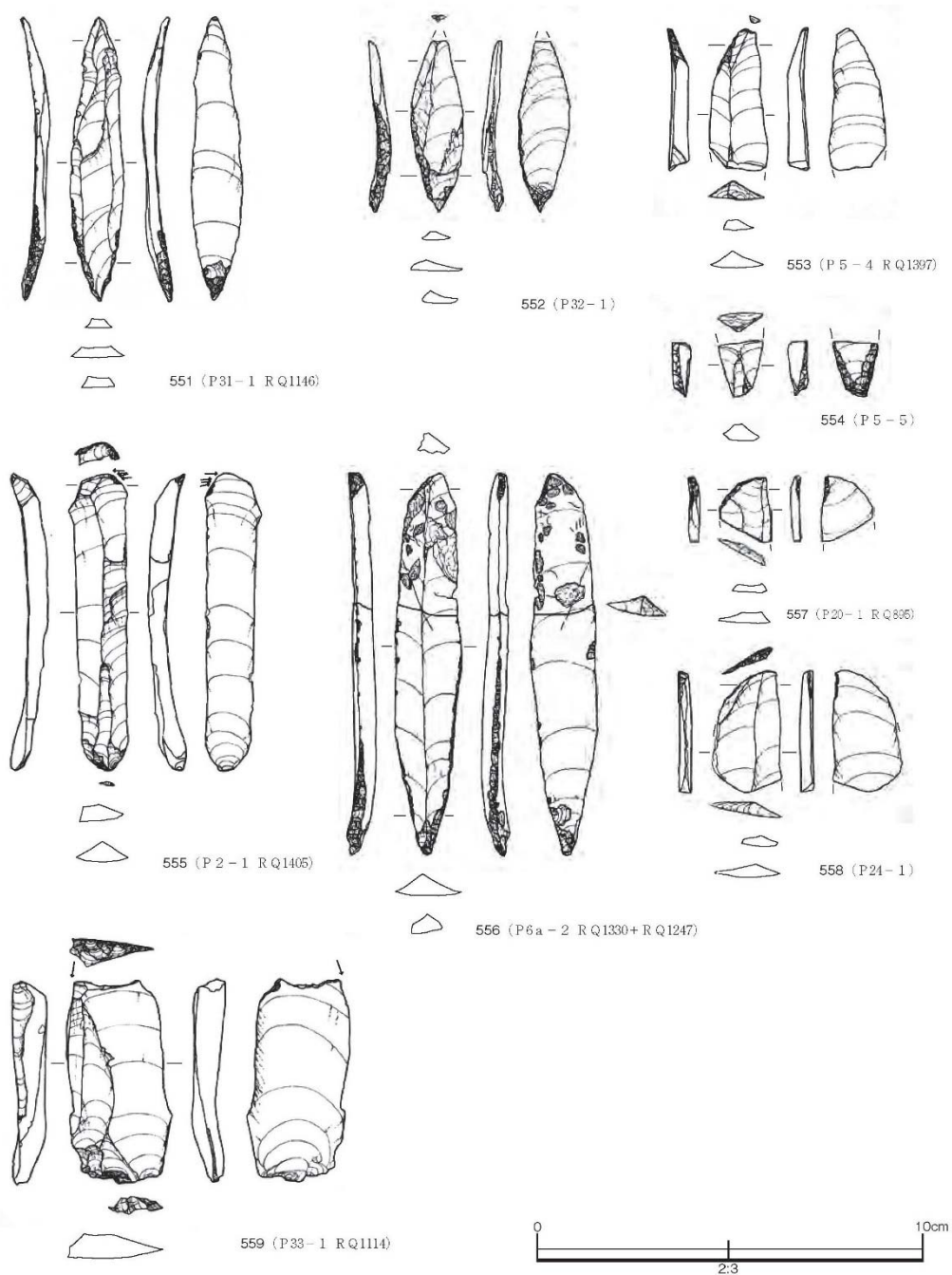


図53 HO3期石器実測図1

り)。表面側左側縁は、不連続であるが全体的に微細剥離痕が認められる。552 は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。背面が縦2稜、細身で、やや短めで先細りの石刃を素材とする。両側縁の中央付近から基部にかけてブランディングが施される。表面側左側縁は裏面側から、右側縁は表面側からの加工となる。さらに右側縁は、表面側の基部から上に 7.5mm の範囲に縁辺か

らの細部調整が入る。左側縁のブランディング面は、急角度となり、一部の剥離面末端にヒンジが認められる。右側縁のブランディング面は、基部付近で急角度となり、中間部付近の角度がやや浅くなる。裏面は、裏面の右側面からバルブ除去がわずかに行われる。先端側は未加工であるが、最先端部は裏面側から折れている（曲げ折り）。553 は、ナイフ形石器の欠損品である。先端部のみが残存。背面が縦1稜で、先細りの石刃を素材としていると思われる。中間部から基部にかけて欠損している。欠損面は、3面で構成され、ともに3面が重なり合う欠損面の裏面側中央付近から、リングが発生している。また、欠損面の右側の面の上部、すなわち表面側の中間部には、打点が観察される。したがって、欠損は、挟み撃ちによってなされた可能性が高い。表面の先端側左側縁に、裏面からの細部調整が施される。最先端部は裏面側から折れている（曲げ折り）。554 は、ナイフ形石器の欠損品である。基部のみが残存。素材は、背面が縦2稜、ないし中間部付近で縦1稜に収斂する石刃であったと思われる。折れ面には、石材内部に存在していた傷が認められる。裏面の左右両側縁に細部調整が施されており、とくに裏面左側縁側が急角度となる。なお、後述するが、553 と 554 は、P 5 に母岩分類され、かつ表面構成や厚さから 554 は、553 の基部であった可能性がある。

裏細部調整切り面彫刻刀形石器 555 は、典型的な神山型彫刻刀形石器である。背面が中間部付近で縦1稜に収斂する石刃を素材とし、石刃の末端に裏面から弧状に細部調整を施したのち、右方向から彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、リップ状で、バルブはあまり発達していない。前面角は、ステップを呈した微細剥離の重複によって、鈍角になっている。556 は、神山型彫刻刀形石器ブランクである。ただし、後述するが、ブランクではない可能性もある。背面が縦1稜で、末端側で2稜に分かれる細身で、比較的整った形態の石刃を素材としている。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランディングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められること、潰れない部分が触ると感じられるくらいのごく薄い突起（ヒンジ）があることから、台上での挟み撃ちの可能性が考えられる。また、右側面、すなわち細部調整の打面上から剥離開始部を見ると、強く湾曲しているのが確認できる。上部は、被熱による焼けはじけが部分的にあるために、ブランディング部がやや不明瞭である。判る範囲では、右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。彫刀面と思われる剥離面もあるが、焼けはじけにより、はっきりとしない。この資料は、そののち中間部で折れて、上半部の資料のみが被熱する。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打撃時の事故による欠損であった可能性がある。この種の折れは、彫刀面打撃時に、打面調整が適切でなかったときなど、打撃しても彫刻刀スポールが剥離されなかったときに、指で押さえていた付近で生じることがよくある。557 は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。折れ面は、割れの始まりが裏面側にあり、ブランディング時の剥離事故の可能性もある。558 は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によ

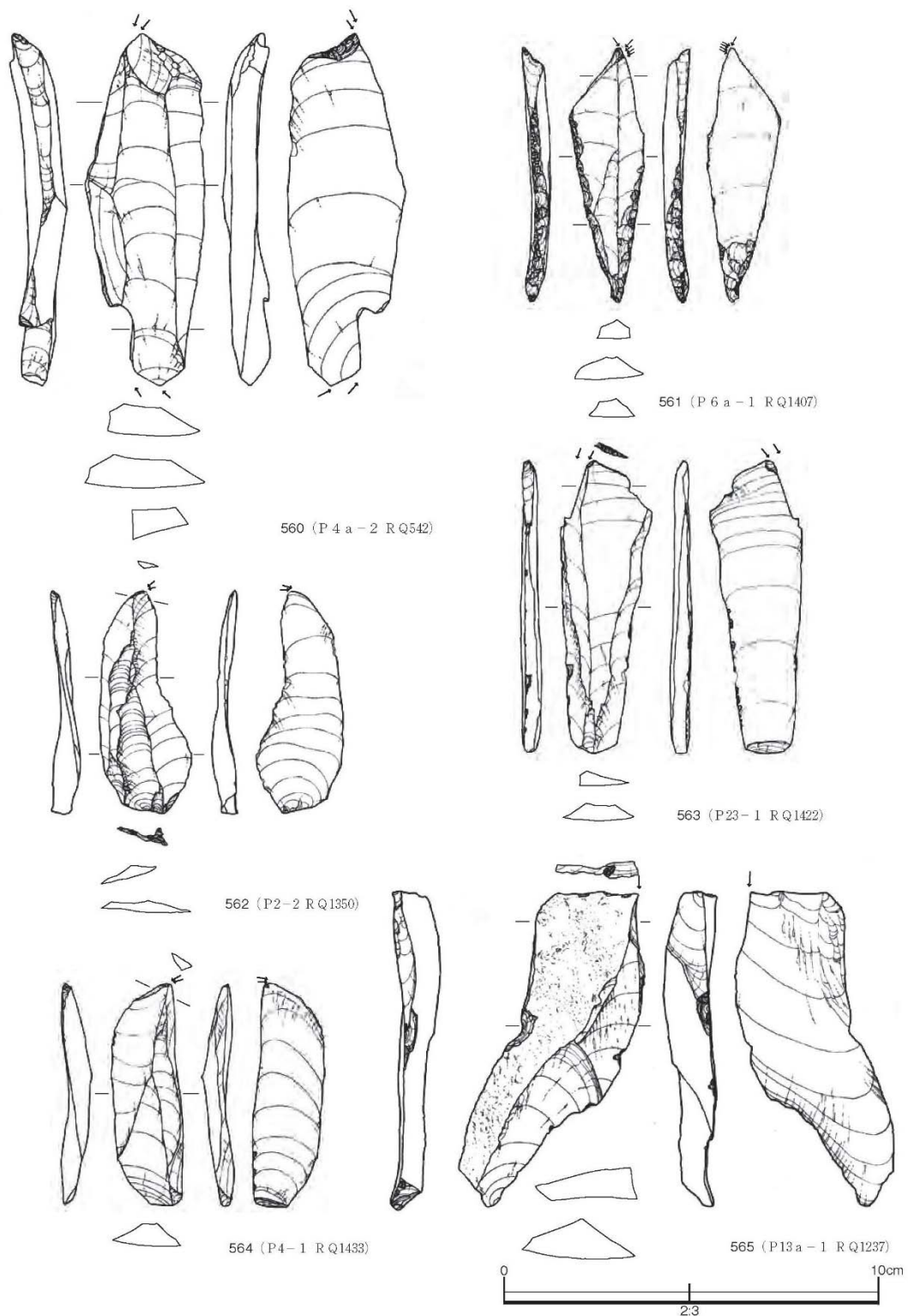


図54 HO3期石器実測図2

って、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打

撃時の事故による欠損であった可能性がある。560 は、裏細部調整切り面彫刻刀形石器である。幅広石刃の末端裏面側に浅い剥離でもって細部調整を施して、縁辺を凹形に仕上げる。その細部調整面から左側縁にかけて彫刻刀スポールを剥離。基部側にも彫刀面打撃がなされるが、基部側の彫刀面打面が欠落している。

双面彫刻刀形石器 561 は、双面彫刻刀形石器である。背面が、縦 2 稜から途中で 1 稜に収斂する石刃を素材とする。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランディングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められることから、台上での挟み撃ちの可能性はある。彫刀面打撃は、まず右側縁側に沿って、ついで左上にたいして、左下がりになるように、それぞれ 1 撃ずつ剥離。左上の彫刀面、すなわち新しい彫刀面の打点は、砕けているものの、幅 1.5mm 程度の凹状の窪みとして残されている。このことから、彫刀面打撃には、石製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる。

細部調整切り面彫刻刀形石器 559 は、小坂型彫刻刀形石器である。幅広石刃を素材とする。石刃の末端側を裏面から細部調整を施し、平面形が弧状で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から 1 枚程度の彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、明瞭なコーンが認められるが、バルブは発達しない。彫刻刀面の剥離開始部は、開始部付近の砕けとともに、打面上から剥離開始部を見たときに強く湾曲しているのが確認できる。その細部調整面を打面にして、左側縁から 1 枚程度の彫刻刀スポールを剥離している。563 は、小坂型彫刻刀形石器である。背面が縦 3 稜で構成され、末端が幅広くなった石刃を素材とする。末端を裏面から細部調整を施し、平面形が直線的で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から 2 枚程度の彫刻刀スポールを剥離。背面側の左側縁には、不連続的であるが微細剥離痕が認められる。基部は折れにより欠損している（曲げ折れか？）。

無調整面彫刻刀形石器 562 は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦 4 稜で構成され、バルブ付近で幅広くなり、中間部から急に幅が狭くなり、かつ側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の剥離開始部は、やや幅の広いコーンが認められる。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの彫刀面を作出。564 は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦 4 稜で構成され、やや幅広で厚手、側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの

彫刀面を作出。565 は、無調整面彫刻刀形石器である。表面左側に大きく自然面を残し、かつ裏面の右側を縦割れにより欠損した縦長剥片を素材としている。旧打面を彫刀面打撃の打面とし、右側縁上部に裏面からの細部調整（稜調整）ののち、彫刻刀スポールを剥離。また左側縁の中央部には、裏面からの打撃により、ノッチが入る。

トウールの素材 注目されるのは、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、無調整面彫刻刀形石器の一部は、細身で薄手の石刃を素材としている。背面が縦 1 稜、

あるいは2稜の石刃が用いられている。一方で、裏細部調整切り面彫刻刀形石器（典型的な神山型彫刻刀形石器以外のもの）、細部調整切り面彫刻刀形石器は、幅広で厚手の石刃を素材としている。背面については、縦2稜、あるいはそれ以上で、自然面が残存するものも用いられている。

杉久保型ナイフ形石器群 J 15 トレンチテストピット出土の旧石器資料は、石器組成のなかに杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器があることから、杉久保型ナイフ形石器群であると言える。本県において、まとまった杉久保型ナイフ形石器群の発掘調査は、1960年の小国町横道遺跡以来となる（加藤・佐藤 1963）。しかも、横道遺跡では資料総数が324点であるのに対し、J 15 出土旧石器資料は2,823点で、格段と数が多い。つまり、技術復原をするうえで、J 15 出土旧石器資料は、横道遺跡の石器資料よりも多くの情報をもたらすと考えられ、有効な資料であると言える。

そこで、以下にJ 15 出土旧石器資料におけるその石器製作技術についてまとめる（以下省略）。

なお、市教委調査区の石器は図55に示した。

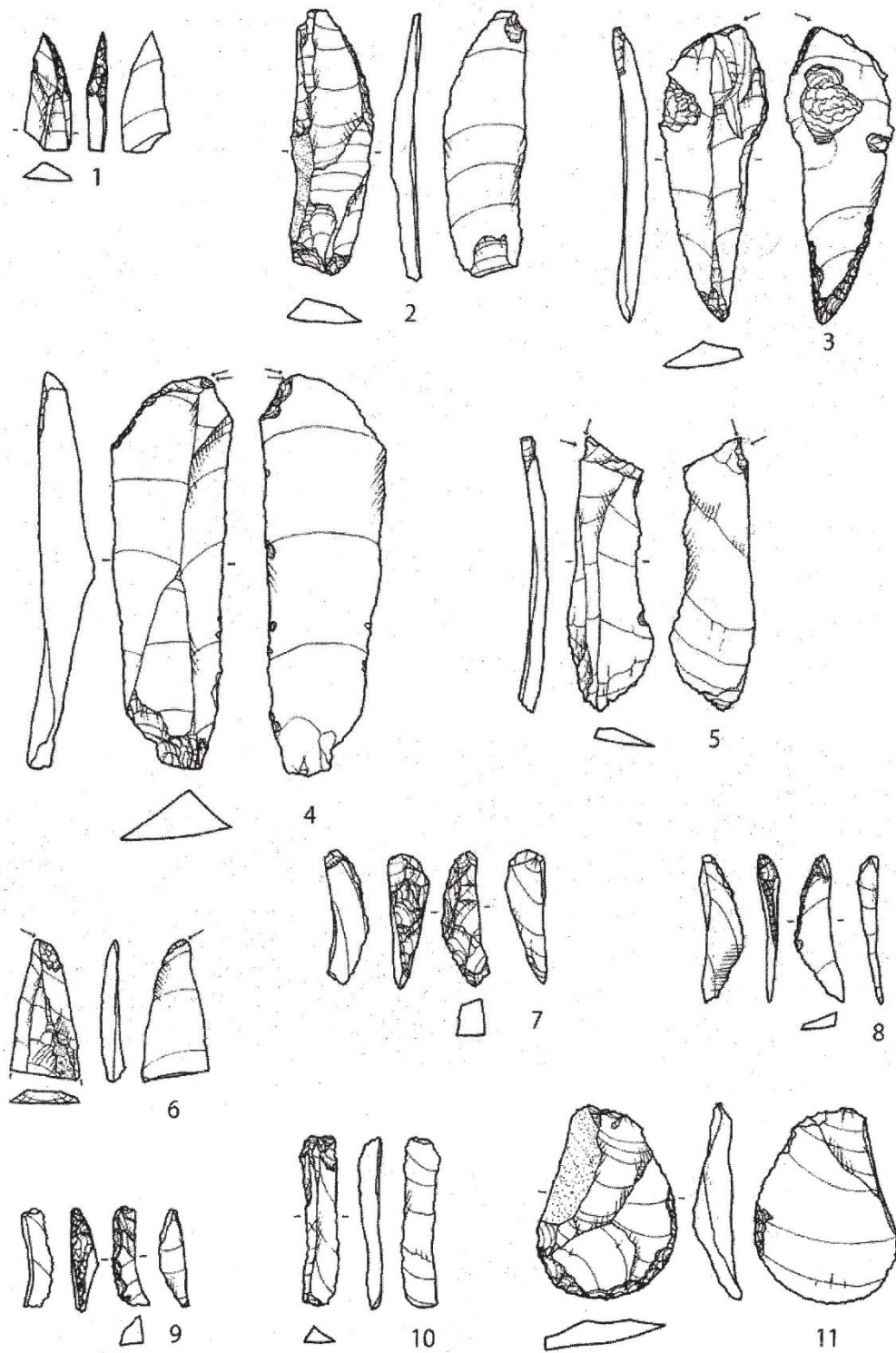
総 括

J 15 出土旧石器資料

これまでの調査 本遺跡では、以前から旧石器が確認されている。ナイフ形石器・槍先形尖頭器・ホロカ型細石刃核を含む石器群（山形埋文 2004）、基部整形石器群（寒河江市教委 1987）、石刃石器群（山形埋文 2004）、槍先形尖頭器石器群（山形県教委 1982）、ホロカ型細石刃石器群（寒河江市教委 1986・2001）、縄文草創期石器群（寒河江市教委 2001）である。今回の第3次調査J 15 トレンチ発見の杉久保型ナイフ形石器群は、高瀬山遺跡において新たな発見であり、かつもっとも古い石器群である。

J 15 出土旧石器資料の年代 J 15 トレンチで石器ブロックとともに出土した炭化物のAMS年代測定の結果は、 $18,350 \pm 70\text{yrBP}$ といった、後期旧石器時代後半期の年代である（第VI章を参照）。2011年の高瀬山遺跡発掘調査団採集の土壌サンプルによるテフラ分析でも、J 15 出土旧石器資料がAT火山灰（約2.5万年前）よりも新しい結果が得られており、AMS年代値の蓋然性の高さを示している。この年代値は、高瀬山遺跡における旧石器編年に寄与するだけでなく、これまで層位的に、そして型式学的に年代的な位置づけが困難であった、小国町横道遺跡などの山形県内における杉久保型ナイフ形石器群にたいする年代的な位置づけにも、大きく貢献することになる。

最上川中流域の原産地遺跡 最上川中流の河川敷は、石器石材に適した良質の珪質頁岩の一大産地である（秦 2011）。上述のように、高瀬山遺跡として設定された範囲では、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期にかけての石器群が多数発見されており、最上川中流域における旧石器の密集地と言える。これらの石器群の主要な石材は珪質頁岩であり、かつ多量の石器製作が認められる。また、前述のSX 241 も含め、珪質頁岩が豊富に採取することができる石材環境が、旧石器時代から縄文時代の各時期に、高瀬山の周辺における集中的な石器製作の痕跡が残された大きな要因であったと考えられる。もちろん、単に石材環境だけではなく、多量の石器製作



- 1～2：ナイフ形石器
- 3～4：神山型彫刻刀形石器
- 5：双面彫刻刀形石器
- 6：無調整面彫刻刀形石器
- 7～10：彫刻刀スポール
- 11：エンドスクレイパー

*2は玉髄製で、それ
以外は珪質頁岩製。

図55 市教委調査区の石器実測図

を促した生業などの要因も絡んでいたものと予想される。各時期における石材環境以外の大量の石器製作を促した具体的な要因については、今後の検討課題となる。

J 15 出土旧石器資料の石刃技術 J 15 出土旧石器資料における石刃製作では、2つの方式と2つのテクニックが認められる。方式では、細身の石刃と幅広の石刃を割り出す2つの方式であり、横道遺跡の石刃技術での傾向と共通する(加藤・会田 1998)。前者は、作業面を幅の狭い面に設定し、基本的に単設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、鹿角製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。後者は、作業面を幅の広い面に設定し、両設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、軟石製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。しかし、前者でも幅広の石刃が剥離される場合もあるし、後者でも細身の石刃が剥離される場合もある。

細身石刃と幅広石刃では、ツールの使い分けがなされており、細身石刃が杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、幅広石刃が神山型彫刻刀形石器と小坂型彫刻刀形石器となる。神山型彫刻刀形石器が細身と幅広の石刃の両方が使われているものの、ナイフ形石器と小坂型彫刻刀形石器は、その石刃素材を使い分けている傾向がある。

細石刃技術 石刃関連資料のほか、J 15 出土旧石器資料のなかには、石刃に比べて生産量は多くないが、直接打撃で剥離されたと考えられる細石刃が一定量認められる。新潟県津南町向原B遺跡(津南町教委 2005)などで発見された杉久保型ナイフ形石器群の中には、厚手の小型剥片の小口から細石刃を剥離し、細石刃から小型のナイフ形石器を製作する状況が、一定量看取される。J 15 出土旧石器資料は、小型のナイフ形石器が含まれていないものの、そうした小型のナイフ形石器を製作するための細石刃技術を有していることも予想される。

被熱石器 J 15 出土旧石器資料には、被熱した石器が含まれている。被熱した石器は、特定の器種のみで構成されるのでない。ランダムに被熱していると言える。石器ブロックの東側に被熱石器が集中し、高瀬山遺跡発掘調査団による調査でも、J 15 における被熱石器集中の隣接地に、被熱石器の密集が確認されていることから、石器ブロックの東側に隣接して炉が設けられ、その近くに散布していた石器資料が被熱したものと考えられる。

使用痕分析 使用痕分析では、676(第233図)と850(第287図)について刺突痕の可能性がわずかながらあるものの、1点の石刃(第282図-829)が何らかの切断に用いられたと判断される以外、ほかはまったく使用痕が検出されなかった(第VI章参照)。このことは、当該地点が石器使用の場ではなく、石器製作に集中した場であったことを意味していよう。また、各種の彫刻刀形石器にも使用痕が検出されなかったことは、「ツールとしての彫刻刀形石器」の意味を考える上で、一考を促すことになろう。

石器ブロックの保存性 一方で、使用痕分析により、埋没後に生じる表面変化がほとんど認められなかったことは、石器ブロックは、埋没後に二次的な移動がほとんどなかった可能性が考えられる。加えて、個々の石器資料は、大半が広い面が層理面と並行的、すなわち“寝ている状態”である。さらに、被熱した石器が狭い範囲に集中している。つまり、石器資料の表面観察、および出土状態からは、果樹等の植物根の侵入とごく一部に工作による影響を除けば、石器ブロック全体が二次移動がほとんどなかったという可能性の高さを示している。

なお、平面分布に関する詳細な分析については、今後高瀬山遺跡発掘調査団の資料とを合わせ

て進めていく必要がある。

二次移動にかんする微視的観察の有効性 なお、石器資料の微視的な表面観察は、遺物の二次移動の判定する上で、有効な方法と言えよう。遺物の二次移動の判定する方法は、クリノメーターによって出土時の遺物の走向や傾斜を測って統計を行い、統計データを解釈的に判定するフアブリック解析による方法もあるが、石器資料表面の微視的な観察の方も有意な方法と言えよう。

S X 241 出土石器資料との比較 S X 241 の石刃技術と比較すると、方式の面では、石刃核下端部の成形と背部の作り出しの違いが認められる。加えて、S X 241 出土石器資料は、基本的に単設打面のみで石刃剥離が行われるが、J 15 出土旧石器資料は、両設打面でも石刃剥離が行われる。求められた石刃形態にも違いが認められる。一方、テクニックの面では、両者に違いはみられない。ともに、鹿角製ハンマーと軟石製ハンマーによる直接打撃が認められる。

また、J 15 出土旧石器資料には、S X 241 出土石器資料のような、厚手剥片の再利用、未熟者による打撃痕が認められない。後者が定住的な生活形態であったのにたいして、前者は遊動的な生活形態のもとに残された資料と言える。つまり、両者に認められる石器製作技術の技術差は、そうした生活形態の違いが大きな要因の一つとなっていると考えられる。

引用・参考文献

- 石井浩幸 1994 「縄文時代中期（大木 10 式期）の石器組成—寒河江川・最上川流域の遺跡調査から—」『西村山地域史の研究』第 12 号 p.47 ~ p.60 西村山地域史研究会
- 石浩浩幸 1998 「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山の歴史と文化』Ⅲ p.1 ~ p.20 西村山地域史研究会
- 大場正善 2011 「山形県寒河江市高瀬山遺跡—高瀬山西麓に残された杉久保型ナイフ形石器群の全貌解明を目指して—」『第 25 回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.66 ~ p.73 東北日本の旧石器文化を語る会
- 大場正善・今正幸 2011 「山形県寒河江市高瀬山遺跡—(財)山形県埋蔵文化財センターによる高瀬山遺跡（HO）3 期第 3 次調査発見の杉久保型ナイフ形石器群—」『第 25 回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.56 ~ p.65 東北日本の旧石器文化を語る会
- 加藤稔・会田容弘 1998 「山形県小国町横道遺跡の研究」『東北芸術工科大学紀要』第 5 号 p.100 ~ p.147
- 寒河江市教育委員会 1981 『高瀬山遺跡群分布調査報告書』 p.42 寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 寒河江市教育委員会 1982 『高瀬山遺跡群分布調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 寒河江市教育委員会 1986 『高瀬山 K・L 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
- 寒河江市教育委員会 1987 『高瀬山 B・K 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 寒河江市教育委員会 2001 『高瀬山（市道駅南高瀬山線・島落衣線）遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 寒河江市教育委員会 2002 『寒河江市内遺跡発掘報告書（9）』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 22 集
- 寒河江市教育委員会 2012 『寒河江市内遺跡発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 32 集（刊行予定）
- 菅原哲文 2007 「縄文時代中期後半の集落様相—山形盆地西部の遺跡を中心として—」『さあべい 第 23 号』 p.1 ~ p.19 さあべい同

人会

津南町教育委員会 2005 『町内遺跡試掘確認調査報告書（5）＜谷内地区遺跡群＞楮沢遺跡 向原A遺跡 向原B遺跡 向原C遺跡 観

音堂原遺跡』津南町文化財調査報告書第 48 輯

秦昭繁 2011 「山形盆地の珪質頁岩の原石調査」『山形考古』第9巻第3号 p.16 ～ p.26 山形考古学会

山形県教育委員会 1981 『寒河江市うぐいす沢遺跡第1次発掘調査』山形県埋蔵文化財調査報告書第 41 集

山形県教育委員会 1982 『分布調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 61 集

山形県教育委員会 2010 『分布調査報告書（36）』 p.93 山形県埋蔵文化財調査報告書第 212 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2001 『高瀬山遺跡（S A）第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2004 『高瀬山遺跡（1期）第1～4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2005 『高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145

旧石器時代・縄文時代草創期の高瀬山遺跡

はじめに

高瀬山遺跡で旧石器時代に溯るものがあるのではないかと考えられた石器に花買場で採集された円盤形石核がある。この石器は 1936(昭和 11)年に阿部酉喜夫氏が採集した。中期旧石器時代に溯るルバロア型石核ではないかと注目されていた。この石核についてご子息の祥人氏(後に慶應義塾大学の教授となられる)は 1976(昭和 51)年に詳細に観察・分析した結果、ルバロア型石核とは言えないという評価が下された(abe1976)。

高瀬山遺跡で明確な旧石器時代から縄文時代草創期の石器が見つかったのは 1981 年のことである。東北電力の鉄塔移設に伴う調査で尖頭器石器群が出土した。この包含層は古墳時代の方形周溝墓により攪乱されていたが、両面加工尖頭器にノッチが伴った(山形県教委 1982)。

1985 年には市道の建設に伴い高瀬山 L 遺跡が、翌年には B 遺跡の発掘調査が寒河江市教委によって行われた。この調査でも尖頭器をもつ石器群が出土した(寒河江市教委 1986・86)

1994(平成 6)年から東北横断自動車道の建設に伴う高瀬山遺跡の調査が始まり、1997(平成 9)年まで行われた 1 期調査区の 1 区と 6 区で尖頭器石器群や細石刃核、石刃等の旧石器が出土した((財)山形県埋蔵文化財センター2004)。

2000(平成 12)年には市道建設に伴う発掘調査でも尖頭器石器群が出土した(寒河江市教委 2001)。以下、各地区の調査報告書から、旧石器部分を抜き出して講座の資料とする。

1 高瀬山遺跡鉄塔地区

1 調査要項

所在地 山形県寒河江市大字寒河江字高瀬山乙 978-38・字三条 65・109 他

調査員 名和達朗・渋谷孝雄・阿部明彦

調査期日 1981(昭和 56)年 11 月 30 日～1982(昭和 57)年 1 月 30 日

遺跡の概要 昭和 56 年 11 月 30 日～昭和 57 年 1 月 30 日

今回の調査は、昭和 56 年度に予定されている東北電力鉄塔建替工事と高瀬山・三条両遺跡との調整に資するために実施したものである。

高瀬山遺跡は、寒河江市街から南方約 1 km、最上川左岸の高瀬山丘陵一帯にかけて立地しており、早くから高瀬山古墳をはじめ、土器・石器等の遺物が採集されることで知られている。この丘陵の北東側に鉄塔が建替されることになり、その区域 8×8(m)の範囲について調査を行った。

その結果、遺跡の層序は、Ⅰ層-耕作土、Ⅱ層-黒色土、Ⅲ層-黄褐色ローム(地山)を示し、Ⅱ層が縄文・古墳・歴史、Ⅲ層が旧石器時代の遺物包含層となっている。遺構は、深さ 30～40cm 程掘り下げた皿層上面において確認され、調査区南中央から北東隅にのびる溝状の落ち込み SD1 が検出された。遺物は、全て破片で調査区中央から南側半分にかけて出土し、特に SD1 覆土内及

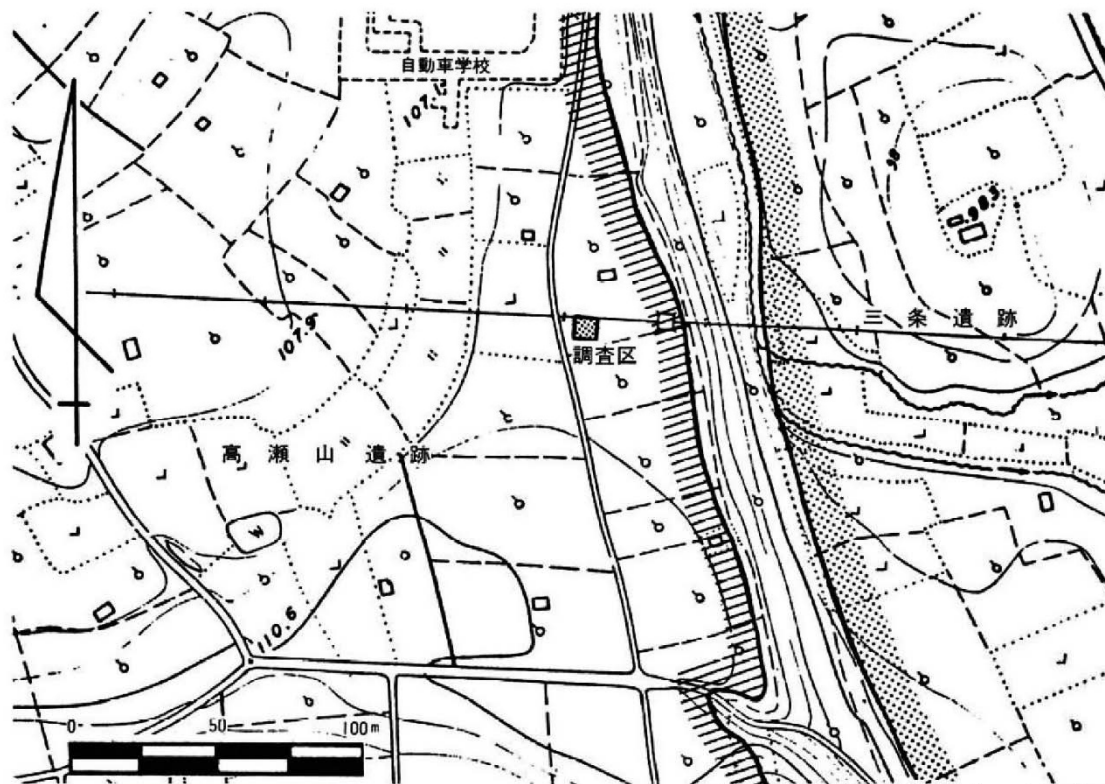


図1 高瀬山遺跡調査区位置図

び1-4G付近に集中している。

三条遺跡は、高瀬山丘陵と国鉄左沢線とにはさまれた一帯にかけて遺物の散布がみとめられ、特に高瀬山東側の微高地にかけて多くなるようである。今回は、水田地帯の二か所について調査を実施し、微高地側と水田中央部にそれぞれ4本ずつ計8本の試掘溝を入れた。試掘溝は、1×1(m)の大きさである。

遺跡の層序は、Ⅰ層-耕作土、Ⅱ層-旧耕作土、Ⅲ層-赤褐色土、Ⅳ層-黒褐色粘土、Ⅴ層-明褐色粘土(地山)である。その中で、Ⅰ層はⅡ層の上に人為的に盛られたものであり、以前の圃場整備によるものと思われる。Ⅲ層は水田の基盤を呈し酸化鉄を堆積している。遺物包含層は、Ⅳ層で赤焼土器・須恵器・陶器が若干出土している。それらは、全て小片で器形全体については不明であるが、坏・甕及びすり鉢等に分けられる。時期的には前二者については平安時代・後者については中世と思われる。なお遺構は、今回の調査では未確認である。

2 古墳時代の遺構について

検出された遺構は、SD1が主要のものであり、他には後世の掘り込みによる攪乱が6ヶ所で認められただけである。土壌・住居跡等の検出はない。以下ではSD1の溝状遺構およびその出土遺物と旧石器時代の出土遺物について説明を行う。

調査区内での平面形は、略「L」字状を呈し、西南および東南方向に溝がのびるものと考えられた。県教委による調査と併行して行われた寒河江市教委の分布調査では5トレンチでその延長部と考えられる溝を検出し、溝がかなりの規模で方形に巡っている事が確認された。しかし、トレンチが1×4mと小規模なため、SD1の計測を正確には行い得ない。8×8mの調査区における

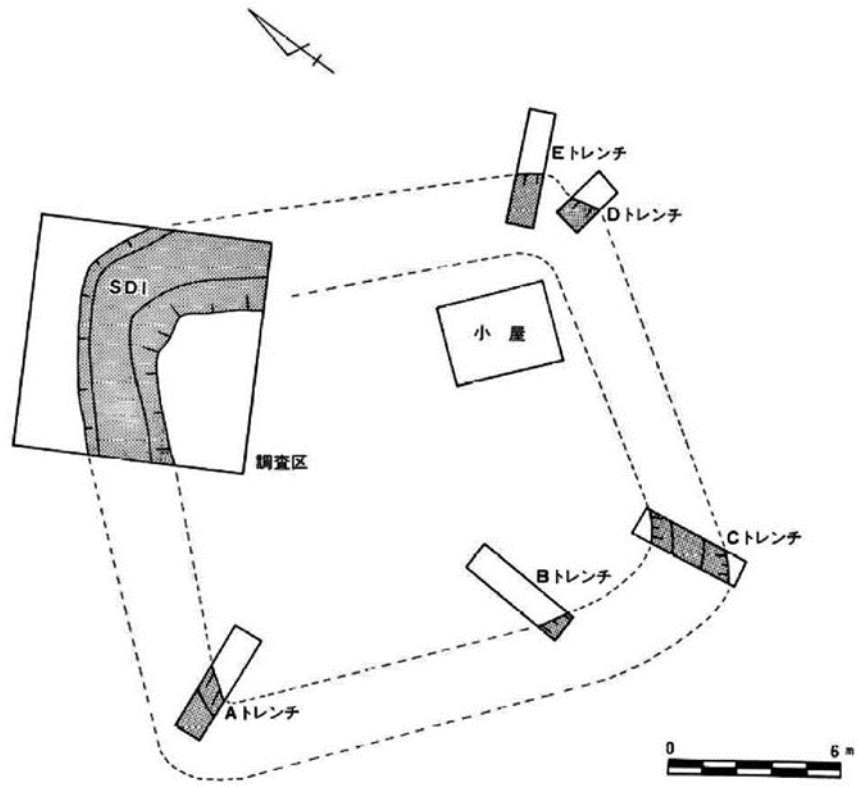
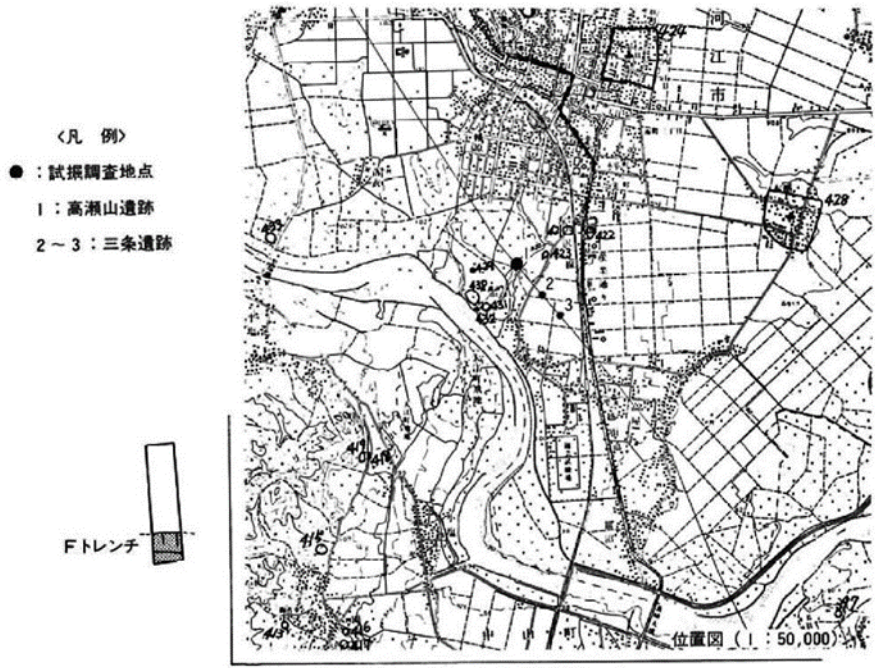


図2 高瀬山遺跡調査概要図

溝幅は、コーナー部の上端 350~360cm、下端 140~190cm を測り、南壁セクションでは上端 317cm、下端 165cm である。全体の規模は、溝上端の外径で東西 19~20m、南北 18~19m、同じく内径は東西 15m、南北 13m 前後と推測できる。以上のような推計も含めた SD1 の計測値からは、SD1 がやや

不整形を呈し、東西方向に幾分長い事が予測される。溝幅等についても寒河江市教委調査の東南コーナーでは上端 3m 前後・下端 1m 前後となっており、必ずしも均等ではないらしい。

溝の深さは、検出面(Ⅲ層上面)から平均 70cm 前後を計るが、セクションの観察からはⅡ層上面から掘り込まれている事が判り、構築時点ではさらに 20cm 前後深かった事になる。

覆土は、自然堆積と考えられる状況を呈し、覆土 7 層に平安期の遺物が多く混入していた。覆土 5 層はⅡ層とほぼ同質のクロボク土で遺物の混入はほとんどない。

遺物は、溝のコーナー部分を中心に検出し、覆土 8・7 層に多く認められた。それらは回転糸切底の赤焼土器の坏、甕、同じく回転糸切底の須恵器坏などである。また覆土 2 層の下面には、溝底より 2~3cm 浮いて出土した壺形土器と思われる土師器の体部破片が 4-1.G で検出された。これは、胎土に石英粒などの粗砂を多く含むもので、外面にハケ目の調整痕、内面ナデの調整痕が認められる。また、外面は二次焼成(加熱)によりもろくなっており、内面には炭化物が附着している。

時期は明確にし得ないが、調査員の協議では 5C 後半頃、東西南半における南小泉Ⅱ式併行ではないかと考えられ、SD1 の構築もその頃の所産ではないかと考えられる。

3 旧石器時代ないし縄文時代草創期の石器群

尖頭器石器群は総数 689 点の出土をみた。内訳は両面加工尖頭器 4 点、ノッチ 6 点、剥片 161 点、破片 518 点で、そのうち原位置を保っていると考えられるⅢ層出土の 355 点の平面分布は第 9 図に示した。その分布範囲は、Ⅱ層の出土状況(表)からみても 1~4-3 区が北限にあたり、調査区外の南西方向にのびるものと想定できる。調査区内では径 2m 前後の小ブロックが 3 ヶ所検出され、各小ブロックのあるグリッドでは、Ⅱ層からの出土量も多く、水平方向の遺物の移動は少なかったと判断できる。また SD1 の覆土からも尖頭器 2 点を含む 125 点が出土し、1~2 ヶ所の小ブロックがあったものと推定でき、調査区内には 100~200 点の遺物からなる 4~5 ヶ所の小ブロックがあったものと想定できる。

尖頭器は 4 点とも折損資料で、図 3-1~3 は先端部(2 は基部の可能性もある)、4 は基部になるものと思われる。大きさから次の二種類に分けられる。長さが推定 15cm 内外と大形のもの(1~3)、推定長 8cm 前後と中形のもの(4)である。4 の基部はやや丸味をおびる。1~3 の基部形態は明らかでないが、①先端部両側縁のなす角度が大きいこと、②全体的に幅広であること、から舌部をもたない木葉形尖頭器と考えられる。

図 4 の 5~7 は弯曲する剥片(円盤状石核から剥離されたもの、もしくは尖頭器製作の初期段階で生じる剥片とみられる)の先端部に加工して、ノッチにつくりあげた石器で、他に 3 点の出土がある。

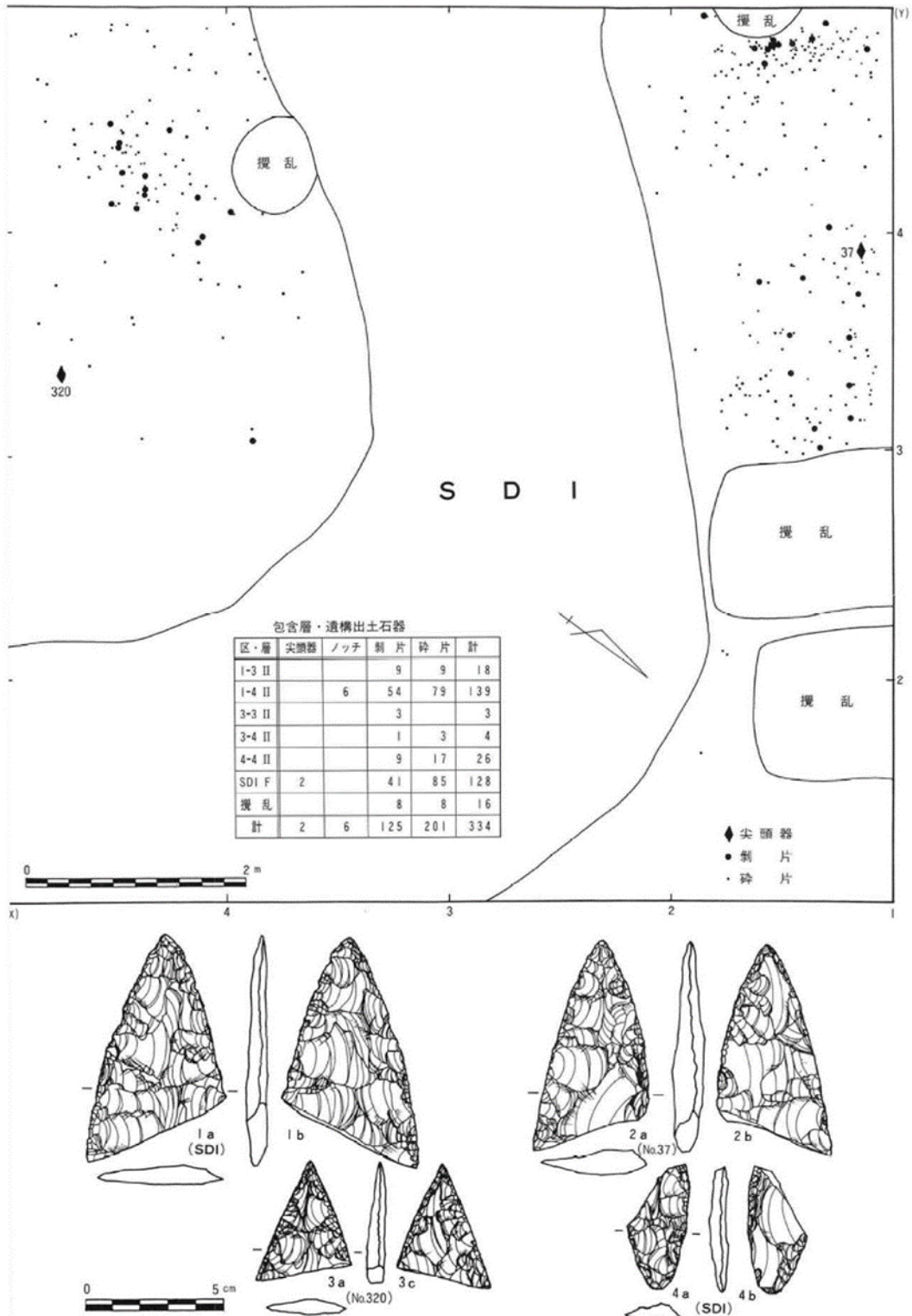


図3 高瀬山遺跡Ⅲ層出土石器分布図・尖頭器実測図

剥片・碎片については詳しく述べる余裕はないが、剥片の背面観察によると、石刃技法はな

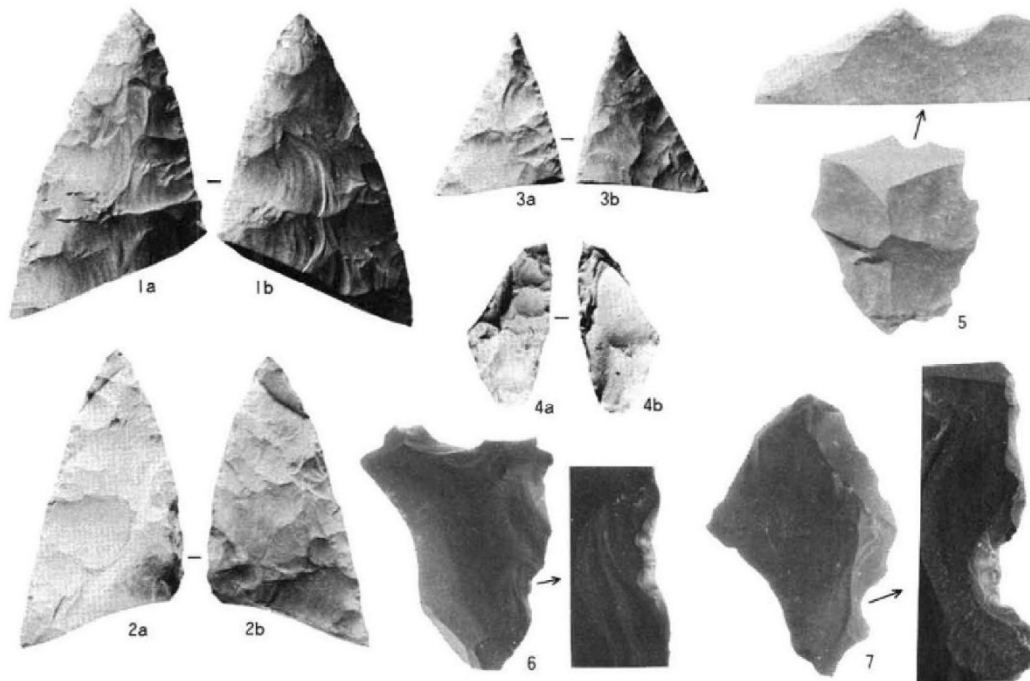


図4 高瀬山遺跡鉄塔地区石器写真

く、多くの打面をもつ円盤状石核から剥離されたものであることがうかがえる。

尖頭器はナイフ形石器をもつ石刃石器群の段階に出現し、細石刃石器群で一時衰退し、片刃石斧・有舌尖頭器を伴う石器群で再び盛行することが知られている(加藤 1973)。細石刃に先行する尖頭器石器群とみられる越中山 A' (加藤 1975)では、①ナイフ形石器を含む石刃石器群がある。②尖頭器は 6~10cm 前後と中形である、という特徴をもつ。また細石刃以降の尖頭器を含む石器群は、石刃技法をもつ長者久保(山内・佐藤 1966)、東山紺野(加藤編 1973)などと、石刃技法のない上屋地 A(加藤編 1972)、弓張平 B(加藤編 1978)があるが、尖頭器は中形~大形で前三者は片刃石斧をもち、弓張平 B では有舌尖頭器を主体としている。本遺跡の石器群は調査区が限定されているため、石器組成についてはなお不明確であるが、①石刃技法をもたない、②尖頭器は中形~大形で、ノッチが共伴するという点で、上屋地 A や尼子第 II 岩陰最下層(加藤 1976)に近接するものと考えられる。

2 高瀬山遺跡 L 地区(L 遺跡)

1 調査経過

調査区域は、分布調査の結果に基づき、道路予定線の中心杭 No.2 から No.4 にかけて設定した。調査を開始するにあたり、中心杭 No.2 と No.4 を結ぶ線を基準として、工事区域をすべてカバーで

きるように1辺2m×2mのグリッドを設定し、西から東へ1.2.3. …・…8、北からA.B.C. ……0とした。

No2 杭はA-5に当る。発掘調査は、重機による表土の除去(試掘調査結果により、縄文時代の遺物包含層であるII層上面まで、約20(cm~40cm)を行い、その後、手掘りにより遺構確認を行いつつV層(北区)まで掘り下げていった。しかしながら、縄文時代のたしかな遺構の確認はできなかった。

L遺跡の存在する段丘縁辺部は土壌堆積が顕著でなく、かえって縄文時代の文化層が削り去られた可能性もある。

遺構としては、性格不明の土壌と石器製作場と思われるブロックが検出された(図5)。このブロックは、段丘傾斜地に位置し、V層(黄褐色粘土層)に至ってもなお石器の出土をみた(図6)。縄文時代を遡る文化層の存在が予想されたため、補足調査を実施し、各文化層の正確な把握と遺物の包含状態を確認し、その記録につとめた(9月27日~10月1日)。

2 遺構の分布

図5に遺構の分布を示した。調査区南に土壌、北側に石器集中地点Lブロックが存在する。特にこのブロックでは4m×6mの調査区に2つの文化層を把握することができた。ブロックは段丘に沿ってさらに東西に延びるものと思われる。近辺に住居跡等は確認できなかった。

3 文化層設定と検証

この地点の調査では、幅4m×6m深さ1mの範囲内に2千点をこす石器、剥片類が出土した。調査の時点で、III層の無遺物層をはさんで上下に文化層が存在することが判明した。しかし、傾斜地上部付近の層位が不明なことや、I・II層においても時期差のある石器群の存在も考えられるため、母岩ごとに分類・接合を行い、また、平面及び垂直分布の様相を記録した(図7)。その結果、I・II層ではレベル差をもって同一母岩の分布がみられることにより同一の石器文化と考えられ、III層をはさんでの上下の接合関係はとらえられないことから異なる二つの石器文化の存在が考えられた。II層中位に石器の集中をみる文化をL I石器文化とする。次に、IV層下部よりV層とVI層上面にかけて遺物の分布がみられ、V層に集中をみるのをL II石器文化とする。遺物の多くは斜面上からの流れこみのような状況である。

4 L地区出土の遺物

第2文化層(L II石器文化)出土石器(図8)

L II石器文化の出土資料は、すべて未製品か欠損・破損品と思われるもので完形品は見当らな

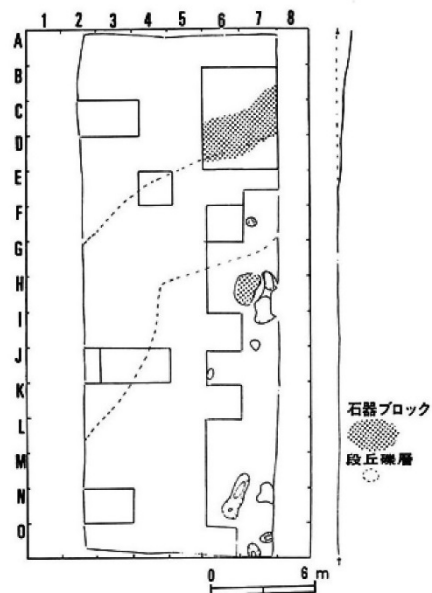


図5 ブロックの位置

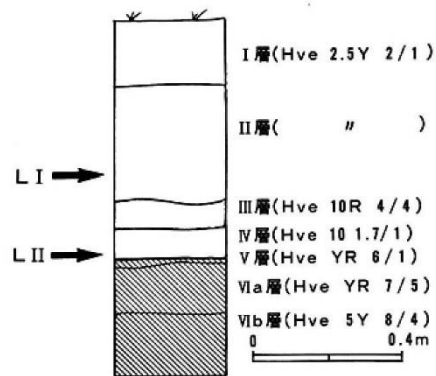


図6 L遺跡層序図

い。図8の1は両面加工の尖頭状石器である。表面中央部は剥離が不十分でコブ状に残している。未製品であろう。2は片刃石斧先端部とみられる。大江町庚申山出土片刃石斧に似る(山形大学

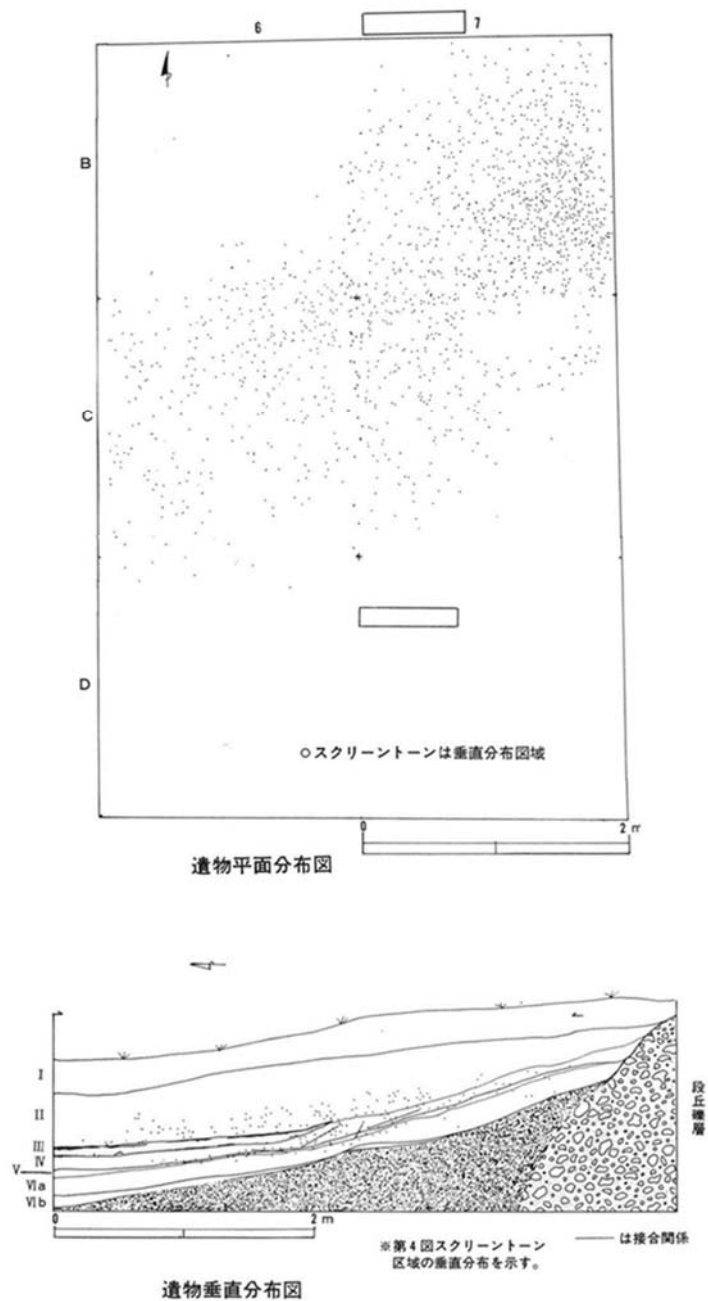


図7 遺物の平面分布と垂直分布図

附属博物館蔵)。3は大型縦長剥片を表材としたエンドスクレーパーである。基部が火熱をうけ火ハネを呈す。図8-4は舟底形石器または細石刃核のブランクと思われる。側辺調整に失敗し、破損廃棄したと見られる。技術的にはホロカ系に属す。5は大型の両側辺加工のスクレーパーである。

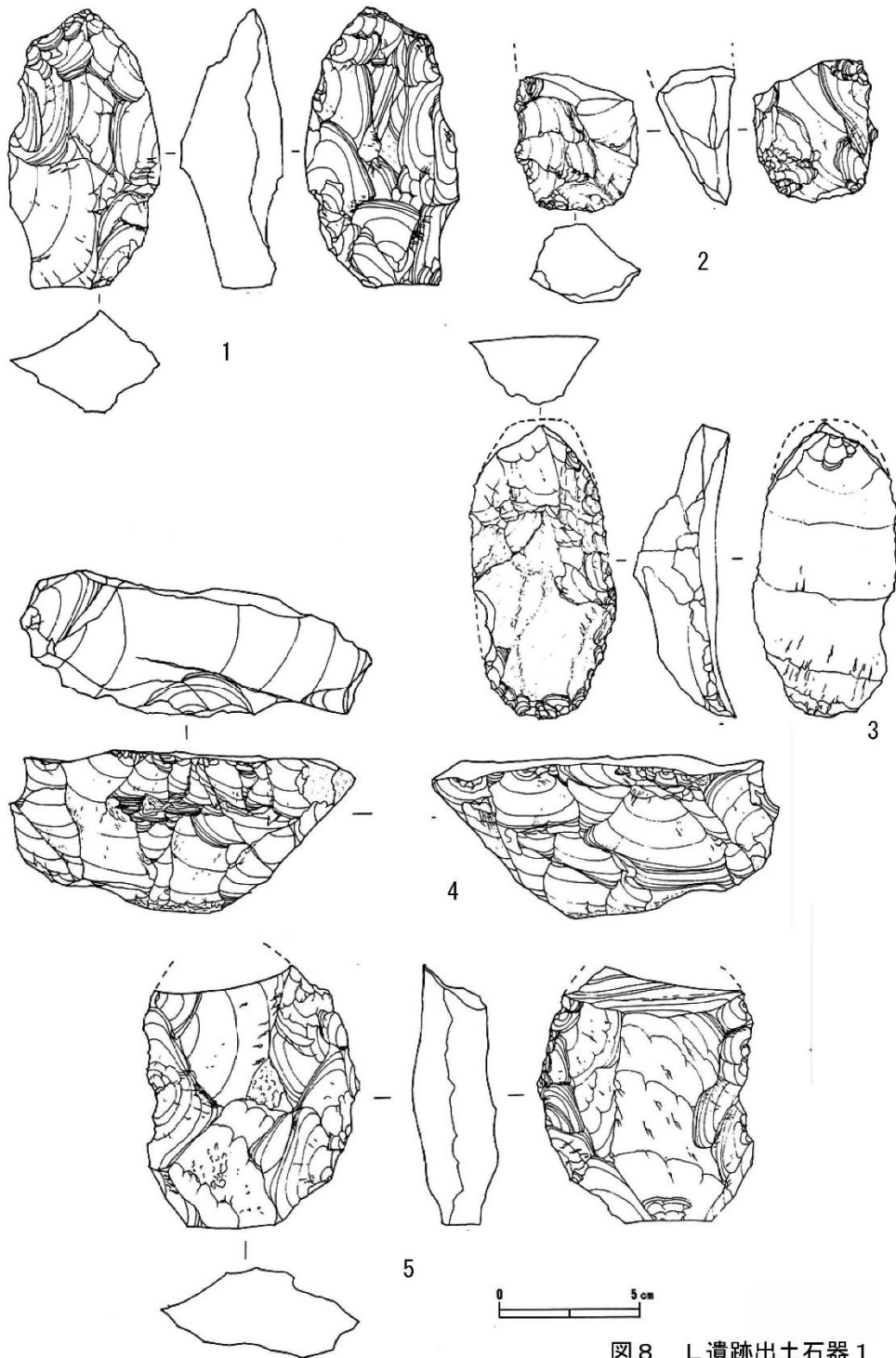


図8 L遺跡出土石器 1

第1文化層(LI石器文化)出土石器(図9)

図9-6は石核である。石刃状剥片を生産したとみられ、最終剥離面はヒンジ状になっている。打面は平坦、作業面調整がみられる。大江町橋上遺跡出土石核のIb類に似る(註1)。
7・8は石核作業面再生剥片である。石核下方からの加撃により作業面の再生を行っている。第

9・10 は石刃状剥片である。他の資料に石刃と剥片の接合資料がある。11 はつまみ部を意図的に作出していることより石匙とみられる。今回の調査において、縄文時代に普遍的にみられる石鏃、石錐などは検出されていない。

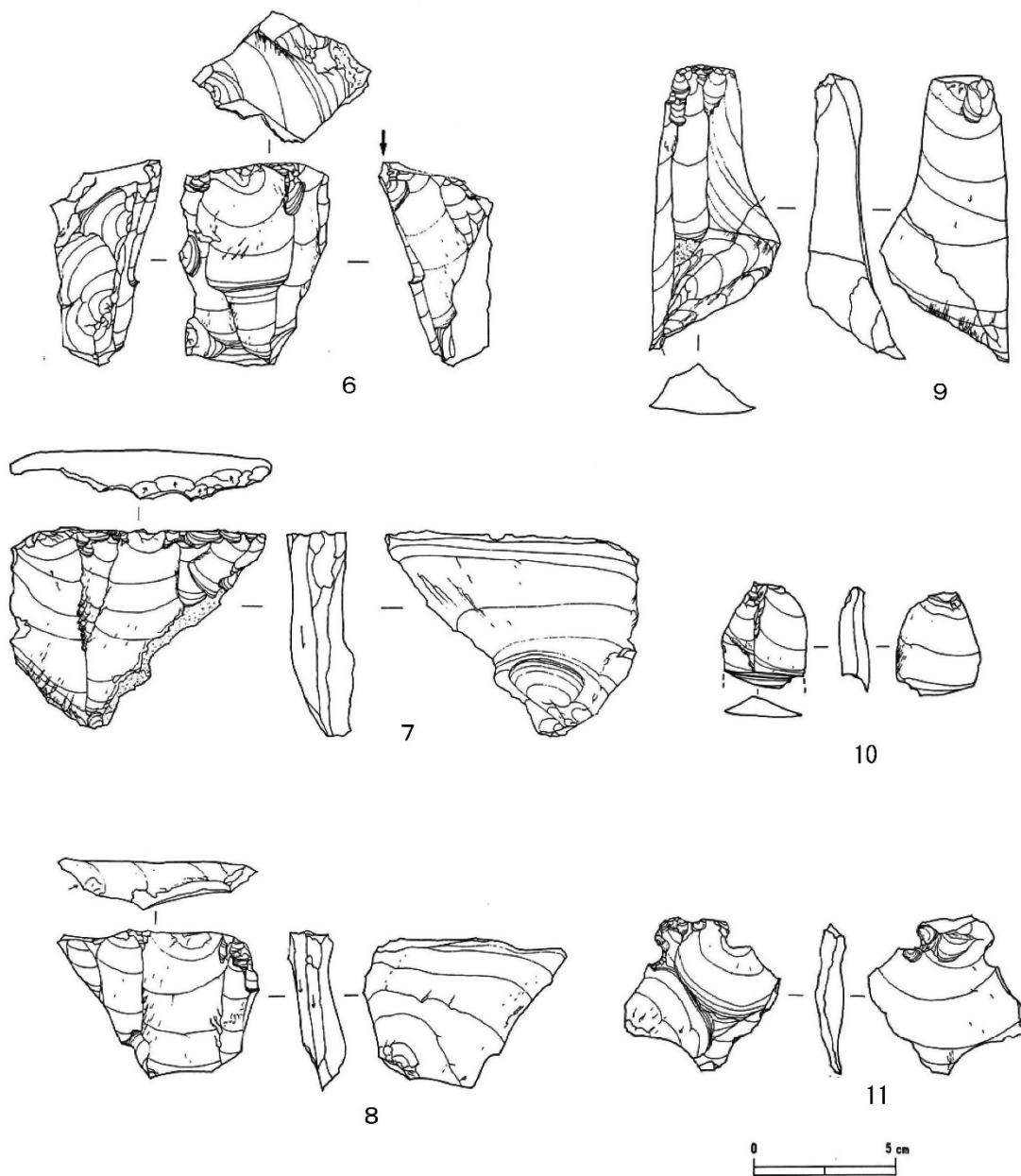


図9 L遺跡出土石器2

5 まとめ

段丘崖の調査区(北区)では2千点をこえる石器、剥片類が出土し、2つの文化層が確認された。それぞれ、第1文化層(LI石器文化)縄文時代中期末の石器群第2文化層(LII石器文化)縄文時代中期以前～中石器時代の石器群であると考えられる。

LⅠ石器文化は、石刃状剥片・石刃核・石筥・石匙などの石器があり、大江町橋上遺跡の石器群と同時期の石器群として理解される(註1)。この種の石器群は縄文時代中期末に西村山地域には濃密に分布をみることができる(註2)。

LⅡ石器文化は、片刃石斧・舟底形石器(未製品)・大型搔器などがあり、特に二次加工時の剥片・碎片が多く存在する。幾つかの剥片が接合し、石器製作技術の一端が明らかになっている(註3)。この地点は、河岸段丘縁辺における石器製作地とみられる。縄文時代あるいは中石器時代においてのこの種の石器製作跡の調査は例をみない。当該期の生活構造を解明する上で重要な意味をもつ遺跡と思われる。高瀬山遺跡群の調査が進む中で、L地点の生活ブロックとしての性格が明らかになるであろう。整理分析途中のため、概要にとどめた。

註1 石井浩幸 1985「橋上遺跡における石器製作作業の分析」『橋上遺跡発掘調査報告書』

大江町教育委員会

註2 寒河江工業高校 1967～1973『人工のはじまりの研究』第1集～第9集。

大江町教育委員会 1967『月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書—古式石器の出土地—』

註3 接合資料は、舟底形石器・打製石斧の製作工程をしめす資料である。

2 高瀬山B遺跡

1 調査経過

高瀬山B遺跡は、寒河江市大字山西に所在する。昭和59年、市道元町平塩線道路改良事業が具体化されたことにより、路線内の試掘調査を実施した結果、L遺跡(上野地区)、B・K遺跡(山西地区)を確認した。市教育委員会では担当課である市土木課と協議を行ない、土木事業計画と調整をはかり、昭和60年度はK遺跡の一部とL遺跡の緊急発掘調査を実施した(寒河江市教育委員会『高瀬山K・L遺跡発掘調査報告書』1986)。61年度は、前年の調査をうけて、K遺跡の残された部分とB遺跡の緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和61年5月7日に重機による表土の除去より開始した。ついでグリッドの設定を行ない、B遺跡については、道路予定線中心杭No.18とNo.22を結んだ線を基準線とし、東西・南北間に5m間隔で基準杭を設置していった。グリッド番号は北から南に51、52、53……とし、西から東にP、Q、R……とした。No.22はT-69に当たる。K遺跡も同様にNo.28とNo.32を結んだ線を基準線とし、北から101、102、103……、西からH、1、J……とした。No.28はL-101にあたる。調査はB・K遺跡平行して進め、順次手掘りにより掘り下げ、遺構検出、精査を行なった。調査途中、K遺跡において遺構が予想以上多く、また、B遺跡において旧石器が発見されたことなどもあり調査予算の増額補正を行なった。実測と遺物収納は6月30日で終えた。調査実施面積は約1200㎡(B-500㎡、K-700㎡)である。

2 基本層序(図10)

I層:10YR%黒褐色シルト、粘性は弱い。軟質。

II層:10YR黒褐色シルト、粘性は弱い。I層よりやや硬い軟質。

III層:7.5YR 髪5黒褐色シルト、粘性は弱い。1、II層より粘性はやや弱い。

IV層:10YRシルト。I～III層とV層の漸移層。I～III層より硬質。V層の粒子を含む。

砂層に直接に接しているところでは砂質をおびる。

V層:10YR 勿褐色シルト。粘性はIV層よりあるが弱い。やや硬質。

石器集中地点では上部 10cm から下位がやや色が鮮やか(10YR%)になる傾向がある。砂層(VI層)に接している部分ではより砂質である。小～極小のマンガン粒を全体に含む。T-65、T-66 では厚く堆積し、色もやや鮮やか(10YR%)で、粘性もより強くなる。下部ではやや粘土化し白味をおび、マンガン粒がふえる。T-66 南半では下部は細砂質になり、白い塊状の粘土(径 10mm 以上)をまばらに含む。

VI層:7.5YR 賜～%褐色.粗砂～レキ層。レキは径 20cm を越えるものがあるが、多くは 5cm 以下である。

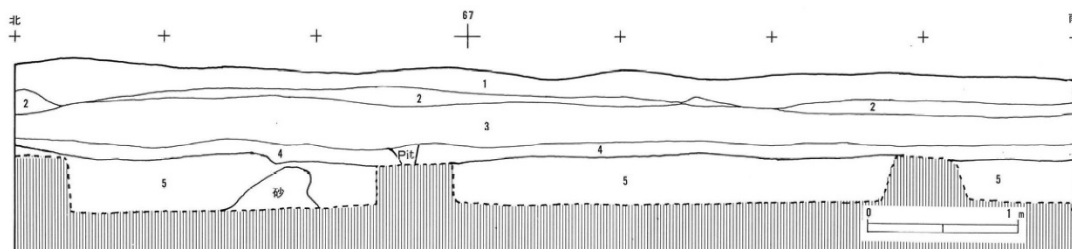


図10 B遺跡土層断面

V・VI層は基本的に段丘構成層である。IV層はV層の上半がIII層により汚染されたものと考えられる。

歴史時代、縄文時代の遺物は、II・III層に包含されている。III層下部～IV層上面で、歴史時代、縄文時代の遺構を確認している。

旧石器時代の遺物はIV・V層に包含されている。ただし、IV～VI層は段丘構成層であるので、III層の下にV層、VI層あるいは直接VIがくるところもある。よって、1ブロックはVI層(レキ層)の直上に旧石器時代の遺物が含まれている。

3 遺構配置(図 11)

旧石器時代旧石器時代の遺物集中箇所はニケ所確認された。U-64Gに径 1m×1mの第1ブロック、T-64・S-64Gに径 3m×1mの第2ブロックがある。

縄文時代土壌が3基確認されている。U-64・65GにSK2、SK5、S-64GにSK7がある。U-71Gに溝状の遺構があるが、縄文時代に位置付けられるものである。

歴史時代S-65・66Gに竪穴住居址(ST1)とU-69、T-68、S-68Gに溝が確認された。

4 遺物分布

縄文時代の土器と石器はほぼまんべんなく分布しているが、T-63、U-65、U-66、U-67、T-66に集中がみられる。

歴史時代の土師器と須恵器は、U-66、S-66、U-69 区に集中がみられる。一部に遺構の分布と重複するが、それ以外にも集中する。

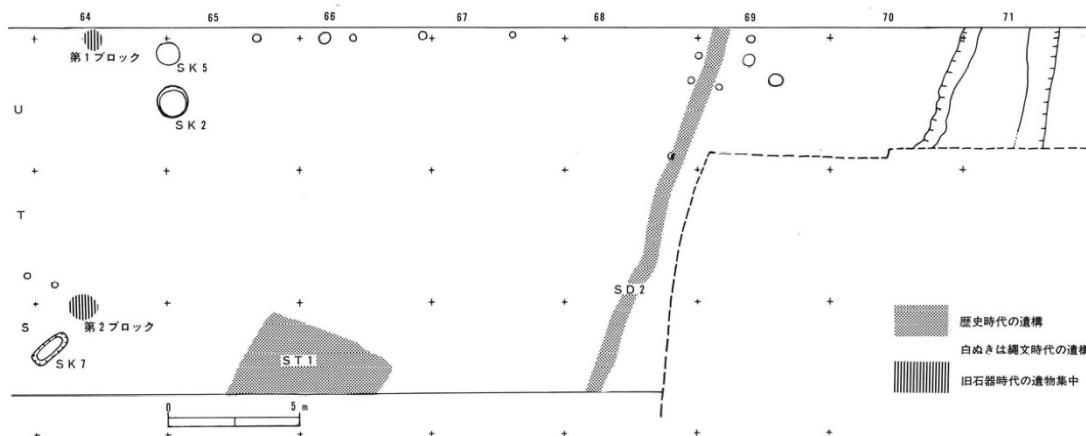


図11 B遺跡遺構配置・石器ブロック分布図

5 旧石器時代

旧石器時代の遺構と認められるものは検出されなかったが、それに準ずるものとして遺物分布について述べる。

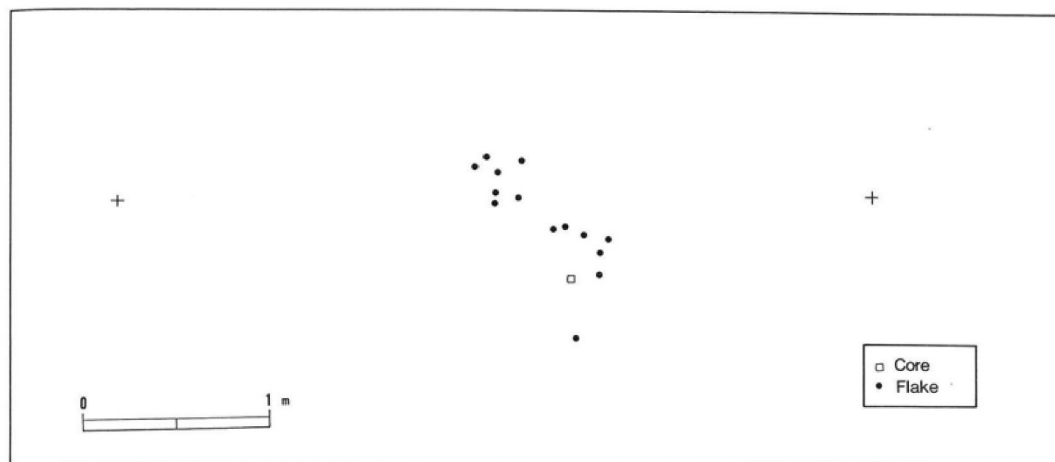


図12 第1ブロックの分布図

第1ブロック(図12)は、レキ層(VI層)が盛り上がった頂部からやや傾斜しはじめるが、その傾斜の変わる所に弧状に分布する。

第2ブロック(図13)は、レキ層(VI層)が西にはり出す部分のさらに先端部に分布している。

第1ブロックは二母岩で構成されている(図)。母岩1は西側に、母岩2は東側にほとんど重複せず分布している。母岩1は剥片のみ、母岩2は1点の石核を弧状にとり囲むように出土している。

第2ブロックは、T列に幅1mの旧石器確認のための試掘トレンチをいれた際に確認された。試掘トレンチからは石器2、石核1、剥片5点を得られたが、それらの出土地点はとらえられてい

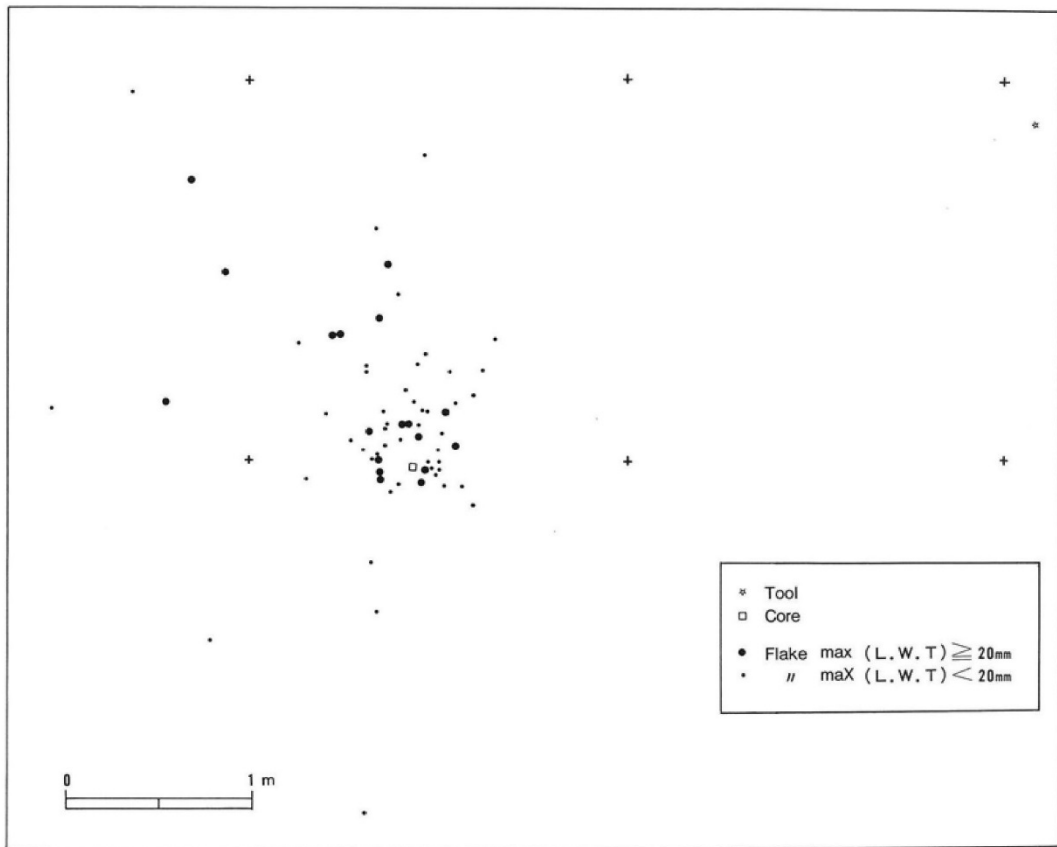


図13 第2ブロック分布図

ない。したがって、図 13 にはそれらの遺物の出土地点は記されていない。二本の杭(+)の東側 1m が空白なのは、以上の理由による。

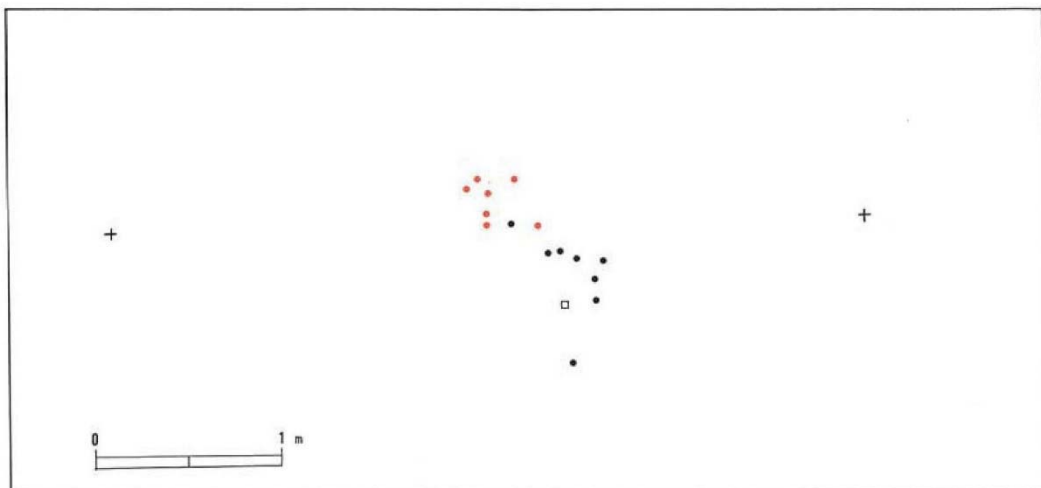


図14 第1ブロック母岩 1・2 分布図

第2ブロックは二母岩で構成されている。他は単品の剥片である。母岩3(図)は石核(試掘トレンチ内出土)を東端にし、西側に開いた半径約 3.5m の扇形に分布していたものと考えられる。石

器 2 点も試掘トレンチ内より出土していることから、石核に近接した位置にあったものと思われる。母岩 4(図 15)は、石核を中心に、西南方向に扇形に開く散漫な分布を示している。

第 2 ブロックの北西から、半欠の両面加工尖頭器が出土している。

第 1 ブロック、第 2 ブロックとも分布範囲の狭い、また遺物密度の低い集中地点であ

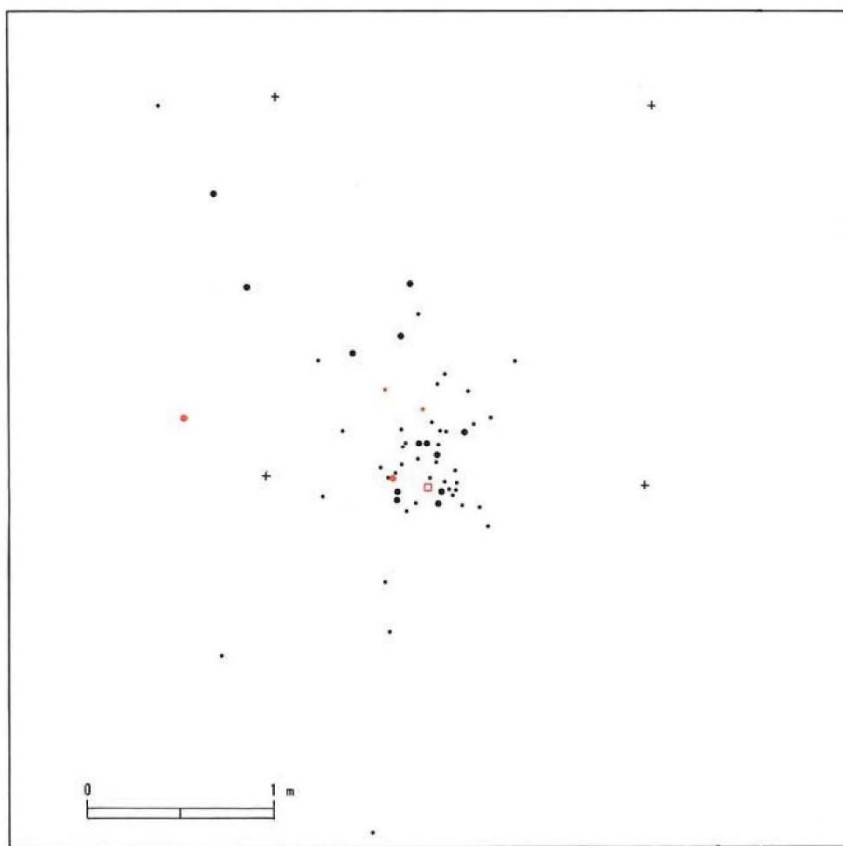


図15 第2ブロック母岩3・4分布図

る。両者は、2 母岩をもつという意味で共通する。両ブロックが剥片剥離後、そのままの状態であったと仮定するならば、第 1 ブロックは、レキ層の形成する高まりで剥離を行ない、一方、第 2 ブロックでは、レキ層の先端に位置して剥離を行っていたことになる。石核の位置に剥離を行なった人がいたと仮定するならば、第 1 ブロックでは、南側を向いて、第 2 ブロックでは南西から西を向いて剥離を行っていたと考えられる。

遺物:空間分布から二つのブロックが認められた。両ブロックには、母岩 1、2 と母岩 3・4 が中心的に位置することが認められるが、両ブロック間に接合はみられない。

第 1 ブロックでは、遺物はIV層(レキ層)直上から得られている。しかし、第 1 ブロックのある地点は、VI・V層が極端に薄いか、堆積がみられないので、第 2 ブロックとの層位的関係をとらえることはできなかった。

第 2 ブロックは、遺物の出土層にかなりのバラツキがみられる(表 3)。発掘時には、IV・V層出土の資料のみを旧石器時代のものと考えたが、III層出土の資料中にも同一母岩資料が認められ、遺物がIII層中にも浮き上がっていることが明らかとなった。一部に土壌攪乱が推定される。

このような状況の中で資料の一括性を保証するためには、同一母岩資料がIV・V層中に確実に含まれているということが条件となる。しかし、母岩外資料も少なからずIV・V層中に認められたり、型式学的に旧石器時代の可能性のある資料がIII層中に認められる。そのような資料については、参考として加えることにする。

第1ブロック(図14)から13点の石器が得られた。うち、6点が母岩1(1~6)、7点が母岩2(7~12)である。母岩1では剥片(図16-1)とバルバースカー片(図16-5)が接合する。

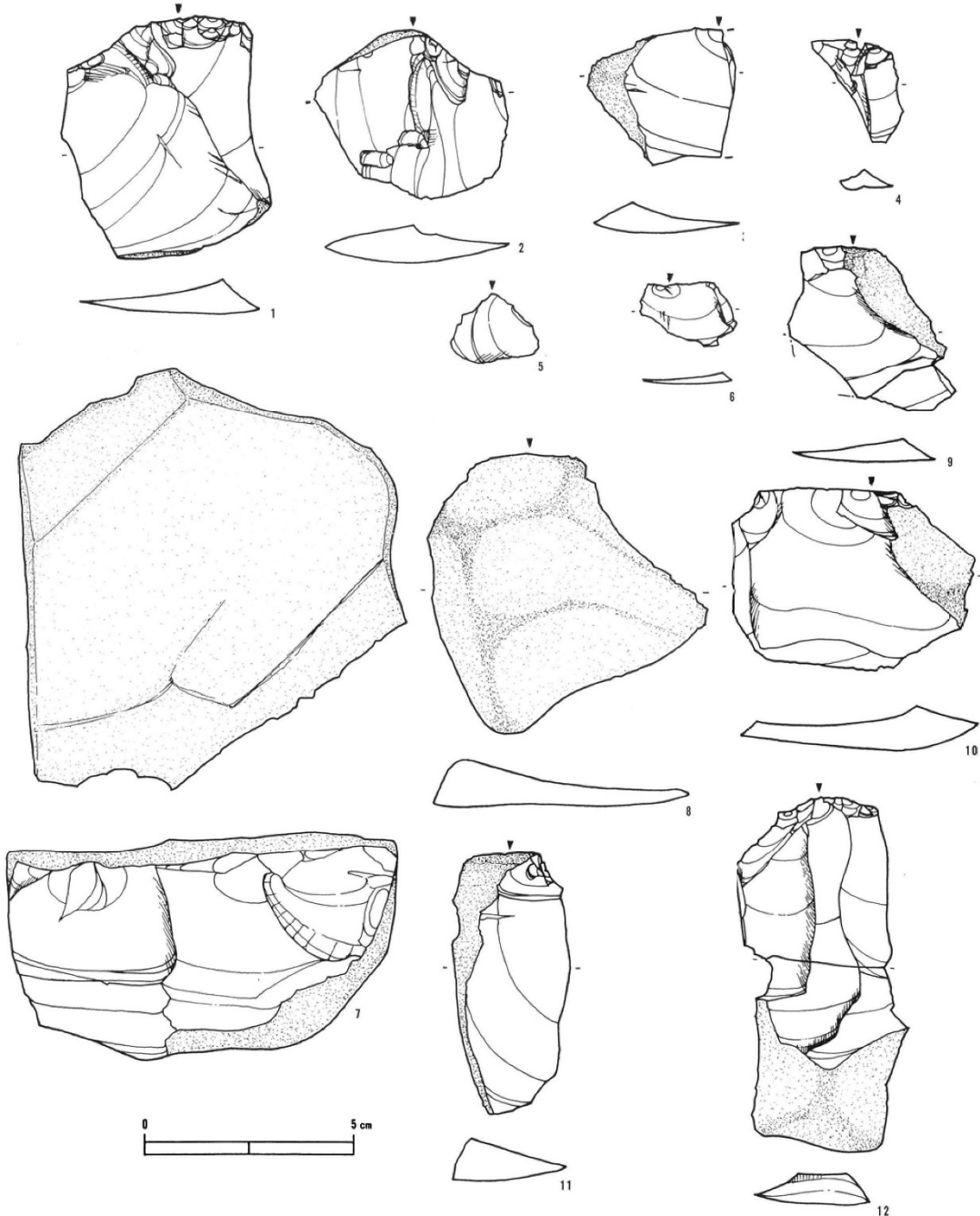


図16 B遺跡出土石器実測図1

母岩2は全点接合する。両母岩に見られる剥片は、原面打面を持ち、部分的に頭部調整を施されたものがほとんどである。

第2ブロック(図15)から72点の石器が得られている。母岩3が量的に主体を占めている。二次調整のある石器は3点(図17)が出土している。15は基部整形石器で先端が失なわれてい

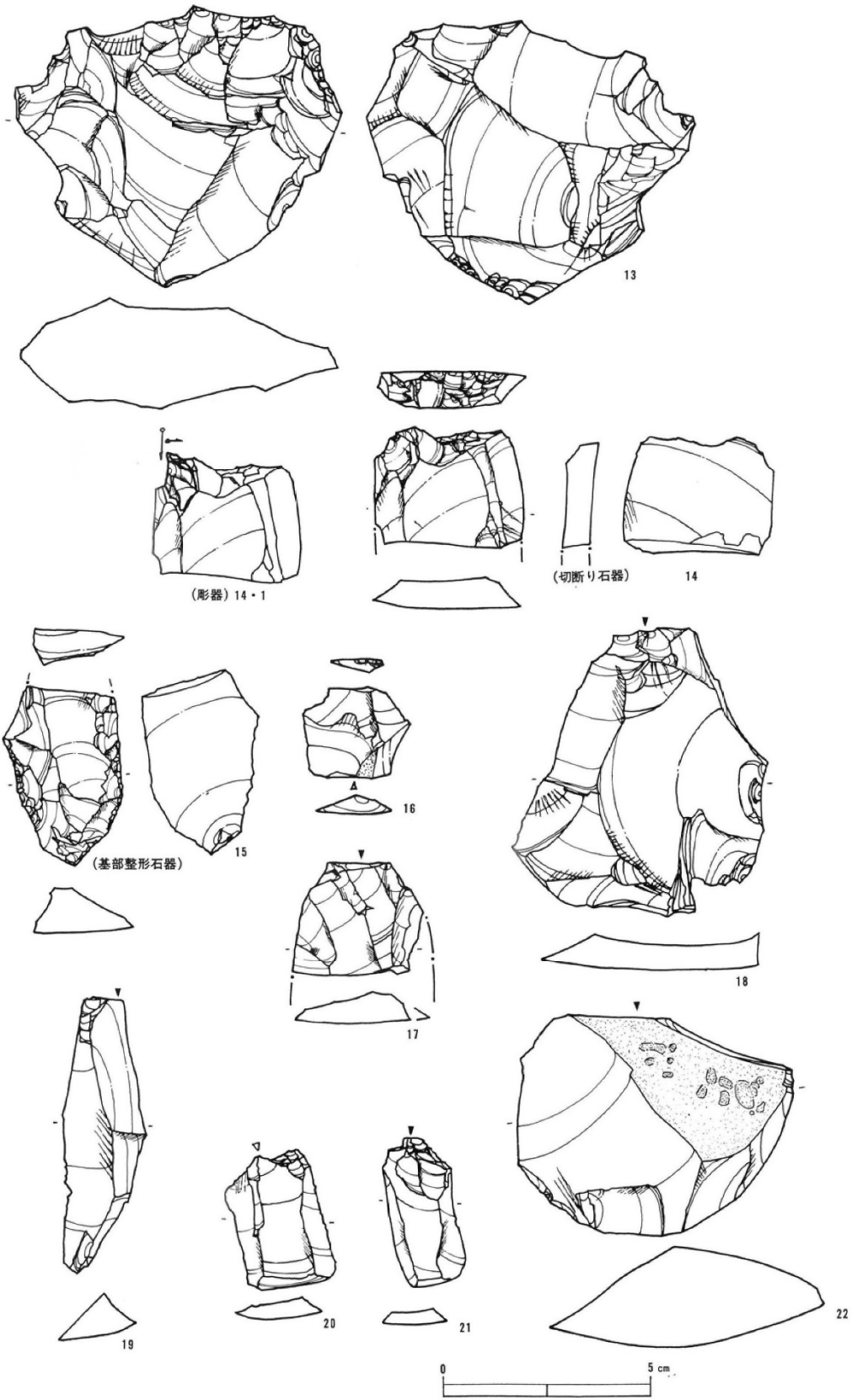


图17 B遺跡出土石器実測図2

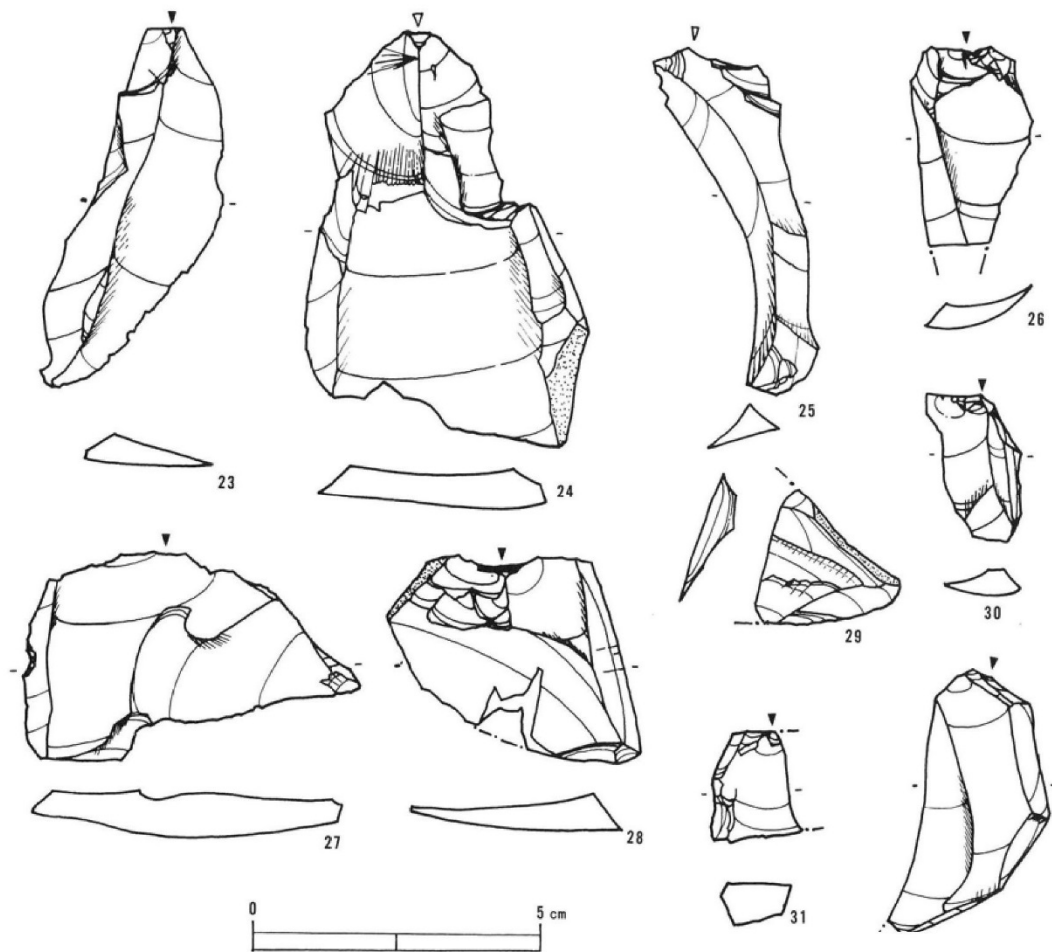


図18 B遺跡出土石器実測図3

る。14 は切断り石器で、基部は発掘時の事故で失なわれている。14 には細部調整剥片が 1 点接合している。接合した状態を見ると、彫刀面が残されており、器種変えがなされたことが明らかとなった。33 は先端部左に鋸歯縁の細部調整が見られる。

母岩 3、4 とも接合例(図)をもつ。両母岩の剥片は、剥離面打面がほとんどで、部分的に頭部調整がみられる。

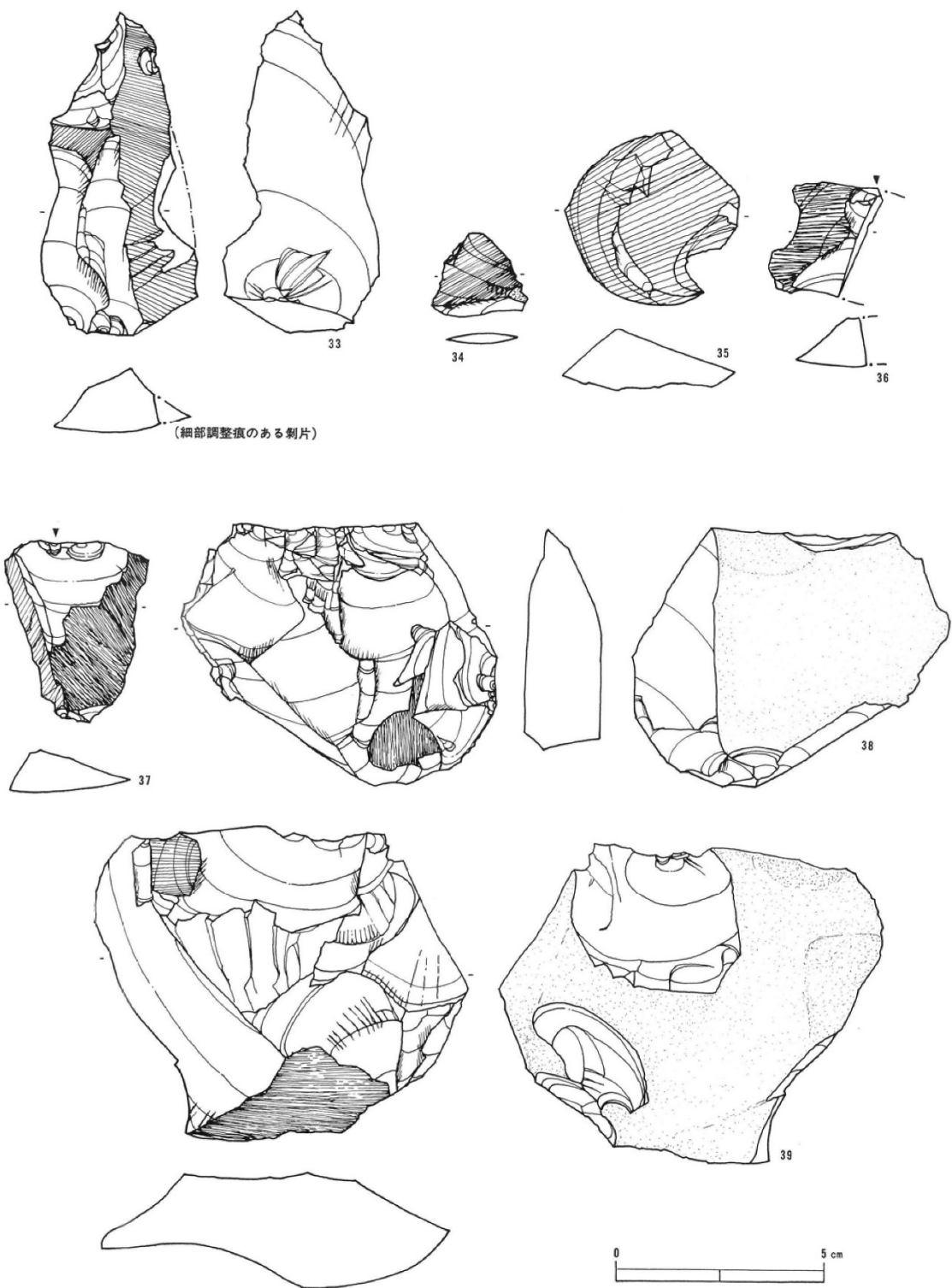


図19 B遺跡出土石器実測図4

6 考察と課題

(旧石器時代)

高瀬山遺跡群の中で、旧石器時代の石器群を発掘調査によって確認できたのは三例目である。高瀬山1遺跡鉄塔地点(山形県教委『分布調査報告書(9)』1982)では、両面加工尖頭器4点、ノッチ6点を含む総数680点の尖頭器石器群を検出している。同じくL遺跡では、片刃石斧、舟底形石器を含む晩期旧石器時代の石器群を検出している。I・L地点とも同じ中位段丘面(M2面)に位置している。鉄塔地点では、Ⅲ層黄褐色ロームを一次的包含層に、L遺跡Ⅱ文化層ではⅣ層(明赤灰色土層)とⅤ層(黄褐色粘土層)にわたって遺物が分布するという。B遺跡の層序と対比した場合、B地点のⅤ層に鉄塔地点Ⅲ層、L遺跡Ⅴ層がほぼ対応すると考えられる。

阿子島(『高瀬山K・L遺跡発掘調査報告書』1986)によれば、M-1面の14C年代が3.1万年、2.5万年、L-2面構成層上部の14C年代が1.5万年とされることから、M-1面の形成年代は、その間に位置付けられる。生活面として安定した状況を考慮すれば、B遺跡の旧石器群の年代はL-3面形成年代にかなり近いが、あるいはそれ以降の年代が与えられよう。層位的には、B遺跡と鉄塔地点はほぼ同じ層準に遺物が含まれていたといえる。しかし、L遺跡は段丘の側刻崖に位置することから、堆積のメカニズムが他の二遺跡と異なることが考えられ、層位的に必ずしも同じ条件であるとはいえない。L遺跡の年代については問題が残る。

B遺跡内において、二つの遺物集中地点が確認された。両者の間に同一母岩の資料は含まれていない。同一層内における共存を示すものであるが、同時存在を保証するものではない。また、第1ブロックには石器(too1)が含まれておらず、石器型式学的に年代を限定することは困難である。第2ブロックには、基部調整石器と切断り石器が各1点含まれている。切断り石器は彫器からの器種変えが見られ、彫刻刀面作出技術の存在を保証している。また、剥片は、石刃状剥片、剥片が多い。このような石器群は、小国平林遺跡の石器群に一部共通するところが見られる。しかし、これらの特色はごく一部にすぎない。

B遺跡の二つのブロックは、従来の東北地方日本海側の旧石器時代遺跡の中では、どれよりもコンパクトで単純なものといえる。原石となる頁岩は、中位面の段丘礫層や最上川で大量に入手できる。そのような条件下での遺物のあり方は、今後東北地方の旧石器時代の遺跡を考えていく上で重要な例となろう。

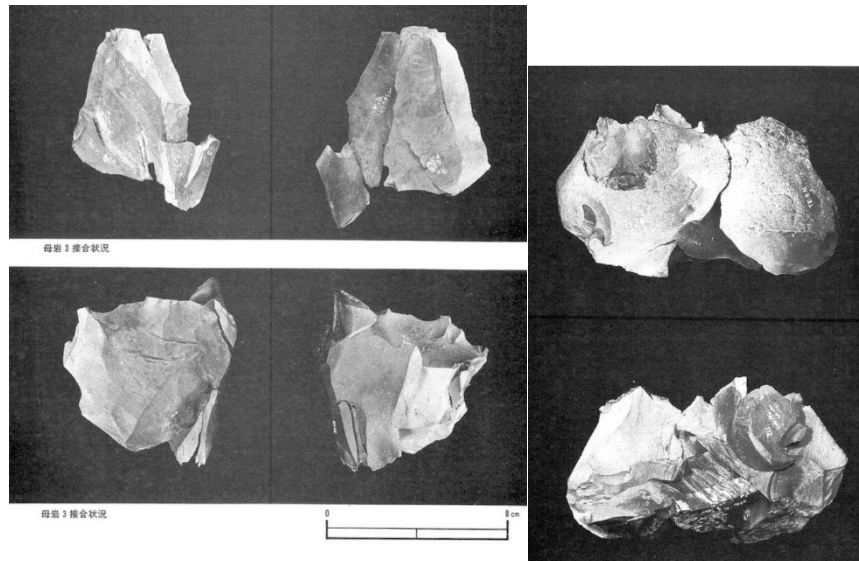


図20 母岩3 接合状況 図21 母岩接合状況

4 高瀬山遺跡市教委調査E区(2000年)出土旧石器

1 調査位置

平成12年度高瀬山遺跡の調査区の精査中、D地点の褐色粘土層から石器が出土したため、D地点北側部分について、旧石器時代の遺構・遺物検出のため補足調査を実施した。D地点は標高109mの段丘縁辺に位置する。東北横断道酒田線が傍をはしている。古墳時代から平安時代の遺構精査後、粘土層上面から約30cmの深さまで、すべて手掘りですすめた。その結果、図にしめした範囲から石器が出土した。

2 層序

調査区D地点が位置する河岸段丘は、4面に相当する。D地点の北壁を掘り下げ、発掘地点直下の地層の状況を検討した。このグリッドの壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下の通りである。観察終了線は、地表下約1m20cmである。段丘礫層まではさらに約1m数10cmの地層の堆積がある。

Ia層 耕作土(10YR3/1)

Ib層 黒色土(10YR3/1)締めり少ない。パサパサしている根の攪乱あり。

II層 漸移層(7.5YR4/3)一部根の攪乱あり。III層の腐食化した層か?

III層 明褐色風化火山灰層(10YR5/6)粘性強い細粒あり。

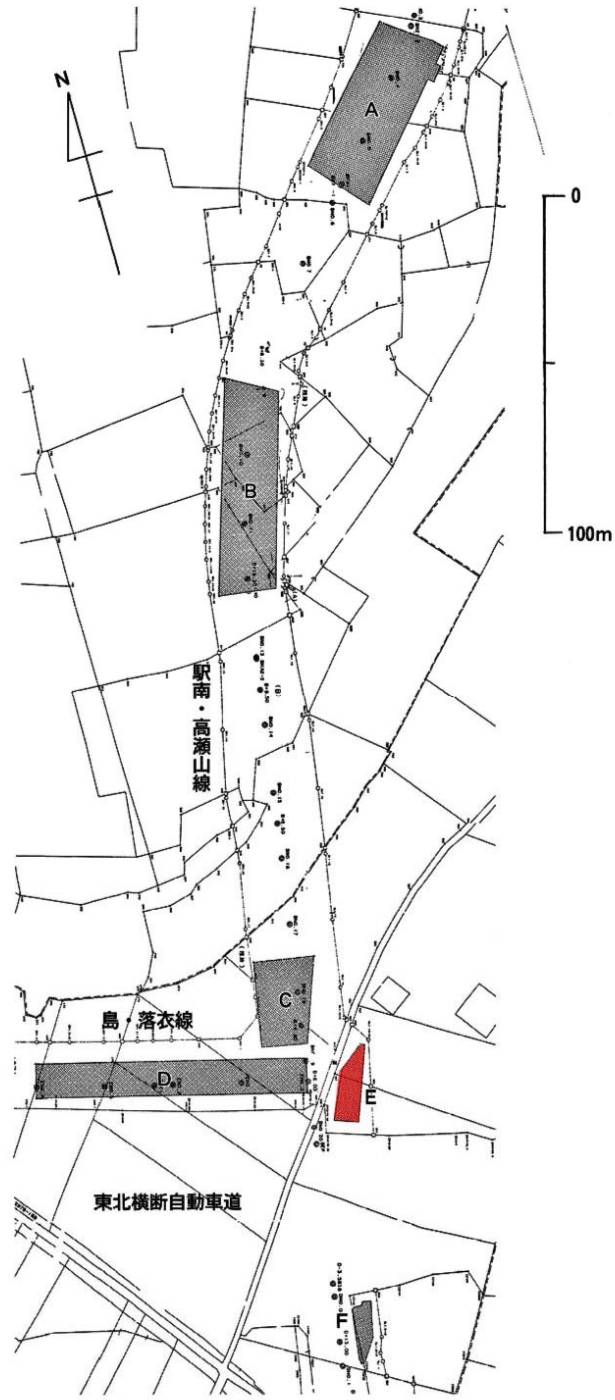


図22 E地区の位置

IV層 明褐色粘土質シルト層(7.5YR7/2)粒状に10YR5/8粘質土が混じる。締まり強い。

V層 黄褐色粘土質シルト層(10YR5/8)粘性少。

VI層 明褐色シルト層(7.5YR7/2)に黄褐色シルト層(10YR5/8)が斑状に混じる。下部は砂質。

VII層 黄褐色シルト質砂層(10YR5/8)粘性少ない。

以上のI～IV層が遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器や石器が出土する。旧石器時代の遺物はこれらI～III層準からも出土するが、耕作や根などの攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層準はIV層である。石器資料は、III層下部から出土し始め、IV層中にまとまって出土する。一部V層上部にかかる部分もある。IVに当時の生活面があると判断できる(図)。V層以下は無遺物層である。

I～IV層は風成層、V層以下は水成層である。水成層から風成層へ移行するV層の上部は水平堆積ではなく、複雑な様相を呈している。

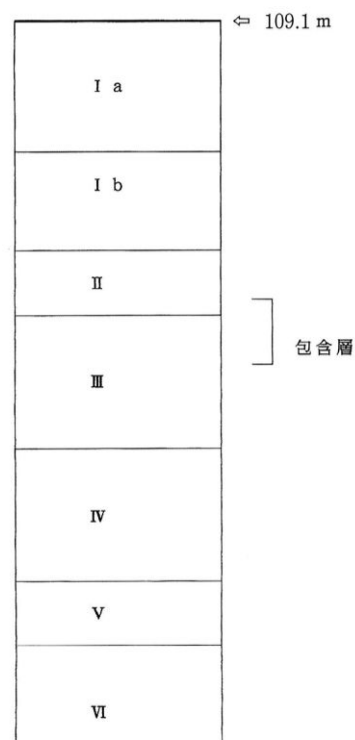


図23 層序概要図

3 分布

石器群は層位的に褐色粘土層から粘土質シルト層にかけて出土した。根等による攪乱も入り、生活面は、IV層中と推定した。石器群の表面的な分布は調査D区の東北コーナーに位置し、全体として楕円形の状況を示す。ブロックとしては1ヵ所の確認となった。1号ブロックと呼称する。このブロックは長径4m、短径2mを測る。東側は古墳の周溝SDに削られて消滅し、周溝覆土からも剥片・碎片が出土している。本来はもう少し東側にも広がっていたものと考えられた。ブロック外からも尖頭器・搔器・篋状石器などが単独で出土・採集した。

II層以下、手掘りによる掘り下げを実施、層位と分布の広がりを確認している。

I～II層 古墳と思われる周溝確認中、石器片が出土し始める。調査区北東コーナー付近を精査。旧石器時代の遺物の可能性があり、出土位置を記録しつつ、取上げに入る。根等により攪乱されているものの、径1mの範囲に、比較的大き目の剥片が分布する。

III～IV層 III層中～IV層上部にかけて、広範囲に散布が確認された。微細な剥片の拡がりが見られ、径2m50cm程の範囲に分布している。根などの影響で、10～15cmほど下に入り込んだ資料もある。分布の中心付近には、比較的大きい資料が分布している。遺物の出土レベルのピークからIV層上部が本来の包含層と推測できる。

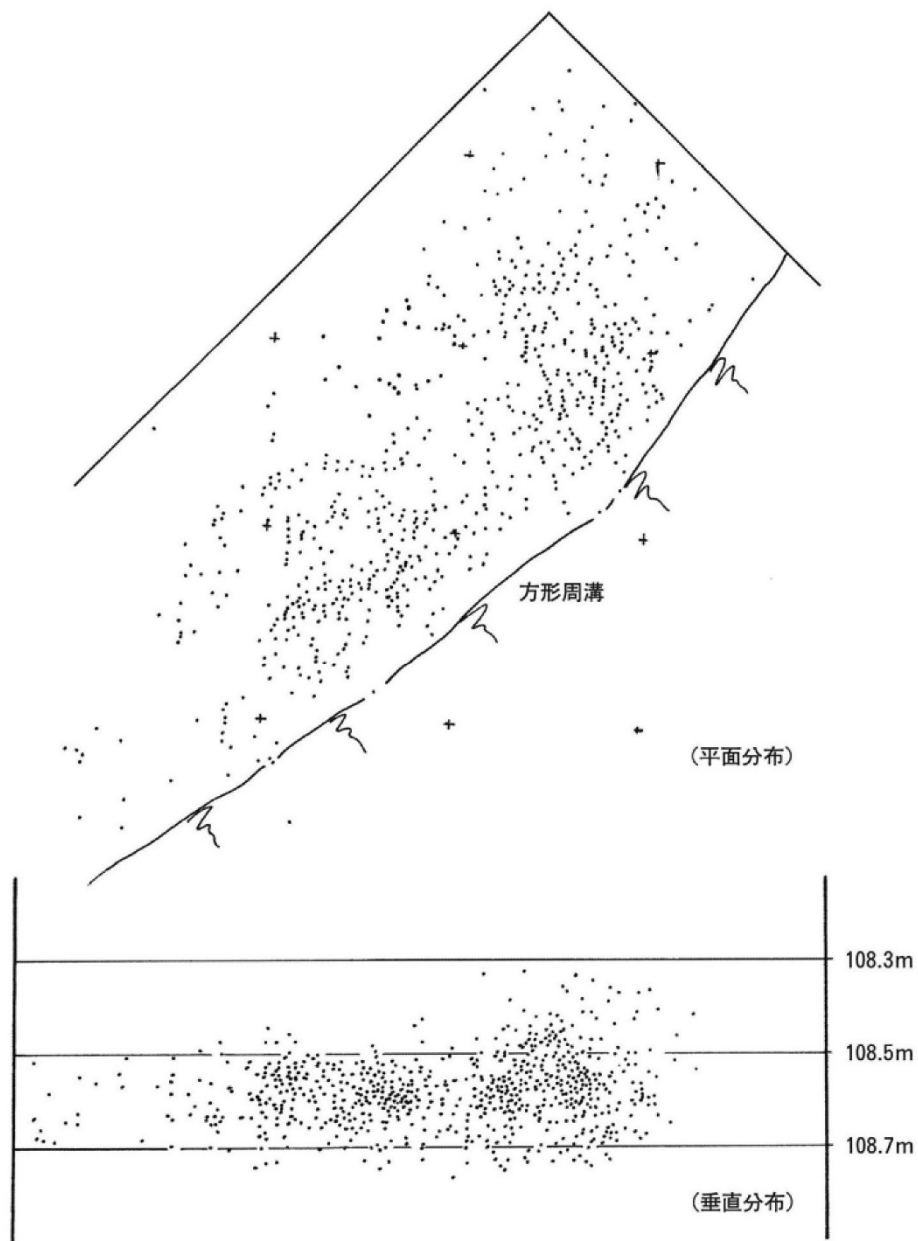


図24 旧石器の平面・垂直分布図

4 出土石器

第1ブロックの旧石器時代石器群は剥片 210 点、碎片 540 点の計 760 点から構成される。発掘資料はすべて剥片・碎片である。これらはすべて槍先形尖頭器の製作加工の途上に生じたものと思われる。

(1) 剥片・碎片

ほとんどは槍先形尖頭器の製作によって剥ぎ捨てられた石片であり、素材加工の部位や製作段階によって大小様々な形態の石片が出現する。中には、礫面を有するものも含まれるが概して大型の剥片に多く、初期の調整剥離において礫面の除去が進められた経緯を示すものと考えられる。

資料の大きさと背面の剥離構成は、その調整剥離段階を示すひとつの指標として以下のように分類した。

- A 類: 背面の剥離面剥離軸が、剥片剥離軸と同一方向の剥離面のみで構成される。
- B 類: 背面の剥離面剥離軸が、 45° ～ 90° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- C 類: 背面の剥離面剥離軸が、 180° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- D 類: 背面の剥離面剥離軸が、 90° ～ 135° 振れる剥離面と同一方向の剥離面で構成される。
- E 類: 背面の剥離面剥離軸が、A～D 以外でさまざまな方向から剥離された剥離面で構成される。

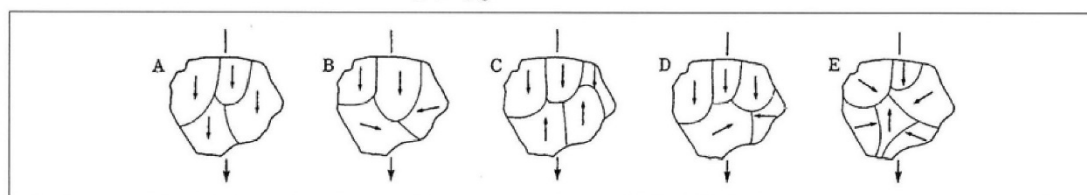


図25 剥離面構成模式図

A 類は背面にみられる剥離がすべて打面側からの剥離による剥離面構成からなり、打面側からの剥離が連続する点と対辺からの剥離面を有しないことを特徴とするが、資料全体の 60%を占め、その内訳は小形の剥片が 75%を占める。小形であるがゆえ中軸線を越えないことにつながるであろうが、中軸線を越える必要のない終末段階の調整剥片に相当するものと考えられる。

他にブロックを切り合う古墳周溝から搔器、筥状石器が出土し、近接する畑地から槍先形尖頭器が採集された(図 26)。

5 石器群の性格

Ⅲ層～Ⅳ層の遺物分布を見ると小型剥片と碎片および微細な石片が資料を構成することから鑑み鑑み、尖頭器の製作が行われたことは間違いないと思われる。しかも、大形の剥片がないこと、表皮のついた剥片が少ないこと、調査区内にはブランクとして搬入され、2 次的剥離作業が行われたエリアととらえることができよう。生産された尖頭器は遺存していない。生活の場に持ち運ばれたか、あるいは本来の機能を果たしているものと推測される。分布図をみると、ブロックはさらに西北側に広がる様相を示している。

D 調査区の北東約 10m のところからも、尖頭器を主体とする石器ブロックが検出されている(1981 山形県教委)。

東北横断自動車道酒田線建設に関わる緊急発掘調査では、隣接した 6 区から石器集中地点が 1 ブロックが確認されている。径 3m ほどのブロックで、礫や石核を中心に小形の剥片、碎片が多数出土した。高瀬山北端の L 地点からも尖頭器製作の場と思われる石器集中地点が確認されており(石井 1985)、段丘縁片に近接し旧石器時代の遺跡が散在しているのかとも考えられる。



図26 D・E地区出土旧石器実測図

6 編年的位置

石器群の特徴及び周辺地域との比較から、所属年代につて触れておきたい。高瀬山遺跡では、

以前から尖頭器が採集されたり、発掘資料として注目されることがあった。

高瀬山遺跡(送電線部分)では槍先形尖頭器の破損品や剥片がまとまって出土し、製作地のブロックとみられる。出土した槍先形尖頭器は、薄手で幅広いタイプの木葉形尖頭器が主体を占める。高瀬山遺跡の北側の位置するL地点段丘崖に位置する石器製作地である。1985年、市道整備に係る発掘調査で尖頭器・搔器・片刃石斧が出土した。

寒河江市高松 II 遺跡でも、槍先形尖頭器とともに、たくさんの剥片碎片が出土している。槍先形尖頭器を観察すると、形態の大小と広がりがあるものの薄手の槍先形尖頭器を仕上げている様子が伺える。他に組成する石器として大型の両面加工石器があり、類例は日向洞窟遺跡西地点や仙台市野川遺跡から出土している。

寒河江川流域ではこのほかに西川町月山沢遺跡・上野 A 遺跡・弓張平 B 遺跡において槍先形尖頭器石器群が出土している。月山沢遺跡では細石刃の片鱗が伺え、上野 A 遺跡では、削片剥取の技術を持つ尖頭器、弓張平 B 遺跡では初期の有舌尖頭器石器群がまとまって出土した。これらの石器群の検討から石井浩幸は、山形県における槍先形尖頭器石器群の編年案を示した。この編年表に組み入れるならば、高瀬山遺跡 E 調査区(2000)の石器群は、大きく細石刃文化以降縄文時代草創期までの時期におさまると見られる。製作された尖頭器の形態や伴出する石器群の全体が判明するならば、なお詳細な時期を設定することも可能となる。今後との課題としておきたい。

参考文献

- 宇野修平・大宮富善他 1980 「市内遺跡発掘調査報告書」寒河江市教育委員会
渋谷孝雄 1980 「高瀬山遺跡」『分布調査報告書 9』山形県教育委員会
石井浩幸 1985 高瀬山遺跡 L 地点『高瀬山 B・K 遺跡』寒河江市教育委員会
佐藤正俊 1980 『月山沢遺跡』山形県教育委員会
加藤稔他 1978 「弓張平 B 遺跡 3 次 4 次発掘調査報告書」山形県教育委員会
阿部祥人 1999 『上野 A 遺跡発掘調査概要』慶応義塾大学考古学研究室
石井浩幸 2000 「弓張平 B 遺跡の有舌尖頭器石器群の検討」『山形考古』6-1

4 高瀬山遺跡横断自動車道 1 期調査区出土旧石器

1 1 期調査区の旧石器出土地区

1期調査区では1区と6区で旧石器が出土した。その位置を図27に示す。

2 1区の旧石器

1区 旧石器出土地点の層序 (図29・30)

1区の調査区がのる高瀬山の段丘面は、地形区分4面に相当する(阿古島 功 1997)。

高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高112m、最上川との比高20mの区域にあたり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡(3+面)は、より低位の段丘面に相当し比高が18mである。1区付近はさくらんぼやりんご・桑等の果樹地域になっていた



図27 高瀬山1期調査区旧石器出土地区位置図

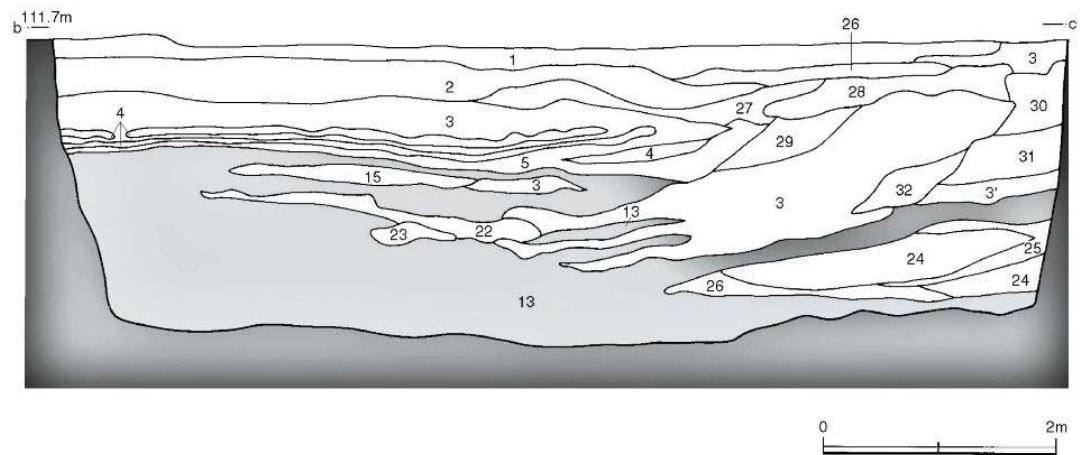
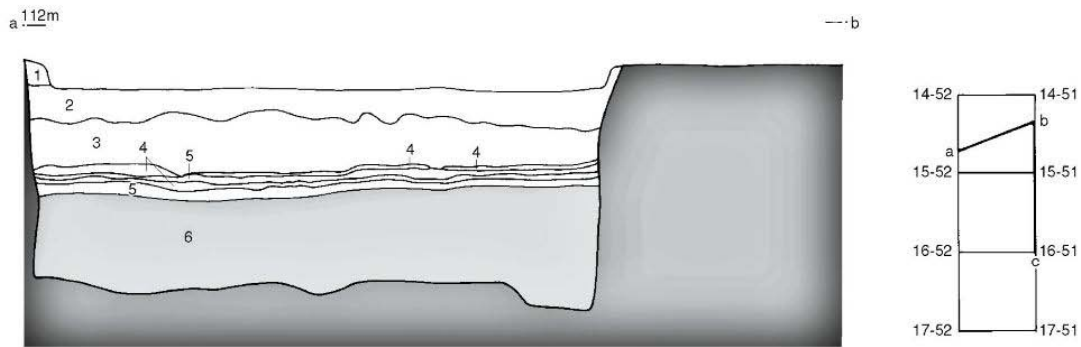
ため、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで攪乱される場合があり、一部根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。調査が進むにしたがい、より下層にも包含層が存在することが確認され、最終的には段丘礫層を掘りきり、岩盤面まで掘り下げた。この掘り下げ箇所の東壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下 2 m70cm である。

I層 耕作土	VII層 明褐色シルト層
II層 黒色土	VIII層 褐色砂層
III層 漸移層	IX層 赤茶褐色砂層
IV層 明褐色風化火山灰層	X層 赤茶褐色砂礫層
V層 明褐色粘土質シルト層	XI層 黄褐色砂層
VI層 黄褐色粘土質シルト層	

以上の堆積層のうち、I～III層が縄文時代までの遺物包含層である。I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石器が出土し、旧石器時代の遺物は、これらI～IIIの層準からも出土するが、耕作や根の攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はIV層中にある。石器群はIII層下部からまとまった出土を見せ始め、IV層中に集中して出土する。IV層に当時の生活面があると判断できる。IV層に集中する石器群を第I文化層とした。V層以下VI層までは無遺物層である。シルト層や砂層の堆積したVII層に相当するレベルから若干の石器が集中して出土する部分を確認した。これを第2文化層とする。

礫層からも散漫ながら摩滅している石器を検出し、検出レベルが上下しているものの礫層内出土のものを一括して第3文化層として区分した。第3文化層の礫層内から検出した炭化物のC14年代測定では、46,000BPの年代が示された（理化学的分析報告参照）。

石器群の年代を判断する1つの指標になるものと思われる。



- | | | | | | |
|----|------------|--|-------|--------|---------------------------------|
| 1 | 黄褐色粘質土 | 灰白色土粒少量混入 | I | 黄褐色土 | 鉄分及び白色土(火山灰)をわずかに混入 |
| 2 | 黄褐色粘質土 | 灰白色粘土を筋線状に混入 | II | 黄褐色土 | 白色土粒を多く混入 |
| 3 | 灰白色粘質土 | 黑色土粒(マンガン)多量混入 | III | 黄灰色土 | IIよりも白色土粒、白色土を多く混入 |
| 3' | 灰白色粘質土 | 黑色土粒(マンガン)多量に混入、酸化している | IV | 灰白色土 | 粘性やや有り、(火山灰層?)黄褐色砂質土少量混入 |
| 4 | 赤茶褐色砂質土 | 3と同様だが、黄褐色シルトブロック多量混入 | V | 灰白色土 | IVよりもやや砂質で灰白色土少なく、黄褐色砂質土を多く混入する |
| 5 | 灰白色砂質土 | 3を多量に混入、マンガンを多量に混入 | VI | 灰白色土 | IVとは同じだがやや砂質 |
| 6 | 赤茶褐色礫 | 3と似るが、3より砂質 | VII | 黄褐色土 | 灰白色土粒多量に混入(5mm~1cm) |
| 7 | 黄褐色砂 | 3、5を筋状に混入 | VIII | 黄褐色土 | 灰白色土を多量に混入 |
| 8 | 灰白色粘質土 | 3、5を筋状に混入 | IX | 灰白色土 | やや砂質土を混入 |
| 9 | 黄褐色砂質土 | 3とは同じだが、3よりマンガン多量に混入 | X | 黄褐色土 | 灰白色粘質土を多く混入 |
| 10 | 黄褐色砂質土 | 灰白色砂質土を混入、グライ化著しい | XI | 黄褐色土 | 灰白色土ブロックを少量混入する |
| 11 | 赤茶褐色粗砂 | 礫少量混入、小礫0.5~1cm混じる | XII | 灰白色土 | 黄褐色砂質土を多量に混入 |
| 12 | 灰白色砂質粘土 | 砂利多く混入、14とはほぼ同じ | XIII | 灰白色土 | 粘性強い(Xと似るが) |
| 13 | 黄褐色砂 | 礫多量に混入 | XIV | 灰白色土 | 灰白色砂質土少量混入、Xと同様だが、灰白色砂少ない |
| 14 | 灰白色粗砂 | 12と同様だが、色調が黄褐色で灰白色粗砂(14)を混入、一部灰白色砂質土混入 | XV | 黄褐色土 | ややグライ化強い |
| 15 | 黄褐色-赤茶褐色粗砂 | 小礫(2~3cm)と灰白色砂質土を多量に混入、11とは似ている | XVI | 黄灰色土 | 16と同様だが、グライ化16より弱い、灰白色砂質土を混入 |
| 16 | 黄褐色-赤茶褐色粗砂 | 10と似るが、礫ほとんど混入しない | XVII | 黄灰色土 | 灰白色砂質粘土を多く混入、17とはほぼ同様 |
| 17 | 灰白色粗砂 | 15と同じと考えられるが、灰白色部分多い(グライ化少ない) | XVIII | 黄褐色砂質土 | VIと似るが、灰白色土粒を少量混入 |
| 18 | 灰褐色粗砂 | 15と同じと考えられるが、灰白色部分多い(グライ化少ない) | XIX | 黄褐色砂質土 | 19とは同じだが、19よりやや灰白色土粒を少量混入 |
| 19 | 灰褐色粗砂 | 12、13と同様だが、色調赤い | XX | 黄褐色砂質土 | VIと同様だが、VIIより砂質 |
| 20 | 褐色-赤茶褐色砂質土 | グライ化著しい | XXI | 黄褐色砂質土 | VIと同様だが、VIIより砂質 |
| 21 | 褐色土 | 岩脈、砂岩? | XXII | 灰白色砂質土 | 礫混入 |
| 22 | 灰白色粘質土 | 3と似た土だが、やや軟弱で礫混入する | XXIII | 褐色砂 | |
| 23 | 黄灰色粘質土 | 22と似るが22より砂質で黄褐色(グライ化)である | | | |
| 24 | 灰白色粘質土 | 16と同様だが、灰白色粘土含まず、礫少量混入 | | | |
| 25 | 灰白色砂 | 13と同じにしてもいいが、やや灰白色砂多い | | | |
| 26 | 黄褐色粘質土 | 2と同様だが、灰白色粘土をわずかに混入しない | | | |
| 27 | 黄褐色粘質土 | 2と同様だが、2より灰白色粘土やや少なく色調2より黄褐色が強い(グライ化?) | | | |
| 28 | 黄褐色粘質土 | 27より灰白色粘土やや少ない | | | |
| 29 | 黄褐色粘質土 | 2と似るが、2よりやや砂質 | | | |
| 30 | 褐色砂質粘土 | 灰白色土粒、同ブロック多く混入(色調が赤いのはグライ化のためか) | | | |
| 31 | 灰白色粘質土 | 3と同様だが、粘質土でなく砂質土である | | | |
| 32 | 灰白色粘質土 | 3と同様だが3よりやや砂質である | | | |
| 33 | 灰白色砂質土 | 一部グライ化して黄褐色を呈する | | | |
| | | 3を少量混入している | | | |

図29 1期1区旧石器出土地土層断面図(1)



図30 1期1区旧石器時代出土土層断面図(2)

1 区 旧石器時代遺物の分布

旧石器時代遺物は1区の中央部に分布し、高瀬山の丘陵部分でも全体の中心付近にあたる。旧石器が出土した部分を中心の約100㎡にわたって慎重に掘り下げを行いつつ、石器の出土状況の記録を行っていった。先に述べたように、層位的に3つの文化層を確認されたことから、それぞれの文化層の石器群の分布状況を説明する。

第1文化層(図31~33)

第1文化層として確認した石器群ブロックは大半がIV層からV層にかけて出土しており、平面的な分布は、南北に15m、東西に10mの不整楕円形の範囲を示す。ここから1,565点の旧石器時代の石器群が検出され、浅い落ち込みも確認したが、風倒木痕などによる自然的な落ち込みとも考えられる。全体としては大きく1つにまとまっているものの細部においては、北側や南側において、小規模な集中域を構成しているようで、幾つかの小さなブロックから大きなブロックが形成されているともいえる。さらに周囲10mの範囲にまばらに石器が分布している。

層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部をピークにレンズ状に分布

していることが窺え、集中した状況を見せている。剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。第1文化層の石器群ブロックは剥片類の集中したレベルをもとにすればIV層上～中位にかけて生活面があると捉えておく。

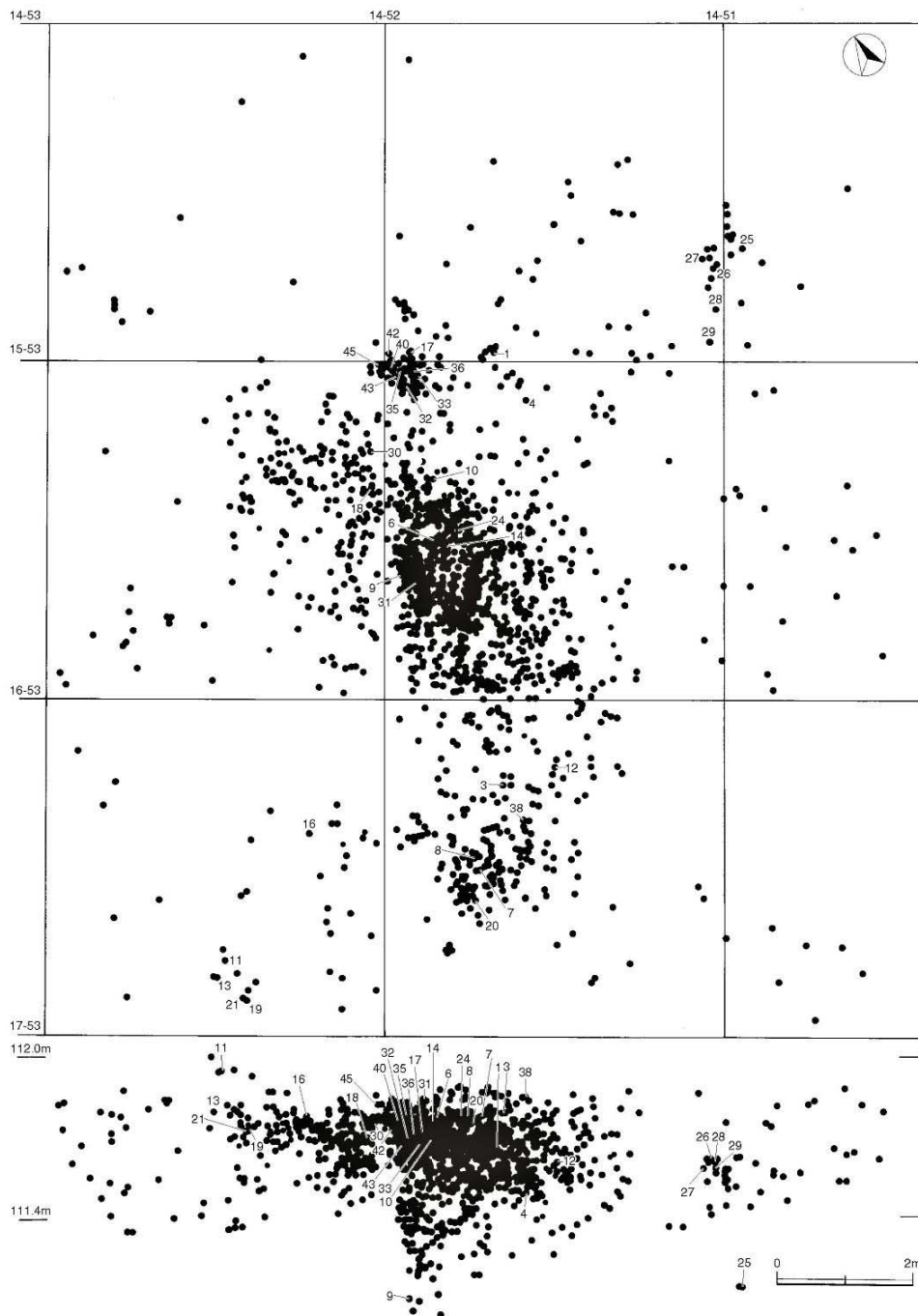


図31 1期1区旧石器第1文化層平面・垂直分布図(1)

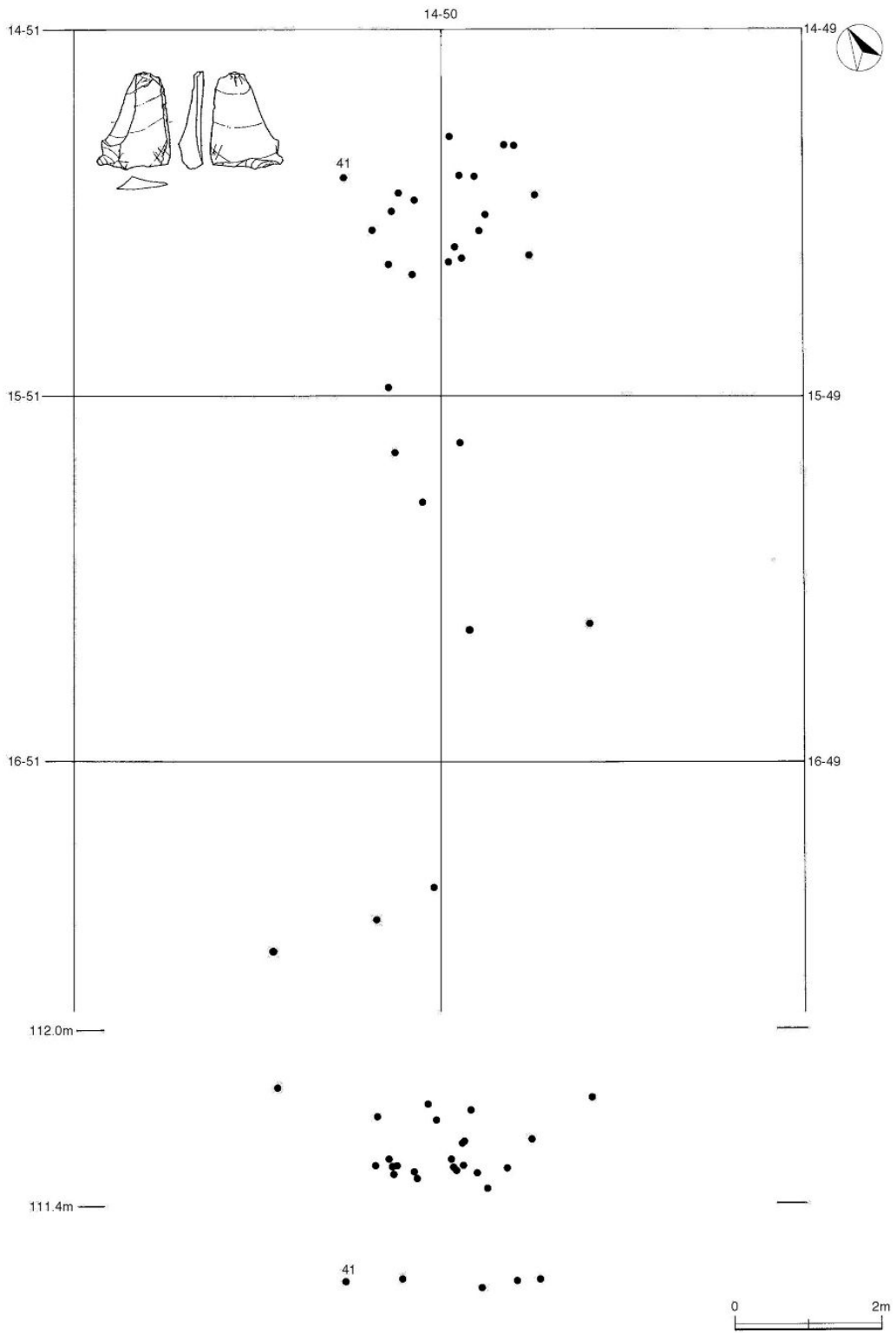


图32 1期1区旧石器第1文化层平面·垂直分布图(2)

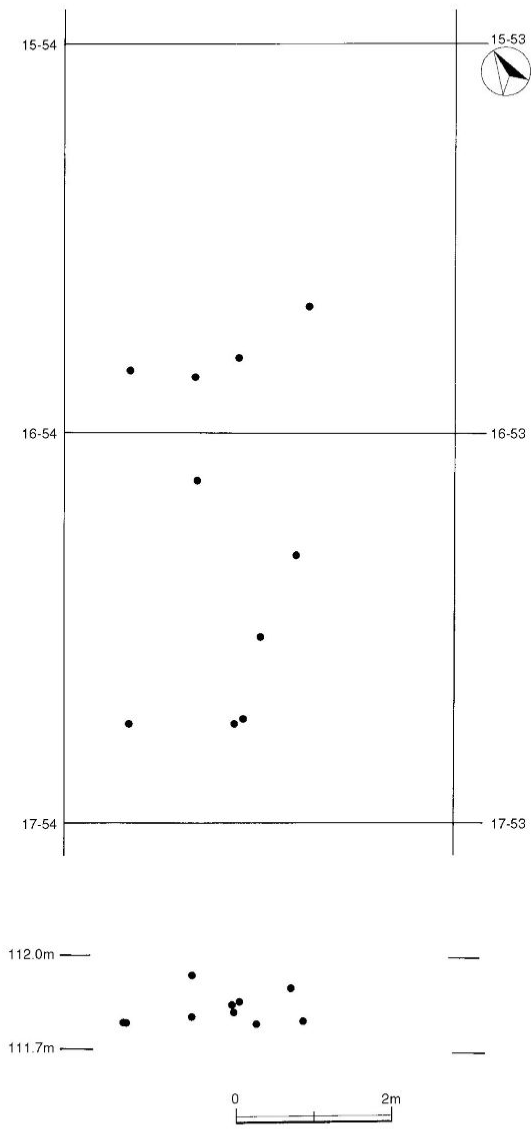


图33 1期1区旧石器第1文化層平面・垂直分布图(3)

第2文化層 (図 34)

第2文化層として確認した石器群ブロックはほとんどがVI層からVII層にかけて約 20cm の高低差を持って出土しており、平面的な分布は深掘区の全域からまばらに出土した。ここから 22 点の旧石器時代の石器群が検出された。全体として1つにまとまっているものかどうか、分布は周囲に広がることも予想され、部分的な分布状況を検出しているようでもある。

石器群ブロックとしては一カ所の確認となったが、散漫な分布と資料数の少なさは注目される。砂礫を含む旧河道の堆積層部分になるためか、石器資料のすべてが摩滅を受けたものである。

流水の働きによって本来の位置から移動し、かつ物理的な衝撃から稜やエッジがつぶれた状況を見せている。出土した石器は、石刃として分類できるものである。

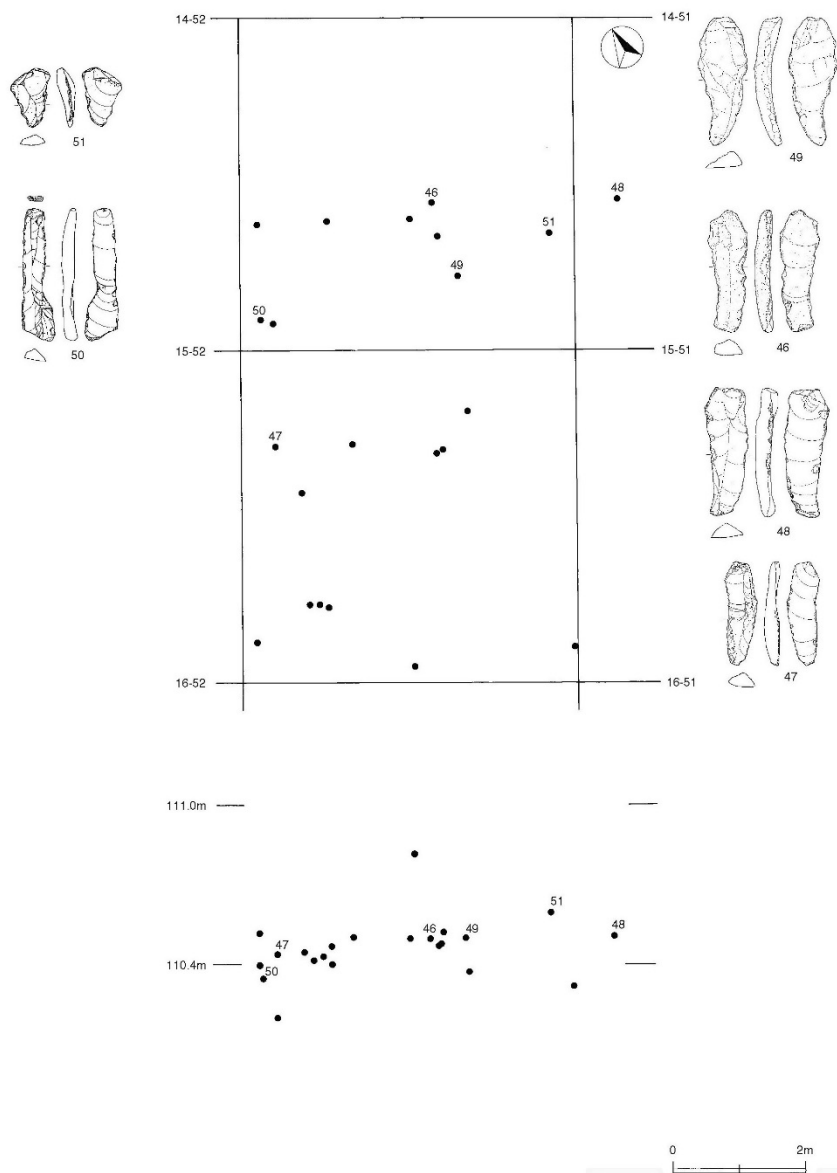


図34 1期1区第2文化層の石器の平面・垂直分布

第3文化層 (図 35)

砂層とシルト層の堆積層の下、段丘礫層内の出土石器群を第3文化層とした。深掘りした範囲5×5mのほぼ全域から60cm程の高低差をもって検出された。石器群はすべて摩滅しており、流されるなどの現象から砂礫とぶつかり摩滅したものと見られる。当初、自然的な偶発的な生成による偽石器と考えたものの、形態的に石刃や人工的な加工を受けた石器と判断できる属性を持っていたため、人工的な遺物と捉えた。ただ、礫層からは頁岩の自然礫も出土することは考慮すべき点である。

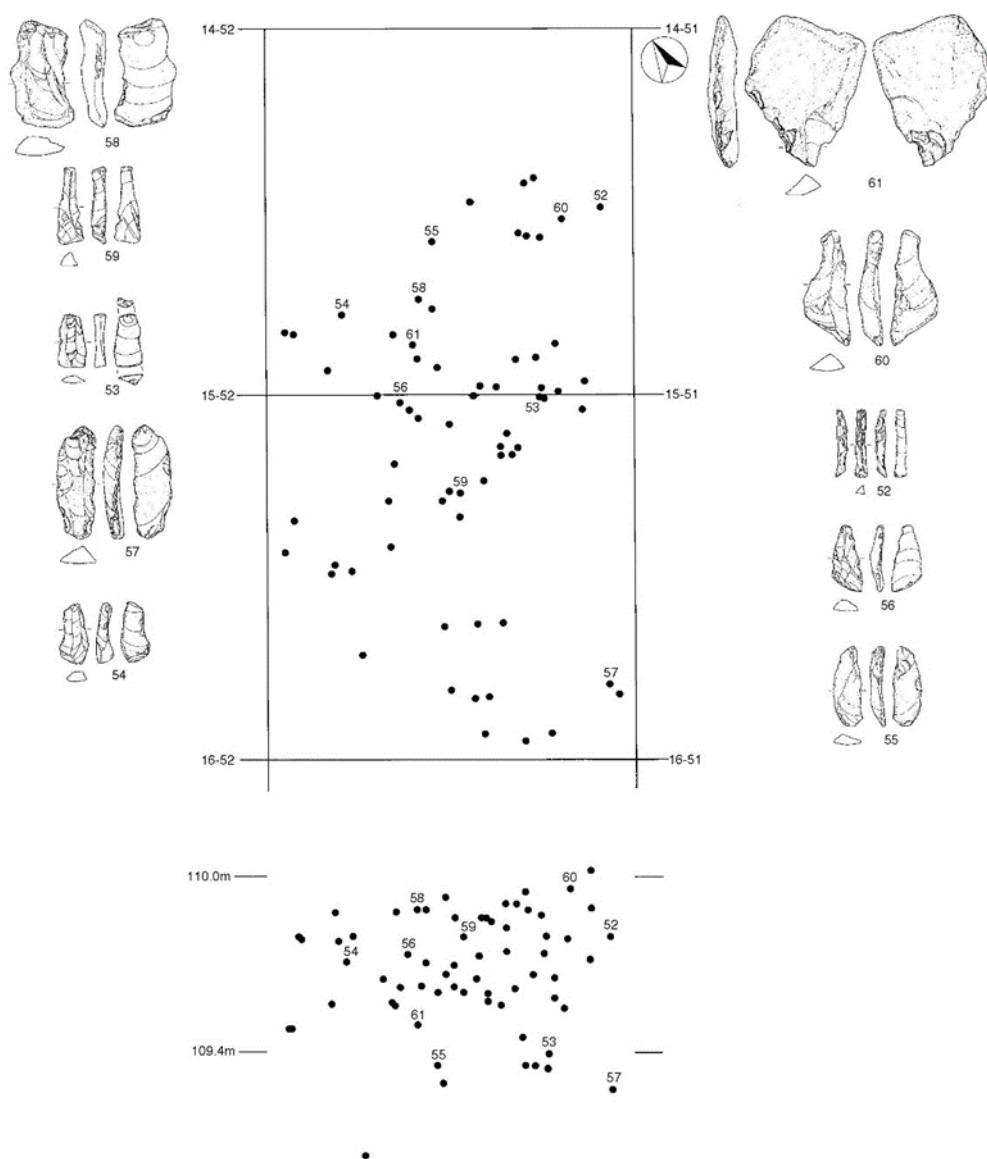


図35 1期1区第3文化層の石器の平面・垂直分布

1 区出土の旧石器時代石器群の概要

1 区の旧石器時代ブロックの石器の組成の内容としては尖頭器をはじめ、搔器、石刃、剥片、碎片などで、利器としての石器は量的に少なかった。一方、石器製作に関わる石器類が大半を占めている。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる石器類が多い。以下、出土した石器の概要を述べる。

第1文化層（図 36～41）

尖頭器（図 36-1）

器体中央部で破損し、表面には素材の礫面が残る。比較的大型の尖頭器を製作中に破損した資料と思われる。

片面加工尖頭器（図 36-2）

剥片の背面に周辺からの器面調整剥離を行い、尖頭器状に整形した石器である。

ナイフ形石器（図 36-3）

背面右側面に切り出し部を残し、他周辺は加工され、尖頭状に整形される。腹面の剥離痕の観察からは、整形した素材は石刃とは異なるようである。

舟底形石器（図 36-5）

甲板面はネガティブな面であり、剥離方向に縦長に整形される。甲板面及び底部からの調整剥離によって船底状に作り上げられ、甲板面からの細かい剥離により仕上げられている。細石刃核の母形というよりも完成した石器と考えたい。

搔器（図 36-4）

薄く幅広の剥片を利用し、背面周辺に加工がなされ、打面部は除去されている。

石核（図 37～40）

石核は4点出土している。剥片と接合したものもある。第34図20は石刃状剥片を生産した石核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、3枚の石刃状剥片の剥離痕が残る。背面・底面には表皮が残る、最終的に石核正面の剥片剥取が困難となり廃棄されたとみられる。

石刃状剥片

やや縦長の剥片で、石刃としては短いものが多い。これは、出土している石核の作業面の長さからも推測されるところで、残されている資料には、礫面があるものが多い。打面は幅があり、複数の切り合いが認められものや、平坦なものなど様々である。石材として頁岩素材のものが多数を占めるが少量ながら黒曜石製の石刃が出土している。

剥片・碎片

剥片・碎片は多数出土している。その中の一部資料を図示している。剥片類の中には、破損や切断、加工の痕跡を残すものなど様々見受けられ、同一母岩と思われる石器資料も多数存在し、その幾つかは接合している。

接合した資料について

出土した石器群を母岩別に分類し接合作業を行った。接合作業は十分ではなかったが7個体の資料について接合関係を確認した。今後さらに増加すると思われるが、現時点での成果の一部を報告する。

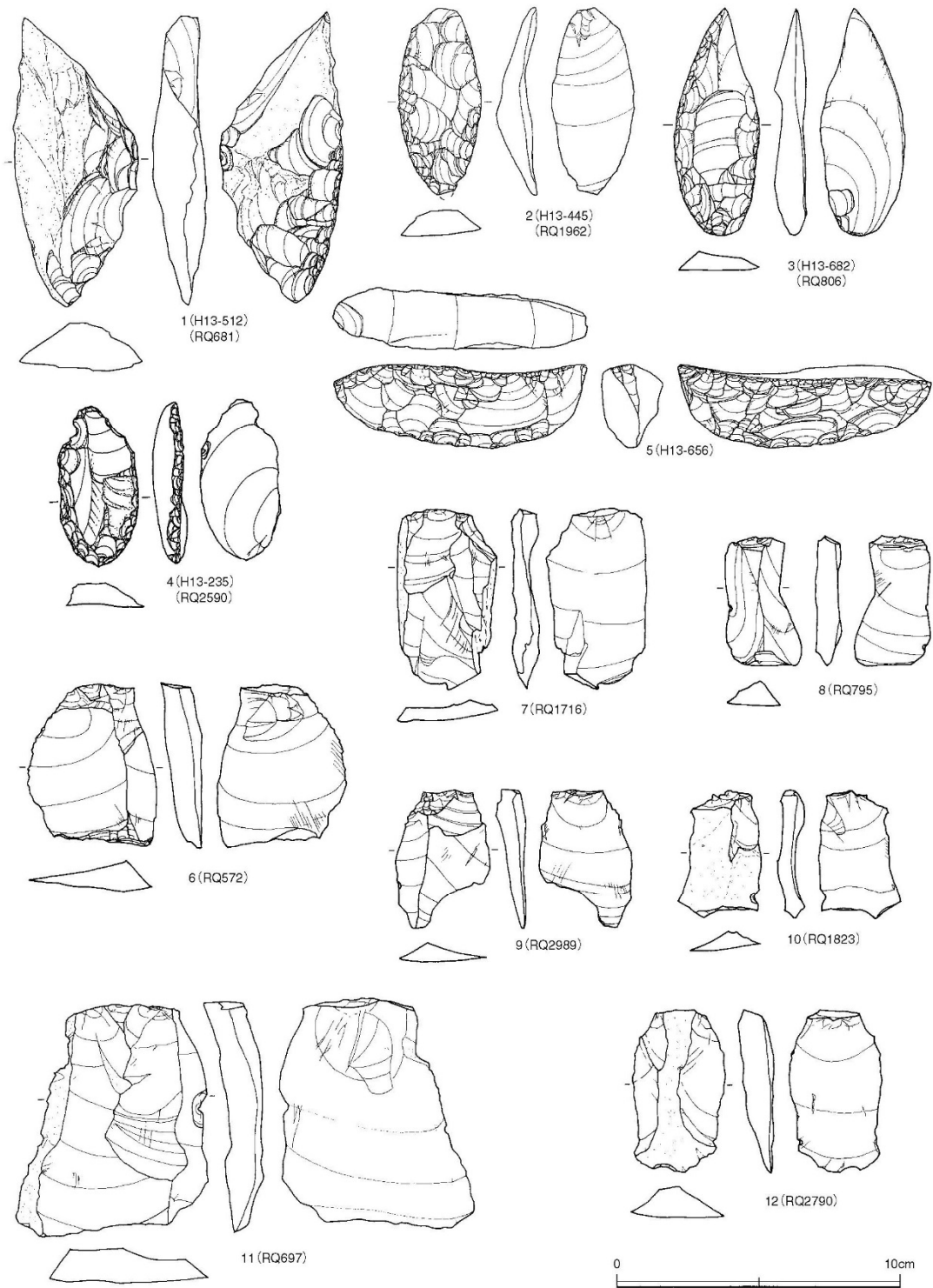


図36 1期1区第1文化層の石器〈1〉

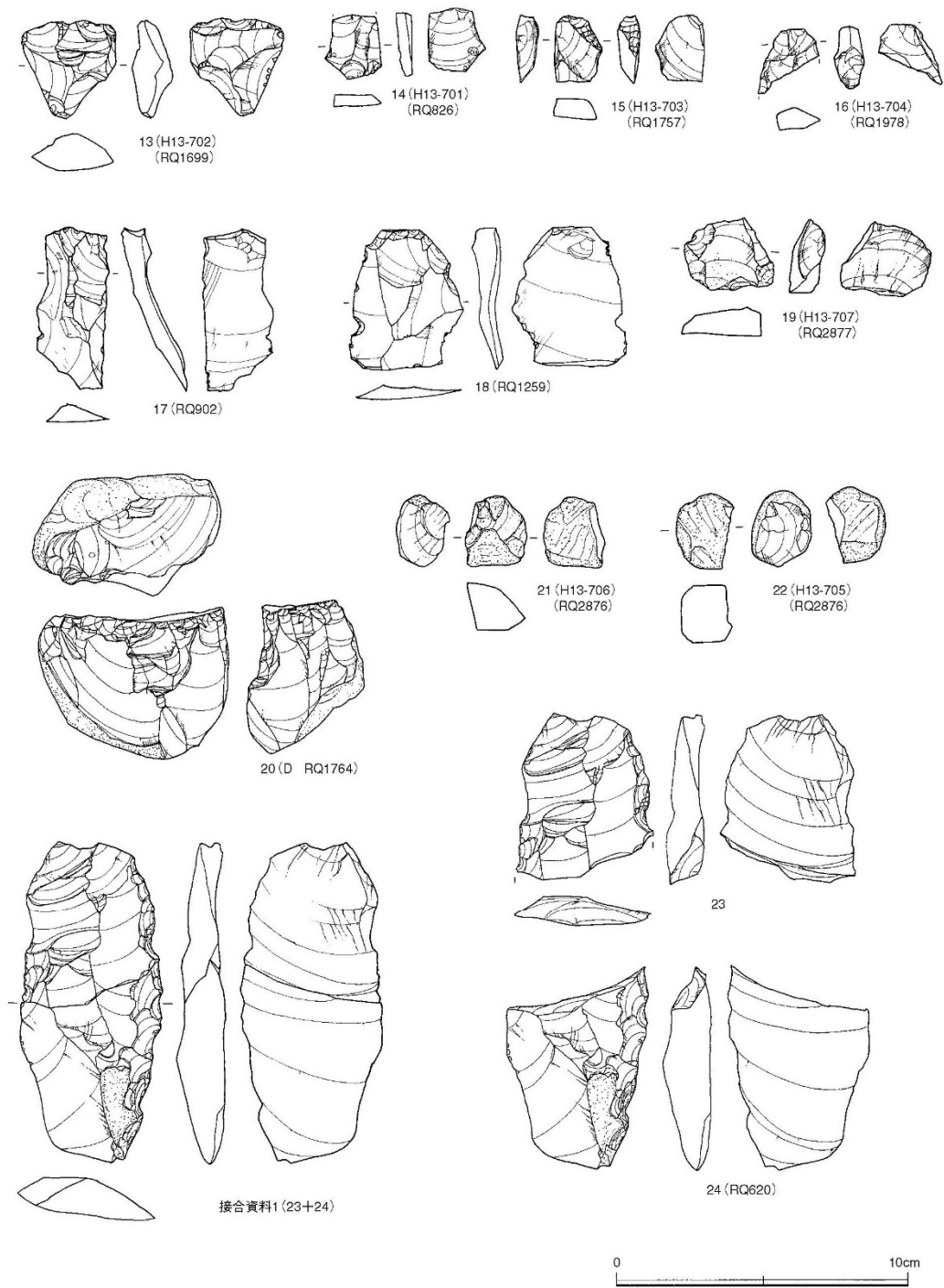


図37 1期1区第1文化層の石器〈2〉

接合資料1 (図37)

大型の石刃が途中で切損したものが接合した。長さ 10cm を超える大型の石刃で打点部分も切損している。背面右側辺に直線状に二次加工が施され、刃部を形成している。作業面が 15cm ほどを持つ石刃核が準備され、剥離されたものと考えられる。

接合資料2 (図 38)

当資料は合計5点の石器が接合した。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする剥片がある程度剥離され作業が進行した状況を見せるもので、底部付近に礫面を残している。作業面

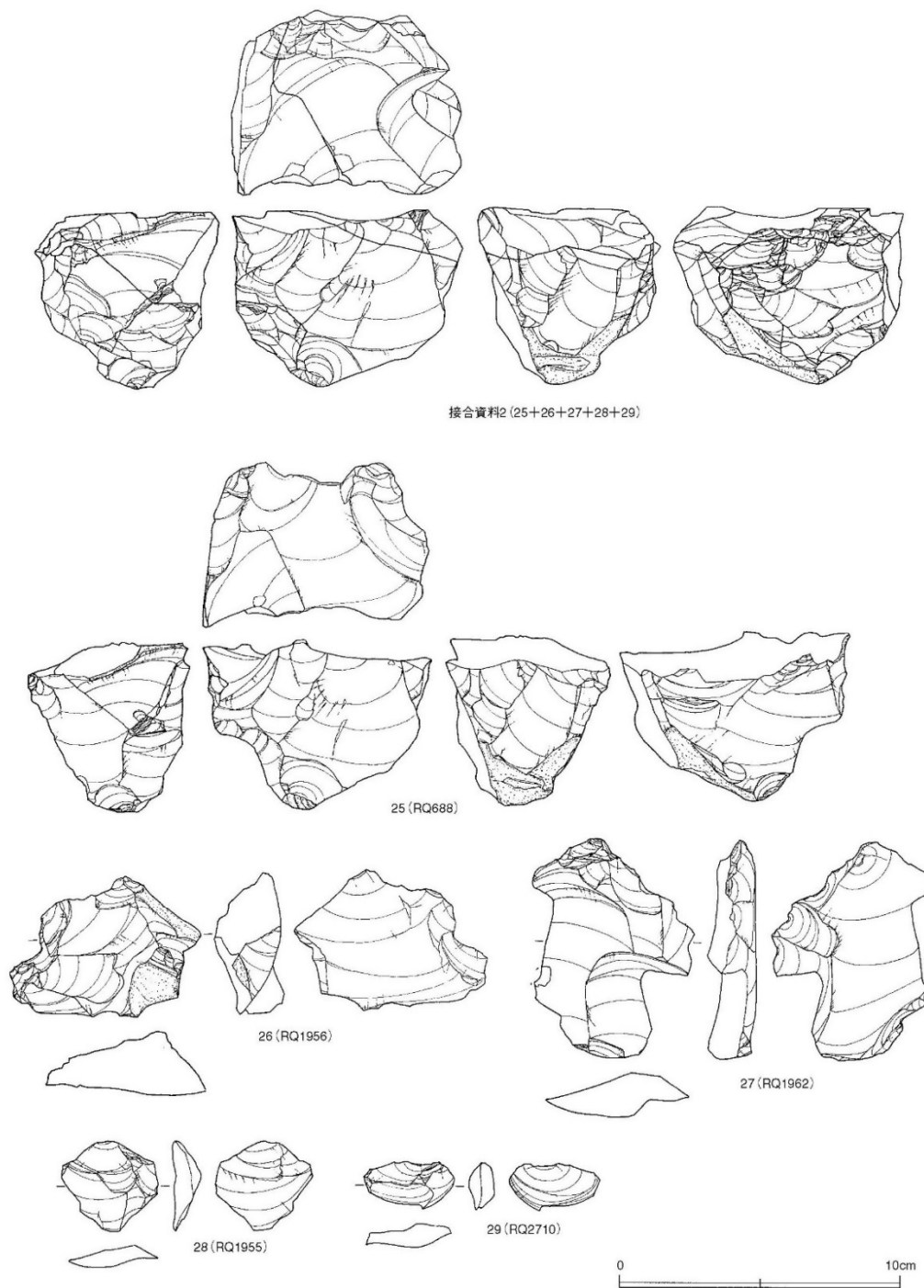


図38 1期1区第1文化層の石器〈3〉

は側辺をめくり、多数の剥離痕跡を残している。石核は剥片の剥離と打面の調整等を繰り返し、

幅広で円錐状の形態になっていったと思われる。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片が接合したことから煩雑に打面を移動しつつ目的とする剥片を得ようとする意識が看取できる。

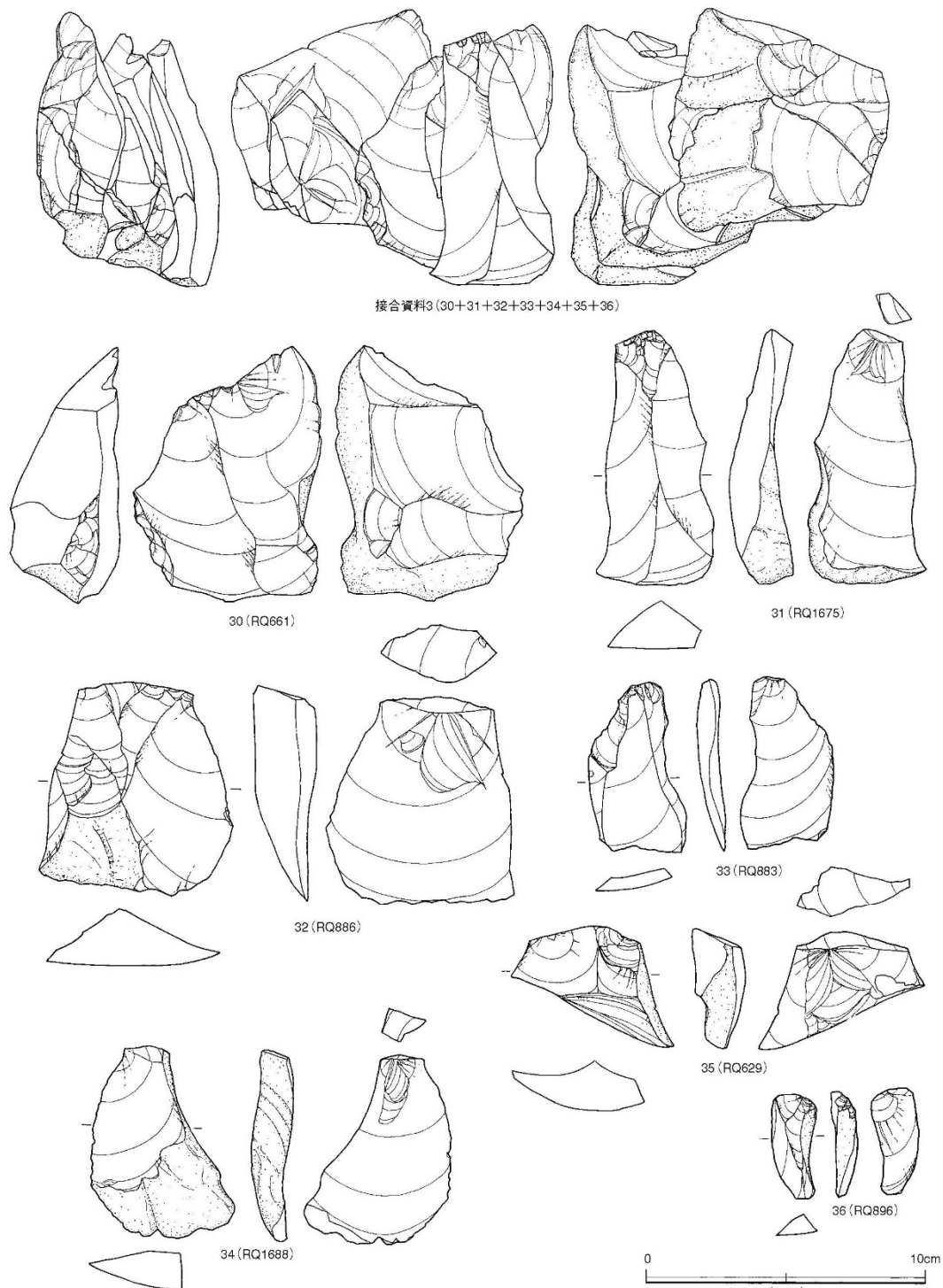


図39 1期1区第1文化層の石器〈4〉

接合資料3 (図39)

当資料は合計7点の石器が接合した。総重量は410gを量る。復元された接合資料は石核から目的とする石刃状の剥片を剥離し、薄く扁平な石核が残される状況をみせるもので、上下左右に作業面の痕跡が認められ、打面が転移している様子が看取できる。作業面となった部分はいずれも数枚の剥離痕が確認でき、接合した資料は作業面部分に接合している。作業面が打面になり、そこから剥離作業が展開するというプロセスが窺える。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは7点のみである。

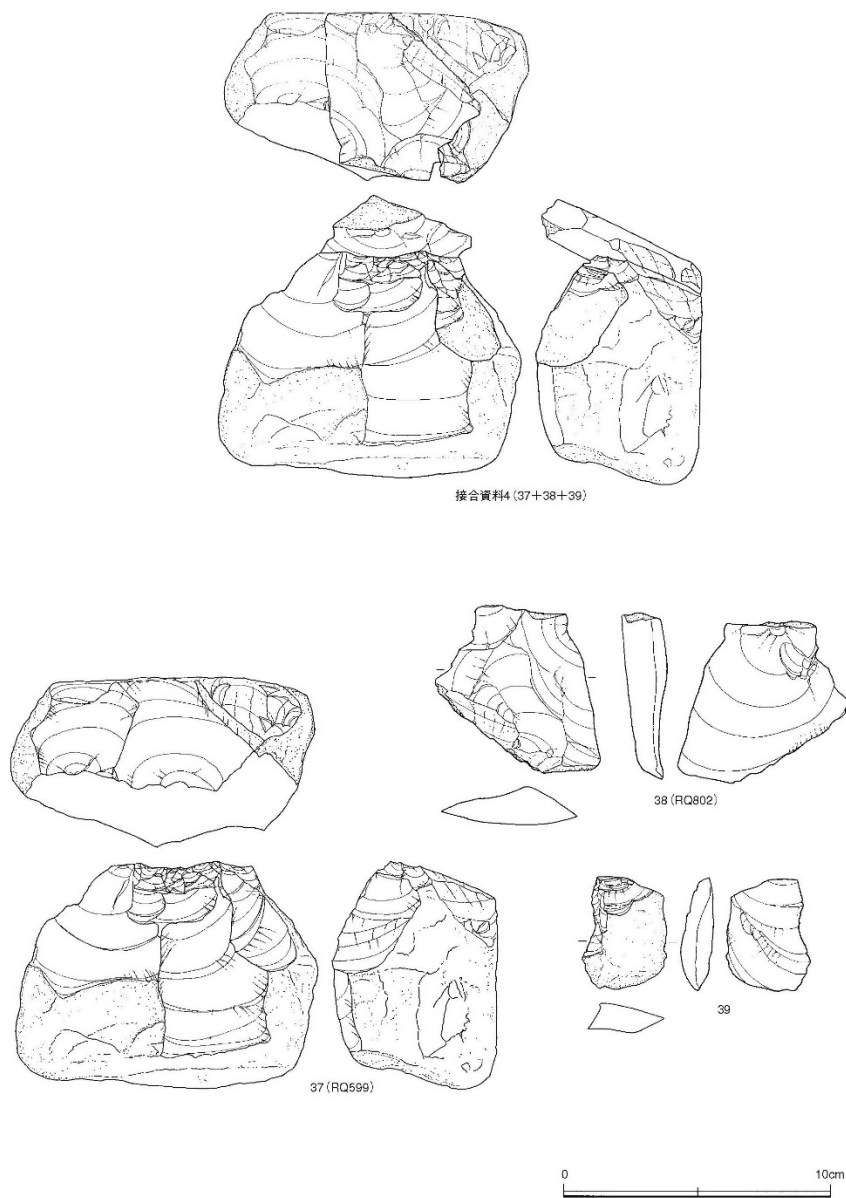


図40 1期1区第1文化層の石器〈5〉

接合資料4 (図40)

石核に2点の剥片が接合した。箱型の母岩の側辺に横方向から数回剥離を施し、礫面除去と打面を形成し、その後、作業面に対して、数回の剥片剥離作業を施している。作業面中央に剥離に

失敗したとみられる小さな剥離痕が集中していることから剥片生産を途中であきらめ、放棄したものと考えられる。もともとの母岩選択を理解することのできる資料である。

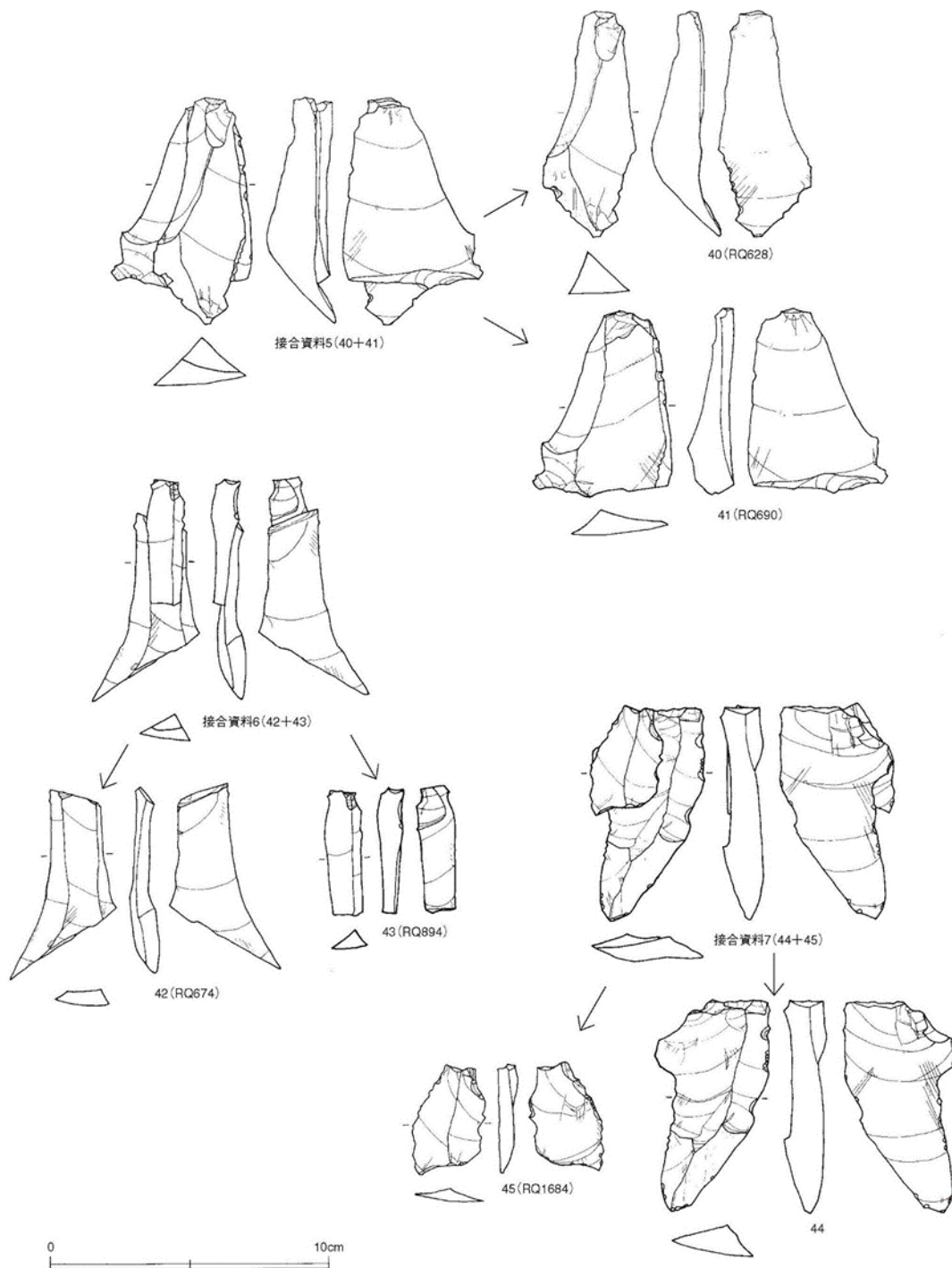


図41 1期1区第1文化層の石器〈6〉

接合資料5 (図41)

縦長剥片が2点接合した。2点ともに内側に内向気味に反っていることから、石核は円錐形

となっていたものと考えられる。

接合資料6 (図41)

石刃状の剥片が2点接合している。

接合資料7 (図41)

長さ10cm程の石刃状剥片に小さい剥片が接合した。打面部が比較的大きい。背面の剥離痕から連続して石刃状剥片が剥取されたことが伺える。

剥片の生産技術について

一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程を以下のように整理した。

①石材・石核の準備

接合資料2・4はやや扁平な角礫を、接合資料3はどんぐり形の頁岩を母岩としたと推測する。

②作業面の設定

準備された頁岩の形態や作業面との位置関係から表皮部分の礫面除去により、打面部が決定する。作業面をどこに設定するか意識が先行している感がある。

③石核の調整加工

礫面部の除去や打面の調整剥離など、意図的な剥離準備が行われている。打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への調整剥離も施される。

④目的剥片生産

作業面と打面の相対的な位置関係は一定しつつも、効率や能率性から打面が転移する。そのため、目的剥片の剥離の連続性にも限りがある。(接合資料3)

石刃の生産を目的としているものの強い規制や技能は把握できず、縦長剥片との区別が明確でない資料も多い。

⑤作業面・打面の調整

剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

⑥転移・再生

接合資料からは打面の転移が煩雑に確認される。

⑦廃棄

残核が廃棄されていることは、搬入から廃棄までの行為が一貫しており、かつ比較的短い期間で生産活動がなされたと思われる。

製作された石器

第1文化層出土の「石器」としては、図36に示した尖頭器やナイフ形石器、搔器などがあげられる。石器素材の生産として石刃を製作する技術が整っており、ナイフ形石器や搔器の素材となっている。また、尖頭器の大きさや形態をみると片面加工の小型の尖頭器は、新潟県真人原遺跡などからまとまった検出例が報告されており(小野 昭他 2003)、素材の生産となる剥片生産技術にも類似する部分があるようである。また、ナイフ形石器は、尖頭器とナイフ形石器の系

譜上に位置するとみられ、石器群の構成から西川町上野A遺跡や小国町平林遺跡等との関連が指摘される。

第2文化層 (図42)

頁岩製の石器が22点出土した。中でも石刃がまとまっており、第40図に示したように、すべて表面の摩滅したものである。第40図48などは縦長で湾曲しており、単設打面と思われる連続した剥離面を残している。長幅比が一定しており、時期的技術的に共通性が感じられる。また、どの石刃も刃部のガジリが激しく、砂礫中での二次的な影響によるものだろう。

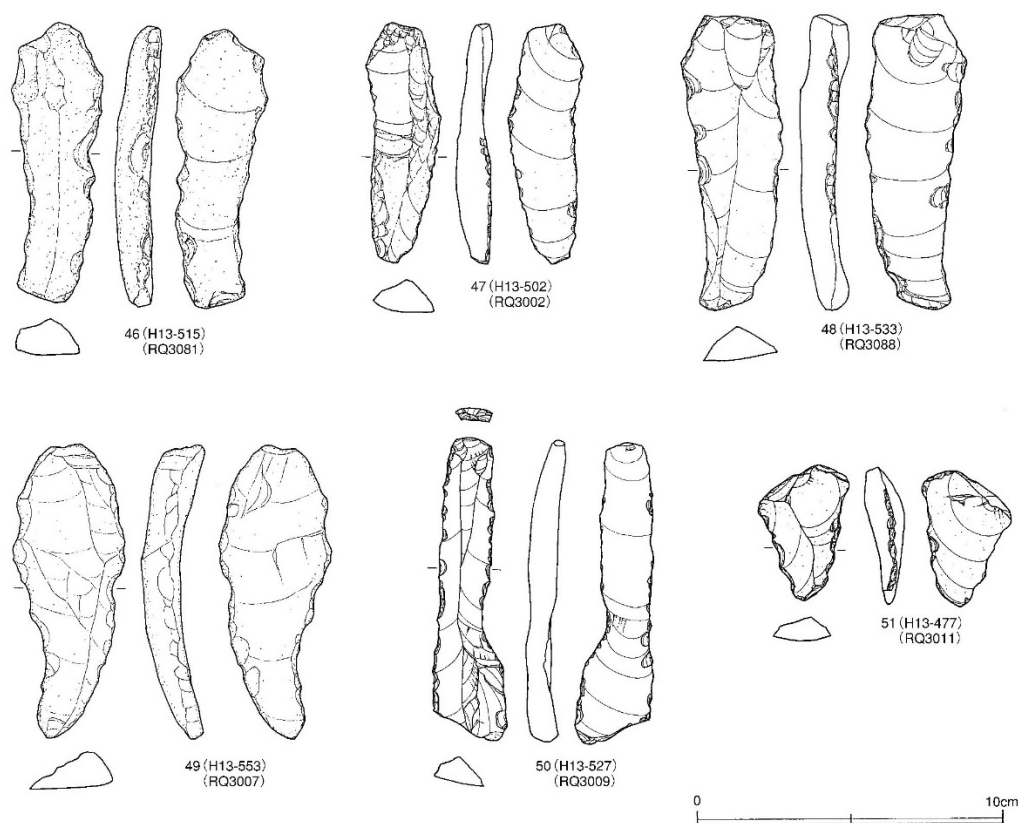


図42 1期1区第2文化層の石器

第3文化層 (図43)

石器や石片を66点検出した。いずれも表面が摩滅しており、疑わしいものも含まれているため、人工のものと思われるものを図示した。第42図52~54は石刃と見られ、52は稜付き石刃とみられる。61は原石に打ち欠いたような剥離痕が認められるが自然の営力による剥落痕の可能性はある。

第2文化層の石刃石器群のグループと両者の型式学的な検討からは判別がむずかしく、層位的な上下関係によって区別しておいた。

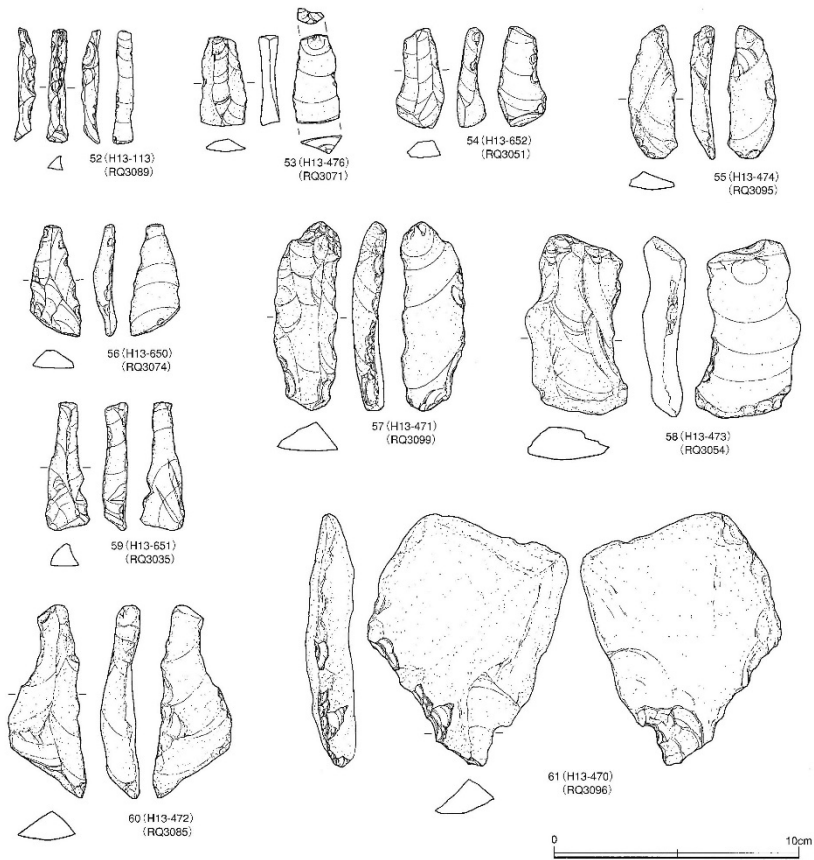


図43 1期1区第3文化層の石器

集中区以外の石器(図44)

集中区以外でも1期調査区では旧石器が出土した。

62は石核である。上向方向からの石刃状剥片の剥離痕と下方からの1枚の剥離痕が認められる。裏面は自然面である。

63は片面加工の尖頭器である。左側縁先端部と右側縁に細かいリタッチがある。

64は左側縁全体にリタッチがある。

1区検出の旧石器ブロックについて

第1文化層の遺物については分布や組成から石器の製作の場であると

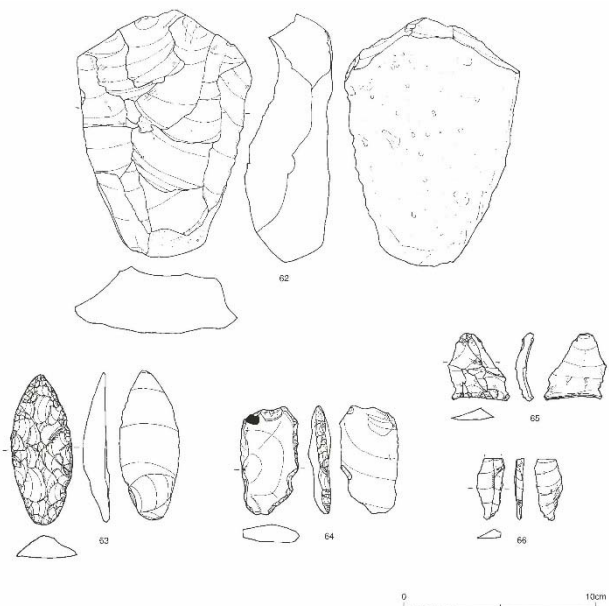


図44 1期1区調査区集中区以外の石器

思われる。大型の剥片や礫面を持つ資料が多いことから、原石の搬入後の一次処理の段階から行われているものと見られる。完成された石器が少ないことから、製作された石器の大半は調査区外に持ち運ばれたと考えられる。また単一のブロックを成しているものの、微視的には幾つかの小さい集中域を持つことは時間的に長期にわたる作業場と考えられる。ここから西側 30mほどの地点から、寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の石器製作のブロックが2カ所発見されている(寒河江市教育委員会 1987)。ここでは搔器といくつかの接合資料が得られており、剥片生産の状況など類似する部分がみとめられ、やや地点が離れているものの1つの石器文化を構成する可能性を指摘しておく。

第2文化層の石器群については石刃石器群のグループとしてまとまっており、移動しているものの技術的に類似したグループの所産と考えた。打面の転移を示す資料は少なく、連続的に剥離取得した状況を示唆する。第3文化層の石器群は、摩滅しながらも形態的には石刃石器群のグループとして理解されよう。ただ、組成や技術的な部分での特徴ははっきりせず、第2文化層の石器群との区分も明確にできなかった。

6 区の旧石器

6 区旧石器出土地点の層序 (図 45)

6 区の調査区がのる高瀬山東側の段丘面は、地形区分 4 面に相当する(阿古島 功 1997)。

高瀬山周辺で旧石器時代の遺物が段丘堆積層に含まれるのは、高瀬山の標高 112m、最上川との比高 20mの区域にあたり、高瀬山の西に位置する金谷原遺跡(3+面)は、より低位の段丘面に相当し比高が 18mの地点である。6 区付近はさくらんぼやりんごの果樹地になっていたが、以前は桑畑や雑木林だったことがあり、倒木や抜根の跡がいたる所で認められた。一部の奈良・平安時代から縄文時代の遺構は倒木などで攪乱される場合があり、さらに根の広がり、旧石器時代の包含層にも達している。

旧石器時代の石器群の層位的な包含位置を把握するため旧石器時代のブロックが検出されたグリッドの西側の壁面を掘り下げ、地層の状況を観察した。この掘り下げカ所の南西壁断面における観察結果をもとにした基本層序は以下のとおりである。発掘境界線は、地表下 1 m30cm である。段丘礫層までは、さらに約 2 mの堆積がある。

- I 層 耕作土
- II 層 黒色土
- III 層 漸移層
- IV 層 明褐色風化火山灰層
- V 層 明褐灰色粘土質シルト層
- VI 層 黄褐色粘土質シルト層

以上の堆積層のうち、I～IV層が遺物包含層である。

I～III層からは平安時代の土器から縄文時代の土器・石

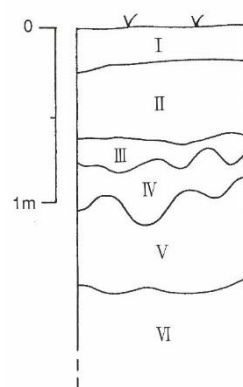
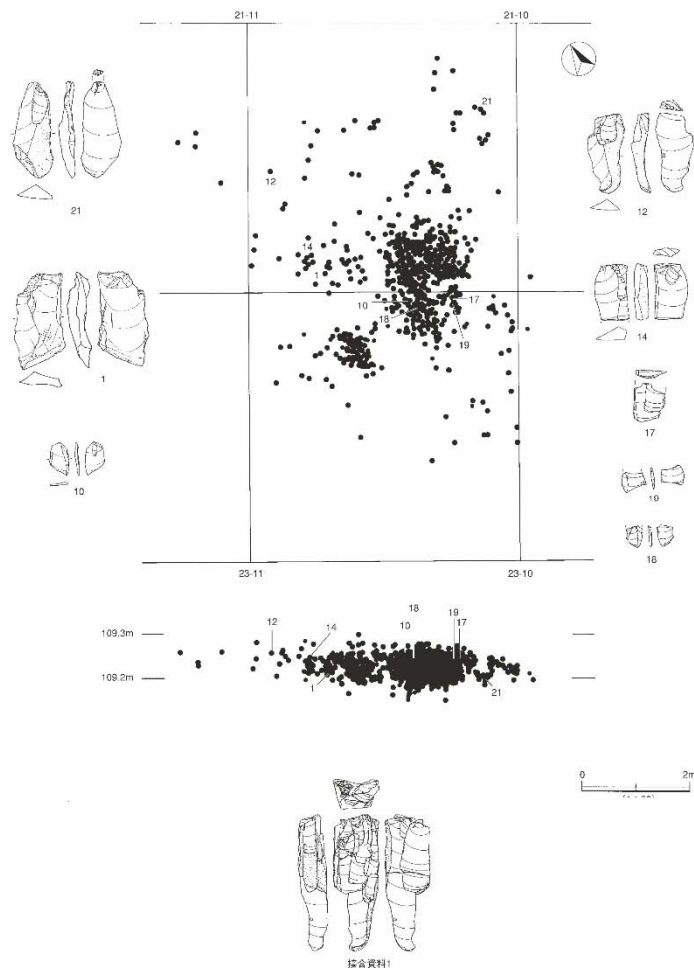


図45 1期6区の土層柱状図

器が出土する。旧石器時代の遺物は、これらⅠ～Ⅲ層の層準からも出土するが、耕作や根の攪乱などによる浮き上がりであり、本来の包含層はⅣ層中にある。石器群はⅢ層下部からまとまった出土を見せ始め、Ⅳ層中に集中して出土する。Ⅳ層に当時の生活面があると判断できる。Ⅴ層以下は無遺物層である。シルト層や砂層の下は砂礫層に到達する。Ⅰ～Ⅳ層は風成層、Ⅴ層以下は水成層と考えられ、水成層から風成層へ移行するⅤ層の上部は水平堆積ではなく、凹凸が多い。

旧石器時代遺物の分布 (図 46)

石器群の分布は6区の南東コーナーに位置し、全体として楕円形の状況を示す。



石器
ックと

図46 1期6区の旧石器平面・垂直区分布図

群ブロ
しては

1カ所の確認となった。このブロックは長径6m、短径4mを測る。東側は古墳の周溝に削平されており、ブロック全体はもう少し東側にも広がっていたものと考えられる。Ⅲ層以下、層位と分布の広がりをおぼろげながら慎重に掘り下げを行った。掘り下げ調査時の所見は以下のとおりである。

Ⅲ層→Ⅰ層の表土や耕作土の掘り下げによって、旧石器時代の遺物の存在が注目され、Ⅲ層から出土位置を記録しつつ取り上げに入った。径5mの範囲に出土地点が集中することが判明、中心部に大きめの剥片の出土が認められた。

Ⅳ層→Ⅳ層上部に径6mほどの分布の広がりを見せたのを境に徐々に、集中域が縮小していった。Ⅳ層上～中位に石刃核が直立した状況で出土し、あわせて石刃や剥片類が集中した。

集中域は大きく一つのブロックとして認識したものの、南西部分に小さな集中部分も確認でき、何回かの活動の痕跡と捉えられよう。

層位的な分布の傾向として、遺物の垂直分布からブロックの中心部を基準にレンズ状に分布していることが窺えた。全体的に碎片などは上下に拡散した状況をみせ、30g以上の剥片は相対的な差異は少なく、集中した状況を見せている。(中沢祐一 2000)によれば、3～10gの資料が相対的に拡散しやすく、安定するのは33g以上の資料だという。「生活面」の認定については遺物重量のみを基準とすることはできないが、少なくとも軽量の遺物の垂直方向への拡散と比較的安定している重量のある資料群があるならば大型の剥片類が集中して遺存するレベルを生活面認定の一つの目安になるとみている。高瀬山遺跡1期6区の旧石器時代石器群ブロックでは比較的大型剥片類の集中したレベルからⅣ層中位レベルを生活面と捉えておく。

石器群の概要

6区の旧石器時代のブロックの石器の組成は石核、石刃、剥片、碎片などで、明確に利器としての石器は確認できなかった。これらの石器の石材については、すべて頁岩であり、同一母岩と思われる資料が多い。以下、各石器の概要を述べる。

① 石核

石核は1点出土している。剥片と接合したものもある。図49-20は石刃を生産した石核とみられる。正面を中心に剥離作業が行われ、5枚の石刃の剥離痕が残る。側面・背面には表皮の除去の痕跡が看守される。最終的に石核の打面再生剥離後に廃棄されたとみられる。

② 石刃状剥片

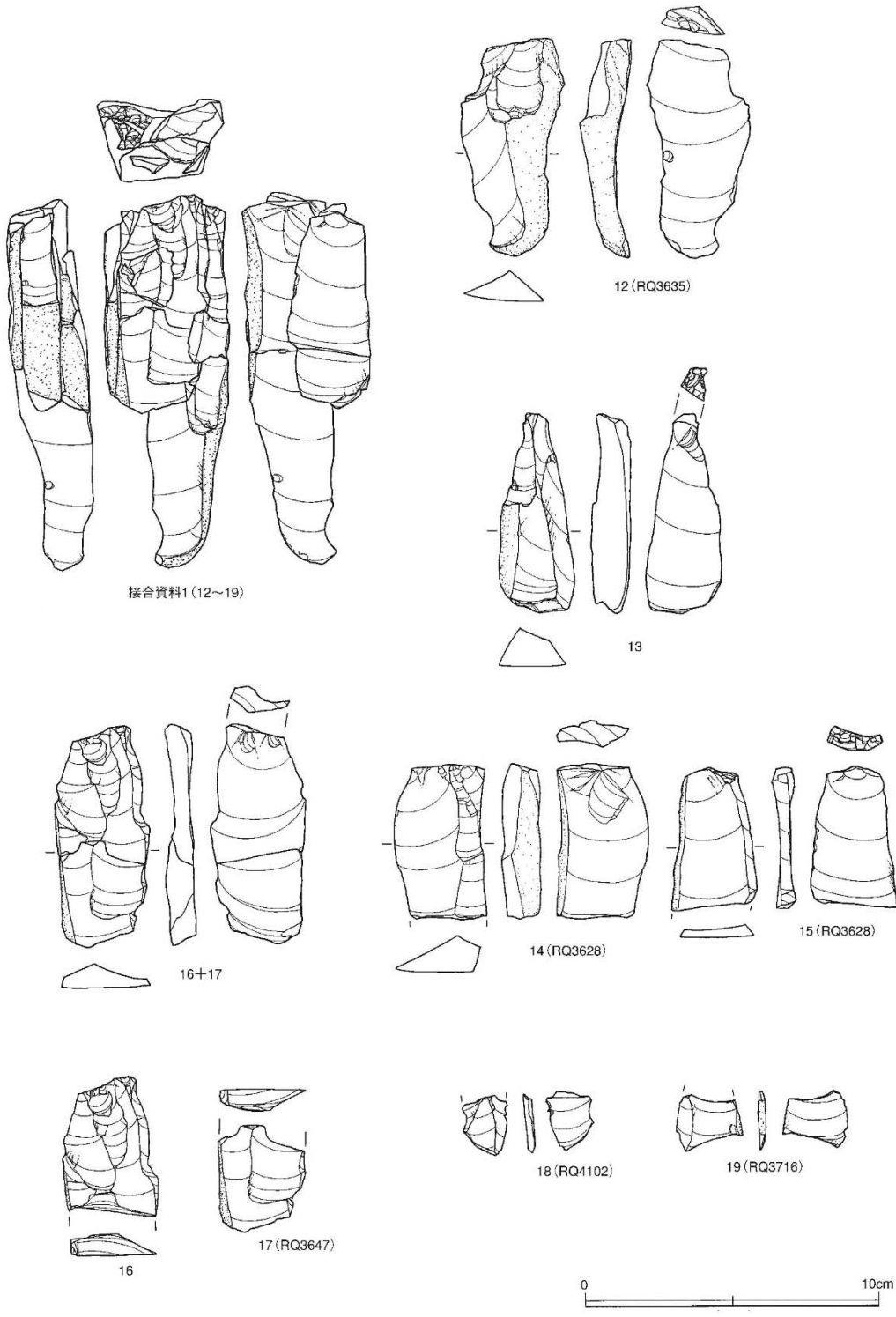
比較的縦長の形状で先端部分は、尖頭状のものが多いが、自然面や平縁のものもある。大きさは10cm前後の資料が大半で、もともとの石刃核の作業面長の範囲内での広がりとおぼろげに捉えられる。ブロック全体での割合は少なく、多くは持ち去られたと推測される。

③ 剥片・碎片

剥片・碎片は約725点出土している。石刃生産において派生した様々な石片類とみている。ブロックの中心付近には、細かい碎片がとくに密集しており、二次加工によるチップ類も含まれていると思われる。



図47 1期6区の石器〈1〉



接合資料1 (12~19)

図48 1期6区の石器〈2〉

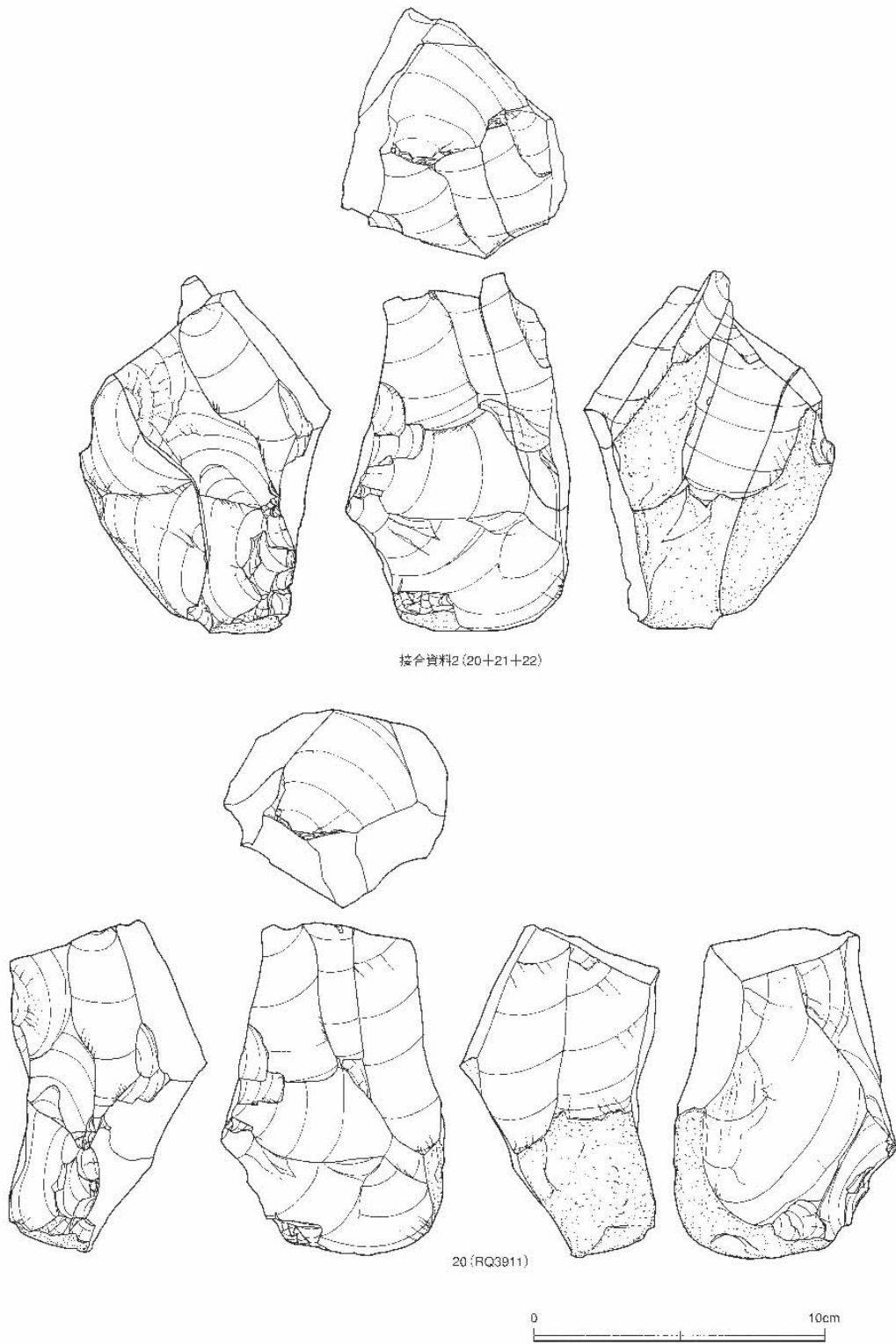


図49 1期6区の石器〈3〉

接合した資料について

出土した石器類の接合関係の観察から、2個体別資料の接合関係を確認している。

① 接合資料1 (図48)

当資料は合計8点の石器が接合した。総重量は90g、長さ12cmをはかる。復元された接合資料は石核が準備され、目的とする石刃がある程度剥離され進行した状況みせるもので、左右の側面に礫面を残している。作業面となった部分は幅が狭く、もともとの石核は幅狭く縦に長いものだったと思われる。残核は検出されておらず、最終的な石核の状態は確認できない。ブロック内に同一母岩と思われる剥片碎片がいくつか認められ、接合作業を試みたが接合するまでにはいかなかった。石核の作業面調整剥片や打面調整剥片とみている。接合した石刃は最長で7cm、短いもので2cmを測る。礫面を残し、かつ折れなどの現象から利器として選択されなかったものと考えられる。打点の動きから素材の稜部分を考慮しながら打面を左右に移動していることが看取できる。

② 接合資料2 (図49)

当資料は合計3点の石器が接合した。総重量は680g、長さ11cmをはかる。復元された接合資料は石核から目的とする石刃がある程度剥離され打面再生が行われた状況みせるもので、左右の側面や底面に礫面を残している。作業面となった部分(正面左右)は幅6cmを測り、3枚の剥離痕が確認できる。接合した資料(第49図-21)は作業面の調整とみられ、第49図の22は石核底部の調整剥片と見られる。この石核と同一母岩の資料はいくつかあるものの接合を確かめられたのは2点のみである。

石刃生産技術について

一般に石器の生産工程は石核の準備→作業面・打面の設定→作業面調整→目的剥片の剥取→作業面・打面調整・再生転移→目的剥片の剥取……残核のような段階を経て行われる。接合資料や剥片類から石器生産の工程とその技術を整理するならば、以下のようにまとめられる。

① 石材石核の準備

石材となった頁岩は高瀬山周辺では、最上川河床や周辺の路頭から容易に採集できる。

接合資料1はやや扁平な円礫を、接合資料2はどんぐり形の頁岩と推測する。

② 打面作業面の設定

準備された頁岩の形態から帽子状の突端部分の剥取により、打面部・底部・作業面が決定する。

③ 石核の調整加工

作業面には横方向からの剥離により礫面除去がなされ、節理などの位置なども勘案して作業の設定を行っている。

打面は周辺からの調整加工から形成し、打面から作業面への部分的な調整剥離も施される。

④ 目的剥片生産

作業面と打面の相対的な位置関係は一定し、打点は左右に移動し後退していく。

石刃の生産を目的としている。

⑤ 作業面・打面の調整

剥離ミスや打角の補正にともない、再調整が行われる。

⑥ 転移・再生

接合資料からは打面の転移は確認できなかったが、打面の再生は行われている。

⑦廃棄

残核の大きさからは、十分に作業継続が可能と考えられるものが廃棄されていると思われた。しかし、ブロック中央に見られたことは、搬入から廃棄までの行為が一貫しておりかつ、比較的短い期間で生産活動がなされたと見られる。

二次加工や製作された石器については、完成した製品としての「石器」が検出しておらず詳細は不明であるが、石刃素材の石器が作られたと考えられる。

旧石器時代の石器ブロックの性格

遺物の分布や組成から石器の製作の場であることは間違いないと思われる。しかも母岩数が少なく、母岩1と母岩2の個体資料が大半であること、大型の剥片や礫面を持つ資料が少ないことから、原石の一次処理が終わった段階で、持ち込まれたものと見られる。さらに完成された石器が遺存していないことから、製作された石器は他の生活の場に持ち運ばれたと考えられる。また単一のブロックを成し、周囲からはブロックの検出が見られなかったことは、時間的にも短期間に利用された場・区域と考えたい。

ここから北側 50mほどの地点から、平成 12 年寒河江市教育委員会の調査で、旧石器時代の尖頭器製作のブロックの一部が発見されている。さらに北側には、1980 年に山形県教育委員会により、尖頭器や搔器などの石器群のブロックを検出している。高瀬山の東側段丘縁辺にそって旧石器時代の遺物が広く散在することが推測されてくる。6区で検出した旧石器時代の石器ブロックは、標準となる石器の出土はなかったものの、石刃の生産や調整剥片・碎片の多さから石器類の素材生産、さらに器体の調整加工の行われた「場」と捉えることができよう。

5 高瀬山遺跡HO3 期調査区出土旧石器

1 調査に至る経緯

高瀬山遺跡は、旧石器時代～中世にわたる複合遺跡で、約 90ha に及ぶ県内屈指の規模を誇っている。1989 年には東北横断自動車道（山形道）の建設計画に伴って、山形県により寒河江・大江・西川地区の分布調査が行われた。これにより高瀬山遺跡は高瀬山遺跡群として、現状の東西 1600 m・南北 600mの範囲に大きく修正されることとなった。その後、1994～1997 年にかけて高速道路建設事業に係る大規模な発掘調査が山形県埋蔵文化財センターによって実施された。調査面積約 15ha の広範囲に及ぶことから、調査区域は高瀬山遺跡 1 期・高瀬山遺跡 2 期・高瀬山遺跡 S A（サーブスエリア地区）の 3 地区に分かれている。併せて調査が行われた三条遺跡・落衣長者屋敷遺跡も、高瀬山遺跡と一連の遺跡群として捉えることができる。

高速道路のサーブスエリア周辺では、今回の調査原因となった最上川ふるさと総合公園整備事業が計画された。遺跡範囲に含まれる全体面積 28.9ha について、平成 7～23 年度の期間で整備が進められてきた。平成 14 年度までに県道天童寒河江線の西側約 17.1ha の供用が行われ、会場となった第 19 回全国都市緑化やまがたフェアでは期間中に約 73 万人が訪れた。その後も、

寒河江市主催の花咲かフェアが毎年6月頃に開催されており、約28万人の来場者で賑わっている。残りの県道から東側の「歴史の丘」区域については、平成15年度から住民とのワークショップを重ねつつ、住民参加型の公園づくりを行っている。2008年4月までにコミュニティー広場・スケートパーク・ドッグランの供用を開始し、供用面積は合計20.9haとなっている。公園整備事業に伴う発掘調査は、事業主体である山形県土木部（現県土整備部）からの委託を受け、同センターが実施してきた。1997～2001年には県道を挟んだ西側約9haの範囲を対象として、高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査が実施された。なお、「HO」地区の名称は、同事業の旧称「ハイウェイ・オアシス」事業に由来する。2004・2005年には県道東側を対象とする高瀬山遺跡（HO）2期発掘調査が実施され、高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査へと引き続いている。以下に、その経緯や分布調査の経過について詳述する。

2002～2008年にかけて、県教育委員会は公園東側の整備事業に係る分布調査を実施している。2002年4月には試掘坑19か所（面積23㎡）の試掘調査を行い、縄文時代と奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した。2003年10月には面積160㎡の試掘調査を行い、平安時代の須恵器が出土した。翌11・12月には事業区内に所在する高瀬山古墳の現地確認・試掘調査が行われた。古墳の範囲確認のため、外周に向けて放射状に試掘トレンチ8か所（面積116㎡）を設定した。調査の結果、外径約34mの円形に廻る周溝が検出された。2007年4月～2008年2月には、果樹移植や植栽、給排水など公園設備の埋設工事に伴う立会調査が実施された。計9次にわたる調査は、実働29日間・総面積約1,188㎡に及び、縄文時代と平安時代に属する遺構・遺物を中心として、まとまった成果が得られている。これらの分布調査の結果、記録保存調査による対応が必要との判断がなされたことにより、2008年からは同センターによる高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査が、3か年にわたり実施されることとなった。

2 発掘調査の経過

高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査は平成20～22年度の第1～3次にわたって実施された。総面積3,780㎡で、調査日数は実働139日間を要した。なお、調査区や調査工程などの都合により、一般対象の現地調査説明会は行っていない。また、遺構図の記録にあたっては、写真測量によるオルソ画像の作成とデジタルトレースを外部に委託して行った。以下に、調査年次ごとの経過について概略を記しておく（第3次調査のみ記載）

第3次調査

2010年6月1日～8月18日（実働57日間）の期間で、面積1,500㎡の調査を実施した（図50）。工事工程との調整により調査区を大きく前半と後半の2つに分け、工事用道路のかからない東側の調査区から調査を開始した。なお、J13トレンチについては、事業側による残土除去と雑木伐採が完了してからの実施となる。また、活断層調査に係るK区では、段丘斜面を縦断する4本のテストトレンチを設定し、断層範囲の確認を行った。6月中旬、工事工程の都合により、遺構検出まででJ区の前半部分の調査を中断し、植栽が行われるI区の調査に移行する。6月中旬にI区とK区のテストトレンチの調査を終了し、遺構精査からJ区の調査を再開する。6月末、事業側にI区を引き渡すとともに、山形大学山野井徹名誉教授を交え、今後のK区の面調査等の進め方について現地協議を行う。7月上旬、調査と併行して進められていた公園工事が完了し、

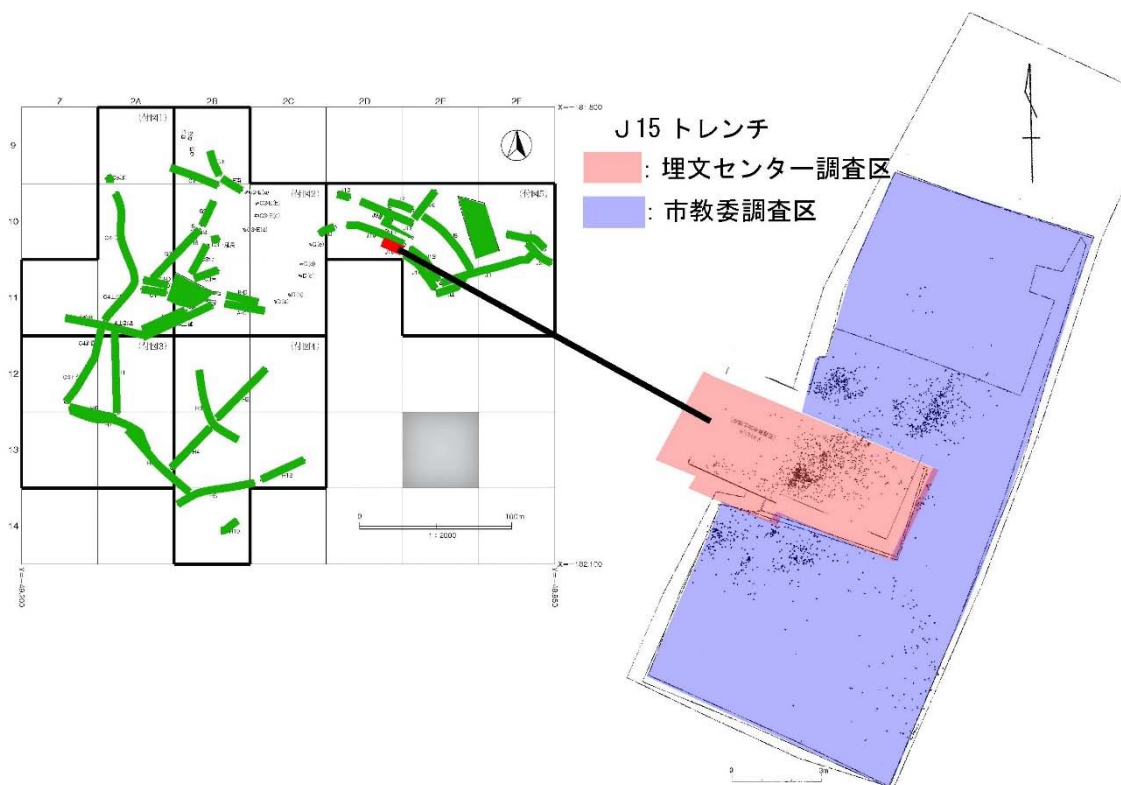


図 50 HO 3期調査区配置図・旧石器分布図（市教委調査分合成）

工事用道路の引き渡しを受ける。J 区の前半部分の調査終了とともに、7月中旬からはJ 区の西側の後半部分の調査に移行する。7月下旬、K 区の調査範囲がほぼ全域にわたる面積 600 m²に決定し、重機による表土掘削から開始した。また、J 15 トレンチにおいて、地山の表層から多量の石器剥片・碎片を出土する石器集中出土地点を検出した。調査の終盤において想定外の作業量が見込まれる状況となったことから、事業側と協議した結果、全体的な調査は予定通り終了するが、石器集中出土地点の調査と埋め戻しについては、一部期間を延長して実施することで調整が図られた。8月上旬、K 区の面調査は遺構検出までで終了し、8月5日に山形大学山野井名誉教授による高瀬山活断層地形見学会（参加約 50 名）が現地で開催された。

3 調査区の立地と層序

高瀬山遺跡（HO）3期の調査区は、寒河江市街の南西、寒河江市大字寒河江字高瀬山に所在する。広大な遺跡範囲の東端にあたり、最上川左岸（標高 90.1 m）に面した段丘崖と高瀬山（標高 122.5 m）西麓の中位段丘面（標高 113.4 m）に立地する。以前は、湿地帯が広がっていた荒蕪地を開墾し、畑地や果樹園として利用されていたが、現況は公園造成地となっている。

基本層序

第1次調査で各トレンチの端に設定したサブトレンチから、調査区の特徴的な土層を示す2地点（C 3北延長トレンチ東壁・C 3南トレンチ東壁）の土層断面図（第5図）を抽出した。調査区における基本層序は、大別して、以下の4層にまとめることができる。



C3北延長トレンチ東壁 a-a' (付図2)

- I. 7.5YR4/1 褐灰色シルト～粗砂 拳大の碎石を多く含む。(盛土)
- II. 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物を少し含む。
- III. 5YR3/1 黒褐色シルト 炭化物を少し含む。
- IV. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (地山)

C3南トレンチ東壁 b-b' (付図2)

- I. 7.5YR3/1 黒褐色シルト～粗砂 1～5cm 大の碎石を含む。(盛土)
- II. 5YR3/1 黒褐色シルト
- III. 5YR2/1 黒褐色粘土質シルト
- IV. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (地山)



図51 H O 3 期 3 次調査区土層柱状図

- I層：褐灰色・黒褐色シルト～粗砂（工事盛土による碎石層）
- II層：黒褐色シルト（畑地・果樹園の耕作土層）
- III層：黒褐色・黒色粘土質シルト（黒ボク土層 縄文～平安時代の遺物包含層）
- IV層：にぶい黄褐色シルト（地山 旧石器時代の遺物包含層）

I層は公園工事に伴う人為的な盛土である。重機の転圧で硬くしまる。II層は本来の表土であり、畑地や果樹園を開墾した際の耕作土である。下層の黒ボク土層に比べてやや褐色を呈し、その境目は波状に攪拌された状況が認められた。III層は腐植質の所謂黒ボク土層で、やや粘性がある。第2・3次調査区では黒色を呈し、層厚の厚い箇所が認められる。G3トレンチの埋設土器（EU 211）の包含状況やK区の活断層に係る年代測定の結果から、縄文時代早期以降の生活面は黒ボク土層の中～上位に位置するものと推定される。IV層は褐色ローム質土の所謂地山である。最上川に面する段丘崖に位置するA斜面トレンチ（付図1）では、河川堆積とみられる砂礫層になっている。調査では、IV層上面を遺構検出面としており、現地表面からの深さは両トレンチにおいて130cm前後を測る。J15トレンチでは、地山（ローム層）上位の約30～40cmの範囲で後期旧石器時代に属する石器群が出土している。

4 J 15 出土旧石器資料

(1) 概要と方法

J15トレンチテストピットでは、3層中部を中心として、2,823点の珪質頁岩製旧石器がまとまって出土している（以下、J15出土旧石器資料）。ここでは、このJ15出土旧石器資料について記述を行う。一括性 またJ15出土旧石器資料のなかには、褐鉄が付着する鉄製工具による接触痕を留め、かつ風化度が浅い1点の剥片（852）を除いて、型式学的に、あるいは風化度の浅い石器といった、縄文時代などの他の時期の所産と考えられる石器はまったく認められ

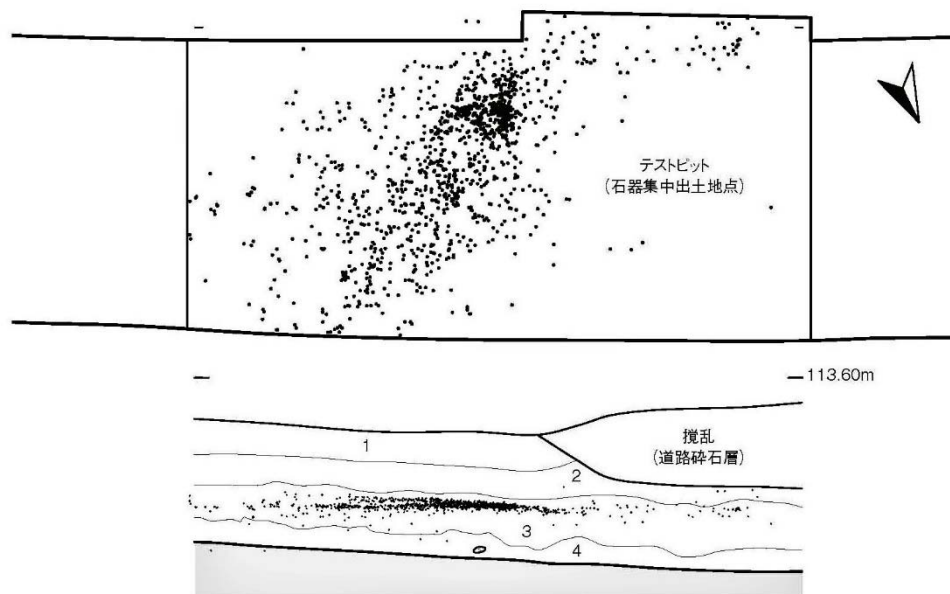
ない。つまり石器群は他の時期の石器が混入した形跡もなく、時期的に限定される一括性の高い資料群であると考えられる。

分析方法 資料整理に際しては、このJ 15 出土旧石器資料について、第4節のSX 241 出土石器資料と同様に、動作連鎖の概念に基づく技術学（Tixier1967、山中 2007）に依っている。

出土層位と出土状態 石器ブロックは、3層の黄褐色粘土質シルト層より出土し3層中部を中心に濃密な出土状況を示す。一部で埋没後に生じた浮き上がりや、後世の耕作などによる土地改変、果樹などの植物の根の成長による土壌の動きの影響を若干受けている。しかし、分布が濃密な3層中～下部付近から出土した石器の大多数は、面的に出土していること、背面や腹面等の平坦な面が層理面と並行的である、すなわち“自然な状態”であること、ほとんどの石器の薄い縁辺や先端部に微細剥離痕や転磨痕といったダメージがないこと、土層中に流水を示す砂礫などの堆積物が目立って認められないことから、ブロックが形成された当時の原位置に近く留めている可能性が高い。

平面分布（図

52） J 15 トレンチのうち、旧石器が出土したトレンチの中央から西寄り、南北約 1.7 m ×東西約 3.5 mのテストピットを設定。石器ブロックは、北東～南西方向で約 3 m× 1.5 mの範囲に集中し、その中でもとくに南側に密集してい



J15トレンチ南壁(テストピット)

1. 10YR2/2黒褐色シルト ややしまりなし。(表土)
2. 10YR2/2黒褐色粘土質シルト 10YR5/6シルトを粒状にやや多く含む。 ややしまりなし。木根による攪乱が目立つ。(地山への漸移層か)
3. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト しまりあり。
4. 10YR5/4に黄褐色シルト質細砂 しまりあり。下部に褐鉄分の集積が見られる。

図52 J15遺物分布図

る。またブロックの西側には、飛び地的な石器分布がみられる。

今回の調査では、事業範囲の関係で調査範囲が限られており、調査区を拡張することができなかったため、今回検出した石器ブロックは、本来のブロックのなかの一部分であることが容易に想定される。2011年5月、資料の重要性に注目した寒河江市教育委員会は、高瀬山遺跡発掘調査団を結成し、この石器分布の全体を把握することを目的とした、当該地点の学術調査を実施している（寒河江市教委 2012）。この調査区の出土状況を合成したのが図 50 である。

(2) 原石と母岩

原石 原石は、すべて珪質頁岩である。自然面の状態から判断される原石形状は、自然面が認められる母岩から、少なくとも転磨によるクラックが顕著に見られ、やや凹凸感のある亜円礫、風化面がやや発達し、わずかに凹凸感のある表面形状の亜円礫、風化面が発達し、滑らかな表面形状の円礫が認められる。選択された大きさは、9～15cm 大。いずれも、自然面の状態から、近隣の河川、あるいは段丘礫層からの採取が考えられる。

母岩 J 15 出土旧石器資料は、石質、色調、粒子の粗細、自然面の状態、節理や潜在割れの有無とその状態、接合関係などを基準に、子細な観察を行い母岩別分類を行っている。その結果、P 1～P 34 (P 21 は欠番) までの 33 母岩が認められる。上述したように、単独母岩の P 34 は、新しい時期のものであると考えられる。したがって、分析では、P 34 を除く、上記の基準で分類できた 32 母岩を基本として進めている。

ただし、ブロックの完掘には至っていないので、欠落している部分が多い。32 に分類できたとあっても、まだ1つの母岩の一部分を覗いているに過ぎないかもしれないし、未発見の母岩が存在する可能性も否定できない。

搬入品 一方で、分類の結果、P 6 は双面彫刻刀形石器 1 点と神山型彫刻刀形石器ブランク 1 点のみで構成され、そのほかの石刃や剥片などは認められない。そのた、P 6 は、本地点で製作されていない可能性が高い。したがって、P 6 は、他所で製作され、製品として本地点に持ち込まれた搬入品であることが考えられる。

(3) ツール (図 53・54)

石器組成 (図) J 15 出土旧石器資料の石器組成は、杉久保型ナイフ形石器 4 点 (ほぼ完形が 2 点、先端部のみが 1 点、基部のみが 1 点)、裏細部調整切り面彫刻刀形石器 6 点 (典型的な神山型彫刻刀形石器 1 点、彫刀面を作出していないブランク 4 点)、細部調整切り面彫刻刀形石器 (小坂型彫刻刀形石器) 2 点、双面彫刻刀形石器 1 点、無調整面彫刻刀形石器 3 点、彫刻刀スポール 41 点 (そのうち、神山型彫刻刀のスポールも含まれる)、細石刃 21 点、石刃 118 点 (稜付き石刃なども含む)、剥片 798 点、チップ 1,635 点 (抽出できた二次加工チップ 13 点)、石刃核 7 点、石刃核ブランク 1 点、石核 1 点 (素材生産の石核ではなく、一打で内部の節理や潜在割れに響き、破碎したもの)、原石 1 点 (ただし、試し割りと考えられる 1 面の剥離痕あり)、被熱痕を有する石器 184 点、石英安山岩製ハンマーストーン 1 点 (珪質頁岩よりもやや軟質)。このほか、石器に付着するように出土した炭化物 1 点、自然礫 10 点も出土している。

ナイフ形石器 551 は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。細身で薄手で、やや湾曲する先細りの石刃を素材とする。基部側の左右に裏面側からのブランディングを施し、基部の縁辺角を急角度に仕上げている。さらに、素材腹面のバルブ付近を基部側の左右両側縁から剥離。バルブ除去は、左右両縁辺付近が崩れていること、6mm 程度の狭い範囲を打撃することを考慮すると、両極打撃であった可能性がある。なお、ブランディングに際しても、ブランディング面が急角度であること、一部のブランディング剥離面の末端にごく薄いヒンジが認められることから、台上での加工の可能性はある。先端側は未加工であるが、最先端部は表面側から折れている (曲げ折

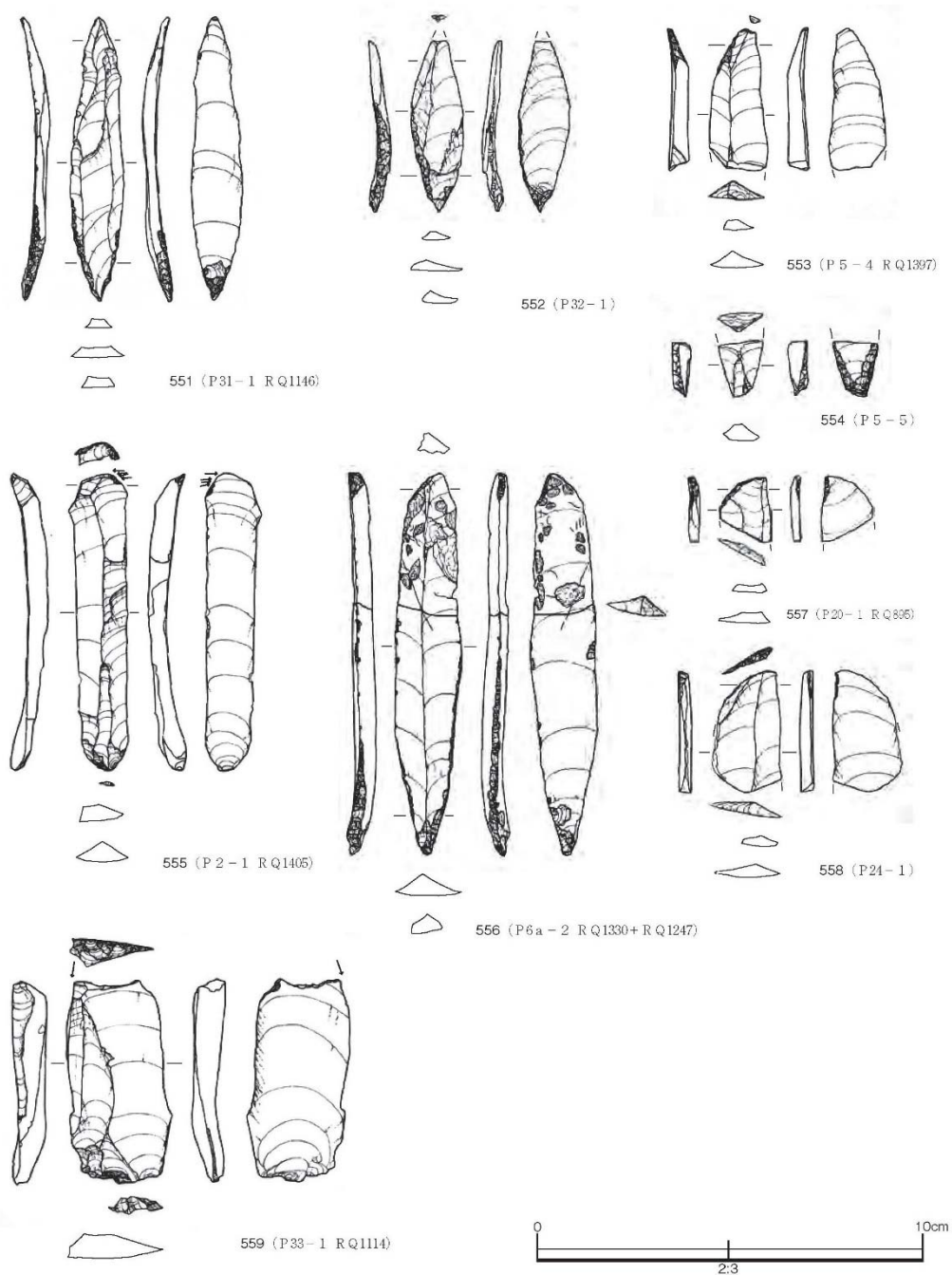


図53 HO3期石器実測図1

り)。表面側左側縁は、不連続であるが全体的に微細剥離痕が認められる。552 は、典型的な杉久保型ナイフ形石器である。背面が縦2稜、細身で、やや短めで先細りの石刃を素材とする。両側縁の中央付近から基部にかけてブランディングが施される。表面側左側縁は裏面側から、右側縁は表面側からの加工となる。さらに右側縁は、表面側の基部から上に 7.5mm の範囲に縁辺か

らの細部調整が入る。左側縁のブランディング面は、急角度となり、一部の剥離面末端にヒンジが認められる。右側縁のブランディング面は、基部付近で急角度となり、中間部付近の角度がやや浅くなる。裏面は、裏面の右側面からバルブ除去がわずかに行われる。先端側は未加工であるが、最先端部は裏面側から折れている（曲げ折り）。553 は、ナイフ形石器の欠損品である。先端部のみが残存。背面が縦1稜で、先細りの石刃を素材としていると思われる。中間部から基部にかけて欠損している。欠損面は、3面で構成され、ともに3面が重なり合う欠損面の裏面側中央付近から、リングが発生している。また、欠損面の右側の面の上部、すなわち表面側の中間部には、打点が観察される。したがって、欠損は、挟み撃ちによってなされた可能性が高い。表面の先端側左側縁に、裏面からの細部調整が施される。最先端部は裏面側から折れている（曲げ折り）。554 は、ナイフ形石器の欠損品である。基部のみが残存。素材は、背面が縦2稜、ないし中間部付近で縦1稜に収斂する石刃であったと思われる。折れ面には、石材内部に存在していた傷が認められる。裏面の左右両側縁に細部調整が施されており、とくに裏面左側縁側が急角度となる。なお、後述するが、553 と 554 は、P 5 に母岩分類され、かつ表面構成や厚さから 554 は、553 の基部であった可能性がある。

裏細部調整切り面彫刻刀形石器 555 は、典型的な神山型彫刻刀形石器である。背面が中間部付近で縦1稜に収斂する石刃を素材とし、石刃の末端に裏面から弧状に細部調整を施したのち、右方向から彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、リップ状で、バルブはあまり発達していない。前面角は、ステップを呈した微細剥離の重複によって、鈍角になっている。556 は、神山型彫刻刀形石器ブランクである。ただし、後述するが、ブランクではない可能性もある。背面が縦1稜で、末端側で2稜に分かれる細身で、比較的整った形態の石刃を素材としている。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランディングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められること、潰れない部分が触ると感じられるくらいのごく薄い突起（ヒンジ）があることから、台上での挟み撃ちの可能性が考えられる。また、右側面、すなわち細部調整の打面上から剥離開始部を見ると、強く湾曲しているのが確認できる。上部は、被熱による焼けはじけが部分的にあるために、ブランディング部がやや不明瞭である。判る範囲では、右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。彫刀面と思われる剥離面もあるが、焼けはじけにより、はっきりとしない。この資料は、そののち中間部で折れて、上半部の資料のみが被熱する。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打撃時の事故による欠損であった可能性がある。この種の折れは、彫刀面打撃時に、打面調整が適切でなかったときなど、打撃しても彫刻刀スポールが剥離されなかったときに、指で押さえていた付近で生じることがよくある。557 は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によって、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。折れ面は、割れの始まりが裏面側にあり、ブランディング時の剥離事故の可能性もある。558 は、神山型彫刻刀形石器ブランクの欠損品である。上部のみが残存。右側縁に腹面側への細部調整によ

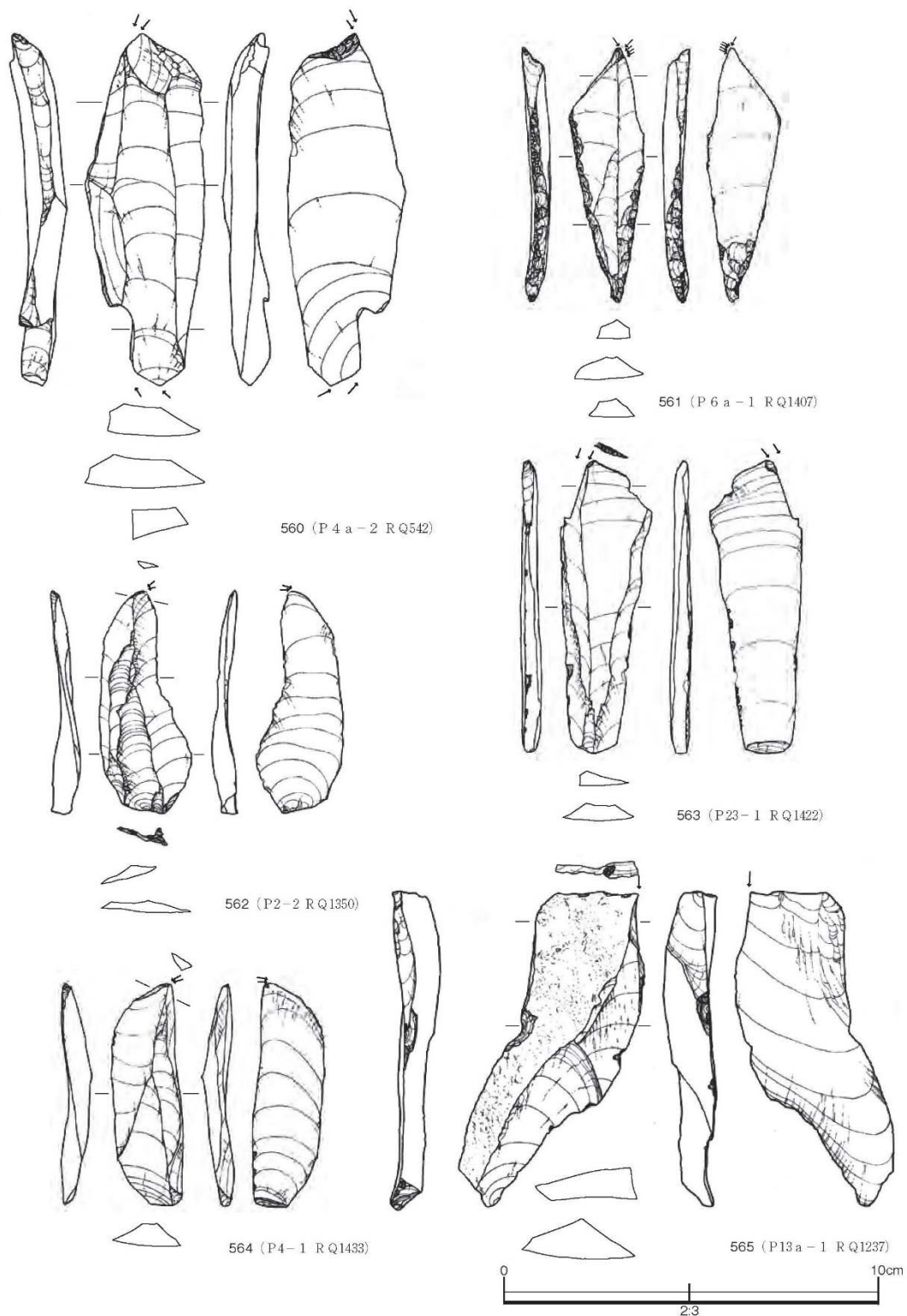


図54 HO3期石器実測図2

って、浅い弧状の縁辺が作られる。そののち、表面側左上部を弧状に、かつ急角度になるようにブランディング。折れ面の剥離方向は、予定された彫刀面打撃方向と同一方向であり、彫刀面打

撃時の事故による欠損であった可能性がある。560 は、裏細部調整切り面彫刻刀形石器である。幅広石刃の末端裏面側に浅い剥離でもって細部調整を施して、縁辺を凹形に仕上げる。その細部調整面から左側縁にかけて彫刻刀スポールを剥離。基部側にも彫刀面打撃がなされるが、基部側の彫刀面打面が欠落している。

双面彫刻刀形石器 561 は、双面彫刻刀形石器である。背面が、縦 2 稜から途中で 1 稜に収斂する石刃を素材とする。背面側基部から中間部付近まで裏面からのブランディングにより、縁辺を急角度に、平面形を尖頭状に仕上げている。基部側裏面にも、右側縁からバルブ除去の細部調整が入る。細部調整面には、左側縁の一部、すなわち細部調整の末端の一部に潰れが認められることから、台上での挟み撃ちの可能性がある。彫刀面打撃は、まず右側縁側に沿って、ついで左上にたいして、左下がりになるように、それぞれ 1 撃ずつ剥離。左上の彫刀面、すなわち新しい彫刀面の打点は、砕けているものの、幅 1.5mm 程度の凹状の窪みとして残されている。このことから、彫刀面打撃には、石製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる。

細部調整切り面彫刻刀形石器 559 は、小坂型彫刻刀形石器である。幅広石刃を素材とする。石刃の末端側を裏面から細部調整を施し、平面形が弧状で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から 1 枚程度の彫刻刀スポールを剥離。素材石刃の剥離開始部は、明瞭なコーンが認められるが、バルブは発達しない。彫刻刀面の剥離開始部は、開始部付近の砕けとともに、打面上から剥離開始部を見たときに強く湾曲しているのが確認できる。その細部調整面を打面にして、左側縁から 1 枚程度の彫刻刀スポールを剥離している。563 は、小坂型彫刻刀形石器である。背面が縦 3 稜で構成され、末端が幅広くなった石刃を素材とする。末端を裏面から細部調整を施し、平面形が直線的で、裏面と調整面が急角度になるよう仕上げている。その細部調整面を打面にして、左側縁から 2 枚程度の彫刻刀スポールを剥離。背面側の左側縁には、不連続的であるが微細剥離痕が認められる。基部は折れにより欠損している（曲げ折れか？）。

無調整面彫刻刀形石器 562 は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦 4 稜で構成され、バルブ付近で幅広くなり、中間部から急に幅が狭くなり、かつ側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の剥離開始部は、やや幅の広いコーンが認められる。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの彫刀面を作出。564 は、無調整面彫刻刀形石器であるが、裏細部切り面彫刻刀形石器の可能性もある。背面が縦 4 稜で構成され、やや幅広で厚手、側面観が大きく歪んだ石刃を素材とする。素材石刃の打面部は、折れにより欠損する。彫刀面打撃は右方向から行い、右上がりの

彫刀面を作出。565 は、無調整面彫刻刀形石器である。表面左側に大きく自然面を残し、かつ裏面の右側を縦割れにより欠損した縦長剥片を素材としている。旧打面を彫刀面打撃の打面とし、右側縁上部に裏面からの細部調整（稜調整）ののち、彫刻刀スポールを剥離。また左側縁の中央部には、裏面からの打撃により、ノッチが入る。

トウールの素材 注目されるのは、杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、無調整面彫刻刀形石器の一部は、細身で薄手の石刃を素材としている。背面が縦 1 稜、

あるいは2稜の石刃が用いられている。一方で、裏細部調整切り面彫刻刀形石器（典型的な神山型彫刻刀形石器以外のもの）、細部調整切り面彫刻刀形石器は、幅広で厚手の石刃を素材としている。背面については、縦2稜、あるいはそれ以上で、自然面が残存するものも用いられている。

杉久保型ナイフ形石器群 J 15 トレンチテストピット出土の旧石器資料は、石器組成のなかに杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器があることから、杉久保型ナイフ形石器群であると言える。本県において、まとまった杉久保型ナイフ形石器群の発掘調査は、1960年の小国町横道遺跡以来となる（加藤・佐藤 1963）。しかも、横道遺跡では資料総数が324点であるのに対し、J 15 出土旧石器資料は2,823点で、格段と数が多い。つまり、技術復原をするうえで、J 15 出土旧石器資料は、横道遺跡の石器資料よりも多くの情報をもたらすと考えられ、有効な資料であると言える。

そこで、以下にJ 15 出土旧石器資料におけるその石器製作技術についてまとめる（以下省略）。

なお、市教委調査区の石器は図55に示した。

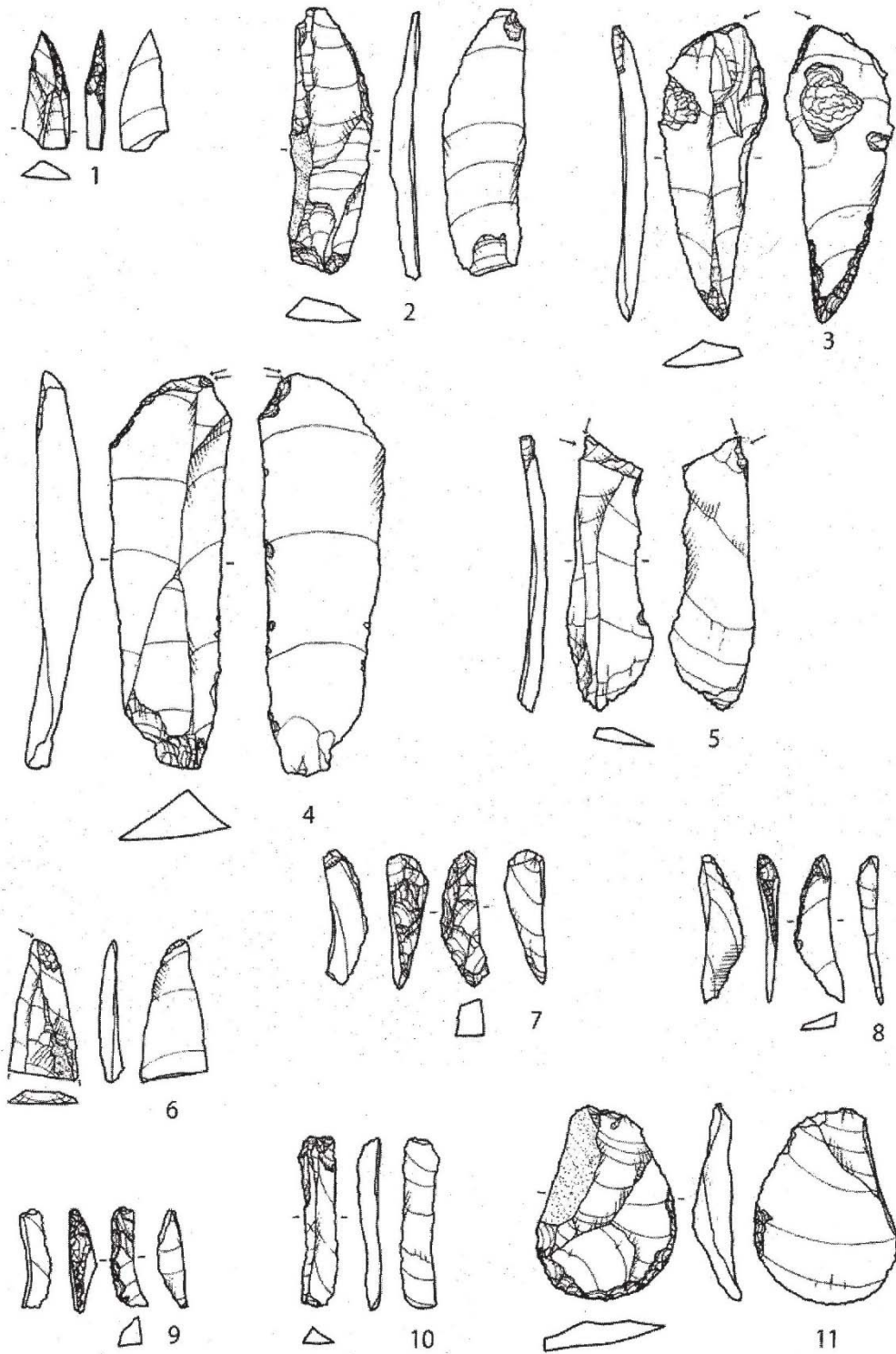
総括

J 15 出土旧石器資料

これまでの調査 本遺跡では、以前から旧石器が確認されている。ナイフ形石器・槍先形尖頭器・ホロカ型細石刃核を含む石器群（山形埋文 2004）、基部整形石器群（寒河江市教委 1987）、石刃石器群（山形埋文 2004）、槍先形尖頭器石器群（山形県教委 1982）、ホロカ型細石刃石器群（寒河江市教委 1986・2001）、縄文草創期石器群（寒河江市教委 2001）である。今回の第3次調査J 15 トレンチ発見の杉久保型ナイフ形石器群は、高瀬山遺跡において新たな発見であり、かつもっとも古い石器群である。

J 15 出土旧石器資料の年代 J 15 トレンチで石器ブロックとともに出土した炭化物のAMS年代測定の結果は、 $18,350 \pm 70\text{yrBP}$ といった、後期旧石器時代後半期の年代である（第VI章を参照）。2011年の高瀬山遺跡発掘調査団採集の土壌サンプルによるテフラ分析でも、J 15 出土旧石器資料がAT火山灰（約2.5万年前）よりも新しい結果が得られており、AMS年代値の蓋然性の高さを示している。この年代値は、高瀬山遺跡における旧石器編年に寄与するだけでなく、これまで層位的に、そして型式学的に年代的な位置づけが困難であった、小国町横道遺跡などの山形県内における杉久保型ナイフ形石器群にたいする年代的な位置づけにも、大きく貢献することになる。

最上川中流域の原産地遺跡 最上川中流の河川敷は、石器石材に適した良質の珪質頁岩の一大産地である（秦 2011）。上述のように、高瀬山遺跡として設定された範囲では、後期旧石器時代後半期から縄文時代草創期にかけての石器群が多数発見されており、最上川中流域における旧石器の密集地と言える。これらの石器群の主要な石材は珪質頁岩であり、かつ多量の石器製作が認められる。また、前述のSX 241 も含め、珪質頁岩が豊富に採取することができる石材環境が、旧石器時代から縄文時代の各時期に、高瀬山の周辺における集中的な石器製作の痕跡が残された大きな要因であったと考えられる。もちろん、単に石材環境だけではなく、多量の石器製作



- 1～2：ナイフ形石器
- 3～4：神山型彫刻刀形石器
- 5：双面彫刻刀形石器
- 6：無調整面彫刻刀形石器
- 7～10：彫刻刀スポール
- 11：エンドスクレイパー

*2は玉髄製で、それ
以外は珪質頁岩製。

図55 市教委調査区の石器実測図

を促した生業などの要因も絡んでいたものと予想される。各時期における石材環境以外の大量の石器製作を促した具体的な要因については、今後の検討課題となる。

J 15 出土旧石器資料の石刃技術 J 15 出土旧石器資料における石刃製作では、2つの方式と2つのテクニックが認められる。方式では、細身の石刃と幅広の石刃を割り出す2つの方式であり、横道遺跡の石刃技術での傾向と共通する(加藤・会田 1998)。前者は、作業面を幅の狭い面に設定し、基本的に単設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、鹿角製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。後者は、作業面を幅の広い面に設定し、両設打面で石刃を剥離していく。石刃剥離には、軟石製ハンマーによる直接打撃が用いられた可能性がある。しかし、前者でも幅広の石刃が剥離される場合もあるし、後者でも細身の石刃が剥離される場合もある。

細身石刃と幅広石刃では、ツールの使い分けがなされており、細身石刃が杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器、双面彫刻刀形石器、幅広石刃が神山型彫刻刀形石器と小坂型彫刻刀形石器となる。神山型彫刻刀形石器が細身と幅広の石刃の両方が使われているものの、ナイフ形石器と小坂型彫刻刀形石器は、その石刃素材を使い分けている傾向がある。

細石刃技術 石刃関連資料のほか、J 15 出土旧石器資料のなかには、石刃に比べて生産量は多くないが、直接打撃で剥離されたと考えられる細石刃が一定量認められる。新潟県津南町向原B遺跡(津南町教委 2005)などで発見された杉久保型ナイフ形石器群の中には、厚手の小型剥片の小口から細石刃を剥離し、細石刃から小型のナイフ形石器を製作する状況が、一定量看取される。J 15 出土旧石器資料は、小型のナイフ形石器が含まれていないものの、そうした小型のナイフ形石器を製作するための細石刃技術を有していることも予想される。

被熱石器 J 15 出土旧石器資料には、被熱した石器が含まれている。被熱した石器は、特定の器種のみで構成されるのでない。ランダムに被熱していると言える。石器ブロックの東側に被熱石器が集中し、高瀬山遺跡発掘調査団による調査でも、J 15 における被熱石器集中の隣接地に、被熱石器の密集が確認されていることから、石器ブロックの東側に隣接して炉が設けられ、その近くに散布していた石器資料が被熱したものと考えられる。

使用痕分析 使用痕分析では、676(第233図)と850(第287図)について刺突痕の可能性がわずかながらあるものの、1点の石刃(第282図-829)が何らかの切断に用いられたと判断される以外、ほかはまったく使用痕が検出されなかった(第VI章参照)。このことは、当該地点が石器使用の場ではなく、石器製作に集中した場であったことを意味していよう。また、各種の彫刻刀形石器にも使用痕が検出されなかったことは、「ツールとしての彫刻刀形石器」の意味を考える上で、一考を促すことになろう。

石器ブロックの保存性 一方で、使用痕分析により、埋没後に生じる表面変化がほとんど認められなかったことは、石器ブロックは、埋没後に二次的な移動がほとんどなかった可能性が考えられる。加えて、個々の石器資料は、大半が広い面が層理面と並行的、すなわち“寝ている状態”である。さらに、被熱した石器が狭い範囲に集中している。つまり、石器資料の表面観察、および出土状態からは、果樹等の植物根の侵入とごく一部に工作による影響を除けば、石器ブロック全体が二次移動がほとんどなかったという可能性の高さを示している。

なお、平面分布に関する詳細な分析については、今後高瀬山遺跡発掘調査団の資料とを合わせ

て進めていく必要がある。

二次移動にかんする微視的観察の有効性 なお、石器資料の微視的な表面観察は、遺物の二次移動の判定する上で、有効な方法と言えよう。遺物の二次移動の判定する方法は、クリノメーターによって出土時の遺物の走向や傾斜を測って統計を行い、統計データを解釈的に判定するフアブリック解析による方法もあるが、石器資料表面の微視的な観察の方も有意な方法と言えよう。

S X 241 出土石器資料との比較 S X 241 の石刃技術と比較すると、方式の面では、石刃核下端部の成形と背部の作り出しの違いが認められる。加えて、S X 241 出土石器資料は、基本的に単設打面のみで石刃剥離が行われるが、J 15 出土旧石器資料は、両設打面でも石刃剥離が行われる。求められた石刃形態にも違いが認められる。一方、テクニックの面では、両者に違いはみられない。ともに、鹿角製ハンマーと軟石製ハンマーによる直接打撃が認められる。

また、J 15 出土旧石器資料には、S X 241 出土石器資料のような、厚手剥片の再利用、未熟者による打撃痕が認められない。後者が定住的な生活形態であったのにたいして、前者は遊動的な生活形態のもとに残された資料と言える。つまり、両者に認められる石器製作技術の技術差は、そうした生活形態の違いが大きな要因の一つとなっていると考えられる。

引用・参考文献

- 石井浩幸 1994 「縄文時代中期（大木 10 式期）の石器組成—寒河江川・最上川流域の遺跡調査から—」『西村山地域史の研究』第 12 号 p.47 ~ p.60 西村山地域史研究会
- 石浩浩幸 1998 「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山の歴史と文化』Ⅲ p.1 ~ p.20 西村山地域史研究会
- 大場正善 2011 「山形県寒河江市高瀬山遺跡—高瀬山西麓に残された杉久保型ナイフ形石器群の全貌解明を目指して—」『第 25 回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.66 ~ p.73 東北日本の旧石器文化を語る会
- 大場正善・今正幸 2011 「山形県寒河江市高瀬山遺跡—助山形埋蔵文化財センターによる高瀬山遺跡（HO）3 期第 3 次調査発見の杉久保型ナイフ形石器群—」『第 25 回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.56 ~ p.65 東北日本の旧石器文化を語る会
- 加藤稔・会田容弘 1998 「山形県小国町横道遺跡の研究」『東北芸術工科大学紀要』第 5 号 p.100 ~ p.147
- 寒河江市教育委員会 1981 『高瀬山遺跡群分布調査報告書』 p.42 寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 寒河江市教育委員会 1982 『高瀬山遺跡群分布調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 寒河江市教育委員会 1986 『高瀬山 K・L 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
- 寒河江市教育委員会 1987 『高瀬山 B・K 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 寒河江市教育委員会 2001 『高瀬山（市道駅南高瀬山線・島落衣線）遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
- 寒河江市教育委員会 2002 『寒河江市内遺跡発掘報告書（9）』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 22 集
- 寒河江市教育委員会 2012 『寒河江市内遺跡発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 32 集（刊行予定）
- 菅原哲文 2007 「縄文時代中期後半の集落様相—山形盆地西部の遺跡を中心として—」『さあべい 第 23 号』 p.1 ~ p.19 さあべい同

人会

津南町教育委員会 2005 『町内遺跡試掘確認調査報告書（5）＜谷内地区遺跡群＞楮沢遺跡 向原A遺跡 向原B遺跡 向原C遺跡 観

音堂原遺跡』津南町文化財調査報告書第 48 輯

秦昭繁 2011 「山形盆地の珪質頁岩の原石調査」『山形考古』第9巻第3号 p.16 ～ p.26 山形考古学会

山形県教育委員会 1981 『寒河江市うぐいす沢遺跡第1次発掘調査』山形県埋蔵文化財調査報告書第 41 集

山形県教育委員会 1982 『分布調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 61 集

山形県教育委員会 2010 『分布調査報告書（36）』 p.93 山形県埋蔵文化財調査報告書第 212 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2001 『高瀬山遺跡（S A）第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2004 『高瀬山遺跡（1期）第1～4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集

（財）山形県埋蔵文化財センター 2005 『高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145